県道紫雲出山線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第１冊

本村中遺跡

2017.3

香川県教育委員会

調査地遠景（北から小蔦島遺跡方面を望む）

調査地遠景（東から紫雲出山遺跡方面を望む）

巻頭図版 2

調査地から粟島方面を望む（東から）

調査地から備讃瀬戸方面を望む（南から）

調査地から本村集落を望む（北から）

調査地から丘陵裾の緩斜面を望む（西から）

押型文土器　深鉢（1 区 5 層下位出土）

縄文包含層出土の押型文土器群

巻頭図版 6

縄文包含層出土の磨石・叩石類

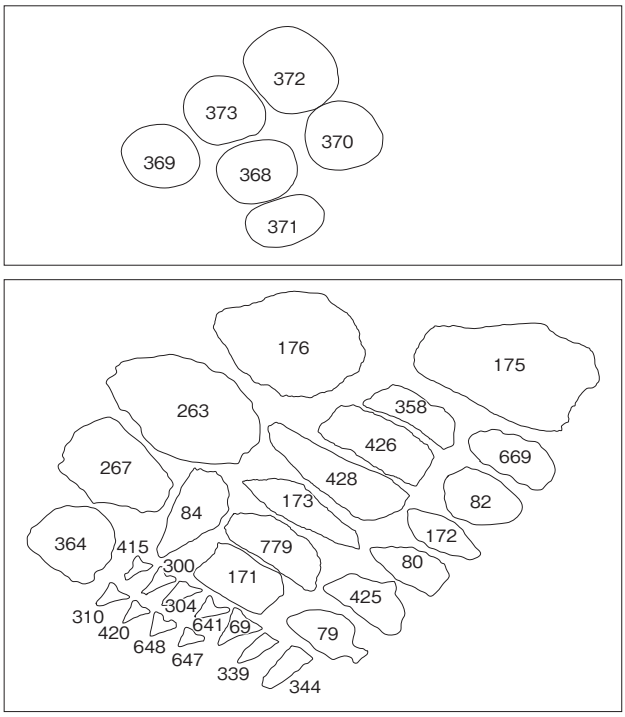
縄文包含層出土のサヌカイト製石器

縄文包含層出土の非サヌカイト石器

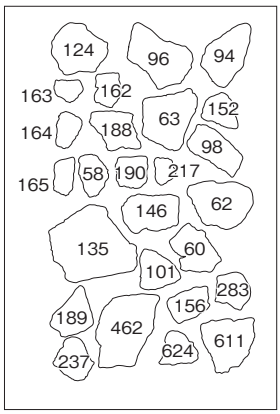
巻頭図版 8

SD501 出土の瓦経（『法華経』「妙法蓮華経」迹門 見宝塔品第十一）

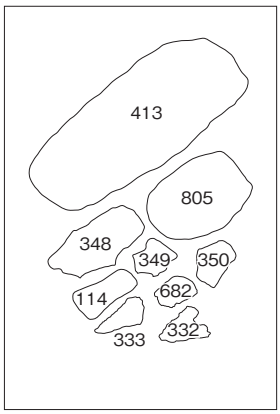
巻頭図版 6



巻頭図版 5



巻頭図版 7



序　文

本書には、県道紫雲出山線建設に伴い発掘調査を行った香川県三豊市詫間町詫間に所在する本村中遺跡 (ほんむらなかいせき) の報告を収録しています。

本村中遺跡では、今から約 8 千年前の堆積層から多数の縄文時代早期土器と、それに伴う石器を検出したほか、掘立柱建物跡・溝跡・河川跡などから平安時代の緑釉陶器、白磁、馬具や、同時代末頃の瓦経など、貴重な遺物が出土しました。

このたび、県道紫雲出山線建設に伴う発掘調査のうち、平成 11 年度から平成 13 年度までの期間で実施した発掘調査の整理作業が終了し、「県道紫雲出山線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 1 冊 本村中遺跡」として刊行することとなりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、西讃土木事務所及び関係諸機関、地元関係者各位に多大な御協力と御指導をいただきましたことに、深く感謝申し上げますとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成 29 年 3 月 17 日

香川県埋蔵文化財センター
所長　増田　宏

例　言

1．本報告書は、県道紫雲出山線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告の第 1 冊で、三豊市詫間町詫間に所在する本村中遺跡 (ほんむらなかいせき) の調査成果を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、平成 11 ～ 13 年度に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．調査にあたっては、次の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。(順不同、敬称略)

　香川県土木部道路課、香川県西讃土木事務所、地元自治会、地元水利組合、三豊市教育委員会

4．本報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施し、執筆・編集は森下英治が担当した。

5．本報告書で図示する座標は、発掘調査の際に使用した昭和 43 年建設省告示第 3059 号の規定による平面直角第Ⅳ座標を基準とするものであり、標高は T.P. を基準としている。また、遺構の略号は以下のとおりである。

　SB：掘立柱建物跡　SD：溝状遺構　SE：井戸跡　SK：土坑　SP：柱穴　SG：池状遺構

　ST：墓　SR：河川跡　SX：性格不明遺構　SA：柵列跡

なお、本文中の説明では座標の北東方向を「北」としている。

6．本報告書で図示する縄文土器実測図の表裏面は、断面図を中心として右側に表面、左側に裏面を配置した。また、同写真図版も右側に表面、左側に裏面を配置した。なお、縄文土器の写真図版の縮尺は約 1/3 に統一した（巻頭図版及び一部の例外を除く）。石器及び弥生時代以後の遺物写真の縮尺は不統一である。

7．本報告書で図示する石器実測図の遺物番号の下に石材を記した。ただし、記載のないものはすべて「サヌカイト」である。

8．本文で引用・参照した文献は巻末 155 ページに参考文献として一括して掲載した。

9．土器観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1998 年度版』による。

10．本文中に、国土交通省国土地理院発行「数値地図 (地図画像)25000 岡山及び丸亀」、国土交通省国土地理院ホームページ掲載「数値地図 (土地条件)」、詫間町（現三豊市）発行「詫間都市計画図 10・14」の一部を加工して使用した。

本文目次

第１章 調査に至る経緯と経過 …… 1

第２章 遺跡の立地と環境
　第１節 地理的環境 …… 4
　第２節 歴史的環境 …… 7

第３章　調査の成果
　第１節　概要と土層…… 11
　第２節　縄文時代の遺構・遺物…… 24
　第３節　弥生・古墳時代の遺構・遺物…… 97
　第４節　古代・中世の遺構・遺物…… 106

第４章　自然科学分析
　第１節　本村中遺跡出土サヌカイト製石器の産地推定…… 133
　第２節　本村中遺跡出土黒曜石製石器の産地推定…… 137
　第３節　放射性炭素年代測定 …… 140

第５章　まとめ
　第１節　縄文時代早期の遺構・遺物について…… 143
　第２節　SD501 出土の瓦経について …… 149
　第３節　総括 …… 154

挿図目次

第 1 図　遺跡位置図……1
第 2 図　遺跡周辺の土地条件図……4
第 3 図　荘内半島・高瀬川河口付近の土地条件図……5
第 4 図　周辺遺跡分布図……6
第 5 図　周辺地形と調査地区割図……10
第 6 図　調査地地形区分図……12
第 7 図　調査地全体概要図……13 ～ 14
第 8 図　1 区西壁・南壁土層断面図……15
第 9 図　1 区北壁土層断面図……16
第 10 図　2 区南壁土層断面図……17
第 11 図　2 区北壁土層断面図……18
第 12 図　3 区南壁土層断面図……19
第 13 図　3 区東壁土層断面図……20
第 14 図　4 区北壁土層断面図……21
第 15 図　5 区北壁土層断面図……22
第 16 図　4 区・5 区東壁土層断面図……23
第 17 図　3 区縄文時代遺構分布図……25
第 18 図　SK301・SK302・SK303 実測図……26
第 19 図　SK301 出土遺物（1）……27
第 20 図　SK301 出土遺物（2）・
SK302 ～ 304・306 出土遺物……28
第 21 図　SK308 ～ 311・SX301 実測図・出土遺物……30
第 22 図　3 区土坑周辺包含層出土遺物（1）……31
第 23 図　3 区土坑周辺包含層出土遺物（2）……32
第 24 図　1 区西側縄文包含層遺物分布平面図……35 ～ 36
第 25 図　1 区西側縄文包含層遺物分布断面図……37 ～ 38
第 26 図　1 区縄文包含層 7 層出土遺物（1）……40
第 27 図　1 区縄文包含層 7 層出土遺物（2）……41
第 28 図　1 区縄文包含層 7 層出土遺物（3）……42
第 29 図　1 区縄文包含層 5 層下位出土遺物（1）……44
第 30 図　1 区縄文包含層 5 層下位出土遺物（2）……45
第 31 図　1 区縄文包含層 5 層下位出土遺物（3）……46
第 32 図　1 区縄文包含層 5 層出土遺物（1）……47
第 33 図　1 区縄文包含層 5 層出土遺物（2）……48
第 34 図　1 区縄文包含層 5 層出土遺物（3）……49
第 35 図　1 区縄文包含層 5 層出土遺物（4）……50
第 36 図　1 区縄文包含層 5 層出土遺物（5）……51
第 37 図　1 区縄文包含層 4 層出土遺物（1）……53
第 38 図　1 区縄文包含層 4 層出土遺物（2）……54
第 39 図　1 区縄文包含層 4 層出土遺物（3）……55
第 40 図　1 区縄文包含層 4 層出土遺物（4）……56
第 41 図　1 区縄文包含層 4 層出土遺物（5）……57
第 42 図　1 区縄文包含層 4 層出土遺物（6）……58
第 43 図　1 区出土位置・層位不明遺物（1）……60
第 44 図　1 区出土位置・層位不明遺物（2）……61
第 45 図　1 区出土位置・層位不明遺物（3）……62
第 46 図　1 区出土位置・層位不明遺物（4）……63
第 47 図　1 区出土位置・層位不明遺物（5）……64
第 48 図　1 区出土位置・層位不明遺物（6）……65
第 49 図　4 区縄文包含層下層出土遺物（1）……67
第 50 図　4 区縄文包含層下層出土遺物（2）……68
第 51 図　4 区縄文包含層下層出土遺物（3）……69
第 52 図　4 区縄文包含層下層出土遺物（4）……70
第 53 図　4 区縄文包含層下層出土遺物（5）……71
第 54 図　4 区縄文包含層下層出土遺物（6）……72
第 55 図　4 区縄文包含層上層出土遺物……73
第 56 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（1）……75
第 57 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（2）……76
第 58 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（3）……77
第 59 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（4）……78
第 60 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（5）……79
第 61 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（6）……80
第 62 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（7）……81
第 63 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（8）……82
第 64 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（9）……83
第 65 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（10）……84
第 66 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（11）……85
第 67 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（12）……86
第 68 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（13）……87
第 69 図　5 区縄文包含層上層出土遺物（1）……89
第 70 図　5 区縄文包含層上層出土遺物（2）……90
第 71 図　5 区縄文包含層上層出土遺物（3）……91
第 72 図　5 区縄文包含層上層出土遺物（4）……92
第 73 図　5 区縄文包含層上層出土遺物（5）……93
第 74 図　5 区縄文包含層上層出土遺物（6）……94
第 75 図　4・5 区出土位置・層位不明遺物（1）……95
第 76 図　4・5 区出土位置・層位不明遺物（2）……96
第 77 図　2・3 区弥生・古墳時代遺構分布図……97
第 78 図　SK201・SK204・SX204 実測図、
柱穴・土坑・不明遺構出土遺物……98
第 79 図　SD207 実測図、出土遺物（1）……100
第 80 図　SD207 出土遺物（2）……101
第 81 図　SD301・303 実測図、出土遺物……102
第 82 図　SD304・305 実測図、出土遺物……103
第 83 図　SD307 実測図、出土遺物……104
第 84 図　SR203・SR204 実測図、出土遺物（1）……105
第 85 図　SR203 出土遺物（2）……106
第 86 図　4・5 区古代・中世遺構分布図……107
第 87 図　SB501 実測図、出土遺物……108
第 88 図　SB502 実測図、出土遺物……109
第 89 図　SE101 実測図、出土遺物……110
第 90 図　SK501・SK502 実測図、出土遺物……111
第 91 図　ST101 実測図、出土遺物……111
第 92 図　SD101 実測図、出土遺物……113
第 93 図　SD102 実測図、出土遺物……114
第 94 図　SD103・SD104 実測図、出土遺物……115
第 95 図　SD201・SD202 実測図、出土遺物……116
第 96 図　SD401 実測図、出土遺物……117
第 97 図　SD403 ～ 405 実測図、出土遺物……118
第 98 図　SD502 実測図、出土遺物……118
第 99 図　SD501 実測図、出土遺物……119
第 100 図　SD503 ～ 507 実測図、出土遺物……120
第 101 図　SR201・SR202 実測図、出土遺物……121
第 102 図　SR401 断面図……122
第 103 図　SR401 出土遺物（1）……123
第 104 図　SR401 出土遺物（2）……124
第 105 図　SR401 出土遺物（3）……125
第 106 図　SR401 出土遺物（4）……126
第 107 図　SG101 実測図、出土遺物（1）……127
第 108 図　SG101 出土遺物（2）……128
第 109 図　柱穴・包含層出土遺物（1）……130
第 110 図　柱穴・包含層出土遺物（2）……131
第 111 図　柱穴・包含層出土遺物（3）……132
第 112 図　サヌカイト産地推定判別図（1）……136

第 113 図　サヌカイト産地推定判別図（2）……136
第 114 図　黒曜石産地推定判別図（1）……139
第 115 図　黒曜石産地推定判別図（2）……139
第 116 図　暦年較正結果 ……142
第 117 図　楕円文系押型文土器器形分類図 ……143
第 118 図　楕円文系押型文土器の変遷……144
第 119 図　他系統土器の変遷……145
第 120 図　SD501 出土瓦経（1023）の全形想定復元図 ·150
第 121 図　吉野経塚瓦経の想定復元図……151
第 122 図　本島八幡神社経塚瓦経の想定復元図……153

付図

本村中遺跡 1 区～ 3 区（1/200）
本村中遺跡 4 区・5 区（1/200）

表目次

第 12 表　本村中遺跡出土土器観察表 (1)……157
第 13 表　本村中遺跡出土土器観察表 (2)……158
第 14 表　本村中遺跡出土土器観察表 (3)……159
第 15 表　本村中遺跡出土土器観察表 (4)……160
第 16 表　本村中遺跡出土土器観察表 (5)……161
第 17 表　本村中遺跡出土土器観察表 (6)……162
第 18 表　本村中遺跡出土土器観察表 (7)……163
第 19 表　本村中遺跡出土土器観察表 (8)……164
第 20 表　本村中遺跡出土土器観察表 (9)……165
第 21 表　本村中遺跡出土土器観察表 (10)……166
第 22 表　本村中遺跡出土土器観察表 (11)……167
第 23 表　本村中遺跡出土土器観察表 (12)……168
第 24 表　本村中遺跡出土土器観察表 (13)……169
第 25 表　本村中遺跡出土土器観察表 (14)……170
第 26 表　本村中遺跡出土土器観察表 (15)……171
第 27 表　本村中遺跡出土土器観察表 (16)……172
第 28 表　本村中遺跡出土土器観察表 (17)……173
第 29 表　本村中遺跡出土土器観察表 (18)……174
第 30 表　本村中遺跡出土土器観察表 (19)……175
第 31 表　本村中遺跡出土土器観察表 (20)……176
第 32 表　本村中遺跡出土土器観察表 (21)……177
第 33 表　本村中遺跡出土土器観察表 (22)……178
第 34 表　本村中遺跡出土土器観察表 (23)……179
第 35 表　本村中遺跡出土土器観察表 (24)……180
第 36 表　本村中遺跡出土土器観察表 (25)……181
第 37 表　本村中遺跡出土土器観察表 (26)……182
第 38 表　本村中遺跡出土土器観察表 (27)……183
第 39 表　本村中遺跡出土土器観察表 (28)……184
第 40 表　本村中遺跡出土土器観察表 (29)……185
第 41 表　本村中遺跡出土土器観察表 (30)……186
第 42 表　本村中遺跡出土土器観察表 (31)……187
第 43 表　本村中遺跡出土土器観察表 (32)……188
第 44 表　本村中遺跡出土土器観察表 (33)……189
第 45 表　本村中遺跡出土土器観察表 (34)……190
第 46 表　本村中遺跡出土土器観察表 (35)……191
第 47 表　本村中遺跡出土土器観察表 (36)……192
第 48 表　本村中遺跡出土土器観察表 (37)……193
第 49 表　本村中遺跡出土土器観察表 (38)……194
第 50 表　本村中遺跡出土土器観察表 (39)……195
第 51 表　本村中遺跡出土瓦・瓦経観察表……195
第 52 表　本村中遺跡出土石器観察表（1）……196
第 53 表　本村中遺跡出土石器観察表（2）……197
第 54 表　本村中遺跡出土石器観察表（3）……198
第 55 表　本村中遺跡出土石器観察表（4）……199
第 56 表　本村中遺跡出土石器観察表（5）……200
第 57 表　本村中遺跡出土石器観察表（6）……201
第 58 表　本村中遺跡出土石器観察表（7）……202
第 59 表　本村中遺跡出土石器観察表（8）……203
第 60 表　本村中遺跡出土石器観察表（9）……204
第 61 表　本村中遺跡出土石器観察表（10）……205
第 62 表　本村中遺跡出土石器観察表（11）……206
第 63 表　本村中遺跡出土石器観察表（12）……207
第 64 表　本村中遺跡出土石器観察表（13）……208
第 65 表　本村中遺跡出土石器観察表（14）……209
第 66 表　本村中遺跡出土金属器観察表……209
第 67 表　本村中遺跡出土木製品観察表……209

図版目次

巻頭図版 1
　調査地遠景（北から小蔦島遺跡方面を望む）
　調査地遠景（東から紫雲出山遺跡方面を望む）
巻頭図版 2
　調査地から粟島方面を望む（東から）
　調査地から備讃瀬戸方面を望む（南から）
巻頭図版 3
　調査地から本村集落を望む（北から）
　調査地から丘陵裾の緩斜面を望む（西から）
巻頭図版 4
　押型文土器　深鉢（1 区 5 層下位出土）
巻頭図版 5
縄文包含層出土の押型文土器群
巻頭図版 6
　縄文包含層出土の磨石・叩石類
　縄文包含層出土のサヌカイト製石器
巻頭図版 7
縄文包含層出土の非サヌカイト石器
巻頭図版 8
　SD501 出土の瓦経
図版 1
　3 区縄文遺構面遺構分布状況（西から）
図版 2
　3 区縄文遺構の分布（東から）
　SK301 遺物出土状況（西から）
　SK302 と調査区南壁断面（北から）
　SK310（南から）
　SK310 遺物（18）出土状況（南から）
図版 3
　3 区土坑群 SX301（南から）
　3 区土坑群 SX301 周辺（西から）
　1 区縄文包含層 7 層調査状況（南から）
　1 区縄文包含層 7 層調査状況（東から）
　1 区縄文包含層 5 層中遺物出土状況（東から）
　1 区縄文包含層 5 層完掘状況（東から）
図版 4
　1 区縄文包含層 5 層下位遺物出土状況
　1 区縄文包含層 5 層下位遺物出土状況
　1 区縄文包含層 5 層下位遺物出土状況（北から）
　1 区縄文包含層 5 層遺物出土状況
　1 区縄文包含層 5 層遺物出土状況（南から）
　1 区縄文包含層 5 層遺物出土状況（西から）
　1 区縄文包含層（調査区南壁断面）
　1 区縄文包含層 5 層遺物出土状況（南から）
図版 5
　4 区縄文包含層断面（西から）
　4 区縄文包含層調査状況（東から）
　2 区弥生時代遺構分布状況（東から）
　SK201 断面（東から）
　SK204 断面（南から）
　SD207 断面（南から）
　SD207 遺物出土状況（東から）
図版 6
　SD202 断面（南から）
　SR203 遺物出土状況（南から）
　SR203 遺物出土状況（南から）
　SD302・SD304（南から）
　SD304 遺物出土状況（西から）
　SD304 遺物出土状況（西から）
　SD307（南から）
　SD307 遺物出土状況（西から）
図版 7
　3 区弥生・中世面（西から）
　SD201 断面（東から）
　4 区西端柱穴群（東から）
　5 区建物遺構全景（東から）
　5 区溝群断面（南から）
図版 8
　SB501・SB502（上面より）
　SB501（西から）
　SB502（東から）
図版 9
　5 区から粟島方面を望む
　SD501 断面（東から）
　SD501 断面（東から）
　SD502 木樋出土状況（南から）
　SD502 木樋細部（東から）
図版 10
　ST101 人骨出土状況（西から）
　ST101 人骨出土状況（西から）
　ST101（西から）
　SR401 断面（南から）
　SG101（北東から）
　SG101（上面から）
　1 区柱穴群検出状況（東から）
　SP101 白磁碗出土状況（東から）
図版 11
　3 区・1 区 7 層出土の縄文土器
図版 12
　1 区 7 層・ 5 層出土の縄文土器
図版 13
　1 区 5 層下位出土の縄文土器
図版 14
　1 区 5 層出土の縄文土器
図版 15
　1 区 5 層出土の縄文土器
図版 16
　1 区 5 層・4 層出土の縄文土器
図版 17
　1 区 4 層出土の縄文土器
図版 18
　1 区 4 層出土の縄文土器
図版 19
　1 区層位不明出土の縄文土器
図版 20
　4 区下層出土の縄文土器
図版 21
　4 区下層・5 区下層出土の縄文土器
図版 22
　5 区下層出土の縄文土器
図版 23
　5 区下層出土の縄文土器

図版 24
5 区下層出土の縄文土器
図版 25
5 区下層出土の縄文土器
図版 26
5 区下層出土の縄文土器
図版 27
5 区下層・5 区上層出土の縄文土器
図版 28
5 区上層出土の縄文土器
図版 29
5 区上層・4・5 区層位不明出土の縄文土器
図版 30
3 区縄文時代石器
図版 31
1 区 7 層縄文時代石器
図版 32
1 区 5 層縄文時代石器
図版 33
1 区 4 層縄文時代石器
図版 34
1 区層位不明縄文時代石器
図版 35
4 区下層縄文時代石器
図版 36
5 区下層縄文時代石器
図版 37
5 区上層・層位不明縄文時代石器
図版 38
SD207・301 ～ 305・307 出土遺物
図版 39
SR203・SD101 出土遺物
図版 40
SD102 ～ 104 出土遺物
図版 41
SD401・501 出土遺物
図版 42
SR401 出土遺物
図版 43
SR401 出土遺物
図版 44
SG101・包含層出土遺物
図版 45
包含層出土遺物
図版 46
出土金属器 1
図版 47
出土金属器 2
図版 48
出土鉄器 X 線写真 1
図版 49
出土鉄器 X 線写真 2
図版 50
補足遺物 1
図版 51
補足遺物 2
図版 52
縄文包含層出土のサヌカイト製剥片（ＩＦ平 01）
図版 53
縄文包含層出土のサヌカイト製剥片（ＩＦ平 02）
図版 54
縄文包含層出土のサヌカイト製剥片（ＩＦ平 03）
図版 55
縄文包含層出土のサヌカイト製剥片（ＩＦ平 04）
図版 56
縄文包含層出土のサヌカイト製剥片（ＩＦ平 05）
図版 57
縄文包含層出土のサヌカイト製剥片（ＩＦ平 06）
図版 58
縄文包含層出土のサヌカイト製剥片（ＩＦ点）
図版 59
縄文包含層出土のサヌカイト製剥片（ⅡＦ）
図版 60
縄文包含層出土のサヌカイト製剥片（ⅡＣ）
図版 61
縄文包含層出土のサヌカイト製剥片（ⅢＴ）
図版 62
縄文包含層出土のサヌカイト製剥片（ⅢＣ）

第１章 調査に至る経緯と経過

県道紫雲出山線は、瀬戸内海に細長く突き出す県西部の荘内半島を周回する総延長約 20km の一般県道である。弥生時代の高地性集落として著名な県指定史跡紫雲出山遺跡が立地する山塊の山裾と海岸との狭隘な谷地形に営まれる小集落をつなぐ重要な道路だが、車両の離合が困難な道幅 5.5 m以下の範囲が多く、道路改良の必要性が高い路線とされていた。

当該路線における用地内の埋蔵文化財の保護については、県観音寺土木事務所（現在「県西讃土木事務所」、以下「土木事務所」という）と県教育委員会事務局文化行政課 (現在「生涯学習・文化財課」、以下「県教委」という) との間で協議が進められた。平成５年、同市詫間町積地区については、周知の埋蔵文化財包蔵地「船積寺跡」に隣接する要件で工事立会が行われた。その結果中世集落跡「積新田遺跡」が発見され、12 世紀～ 13 世紀代の瓦器・土師器・亀山焼などが出土した。

平成７年には、本村地区、須田地区で工事が予定されている範囲の分布調査が行われ、用地買収後に試掘調査を実施する範囲が県教委から土木事務所に提示され、平成８～ 10・12 年度にかけて県教委が試掘調査を実施した。その結果「本村中遺跡」「須田・中尾瀬遺跡」「尾の上遺跡」の新たな遺跡が見つかり、平成 11 年度から本発掘調査が行われた。本発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

今回報告する本村中遺跡は、平成 11 年から 13 年度にかけて次の期間・体制で調査を実施した。

第１図　遺跡位置図

＜平成 11 年 11 月～ 12 月＞

■香川県教育員会事務局文化行政課

総括　　課長 小原克己、課長補佐 小国史郎

総務　　係長 中村禎伸、主査 三宅陽子・松村崇史

文化財　副主幹 廣瀬常雄、係長 西村尋文、文化財専門員 森格也、主任技師 塩崎誠司

■財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括　　所長 菅原良弘、次長 川原裕章

総務　　副主幹 六車正憲・田中秀文、係長 新一郎、主査 長尾寿江子・山本和代、
　　主任主事 細川信哉

調査　　参事 長尾重盛、主任文化財専門員 大山真充・藤好史郎、文化財専門員 西岡達哉、
　　主任文化財専門員 蓮本和博、文化財専門員 蔵本晋司、調査技術員 中村文枝

＜平成 12 年 8 月～ 10 月＞

■香川県教育員会事務局文化行政課

総括　　課長 小原克己、課長補佐 小国史郎

総務　　係長 中村禎伸、主査 三宅陽子、主事 亀田幸一

文化財　副主幹 廣瀬常雄、係長 西岡達哉、文化財専門員 森格也・宮崎哲治

■財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括　　所長 菅原良弘、次長 川原裕章

総務　　副主幹 六車正憲・大西誠治、係長 新一郎、主査 長尾寿江子、山本和代、主査 高木康晴

調査　　参事 長尾重盛、主任文化財専門員 大山真充・藤好史郎、文化財専門員 西村尋文、主任技師
　　石原徹也、技師 小野秀幸、調査技術員 中村文枝

＜平成 13 年 7 月～ 9 月＞

■香川県教育員会事務局文化行政課

総括　　課長 北原和利、課長補佐 小国史郎

総務　　副主幹 中村禎伸、主査 須崎陽子、主事 亀田幸一

文化財　副主幹 大山真充、主任 西岡達哉、文化財専門員 古野徳久・宮崎哲治

■財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括　　所長 小原克己、次長 川原裕章

総務　　参事 河野浩征、副主幹 大西誠治、係長 多田敏弘、主査 山本和代、

調査　　参事 梅木正信、主任文化財専門員 廣瀬常雄・藤好史郎、文化財専門員 木下晴一、
　　文化財専門員 森格也、主任技師 松岡晶、調査技術員 漆原啓悟

調査にあたっては、平成 11 年度は掘削工事を請負で、平成 12・13 年度は直営で実施した。また、航空写真撮影・図化作業を委託して実施した。

本村中遺跡の調査面積は 3,823㎡（平成 11 年度 984㎡、平成 12 年度 1,319㎡、平成 13 年度 1,520㎡）、

出土した遺物量は159箱（28リットル入コンテナ）である。

本発掘調査終了後、長期が経過したが、平成23年度に県教委と県土木部道路課との間で県道関係遺跡の整理作業を計画的に実施する旨の協議が整い、本村中遺跡については平成25～26年度に以下の体制で当該遺跡の整理作業を実施し、平成28年度に本書の印刷を行った。

■香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括　　課長 増田宏、副課長 木虎 淳（平成25年度）川上泰（平成26年度）

総務G　　副主幹 松下由美子、主任主事 丸山千晶（平成25年度）、主事 和木麻香（平成26年度）

文化財G　　課長補佐 片桐孝浩、主任文化財専門員 山下平重、文化財専門員　松本和彦

■香川県埋蔵文化財センター

総括　　所長 真鍋昌宏、次長 前田和也

総務課　　課長 前田和也（兼務）、主任 俟野英二・宮武ふみ代（平成25年度）・寺岡仁美（平成26年度）・中川美江・高木秀哉・岩崎昌平

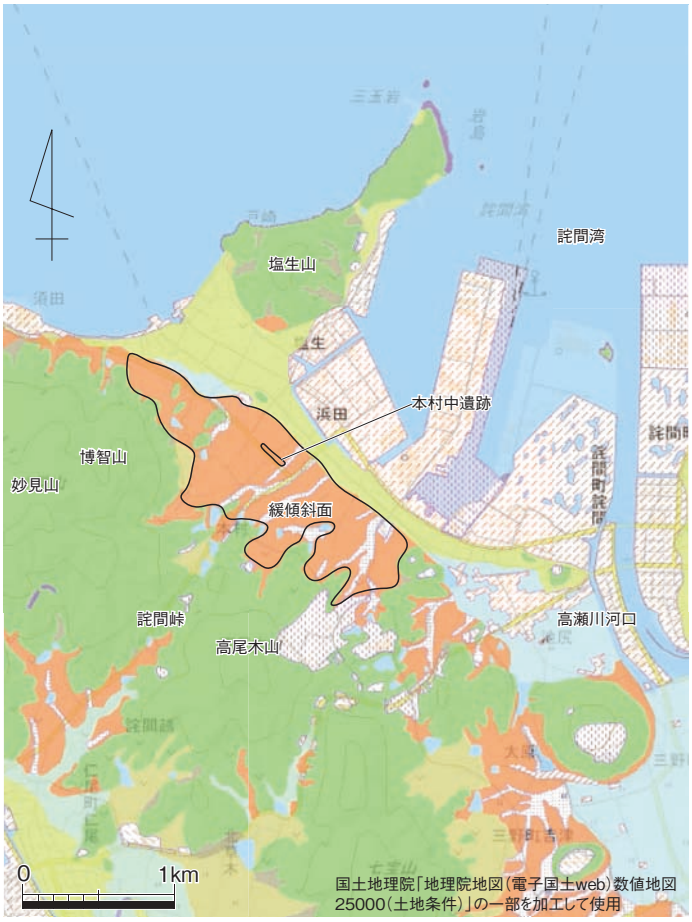
資料普及課　課長 森格也（平成25年度整理担当兼務）、主任文化財専門員　森下英治（平成26年度）

第２章 遺跡の立地と環境

第１節 地理的環境

香川県の西部で、直線にして 12km ほど瀬戸内海に細長く突出している荘内半島は、紫雲出山・横峯山・妙見山などの 300m 前後の山が連なり、海岸線近くまで急峻な地形が迫る箇所が多い。地質学的には花崗岩を基盤とし、安山岩や角礫凝灰岩が累積する開析溶岩山地で、花崗岩層の開析が顕著であることから、変化に富んだ海岸線を生み出している。その開析により谷筋から海に向かって小扇状地が形成され、海岸付近では狭小な入り江状の平地部が存在する。この入り江には現在、積・生里・大浜・箱などの漁港が多く所在する。一方で、半島付け根部付近では扇状地範囲は広く、緩傾斜地を活かして詫間・仁尾の集落が展開する。また半島周囲には粟島・志々島・大蔦島・小蔦島などの島が所在する。このうち、詫間沖の粟島は面積 3.68 km^2 と最も大きく、３つの丘陵が浜堤で接続する形状を呈す。同じく志々島が半島の北東側に所在し、高瀬川河口を取り巻くように２島が分布する。この海浜と島に囲まれた範囲が詫間湾である。一方、半島南西の仁尾沖には大蔦島･小蔦島が所在し同じく湾状の地形を形成する。

今回、発掘調査を行った本村中遺跡は詫間湾に面した荘内半島の北東側の付け根付近に位置し、妙見山（標高 319.9 m）、博智山（同 237 m）を経て北に延びる丘陵と、高尾木山（同 270.4 m）から北に延びる丘陵の間に形成された扇状地の緩やかな傾斜面に立地する。半島部の狭小な平地とは対照的に、面積の大きな緩斜面地である。遺跡周辺の標高は約 10 ～ 11 m で、北東に緩やかに傾斜して海浜に至る。



第２図　遺跡周辺の土地条件図

なお、当該遺跡北 1.5km の塩生山（標高 140.7 m）は現在は詫間湾に突き出た独立丘陵だが、妙見山から続く尾根筋の延長上にあり、その尾根筋が緩斜面である当遺跡周辺地形の西を区切る。遺跡の東側は高瀬川河口で地形が区切られるので、当遺跡は東西約 2km、南北約 1km 弱の平地・緩斜面地形単位の中央に位置することになる。第２図は国土地理院発行の土地条件図をもとに地形単位を図示したものである。土地条件図では高位段丘面とされる緩斜面地（第２図の橙色部分）の分布が当遺跡周辺の地形単位を良く示している。高瀬川東岸まで視界を広げると、第３図に示したように詫間湾周辺には同様の地形単位が、南方約 3km の三野町吉津周辺と、高瀬川東岸の同町大見周辺の２か所に存在している。つま

第３図　荘内半島・高瀬川河口付近の土地条件図

り当該遺跡が所在する単位は、高瀬川河口付近に分布する平地・緩斜面地で構成する本村・吉津・大見の３つの地形単位のうちの一つであり、最も海に向かって開かれた地形的環境を有する。

国土地理院「数値地図（地図画像）25000」の一部を加工して使用

第４図　周辺遺跡分布図

第 2 節 歴史的環境

－旧石器時代－

荘内半島には、今のところ旧石器時代の遺跡は知られていないが、当該本村中遺跡では今回サヌカイト製の角錐状石器が 1 点（本書 43）出土しており、周辺に旧石器時代の遺跡が所在する可能性がある。

－縄文時代－

縄文時代の遺跡は古くから多数知られている。縄文時代早期は仁尾の 1.3km 沖合の小蔦島遺跡と当該報告の本村中遺跡がある。小蔦島遺跡では貝塚を伴い、主に山形文・楕円文を中心とした押型文土器が出土しており、早期中葉の黄島式を代表する貝塚遺跡として、県史跡に指定されている（仁尾町誌編さん委員会 1984）。当該本村中遺跡では後続する早期後葉の高山寺式の押型文土器が出土した。前期では三豊市仁尾町の南草木遺跡（樋口 1938）がある。貝塚を伴い、前期後半の彦崎 ZI・Ⅱ式の土器を主体とする。またヤスと考えられる骨角器も出土している。三豊市詫間町粟島の東風浜遺跡（香川県教育委員会 1956）でも前期の土器が出土している。中期では同じく粟島の西浜遺跡（香川県 1987）がある。粟島の両遺跡は後期まで継続する。後期になると三豊市詫間町で遺跡数は増加し、大浜遺跡（伊沢・森本 1981）、蟻の首遺跡（香川県 1987）、船越遺跡（香川県 1987）、箱遺跡、生里遺跡など、海浜部で貝塚を形成する遺跡が多くみられる。これらでは、中期の土器が散見されることから、遺跡形成は中期にあって、後期に継続する中で遺跡数の増加や遺跡規模の拡大が行われた可能性が考えられる。また、貝塚を伴うことも県内にあってはこの地区の特徴である。逆に、晩期の遺跡はあまり知られていない。貝塚遺跡が後期までに終焉するパターンが多いものと考えられる。当該遺跡で晩期前半の土器が出土しているほか、粟島の西浜遺跡で僅かに突帯文土器が出土している。

－弥生時代－

明確な弥生時代前期の遺跡はこれまで見つかっていない。

弥生時代中期、標高 352m の紫雲出山の頂上付近に紫雲出山遺跡が出現する。いわゆる高地性集落で、多量の土器とともに石鏃・打製石庖丁などの石器、骨角製の釣り針などが出土し、貝層が伴う（小林・佐原 1964）。それに先行する中期前半には三豊市詫間町北谷遺跡がある。横峯山と妙見山との谷奥の高所に立地する（前田・松本 1961）。また、当遺跡上方の標高 100 mほどの地点では、かつて弥生土器とともに炭化物層が検出されており、丘陵斜面地を造成した集落が多数所在した可能性が高い（詫間町誌編集員会 1952）。ただ、これらの集落は後期には続かない。終末期には仁尾の南草木遺跡で竪穴住居跡が 1 棟検出されており、竪穴住居跡から甕・鉢・甑・製塩土器が出土している（香川県教育委員会 1988）。また、銅鏃が出土している（瀬戸内海歴史民俗資料館 1983）。このほか、ヤモンベ遺跡で弥生時代後期に属する銅鏃が出土している（瀬戸内海歴史民俗資料館 1983）。

－古墳時代－

古墳時代では荘内半島の付け根の三豊市仁尾町と詫間町の境の加嶺峠に向かう山裾に加嶺大麻古墳がある（香川県教育委員会 1988）。横穴式石室の一部が残っており、6 世紀末の須恵器・土師器とともに耳環が出土している。典型的な後期古墳だが、それ以外海との関わりが看取できる古墳が所在する。大浜からやや北に離れ海に突き出た丘陵先端には吉吾古墳がある。直径 9 mの円墳と近接する箱式石棺を埋葬主体部とする別墳からなり（塩冶･垣見 2012）、箱式石棺の長さは 2.92 mと長大である。粟島では、

小丘陵あるいは海浜部の浜堤に横穴式石室や箱式石棺を埋葬主体とする古墳が多く分布する。馬城古墳は墳形は不明だが東面する横穴式石室を有する古墳である。墳丘には3基の箱式石棺も併設し、鉄剣の出土が伝わる（三豊市教育委員会 2011）。いずれも浜堤上に立地する。東風浜古墳も浜堤に立地する2基の古墳で高さ2ｍの墳丘が遺存する。志々島には墳丘の有無は不明だが棺底に玉石敷を備えた箱式石棺を埋葬主体とする十握古墳が所在する。

－古代－

古代の荘内半島一帯は三野郡詫間郷に属す。日本三代実録巻11に「貞観7年（865）12月9日、讃岐国三野郡託磨牧を停廃す」（黒川編 1934）とあり、郷内に官牧が所在した。927年（延長5年）に完成し、967年（康保4年）に施行された延喜式28巻兵部省に記載された「諸国馬牛の牧」一覧には「託磨牧」の記載はないので、延喜式以前に停廃した牧である。続日本紀巻1文武4年（700）3月17日条で諸国に牛馬牧の設置を義務付けて以来、上記の865年まで165年間、郷内に牧が存続した。

西讃府志では肥後国託磨郡、薩摩国高城郡託馬郷などの類似地名の存在と、粟島に馬木八幡宮が所在することから、粟島に牧の実在を想定している（大塚ほか 1898）。昭和46年発行の詫間町誌では、長門国角島牛牧、伊予国忽那島馬牛牧、備前国長島馬牛牧、筑前国能巨島牛牧、肥前国生属島牧、肥前国柏島牛牧など島に所在する牧が存在することから、同様に島である粟島が牧として使われたものと想定している（詫間町誌編集委員会編 1971）。ただ上記の牧は延喜式以降に続いた牧であり、それ以前に設けられ令制の変質とともに停廃した「託磨牧」のような「令制の牧」は開発地との干渉により停廃もしくは移転に至った例が多い（西岡 1953）。託磨牧は霊亀2年（716）の摂津国大隅嶋・媛嶋2牧の停廃に始まる8牧の停廃と1牧の移転のうち最後の貞観7年（865）に停廃した令制の牧であり、開発地との干渉が生じやすい本土側に所在した可能性も考慮する必要がある。粟島には前記の古墳名称のように馬を冠した地名等が知られるが、牧を証する具体的な資料はいまのところ存在しない。

詫間町積に所在する船積寺遺跡では、大正15年に経塚の発掘調査が行われた。石で覆われた盛土の一部から、青銅鏡14面、刀剣類、青磁器、金銅装経箱片、経紙片が出土した（香川県 1930）。出土した土器は13世紀の亀山産須恵器で経塚の時期を示す。また、隣接地で13世紀初めごろの古瓦が採集されており（森下英 2015）、平安期創建の船積寺跡が所在したことが知られる。さらに、紫雲出山山頂には中世の積石塚が存在し、中世土器の出土が伝えられており近接する船積寺跡との関係が指摘されている（小林・佐原 1964）。

妙見山の山頂から南東に延びる尾根上標高約300mの平坦地に妙見山遺跡がある。土師器・須恵器の杯が重ねられて埋納されていた（仁尾町誌編さん委員会 1984）祭祀遺跡である。

なお平安時代末～鎌倉時代にかけては、この地域においても荘園が多く成立する。半島先端部近くに摂関家領三崎荘、荘内半島の東側の付け根部分に九条家領詫間荘が成立している。

－中世－

瀬戸内海に突き出る荘内半島周辺は瀬戸内海航路を行き来する船舶で賑わいを見せる。その中で、「兵庫北関入船納帳」と呼ばれる摂津国兵庫北関に入関した文安2年（1445）の船舶記録では、「詫間塩」6,190石が通関し、関銭石当たり2.74文の通関料が支払われている。詫間塩は讃岐全体の輸送塩の3割を占め、宇多津、平山、多度津船籍の輸送船がその輸送を担っていたらしい（橋詰 2007）。港としての「詫間港」

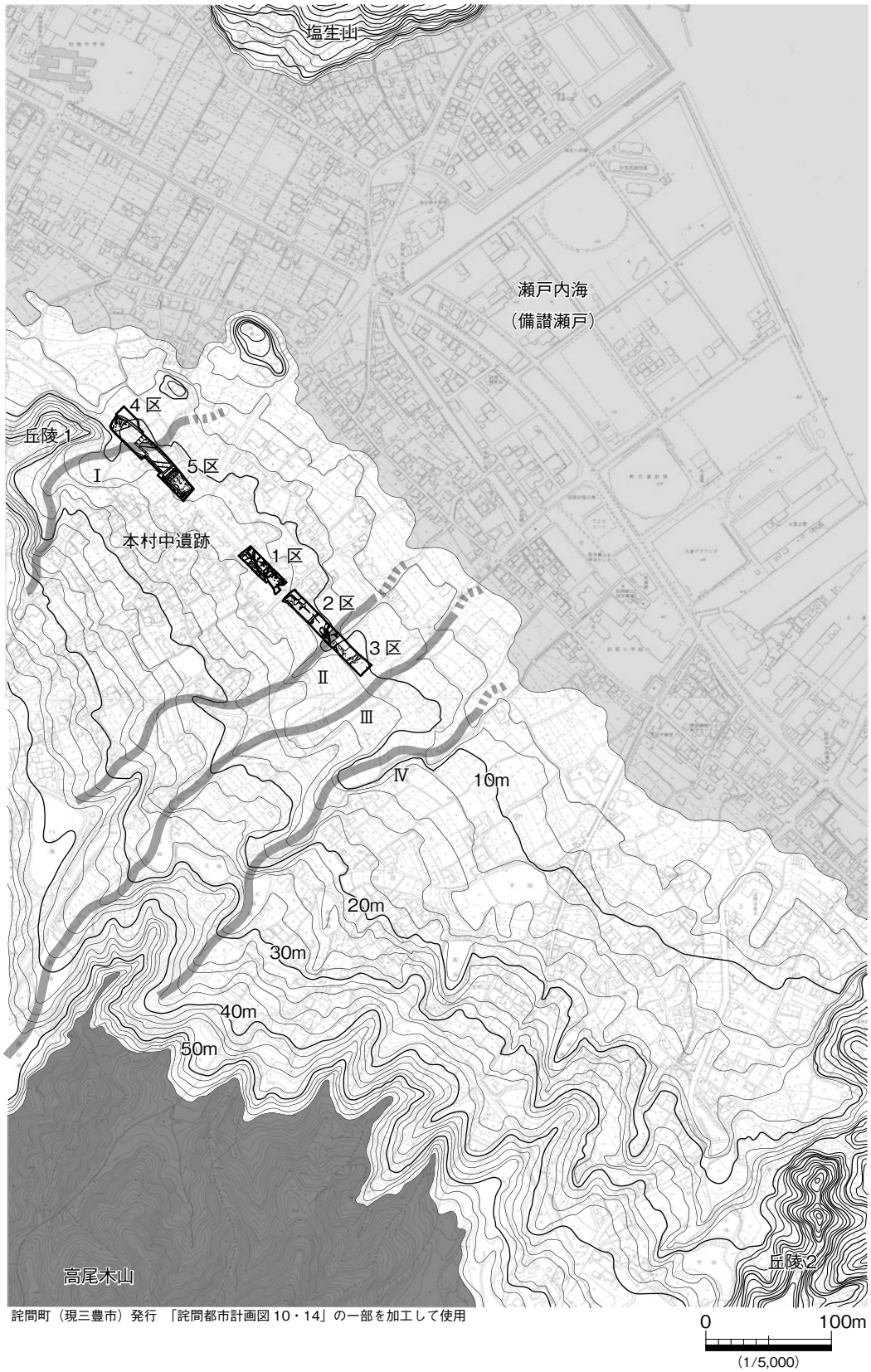
の標記はみられないものの、詫間の海浜部では塩の生産と積み出しが活発に行われていたものと推定される。

中世の遺構・遺物は、当遺跡のほか須田・中尾瀬遺跡や積新田遺跡（森下 1994）で建物柱穴等が検出されている。仁尾町古江善光寺遺跡では平窯跡の一部が検出され、15 ～ 16 世紀の軒丸瓦・軒平瓦が出土した（塩崎 1997）。15 世紀ごろは大小の寺院が各所で建立しており、それらの寺院の瓦を生産したものであろう。なお仁尾の覚城院は 15 世紀に 23 の末寺を有する寺院であったことが永享 2 年（1430）の「覚城院惣末寺古記」（香川県教育委員会 1981）に記されている。同じく仁尾で 14 世紀創建の常徳寺は重要文化財に指定されている円通殿が応永 8 年（1401）に建築されたことが棟札から判明している（重要文化財常徳寺円通殿修理委員会 1964）。

－戦国期以後－

戦国時代になると荘内半島では、三豊市詫間町に詫間城跡、海崎城跡、栗島城跡が、三豊市仁尾町には仁保城跡、天神山城跡といった城館がそれぞれ築かれている。在地の土豪託間氏に関する遺跡が多いと思われるが、その詳しい事歴は不明である。

近現代になると海浜部に塩田が築かれ製塩業で賑わったが、その塩田も昭和 40 年代に廃止された。



第５図　周辺地形と調査地区割図

第３章　調査の成果

第１節　概要と土層

第５・６図は 2m 間隔の等高線図に調査地区割を示したものである。緩傾斜面の等高線にほぼ沿うように北北西から南南東に向けて細長く調査区を設定した。総延長は 280 ｍで、途中５区と１区の間の 60 ｍ分は予備調査の結果遺構が所在しなかったことにより本発掘調査の対象から外している。調査区の幅は道路設計幅に合わせて 14 ｍとした。

調査区の名称は、北（図の左側）から４区、５区、１区、２区、３区の順である。調査区名は調査時と異なり、今回新たに付け替えを行い、３か年にわたる調査の統一を図った。なお調査時は１区が平成 12 年度Ⅰ区、２区が平成 12 年度Ⅱ区、３区が平成 11 年度調査全区、４区が平成 13 年度Ⅰ区、５区が平成 13 年度Ⅱ区であった。

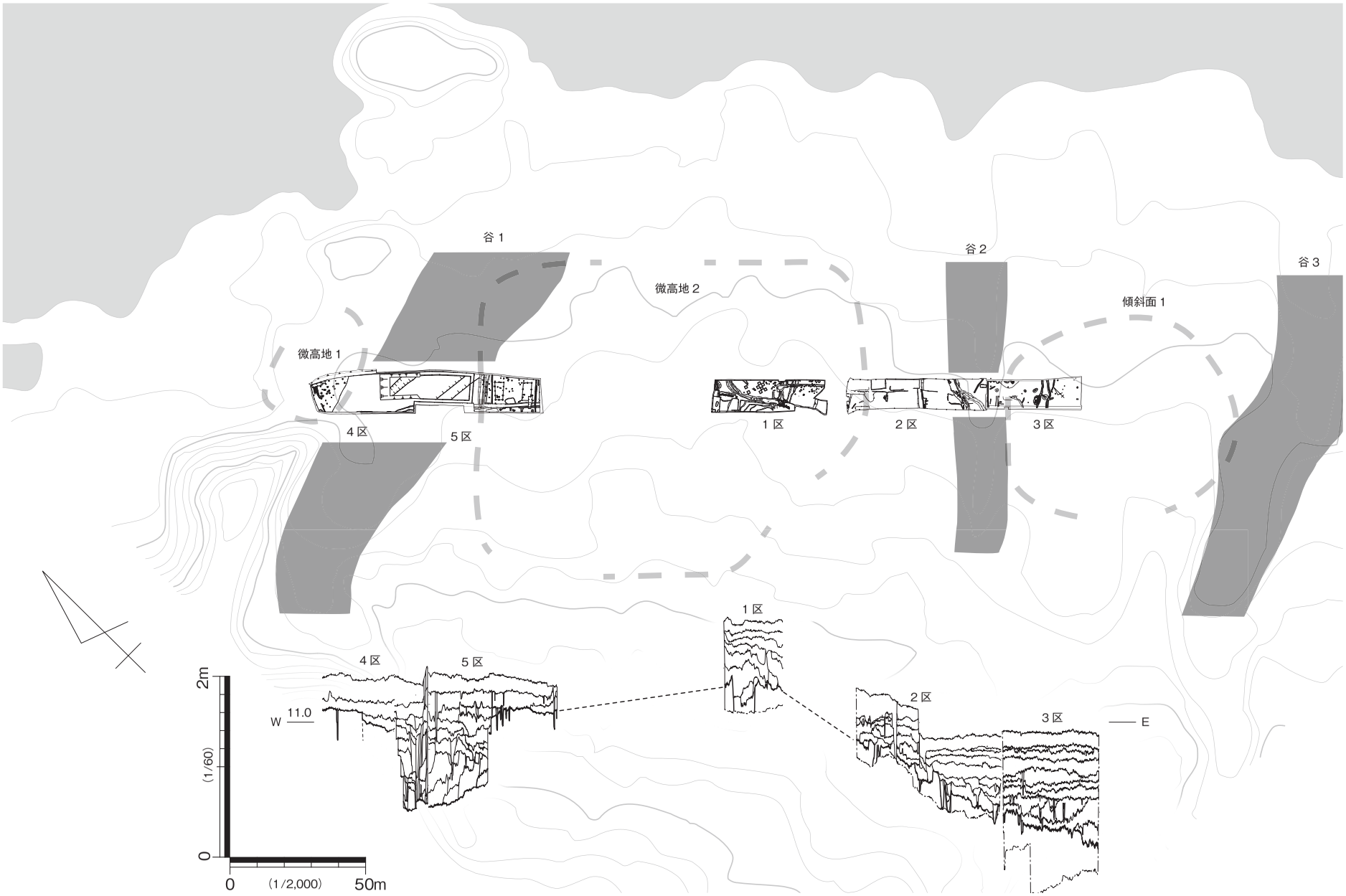
調査範囲内では、調査区内外を含めて南から北へ流下する開析谷が数条跨いでいる。まず４区と５区の間に南から北への開析谷が存在する。この開析谷は後述の SR401 に対応するとともに、その下位の４区･５区縄文包含層もこの開析谷埋没層に相当する。幅は約 50 ｍ､深さは縄文包含層下位面で 1.3 ｍある。この谷を谷１（第５図のⅠ）とする。谷１の北側は南西から延びる丘陵の先端に取り付く微高地がある。これを微高地１とする（第６図）。２区と３区の境に細い谷筋が北流する。これは幅 20 ｍと細く、地表層にほとんど痕跡を残していないが、２区の SR201 ～ 204 の弥生時代から中世にかけての浅い流路遺構が対応する。これを谷２（第５図のⅡ）とする。谷１と谷２の間は一部未調査範囲があるが、調査区壁面の土層断面を概観すると､東西約 130 ｍの微高地が存在することがわかる。これを微高地２とする（第６図）。谷２を介して東側は地形が東に傾斜する。３区の縄文時代晩期の土坑群はこの傾斜面に設けられたものである。この地形単位を傾斜面１とする。傾斜面１の東への傾斜は調査区から 50 ｍ東側まで連続し、その後開析谷に行き着く。この開析谷は詫間峠から続く谷で谷３とする。以上の地形単位において､発掘調査では微高地１に所属する柱穴等の遺構が４区北端､谷１の遺構が SR401 及び縄文包含層（早期）である。５区から２区までの間の微高地２が中世以後の遺構面となる。また１区縄文包含層は微高地２に形成されたもので、４・５区の包含層とは成因が異なる。２区の弥生時代の河川跡は地形的にみて用水機能が付与された可能性が高いものと言える。３区の縄文時代晩期土坑群は調査区の東方にも延びる可能性があり、開析谷までの東西延長 80 ｍの範囲が晩期の遺構分布エリアと考えられる。

以上の地形単位と調査区との関係を基礎として、以下、各調査区の土層を報告する。

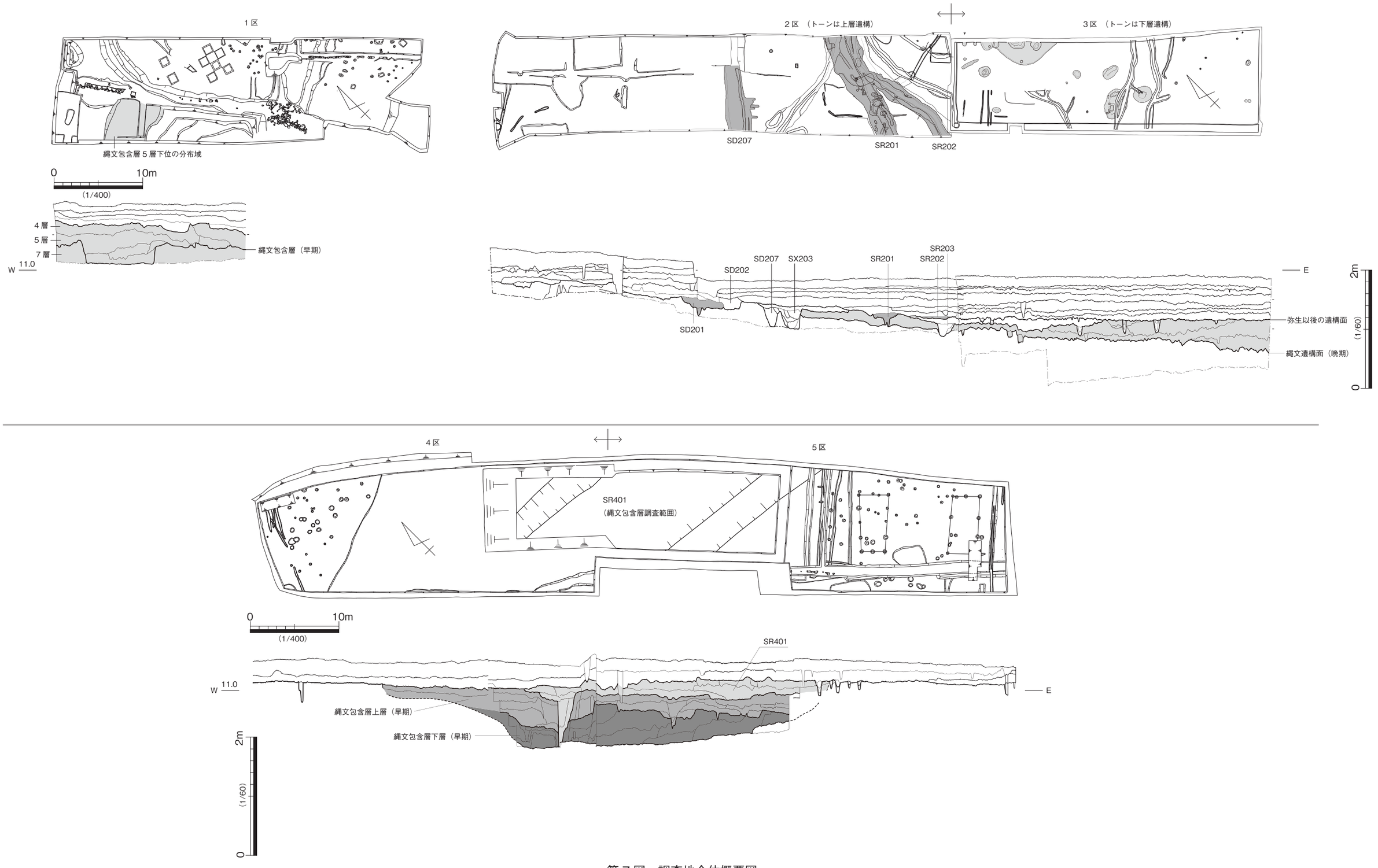
１区

今回の発掘調査対象地の中で、最も高い位置にある調査区である。西壁断面（第８図上段）は現況地盤で北側と南側とで約１ｍの比高差があり、南が高く北に低い。耕作土及び整地土を除去すると中世包含層が 20cm 厚さで堆積し、その下位に縄文包含層が存在する。包含層は北に緩やかに傾斜する。西壁中央部に北側と南側の段下をめぐる現代用水路跡があり、その下位に近世の溝 SD101 が重複する。溝に切られる近世井戸の SE101 で下段西壁の大半を占めるが､北壁近くで僅かに縄文包含層（第８図上段９）が残る。

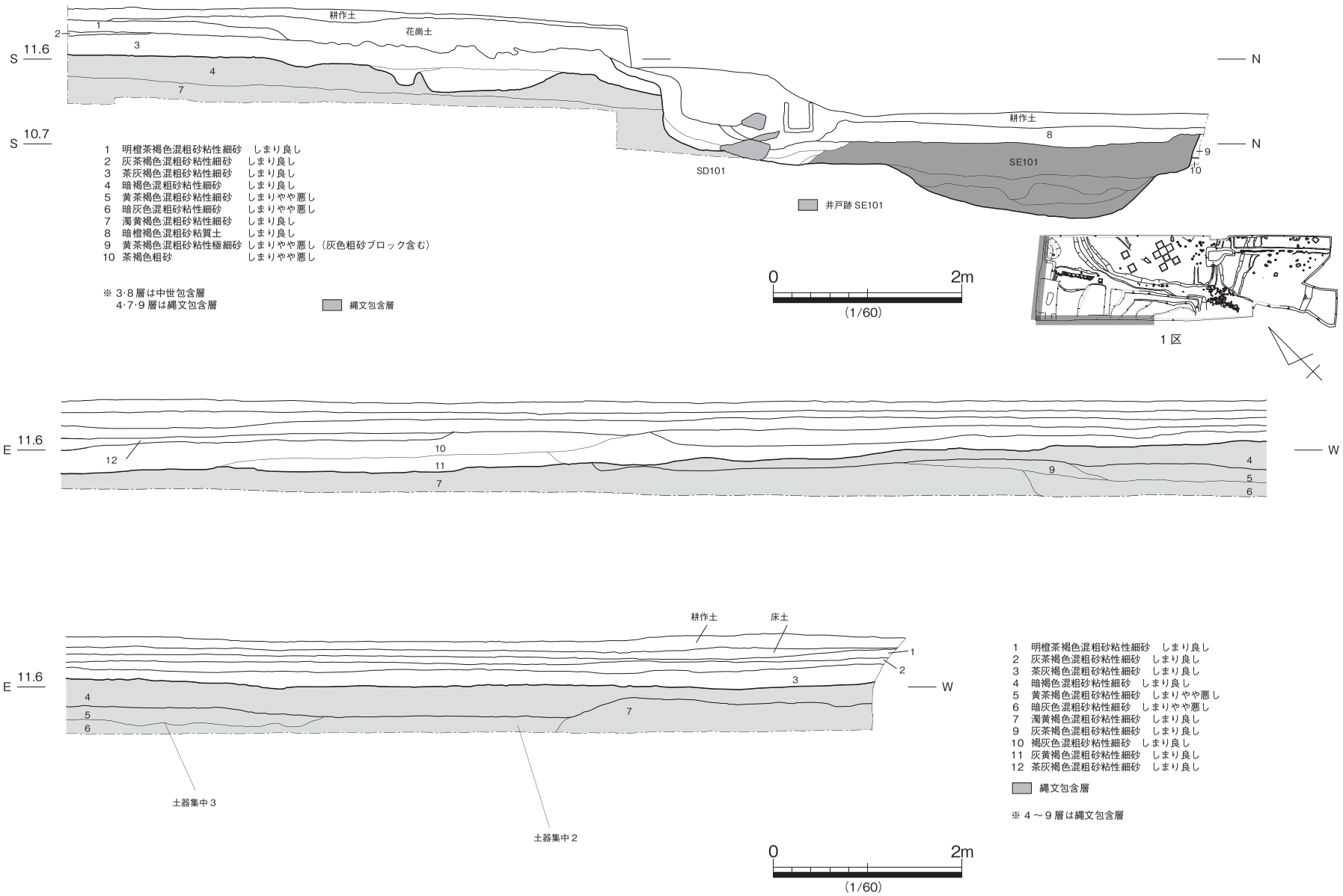
南壁は中世包含層とその下位の縄文包含層がよく残る。縄文包含層は主に１区北側を中心に層序遺存が顕著で、上位に４層、下位に７層が存在する。また７層の部分的な窪みに５層（第８図下段５・６）が堆積す



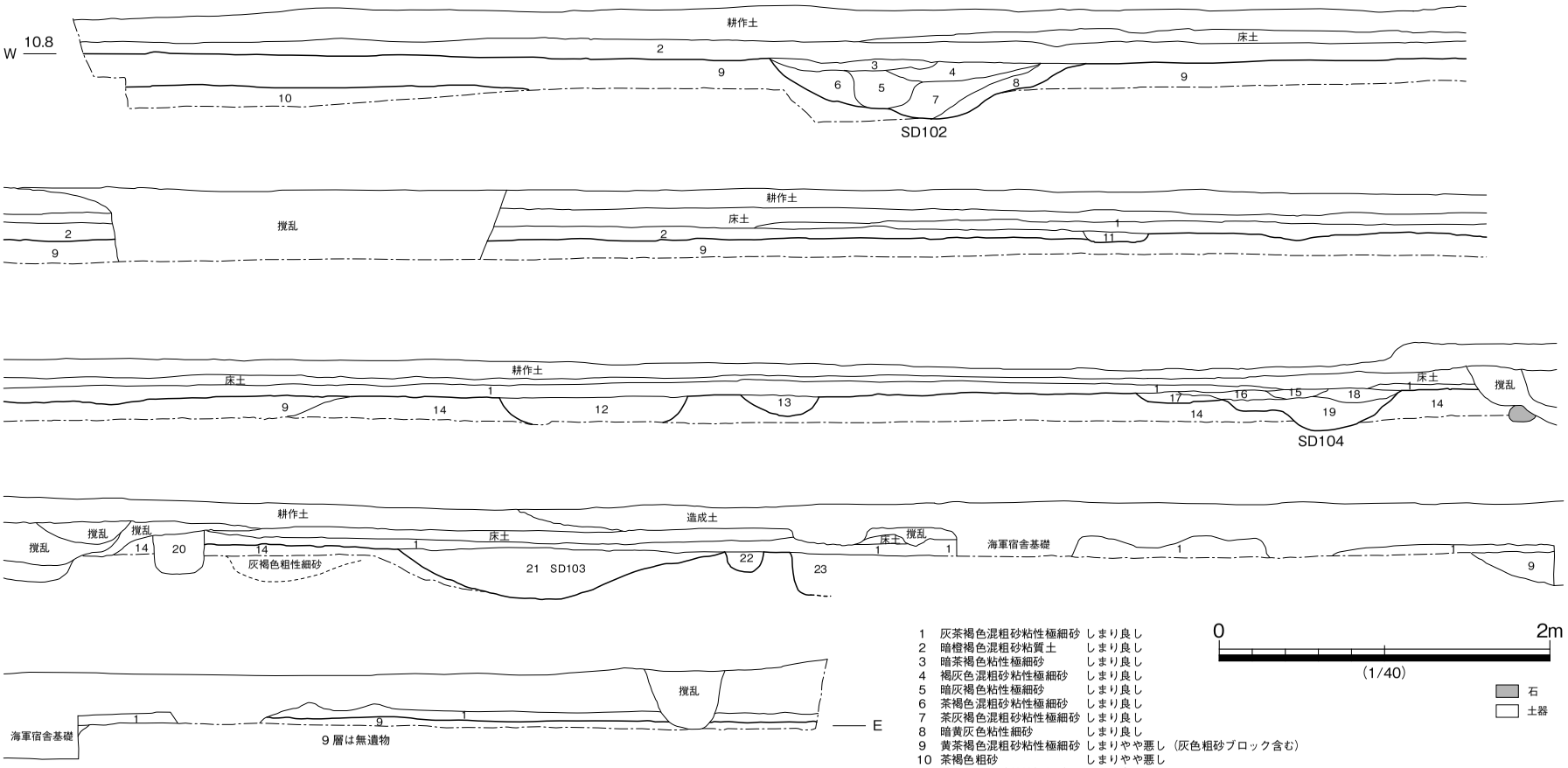
第６図　調査地地形区分図



第７図　調査地全体概要図



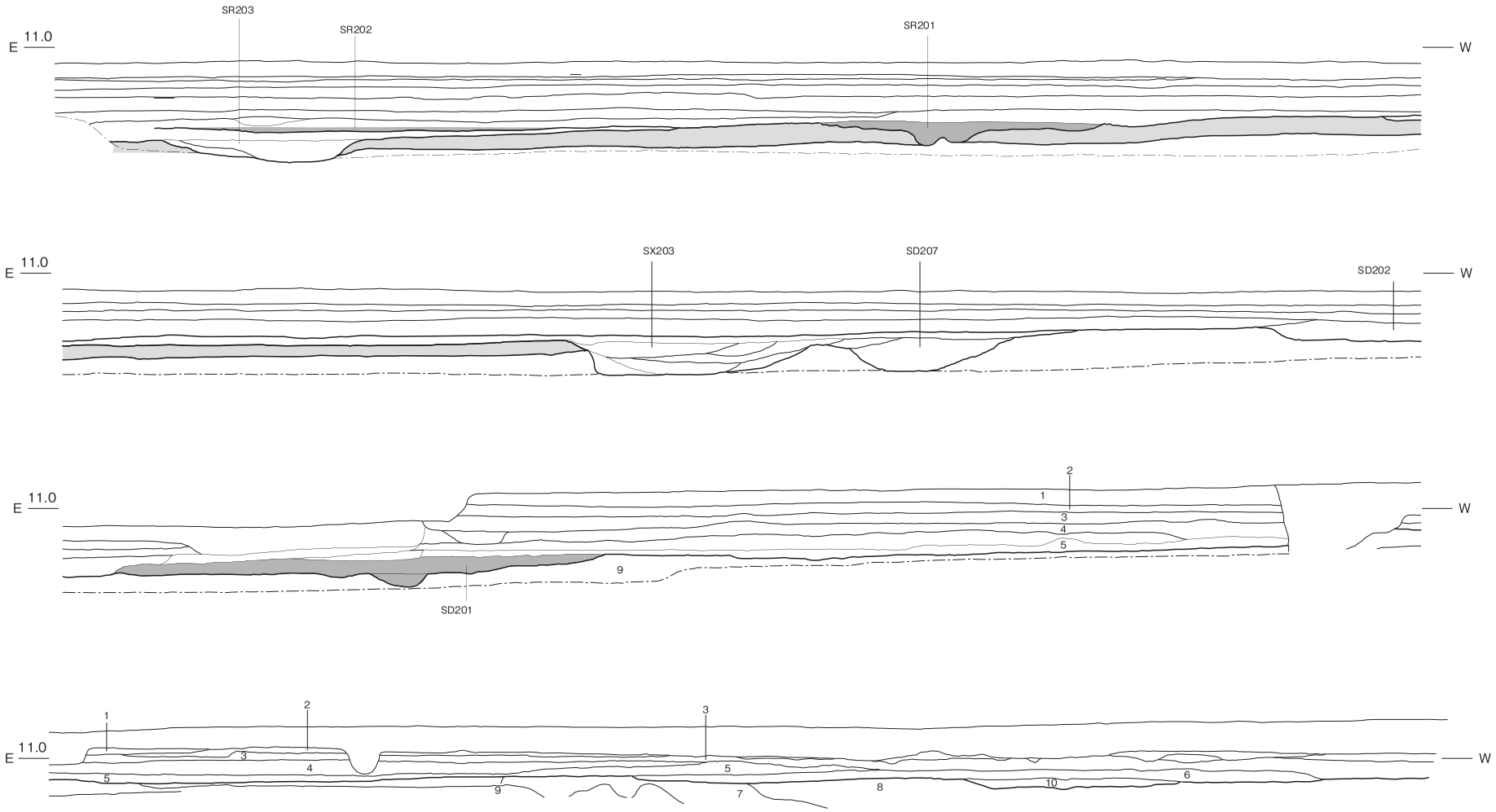
第 8 図　1 区西壁・南壁土層断面図



1 灰茶褐色混粗砂粘性極細砂 しまり良し
2 暗橙褐色混粗砂粘質土 しまり良し
3 暗茶褐色粘性極細砂 しまり良し
4 褐灰色混粗砂粘性極細砂 しまり良し
5 暗灰褐色粘性極細砂 しまり良し
6 茶褐色混粗砂粘性極細砂 しまり良し
7 茶灰褐色混粗砂粘性極細砂 しまり良し
8 暗黄灰色粘性細砂 しまり良し
9 黄茶褐色混粗砂粘性極細砂 しまりやや悪し（灰色粗砂ブロック含む）
10 茶褐色粗砂 しまりやや悪し
11 茶灰色混粗砂粘性極細砂 しまり良し
12 灰色混粗砂粘性極細砂 しまり良し（黄灰色粗砂ブロック若干含む）
13 灰褐色混粗砂粘性極細砂 しまり良し
14 黄茶褐色粘性細砂 しまり良し
15 茶灰色粘性細砂 しまり良し
16 明茶灰色粘性細砂 しまり良し
17 灰色粘性細砂 しまり良し（炭化物多含）
18 灰茶褐色混粗砂細砂 しまり良し
19 灰黄色粘性細砂 しまり良し
20 濁灰褐色粘性細砂 しまり良し（SP）
21 灰茶褐色混粗砂粘性細砂 しまり良し
22 SP
23 SP

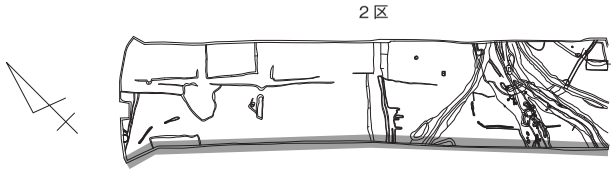
1区

第９図　１区北壁土層断面図

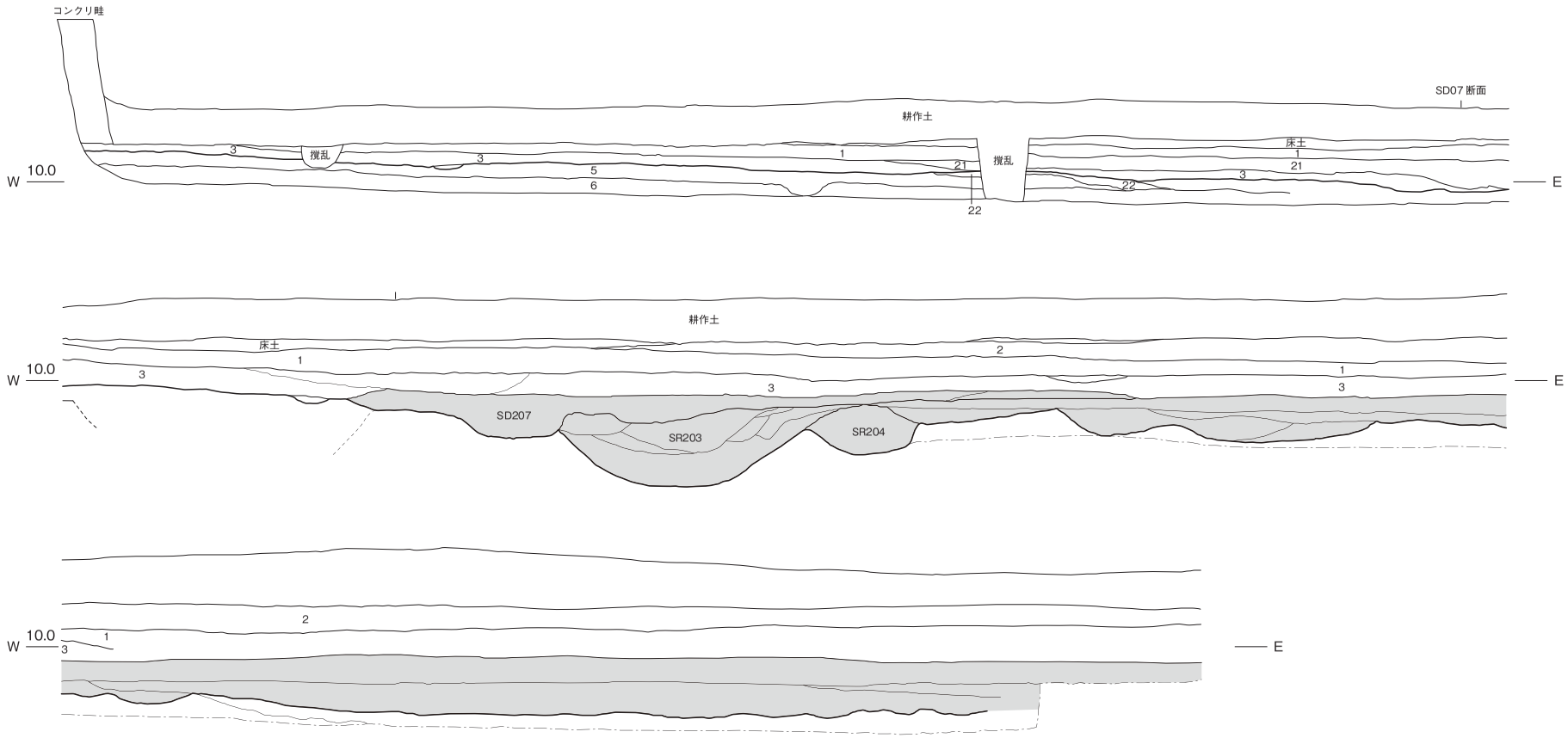


1　旧耕土
2　濁黄色混粗砂粘性極細砂　しまり良し（旧床土）
3　赤褐色混粗砂粘性極細砂　しまり良し
4　濁黄灰色混粗砂粘性極細砂　しまり良し
5　黄茶褐色混粗砂粘性極細砂　しまり良し
6　茶褐色混粗砂粘性極細砂　しまり良し
7　明黄色混粗砂粘質土　しまりやや悪し　Mn 沈澱顕著
8　明黄色混粗砂粘質土　しまり良し
9　明黄灰色粗砂　しまりやや悪し
10　灰茶褐色混粗砂粘質土

0　2m
（1/60）



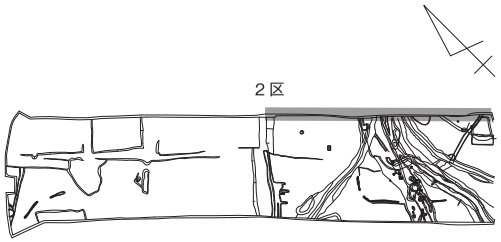
第 10 図　2 区南壁土層断面図



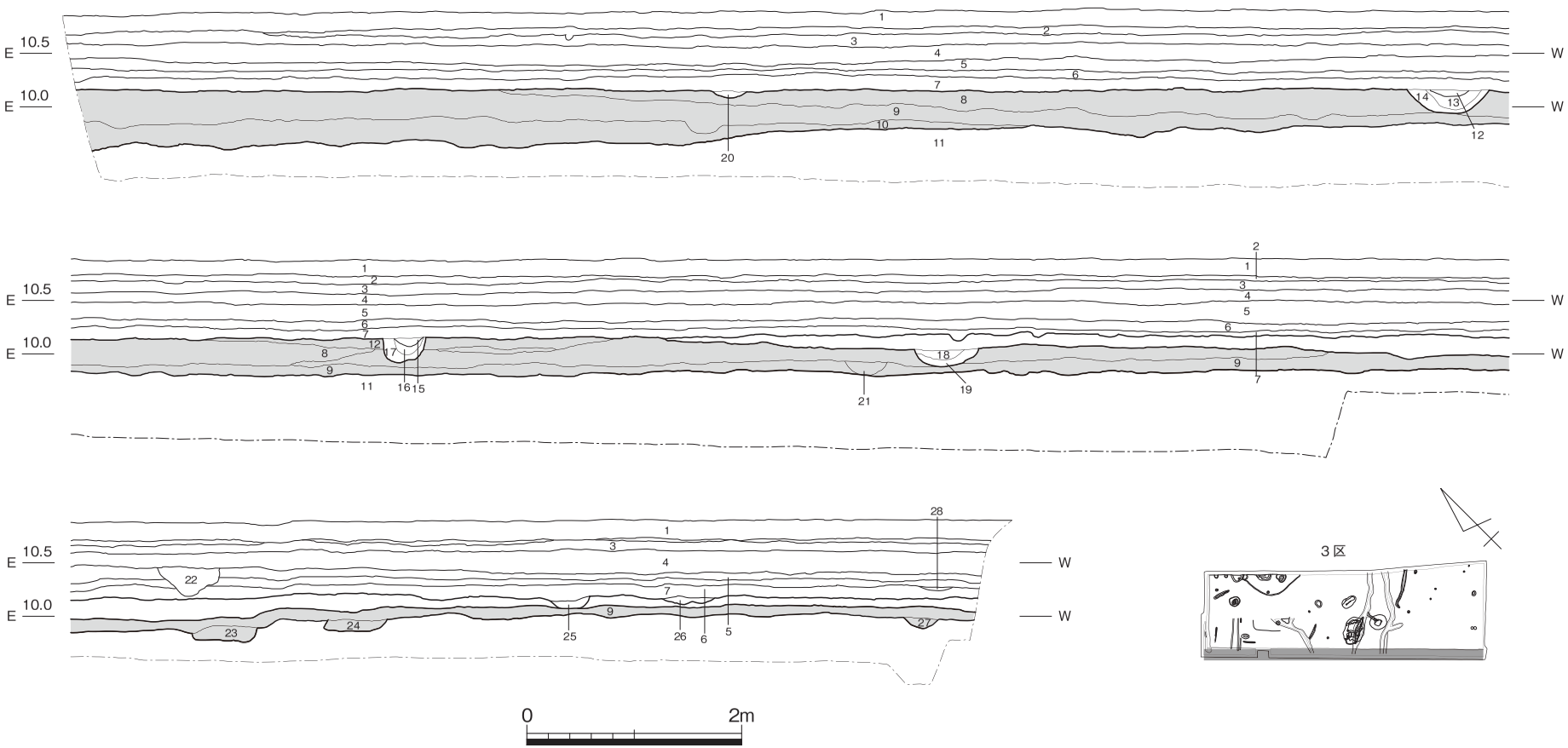
1　暗褐色混粗砂粘性細砂　　しまり良し
2　床土
3　暗褐色混粗砂粘質土　　しまり良し
5　褐黄色混粗砂粘質土　　しまり良し
6　黄橙褐色混粗砂粘質土　　しまり良し

21　茶灰色混粗砂細砂
22　灰茶色混粗砂細砂

0　2m
(1/40)

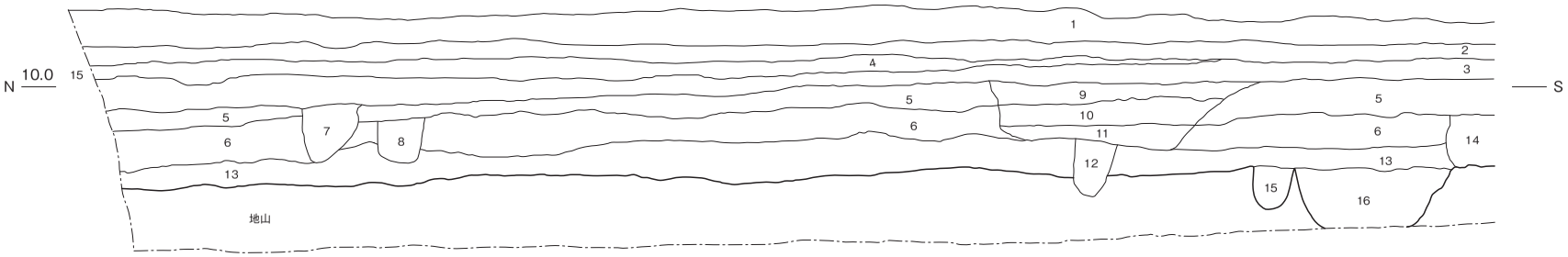


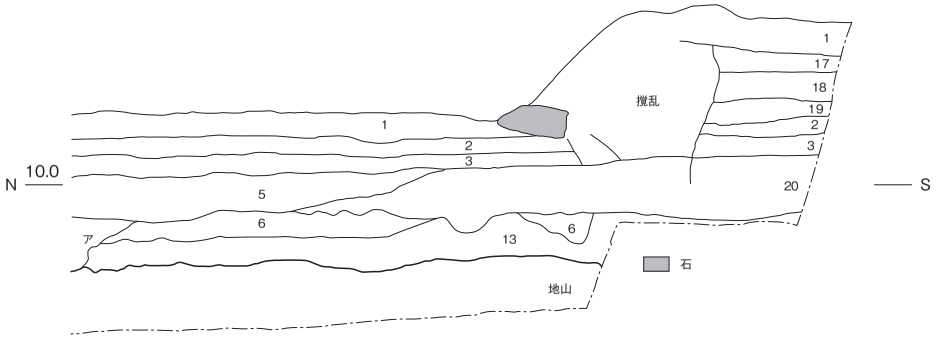
第 11 図　2 区北壁土層断面図

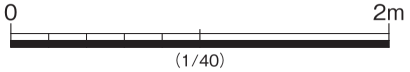


1　耕土
2　5Y6/2 灰オリーブ粗砂混シルト層 (旧耕土・床土)
3　2.5Y4/2 暗灰黄粗砂混粘質土（Fe 分ブロック全体に、旧耕土・床土）
4　10YR4/2 灰黄褐色粗砂混粘質土（Fe 分ブロック、3 層よりやや少ない）
5　10YR3/2 黒褐色粗砂混粘質土（3 層と同様に Fe 分ブロック含む　Mn 分下の方に沈着）
6　10YR3/2 黒褐色粗砂混粘質土（5 層よりも Fe、Mn 分の沈着多い）
7　10YR2/3 黒褐色粗砂混粘質土（4 層とよく似るが上層は Fe 分多く下層は少ない　Mn 粒沈着多し）
8　7.5YR5/6 明褐～ 7.5YR5/8 明褐色粗砂混粘質土
9　7.5YR2/2 黒褐色粗砂混粘質土（東端では Mn 分沈着多し　他は Mn 分少ない）
10　2.5YR5/3 にぶい赤褐～ 2.5YR5/4 にぶい赤褐色粗砂混粘質土（上半は 9 層よりの黒褐色土沈み込み　Fe 沈着）地山
11　7.5YR3/2 黒褐色粗砂混粘質土（Fe 分全体にブロック状　Mn 分多く沈着）
12　10YR4/4 褐色粗砂混砂層（φ1 以下少、φ0.5 以下多、Fe 分多く沈着、Mn 分少沈着）
13　10YR4/3 にぶい黄褐粗砂層（φ1 以下砂多、Fe 分沈着少、Mn 分沈着多）
14　10YR5/4 にぶい黄褐砂層（φ1 以下砂少、φ0.1 以下砂多、両端部では Fe・Mn の沈着が多く見られる）
15　7.5YR4/4 褐色粗砂混シルト（φ0.5 砂少、φ0.2 以下砂多、花崗土の流れ込み）
16　10YR3/3 暗褐～ 7.5YR4/3 褐粗砂層（φ1 以下砂少、φ0.5 以下砂多）
17　10YR5/3 にぶい黄褐～ 10YR4/3 にぶい黄褐砂層（φ0.5 以下砂少、φ0.3 砂が部分的に多いほとんどがφ0.1 以下の細砂）
18　10YR5/3 にぶい黄褐細砂層（ほとんどがφ0.1 以下砂）
19　10YR4/2 灰黄褐色粗砂層（φ0.5 以下砂多、細砂も多い）
20　10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂層、（φ1 以下少、φ0.5 以下
21　10YR4/2 灰黄褐色粗砂層（φ0.5 少、φ0.2 多）
22　10YR3/3 暗褐色粗砂混粘質土（φ1 以下砂少、炭を含む、Fe・Mn 分沈着）
23　10YR3/2 黒褐色粗砂混粘質土（φ0.5mm 以下砂少、Fe 多、Mn 少沈着）
24　10YR5/2 灰黄褐砂層（φ0.5 以下砂多、φ0.2 以下砂多　ラミナ状）
25　10YR5/3 にぶい黄褐砂層（φ5mm 以下少、φ2mm 以下ほとんど上層の土ブロック混じ込み　ラミナ状）
26　5YR3/1 黒褐色砂混粘質土（φ5mm 以下砂多）
28　10YR3/2 黒褐色砂混粘質土（φ5mm 以下砂多）
※8 ～ 10　縄文包含層
11 上面　縄文晩期遺構面

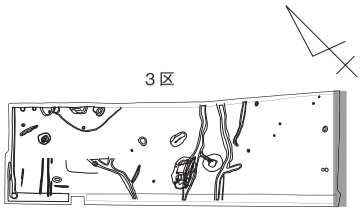
第 12 図　3 区南壁土層断面図



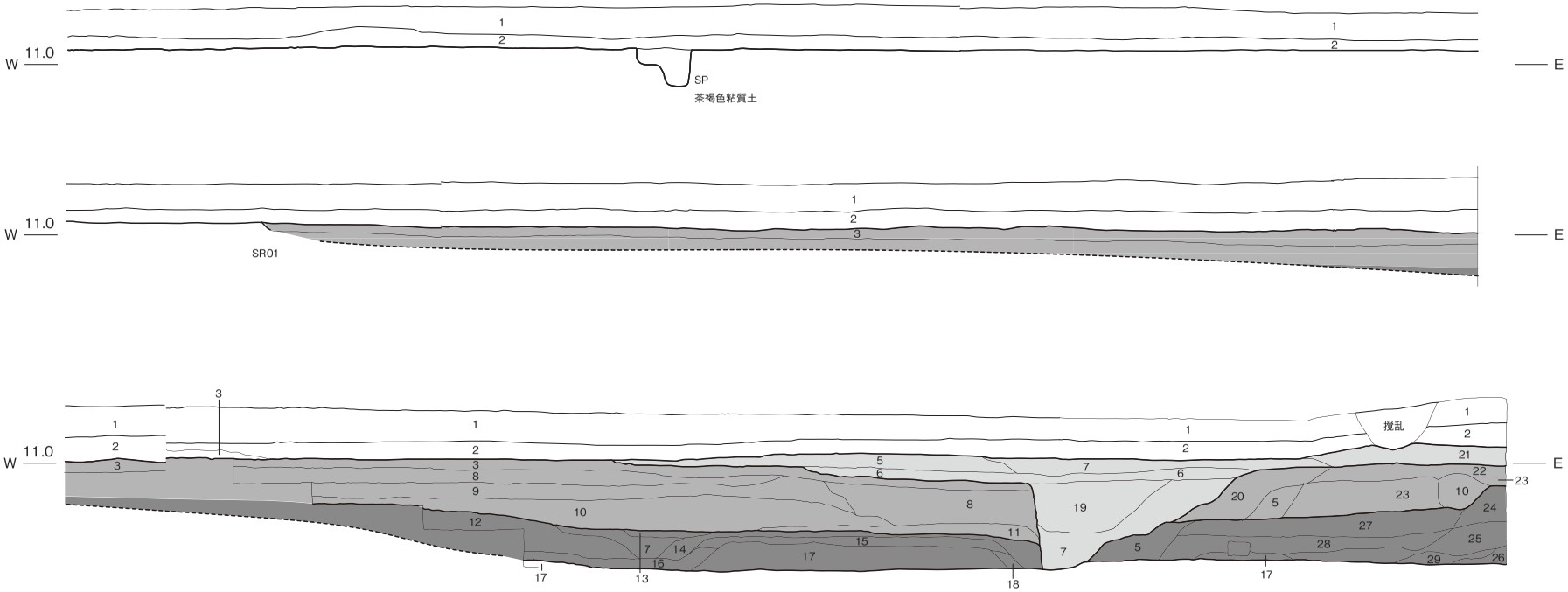




1　耕土
2　10YR4/3 にぶい黄褐　粗砂混粘質土（φ1 以下少、φ0.3 以下多、Fe 分含むブロック全体に広がる、南壁 6 層に対応）
3　10YR4/2 灰黄褐～ 10YR3/4 暗褐　粗砂混砂質土（φ1 以下少、φ0.3 以下多、Fe 分含むブロック下層に多く、Mn 分少、南壁 7 層に対応）
4　10YR4/2 灰黄褐　粗砂混砂質土（φ1 以下少、φ0.3 以下多、Fe 含ブロック全体に広がる　Mn 分少、2・3 の中間層）
5　10YR3/2 黒褐　粗砂混粘質土（φ1 以下少、φ0.3 以下多、Fe 含ブロック多く含む　Mn、20 層より多くなる、20 層の続きの上半）
6　10YR2/2 黒褐～ 10YR2/3 黒褐　粗砂混粘質土（φ1 以下少、φ0.3 以下多、Fe 含ブロック多く含む　Mn、沈着 5 よりますます多くなる、20 層の続きの下半）
7　10YR3/3 暗褐　粗砂混粘質土（φ1 以下少、Fe 含ブロック、Mn 分供特に多い）
8　10YR3/3 暗褐　粗砂混粘質土（φ1 以下少、Fe 含ブロック、Mn 分供と多い）
9　10YR2/3 黒褐　粗砂混粘質土（φ1 以下少、Fe 含ブロック多い、Mn 多）
10　10YR2/3 黒褐　粗砂混粘質土（φ1 以下少、Fe 含ブロック、Mn 供 20 層より多い）
11　10YR3/4 暗褐　粗砂混粘質土（φ1 以下少、φ0.3 以下多い　Mn、Fe 含ブロックは 20 程度　上 2 層と比べ砂が多く粘度が低い）
12　10YR5/3 にぶい黄褐～ 10YR5/4 にぶい黄褐　粗砂混粘質土（φ1 以下少、φ0.3 以下多量、Mn、Fe の含む量は減少）
13（南壁 11 層の続き）　7.5YR3/2 黒褐色粗砂混粘質土（Fe 分はブロックではなく　たて筋で沈着　上層部は Mn 分の沈着も見られる）
14　10YR3/3 暗褐～ 10YR3/4 暗褐　粗砂混粘質土（φ0.5 以下少、Mn 分、Fe 分含む）周囲と比べ砂粒細かい）
15　ベース土は 13 層と同じ　左右両横と比べ、Fe、Mn 分の沈着多い
16　2.5Y5/2 暗灰黄　粗砂混粘質土
17　2.5Y4/2 暗灰黄粗砂混粘質土（Fe 分ブロック全体に、旧耕土・床土）
18　10YR4/2 灰黄褐色粗砂混粘質土（Fe 分ブロック、17 層よりやや少ない）
19　10YR3/2 黒褐色粗砂混粘質土（17 層と同様に Fe 分ブロック含む　Mn 分下の方に沈着）
20　7.5YR2/2 黒褐色粗砂混粘質土（東端では Mn 分沈着多し　他は Mn 分少ない　φ3 以下の Mn ブロックが多く見られる、南壁 9 層に対応）

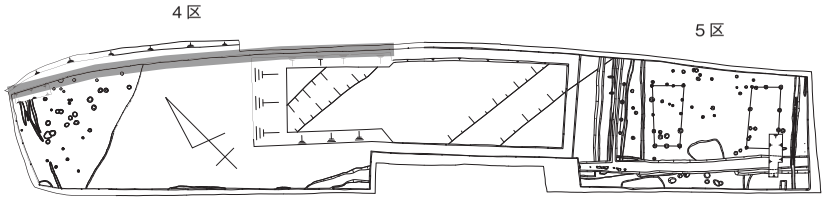


第 13 図　3 区東壁土層断面図

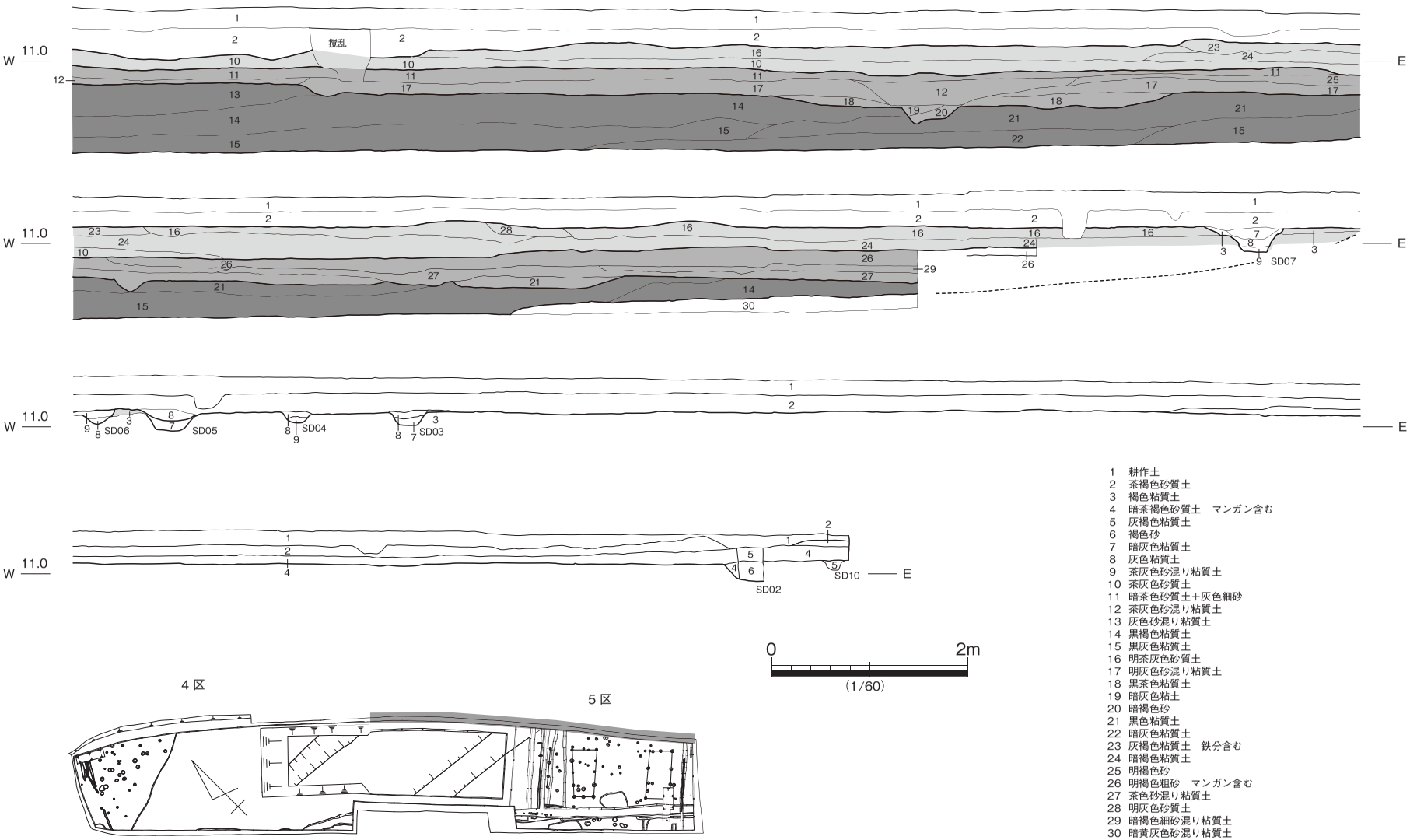


1　耕作土
2　茶褐色砂質土　マンガン含む
3　褐色砂質土
4　橙褐色粘質土　鉄分、明褐色細砂含む
5　褐色粗砂　マンガン含む
6　明褐色砂　マンガン含む
7　褐色砂
8　暗褐色砂混り粘質土
9　茶褐色砂混り粘質土
10　褐色砂＋灰褐色粘土（ブロック状に混じる）
11　暗灰色粘土
12　茶灰色粘質土
13　褐色粗砂
14　暗茶色粘質土
15　暗灰色粘質土　鉄分少々含む
16　暗灰褐色砂質土
17　暗青灰色粘土
18　暗褐色粘質土
19　茶色砂　マンガン沈着
20　明褐色細砂　鉄分少々含む
21　茶灰色砂質土
22　暗茶色砂質土＋灰色細砂　マンガン含む
23　茶灰色砂混り粘質土
24　灰色砂混り粘質土
25　黒褐色粘質土　遺物包含
26　黒灰色粘質土　遺物包含
27　暗茶灰色粘質土
28　暗茶色粘土
29　暗褐色粘質土

0　2m
（1/60）



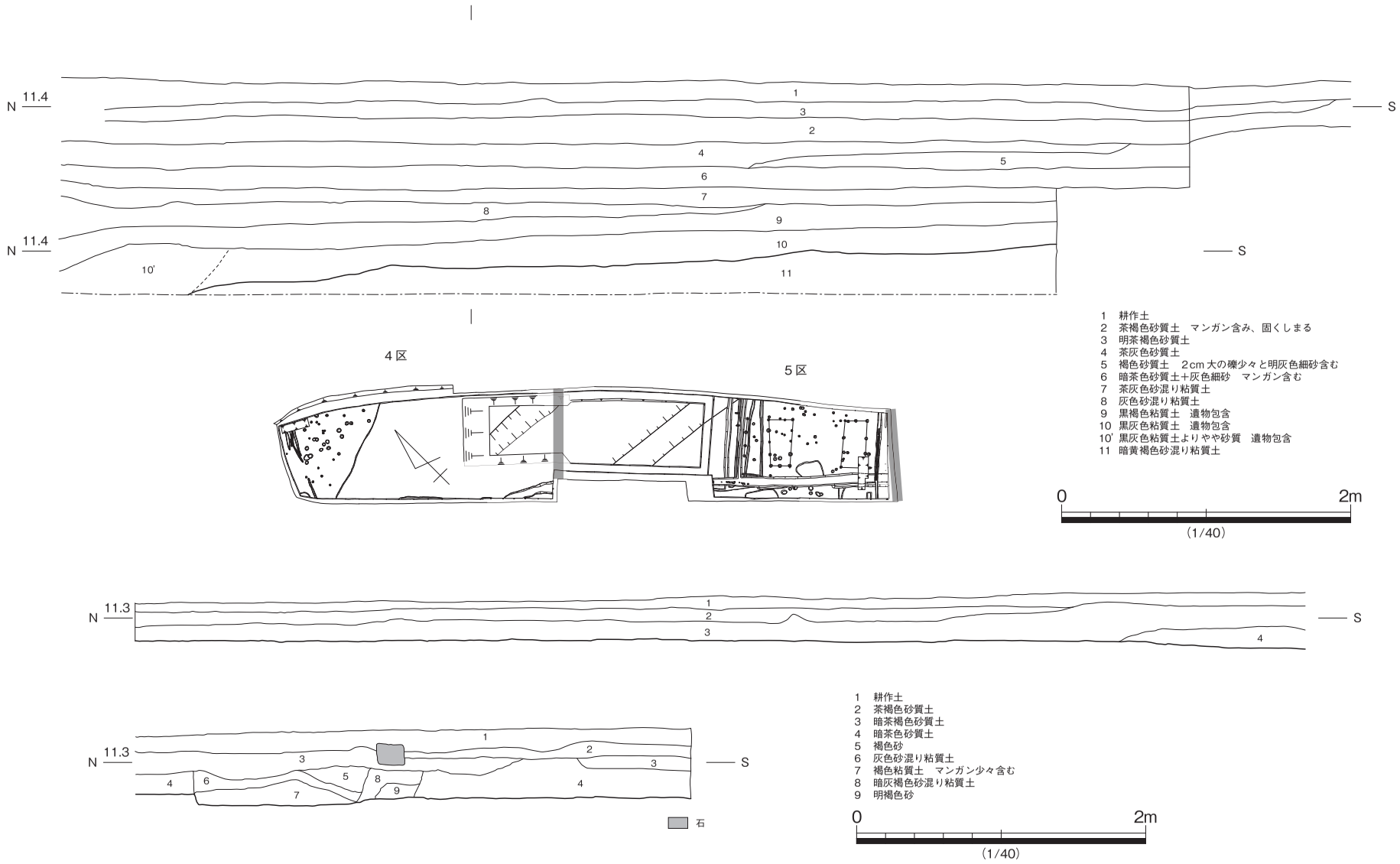
第14図　4区北壁土層断面図



1　耕作土
2　茶褐色砂質土
3　褐色粘質土
4　暗茶褐色砂質土　マンガン含む
5　灰褐色粘質土
6　褐色砂
7　暗灰色粘質土
8　灰色粘質土
9　茶灰色砂混り粘質土
10　茶灰色砂質土
11　暗茶色砂質土＋灰色細砂
12　茶灰色砂混り粘質土
13　灰色砂混り粘質土
14　黒褐色粘質土
15　黒灰色粘質土
16　明茶灰色砂質土
17　明灰色砂混り粘質土
18　黒茶色粘質土
19　暗灰色粘土
20　暗褐色砂
21　黒色粘質土
22　暗灰色粘質土
23　灰褐色粘質土　鉄分含む
24　暗褐色粘質土
25　明褐色砂
26　明褐色粗砂　マンガン含む
27　茶色砂混り粘質土
28　明灰色砂質土
29　暗褐色細砂混り粘質土
30　暗黄灰色砂混り粘質土

SD
7　暗灰色粘質土
8　灰色粘質土
9　茶灰色砂混り粘質土

第 15 図　5 区北壁土層断面図



第16図　4区・5区東壁土層断面図

る。土質は中世包含層が灰色系の粗砂混じり粘性細砂で水田耕土の可能性もある。縄文包含層は暗褐色系の粗砂混じり粘性細砂で下位ほど褐色味が薄く、7層では濁った黄褐色系の粗砂混じり粘性細砂となる。7層の窪みに堆積する5層は土の締りがやや弱いため、調査時は縄文期の低地帯として考えていた。ところが、5層下位面が延長7.5 mにわたって平坦で、底面に貼り付く土器群を検出したことや、7層の窪みとしている当該層の下がり際の肩部傾斜が比較的急なこと、地形的に高い位置にあたることなどを勘案すると、何らかの遺構が存在した可能性は否定できない。

なお、南壁の包含層堆積は東に向かって緩やかに下降している。

北壁断面（第9図）は耕作土の下位に床土・中世包含層が所在し、その直下に灰色粗砂ブロックを含む黄茶褐色系の砂質土層（第9図9）が堆積する。中世遺構調査後に千鳥状に設置した下層確認トレンチでは上部層から沈下した可能性がある石器が若干出土しただけで、基本的には無遺物層と考えられる。

2区

調査区南壁を記録している。1区に近い調査区西側では地表下50cm、調査区東側では100cmで明黄灰色砂の基盤層を確認した。緩やかに東に下降する地形である。特に東側では地表下70cmで古代～中世の河川跡SR201・202を検出し、その基盤となる褐色系堆積層を除去した後に弥生～古墳時代の河川跡SR203・204を検出した。

当該箇所の堆積層は全般的に粗砂を多く含み、河川堆積によって形成された可能性が高い。巨視的には開析谷2としての窪みが現況地形に僅かに現れるが、比較的早い段階（縄文時代早期以前か）に埋没を完了しているものとみられる。

3区

東に向かって傾斜する地形である。調査区東端では地表下75cmで弥生時代の遺構面、その下位に50cm厚さの包含層が堆積し、その層を除去すると縄文時代晩期の土坑を中心とした遺構群の検出面となる。ただし調査区西端での包含層の厚さは約10cmと浅い。

4区・5区

発掘調査範囲の西端にあたる調査区である。両区を斜めに跨いで古代の流路SR401が、その下位に縄文包含層が堆積する。この低地帯域は図示した範囲において調査したため、縄文包含層の厳密な東西の立ち上がりは不明である。ただ、巨視的には先述した谷1に相当しており、流路堆積層と判断できる。

流路の東西の微高地には中世柱穴群・建物跡が所在する。その検出面は耕作土・床土直下にあり、削平を被った面である。流路東側にある建物跡・溝跡は流路SR401の東肩部堆積層を切り込んで掘開している。

SR401は幅約30 m、深さ0.3 mの広く浅い流路形状で、西肩寄りに深さ約1 mのクレバス状の深部がある。堆積層は茶灰色系砂質土（第14図5・6・21、第15図10・16・24）でクレバス部分は褐色砂層である。

縄文包含層はSR401より幅広い範囲に存在し、上層が厚さ20～60cm、下層が30～60cmある。

第2節　縄文時代の遺構・遺物

（1）概要及び報告の手順

縄文時代の遺構は3区で晩期を中心とした土坑群を検出した。また、1区・4区・5区では弥生時代

以後の遺構調査終了後、下位の縄文時代遺物包含層（以下、縄文包含層という）調査を実施し、縄文時代早期を中心とする遺物が出土した。このうち１区は他の調査区より高所に位置しており、前節で５層とした窪み堆積層は底面が平坦で土器集中部を伴うことから、遺構埋土の可能性を否定できない状況である。少なくとも、５層出土遺物とその上位を覆う４層出土遺物には相応の時期差が存在するものと思われる。一方で、５層の窪み堆積の基盤土である７層の遺物は、元来遺物量が少なく、上位層との層境付近の遺物が含まれている可能性もあるので、さほど重視できない遺物群である。したがって４層と５層及び５層下位の３単位の遺物群が１区の主要単位である。

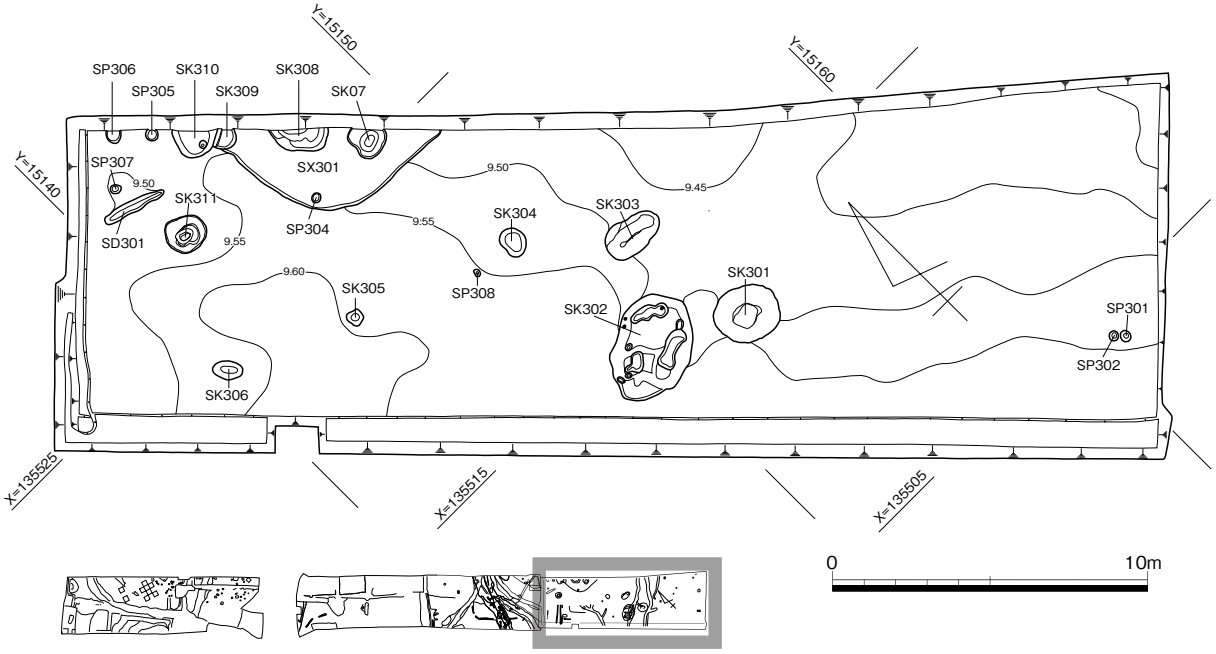
また、２区については縄文包含層の残りが悪く、報告可能な土器は皆無であった。石器については弥生時代以降の遺構検出時に出土したサヌカイト製石器類が少量ある。これらは１区の出土位置・層位不明の遺物と合わせて報告した。

報告はまず遺構が遺存する３区、その後１区⇒４区⇒５区の包含層の順で報告する。３区は遺構図、出土土器・出土石器の順で提示し、１区は遺物分布関連図の提示を行った上で、遺物報告を行う。４区・５区は各区ごとに下層・上層・出土位置や層位不明の遺物の順で報告する。

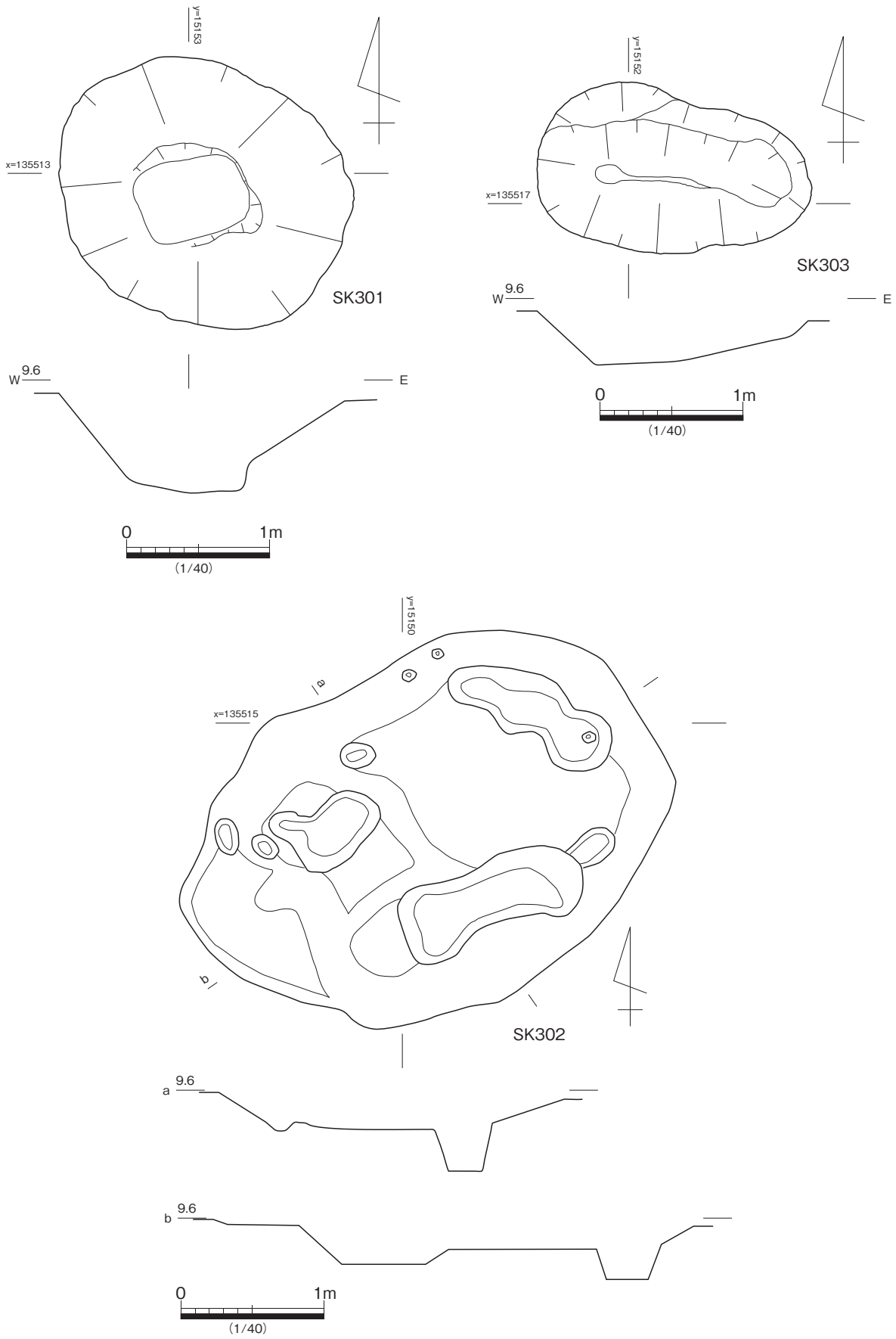
また、出土した石器のうちサヌカイト剥片については末章のまとめで分析対象とし、写真図版に表裏面の写真を掲載して観察表に情報を提示した。また、すべての石器について重量計測を実施して石材別の出土量を比較した。

（２）３区縄文遺構の調査

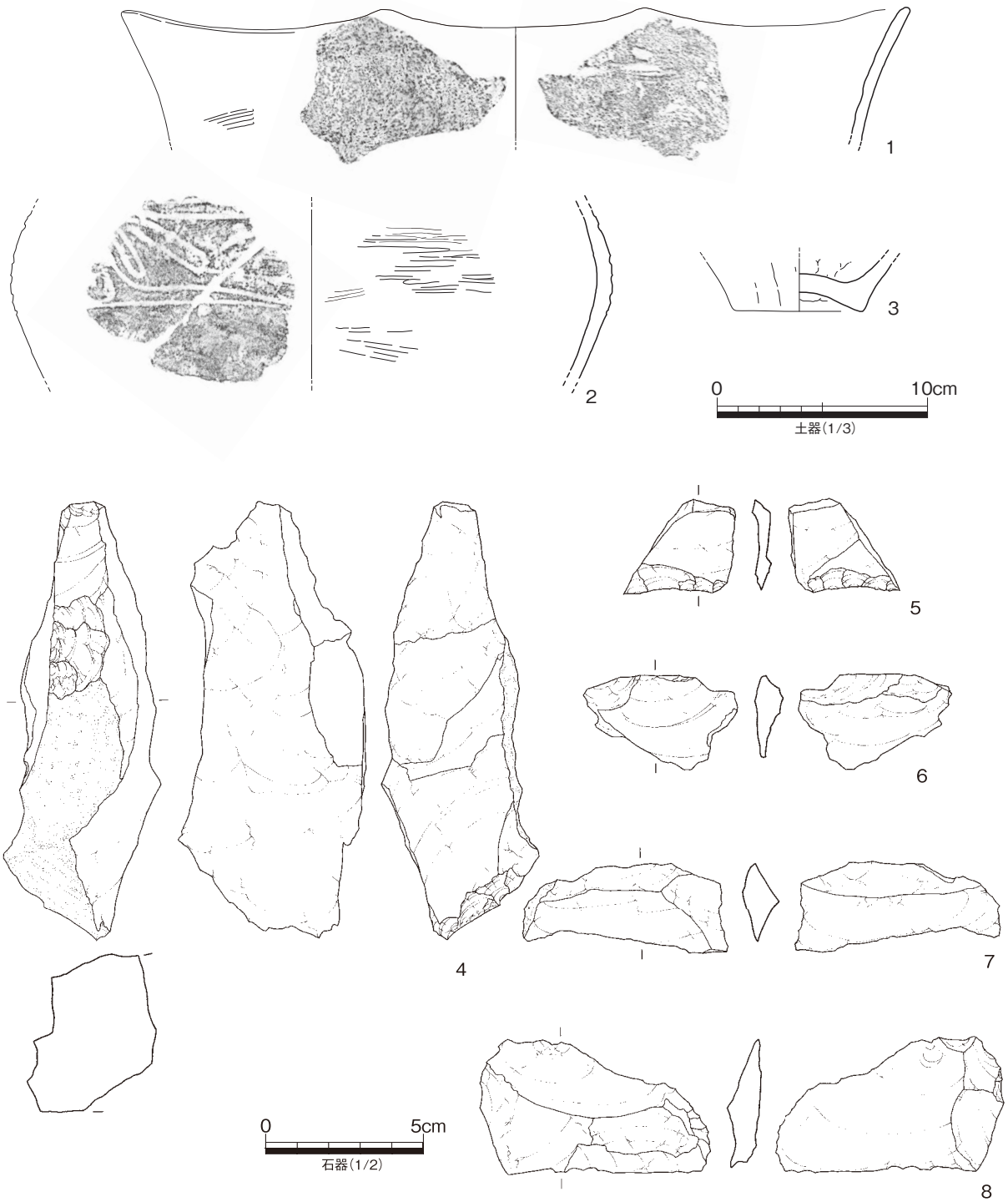
土坑 11 基及び不明遺構１基を検出した。これらは、弥生時代の溝状遺構の基盤土である縄文包含層（第 12 図８～10）を除去した後に検出した遺構である。３区全域に散在し、形状は円形や楕円形、不定形なものがある。埋土は灰色系砂質土で、その上部を黒色砂質土が覆う。以下、遺物出土の土坑・不明遺構を説明する。



第 17 図　３区縄文時代遺構分布図



第 18 図　SK301・SK302・SK303 実測図



第 19 図　SK301 出土遺物（1）

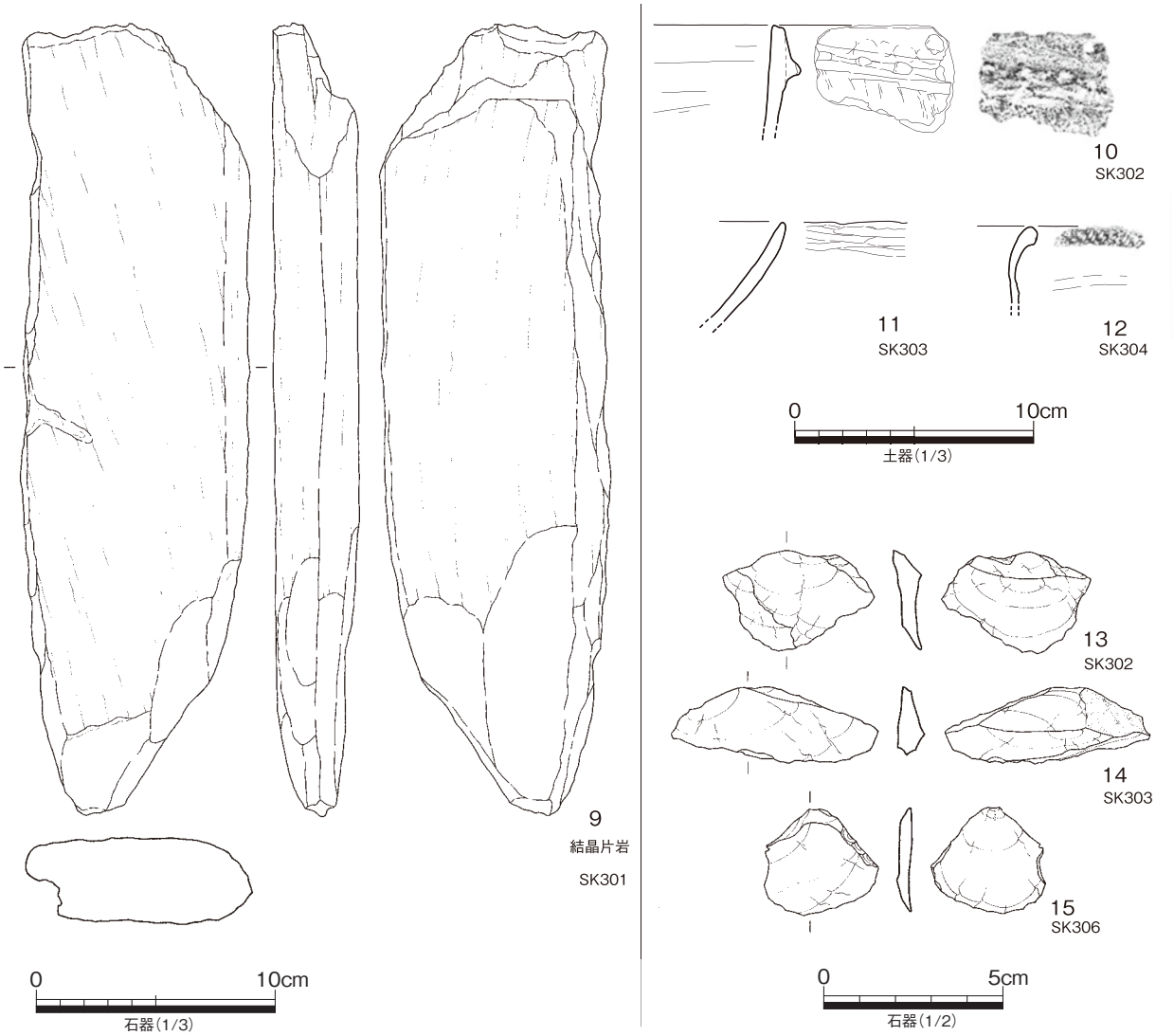
SK301（第 18 ～ 20 図）

長径 2.1 m、短径 1.8 m、深さ 0.65 m、平面楕円形、断面逆台形の土坑である。底面は 0.8m × 0.55 mの隅丸長方形を呈し平坦である。埋土は暗灰色系砂質土の単層で、検出面から約 10cm 下がって側面に貼りついた状態で結晶片岩製の碇石片が出土した。このほか埋土中からは縄文時代後期の磨消縄文系土器、サヌカイト製石器・剥片類が出土した。

1 は口縁部片である。接合しないが、同一個体と思われる口縁部破片が 2 片あり、両者の傾きを検討したところ、口縁部波状の径 37.5cm の深鉢に復元できる。内外面とも器表面の磨滅が顕著だが、外面に条痕、内面に条痕及び指押さえが確認できる。波状口縁の粗製深鉢と判断した。2 は胴部径約 28.6cm の浅鉢である。胴部中ほどが緩やかに膨らむ形状で、最大径部から肩部にかけて横位に展開する細葉系意匠を沈線で描き、磨消縄文で加飾する。胴部下半及び内面は横方向の丁寧なヘラ磨きが施される。3 は上げ底の深鉢底部片である。

以上の土器は 2 の浅鉢が、胴下半に屈曲が出現する縁帯文土器後半期より古く、S 字状カーブで口縁に至る器形と推定され、沈線による細葉の曲線文様などから、近畿地方の北白川下層式あるいは瀬戸内地方の彦崎ＫⅠ式に該当する（千葉 2008）。

石器は 6 点出土した。4 はサヌカイト製の石核である。節理に沿って剥離した厚さ 4cm の扇状の大



第 20 図　SK301 出土遺物（2）・SK302 ～ 304・306 出土遺物

形剥片を素材として、その側縁となる自然面を打面に設定し幅 3 ～ 4cm の剥片を剥ぎ取るものである。5 はサヌカイト製のスクレイパーである。剥片末端の両面から加工して付刃する。6 ～ 8 はサヌカイト製剥片である。6･8 は打撃時の破砕により、打面が遺存しない。7 は幅広く平坦な打面を打撃して剥取した横長剥片である。9 は結晶片岩製の碇石片である。長さ 33.5cm 幅約 10cm の破損品。側縁は丁寧な敲打仕上げが残り、上下端が折損する。近隣の須田・中尾瀬遺跡には縄文時代晩期のほぼ完形の碇石が出土しており、当該品とほぼ同じ形状である（(財）香川県埋文調センター 2000a)。

以上の出土遺物から、縄文時代後期前半の土坑である。

SK302（第 18・20 図）

長径 3.5 m、短径 2.5 m、最大深さ 0.5 mの平面楕円、断面不整形の土坑である。底面は凹凸が顕著である。埋土中から土器片・石器片が出土した。土坑形状から風倒木痕の可能性もあるが、出土遺物がある点を重視して遺構として報告する。

10 は刻目突帯文をもつ深鉢口縁部片である。端部からかなり下がった位置に斜行する突帯を貼付し、突帯と端部との間に円形浮文を施す。突帯より下は縦位の板ナデにより器面を調整する。当該地域の晩期後半の突帯文系土器（森下 2008）には例を見ない文様パターンである。

13 は山形の打面を有するサヌカイト製剥片である。背面は先行剥離面及び底面に覆われ、連続して剥片を剥取している。

突帯文土器が出土することから縄文時代晩期後半の遺構である。

SK303（第 18・20 図）

長さ 2.0 m、幅 1.15 m、深さ 0.4 mの長楕円形の土坑である。断面はＶ字状である。埋土中から少量の土器片・石器片が出土した。11 は単口縁でボウル状形態の浅鉢である。14 は破砕により打面が遺存しないサヌカイト製剥片である。

出土遺物からみて、縄文時代後期から晩期にかけての遺構である。

SK304（第 17 図）

直径約 1m の不整円形の土坑である。深さは 0.13cm で断面は皿状を呈す。埋土中から少量の土器片が出土した。12 は胴部から口縁部にかけてＳ字状カーブを描く器形の浅鉢である。口縁端部が肥厚し、その外面に細かな縄文を施文する。後期縁帯文系土器の彦崎Ｋ１式に該当する。

SK306（第 17 図）

長さ 1.0 m、幅 0.5m、深さ 0.23m の小形土坑である。埋土中から少量の土器・石器片が出土した。土器片は報告可能なものはないが、石器剥片が 1 点出土している。15 は薄い点状打面のサヌカイト製剥片である。

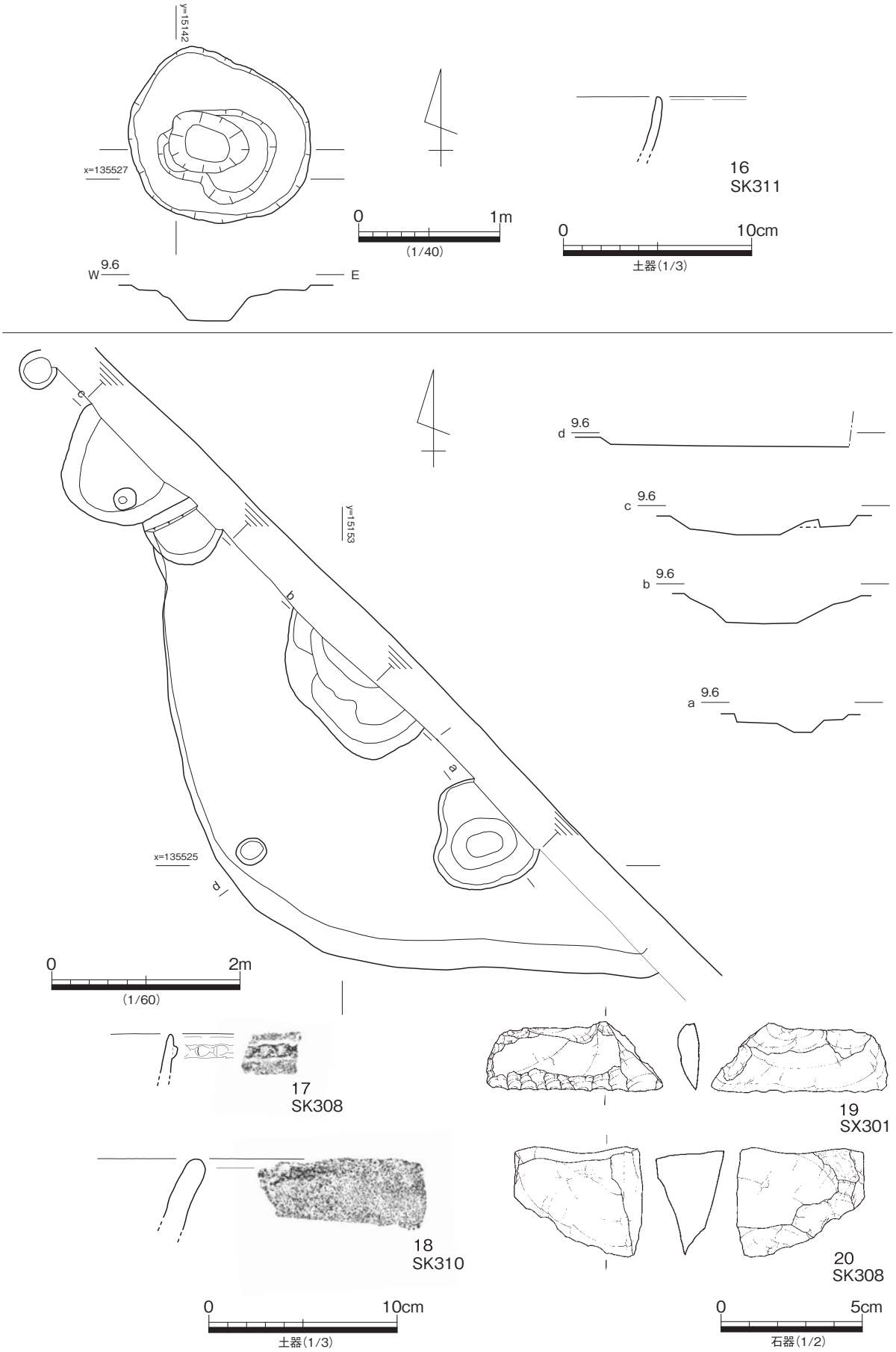
周囲の遺構の時期から見て縄文時代後期から晩期にかけての遺構である。

SK311（第 21 図）

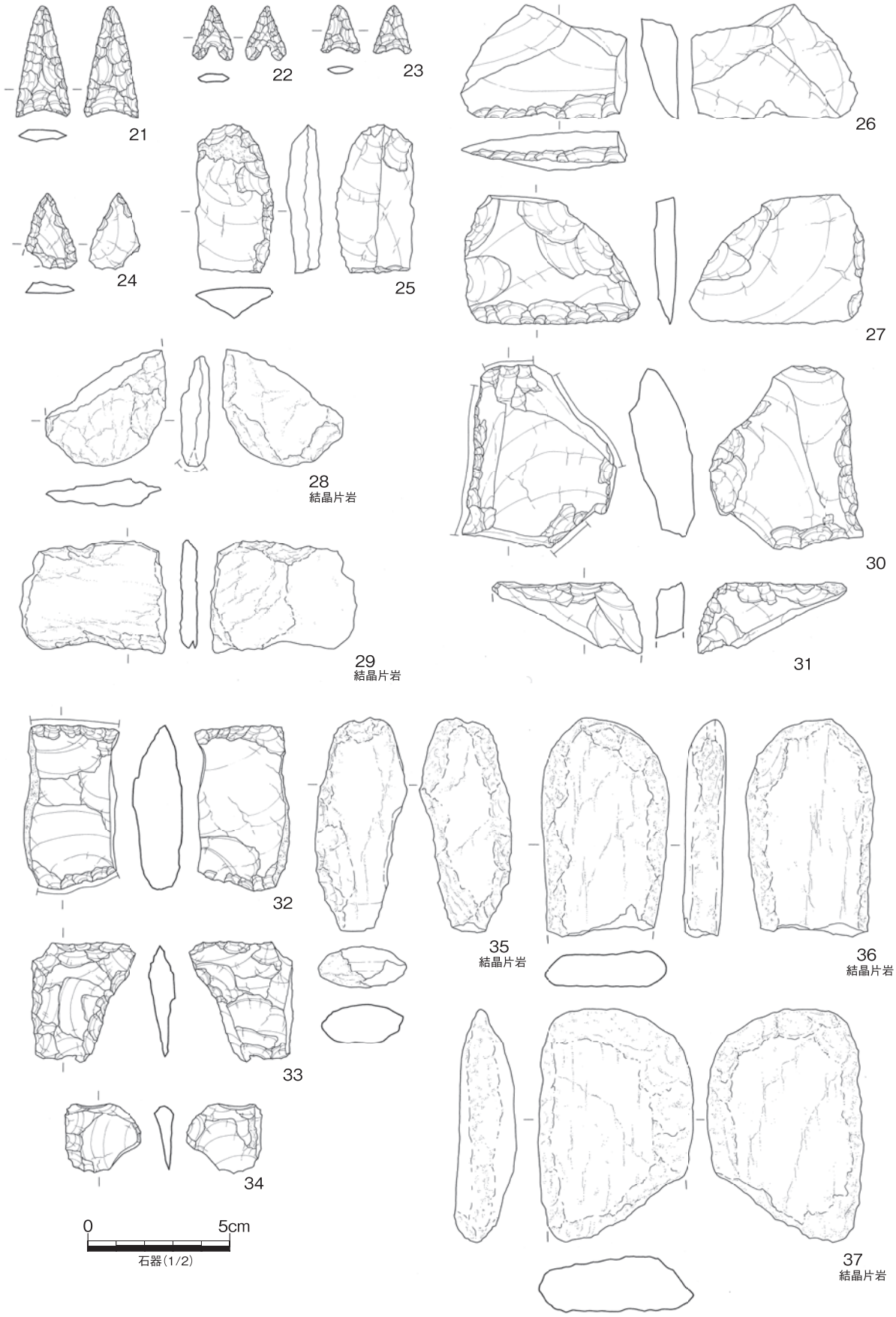
直径 1.3 mの円形土坑である。底面中央の直径 0.6 mほどの範囲が大きく窪み、深さ 0.28m をはかる。埋土中から土器片 1 点が出土した。16 は直口の浅鉢口縁部片である。所属時期は明らかでない。

SX301・SK307・SK308・SK310（第 21 図）

北壁沿いの 8.5 mの範囲に遺構が集中する。埋土はいずれも暗褐色系砂質土で下位に灰色系砂層が介在する。円形でもっとも大きな掘り方をもつ SX301 は肩部の傾斜が緩やかで、SK308 付近に向かって下降する床面形状をもつ。SK307 は深さ 0.16m で浅い円形の窪み。SK308 はそれより深く、側縁の傾



第 21 図　SK308 ～ 311・SX301 実測図・出土遺物



第 22 図　3 区土坑周辺包含層出土遺物（1）

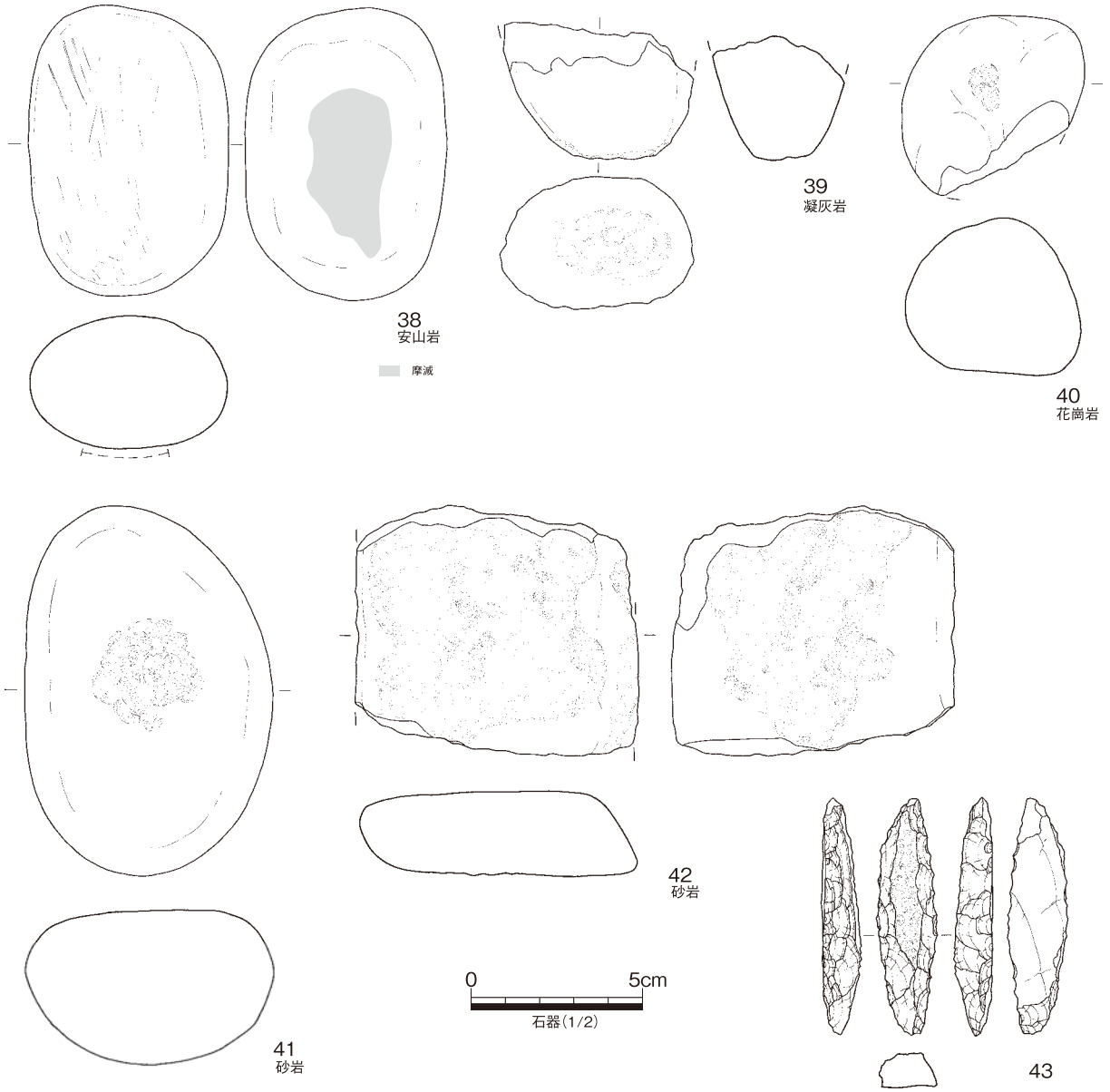
斜が急である。SK310 は SX301 と重複する遺構か併存する遺構か不明だが、同様の埋土である。出土遺物は少ないが土器片・石器片が出土した。

17 は SK308 出土の突帯文系深鉢口縁部片である。口縁端部からやや下がった位置に刻目突帯を貼付する。突帯は扁平で、D 字形の刻目を施す。18 は SK310 出土の深鉢口縁部片である。器壁は厚く、口縁端部は丸く収める。縄文時代後晩期ではなく、1 区等出土の押型文系土器に類似する。19 は SX301 出土のサヌカイト製スクレイパーである。打面除去した横長剥片の末端から側縁にかけて、片面からだけ調整加工を加えU字の刃部を作り出すものである。20 は SK308 出土の加工痕有剥片である。肉厚で打面半載した剥片の末端側背部から粗い加工を施すものである。

縄文時代晩期後半の突帯文土器が出土していることから、晩期の遺構である。

3 区土坑群周辺出土の石器（第 22・23 図）

土坑群を覆う褐色系砂質土（縄文包含層）から出土した石器である。21 ～ 24 はサヌカイト製石鏃で



第 23 図　3 区土坑周辺包含層出土遺物（2）

ある。21 は平基式で側縁が直線的に先端に向かう形態で長さ 4cm の大形品である。22・23 は長さ 2cm 以下の小形品で 22 は凹基、23 は平基である。24 は剥片を素材として片面縁辺に調整加工を一周巡らせただけの未製品である。25 はサヌカイトの縦長剥片の側縁から打面側にかけて調整加工を施したスクレイパーである。調整加工は背面を打撃し、腹面側のみに施す。26・27 はサヌカイトの横長剥片を素材とするスクレイパーである。いずれも片面のみの調整加工で、26 は背面側から、27 は腹面側から打撃して加工する。28 は結晶片岩製の打製石斧刃部片である。刃部付近に磨滅が残る。29 は結晶片岩製の加工痕有剥片である。図の下端に若干の調整加工を施す。30 ～ 32 はサヌカイトの楔状石核である。33・34 は同様の石核から剥離した剥片である。いずれも側縁に両極打撃によるとみられる敲打がみられる。35 は結晶片岩製の磨製石斧片である。周縁部が強く敲打されており、叩石に転用されているが、図の下端に僅かに刃部が残る。刃部厚さ 1.5cm ほどの両刃の伐採斧とみられる。36・37 は扁平な結晶片岩の周縁に敲打痕が残る叩石である。

38 ～ 42 は磨石･叩石類である。38 は安山岩で片面に磨滅、一方に線状痕が残る。39 は凝灰岩の叩石。小口部に敲打痕を認める。40 は花崗岩製の磨石である。41・42 は砂岩製の叩石である。いずれも腹面に敲打痕を認める。

43 はサヌカイト製の角錐状石器である。今のところ荘内半島で唯一の旧石器である。背面に自然面を残す横長剥片を素材として主要剥離面側から打撃して周縁全面に調整加工を施す。断面形は中央部が台形で基部が三角形。先端側は折損するため明確ではないが、基部同様に断面は三角形と推定できる。残存範囲で稜上加工は施していない。ただ、基部裏面に若干の基部加工を施す。長さは 7cm で、備讃瀬戸地域のナイフ形石器文化期の角錐状石器としては標準的な中形品である（森下編 2000）。

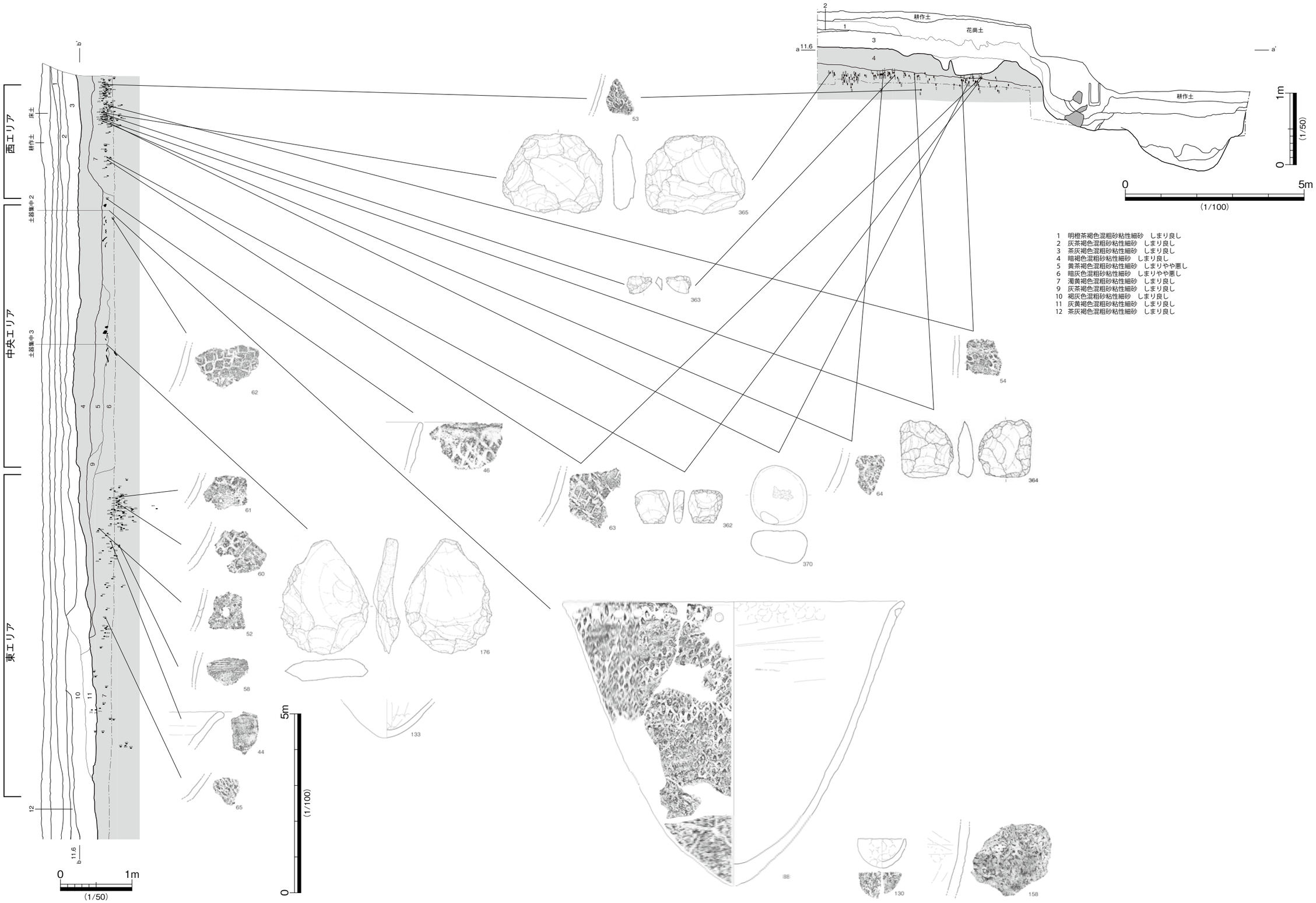
（3）1区縄文包含層の調査

1区の南西部は丘陵縁辺にあたり、周囲より約1mほど地盤が高い。縄文包含層はその南西部を中心に良好に遺存する。前節でも記したように中世包含層の下位に4層（暗褐色系砂質土）、5層（黄茶褐色系砂質土）、7層（濁黄褐色系砂質土）の順で堆積しており、そのうち5層は東西8mほどの範囲の窪みに堆積した層である。なお、7層の下位には無遺物層とみられる9層がある。

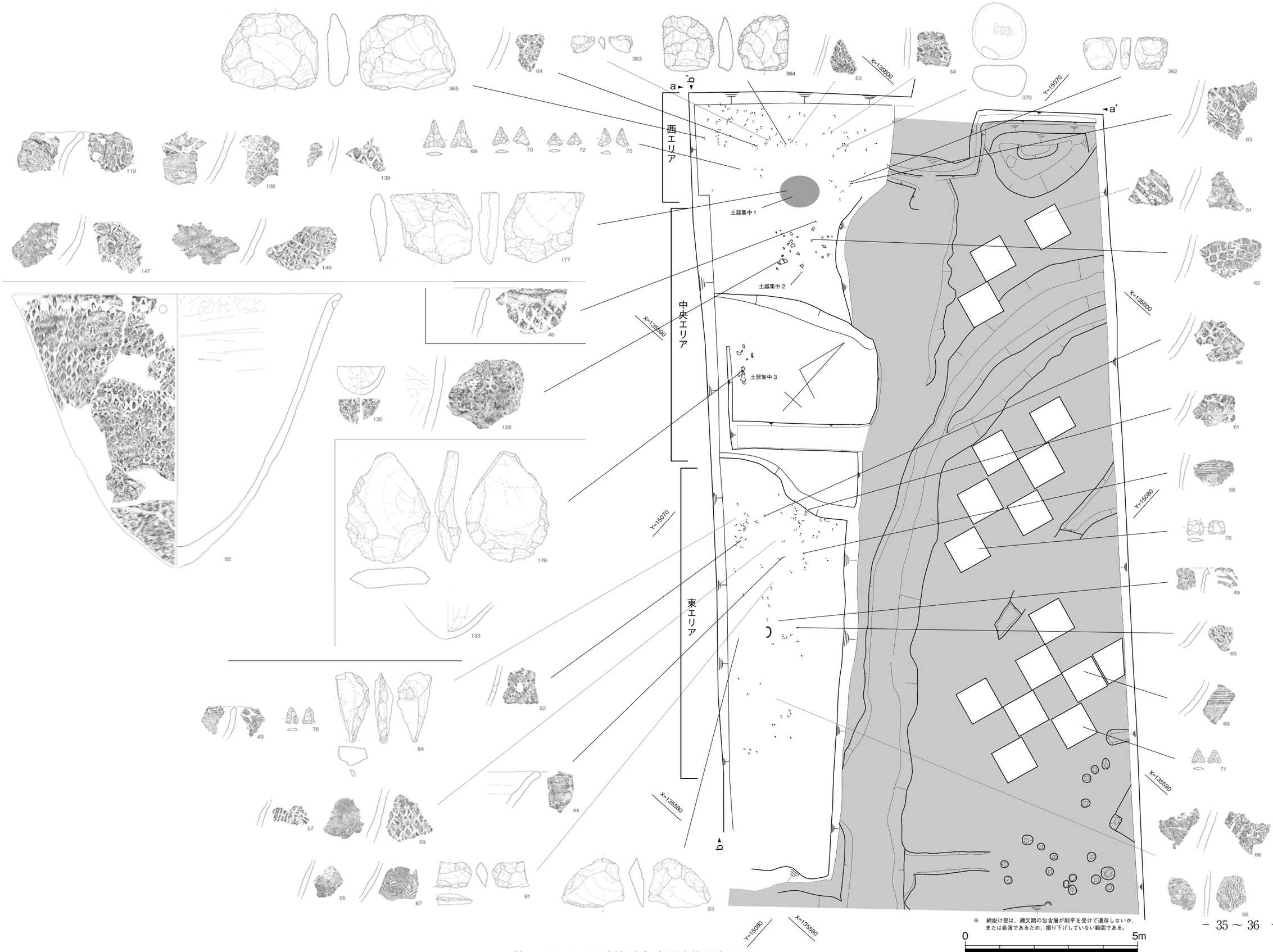
第24図に示した1区西側縄文包含層遺物分布図は、図左側の白抜き部分が縄文包含層遺存範囲、右側の網掛け部分は縄文包含層が遺存しない（9層が露出）範囲である。右側で千鳥状に白抜きとなっている部分は、下層確認のためのトレンチである。ここでは少量の石器片が出土したが、経年による垂直移動の結果、9層に沈下し削平を免れた遺物と判断し、7層と合わせて報告している。

第24図では縄文包含層分布域を便宜上西エリア、中央エリア、東エリアに区分した。調査の詳細手順は次のとおりである。当初4層遺物を全エリアで掘り下げ、遺物を一括取り上げした。さらに中央エリアの5層分布域の窪みを掘り下げ、出土遺物を原則一括取り上げしたが、5層（第25図土層図の6層を含む）下位面に貼りついて出土した大形の土器類については、出土位置を記録した後に取り上げた。5層分布域の窪みの肩部に相当する7層はすべての遺物出土位置を記録しながら掘り進めた。さらに北側（第24図の右側）の9層は千鳥状に確認トレンチを設定して掘り下げた。

以上の調査手順を経た。このうち、西エリアと東エリアの西半分に遺物分布が多いようにみえるが、これは5層出土遺物の出土位置が反映していないためである。5層出土遺物は1区縄文包含層出土の中で最も多い量が出土しており、5層分布域の窪みとした中央エリア・西エリア・東エリアの西半分が主な遺物集中域である。以下、各層ごとに出土遺物を報告する。



第 25 図　1 区西側縄文包含層遺物分布断面図



第 24 図　1 区西側縄文包含層遺物分布平面図

＜1区7層出土遺物＞（第26～28図）

44～49は押型文系深鉢口縁部片である。44は上開きの胴上半から口縁部が短く外反する形態で、内外面に文様を持たない。45・46は口縁部が外反しない深鉢形態で、45は口縁端部からやや下がった位置に楕円文を施し、46は口縁部直下から楕円押型文を施文する。47は深鉢口縁部片で僅かに外反する。外面に楕円文、内面に斜行沈線を施す。48・49は小形の深鉢口縁である。このうち48は口縁部がやや内湾気味となる深鉢口縁部片で、外面は口縁端部まで単位の大きな楕円押型文を施文する。また、内面には貝殻原体押捺文を施文する。49は口縁に刻目隆帯を貼付し、隆帯下位に押し引きによる太い沈線を施文する深鉢口縁部である。

50～58は押型文系深鉢胴上半片である。50・51は外面に楕円押型文、内面に太い斜行沈線文を施文する。52～54は外面に楕円押型文を施文、55・56は山形押型文を施文する。57は半載竹管による斜格子沈線を施す。58は横位の条痕文を施す。

59～68は押型文系深鉢胴下半片である。59～65は外面に楕円文を施す。このうち、63・64は格子状の楕円文である。65は楕円の単位が細長い。66・67は外面に山形文を施文する。66は山のピッチが細かく、68は外面に条痕文を施す。

69～78はサヌカイト製打製石鏃である。いずれも凹基式で、69～72は側縁が直線的なもの、73～76は側縁中程で屈曲し裾に向かって広がる正面形を呈するものである。なお、77・78は製作途上の欠損品である。基部形状に着目すると、69･70が緩やかな凹基、71～76は左右の逆刺が外に開く形状で、後者が量的に優勢である。

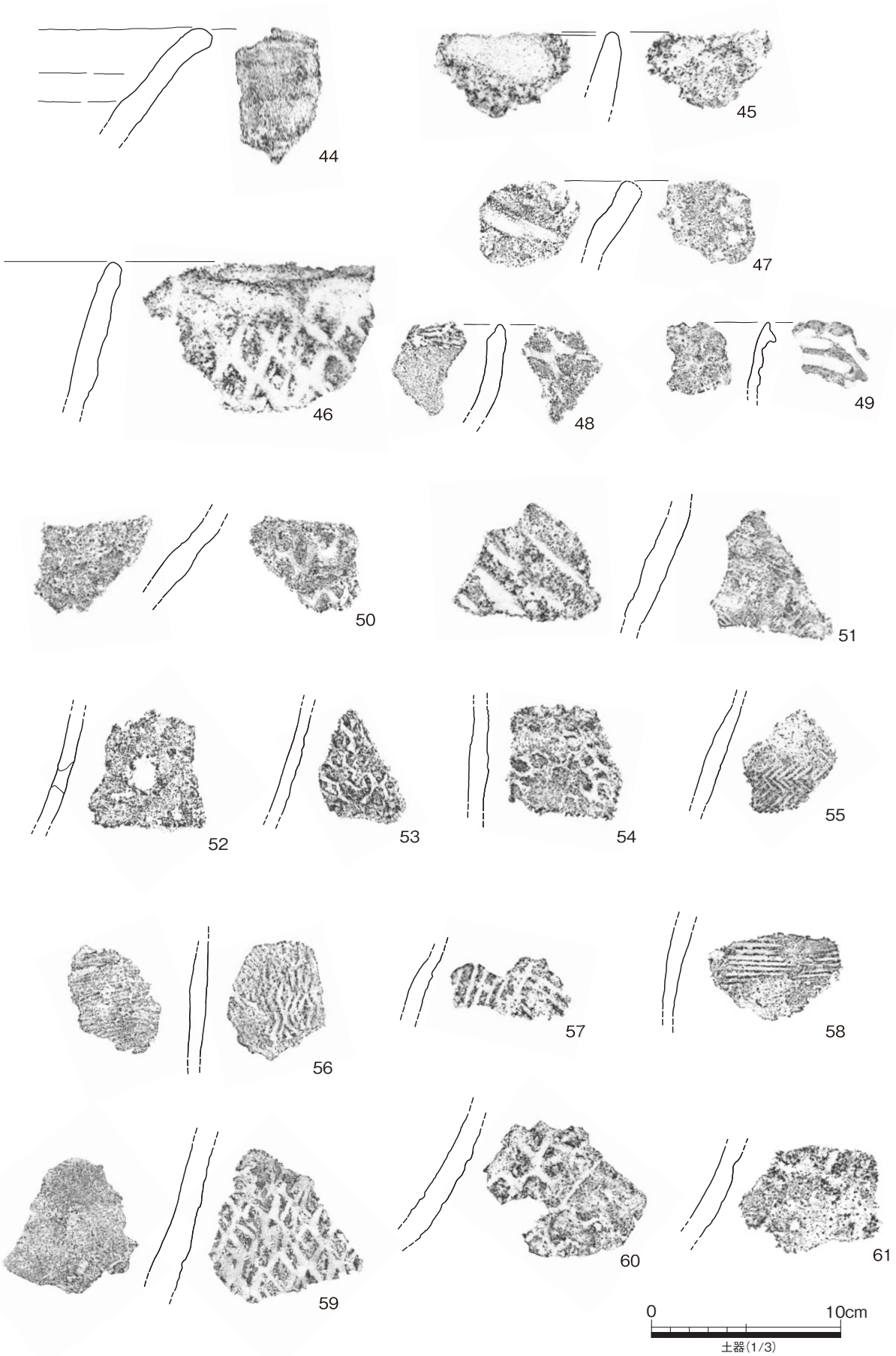
79はサヌカイト製石匙である。横形で素材剥片の背面に多くの調整加工を施し刃部は片刃となる。

80～83はサヌカイト製スクレイパーである。80は端正な正面形を呈す。背面の大部分に自然面を残す素材剥片の腹面側を主に加工して片刃を作出し、背部は丸く仕上げる。81・83は厚味のある素材剥片の打面部を大きく除去して背部を粗加工し、刃部は主に腹面側を加工して直線的な片刃を作出する。82は薄い剥片を素材として、弧状の片刃を作出する。

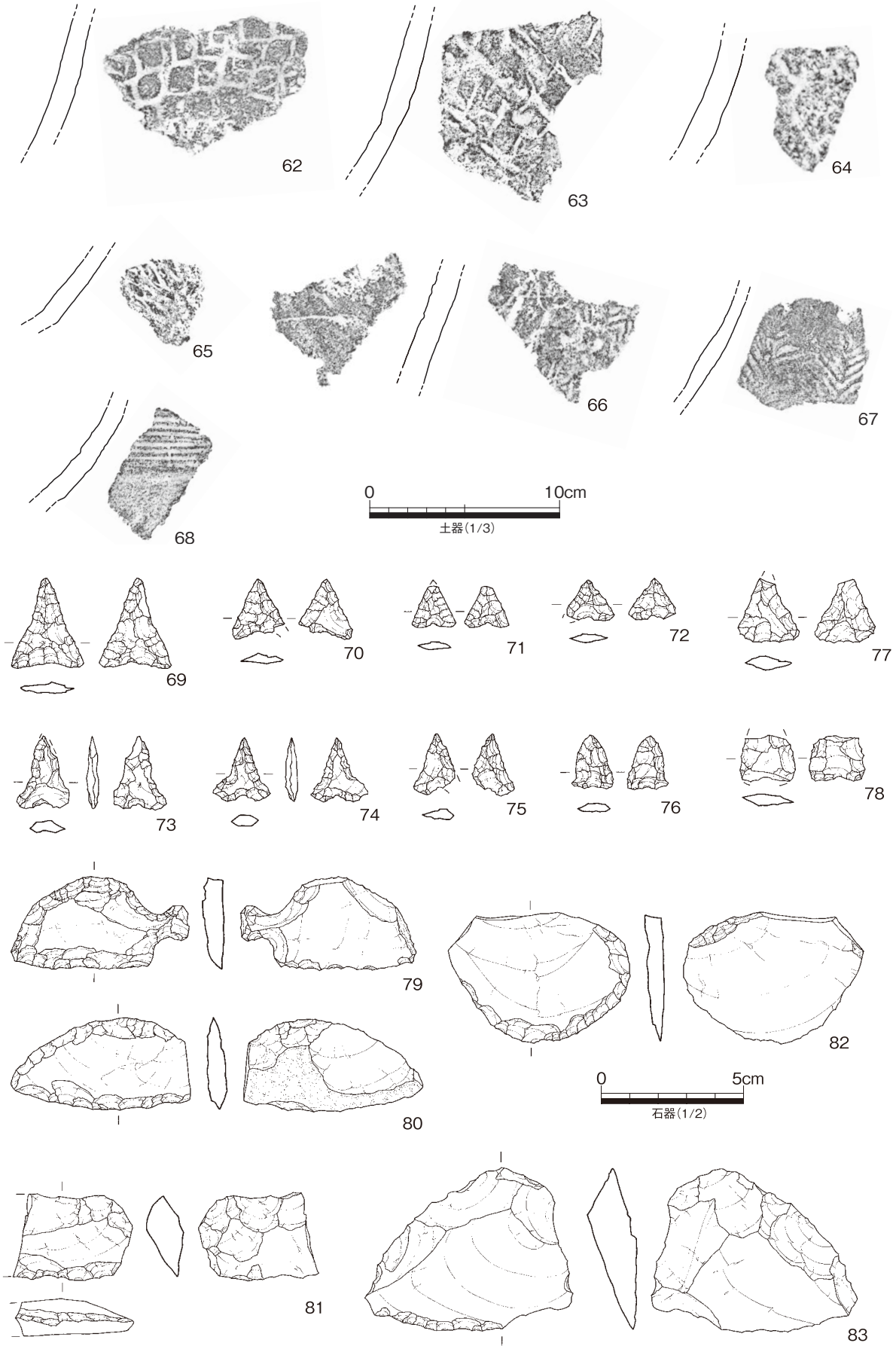
84はサヌカイト製の大形石錐である。厚さ2.1cmのやや厚めの石核を素材として、急角度の調整加工を施し側縁形状を整え、対する折損面との間に下端作用部を作出する。作用部には回転磨滅及び捻じれによる微剥離痕を認める。

85～87は叩石類である。いずれも礫表面に研磨痕があり、磨石として使用した後、叩石に転用している。85は安山岩製。表裏の研磨が顕著で、一部側縁に明確な稜線を残す。敲打痕が線状を呈しサヌカイト剥片素材の両極打撃を示唆する。86は硬質の凝灰岩製で周縁部のあばた状敲打が顕著。87は砂岩製である。

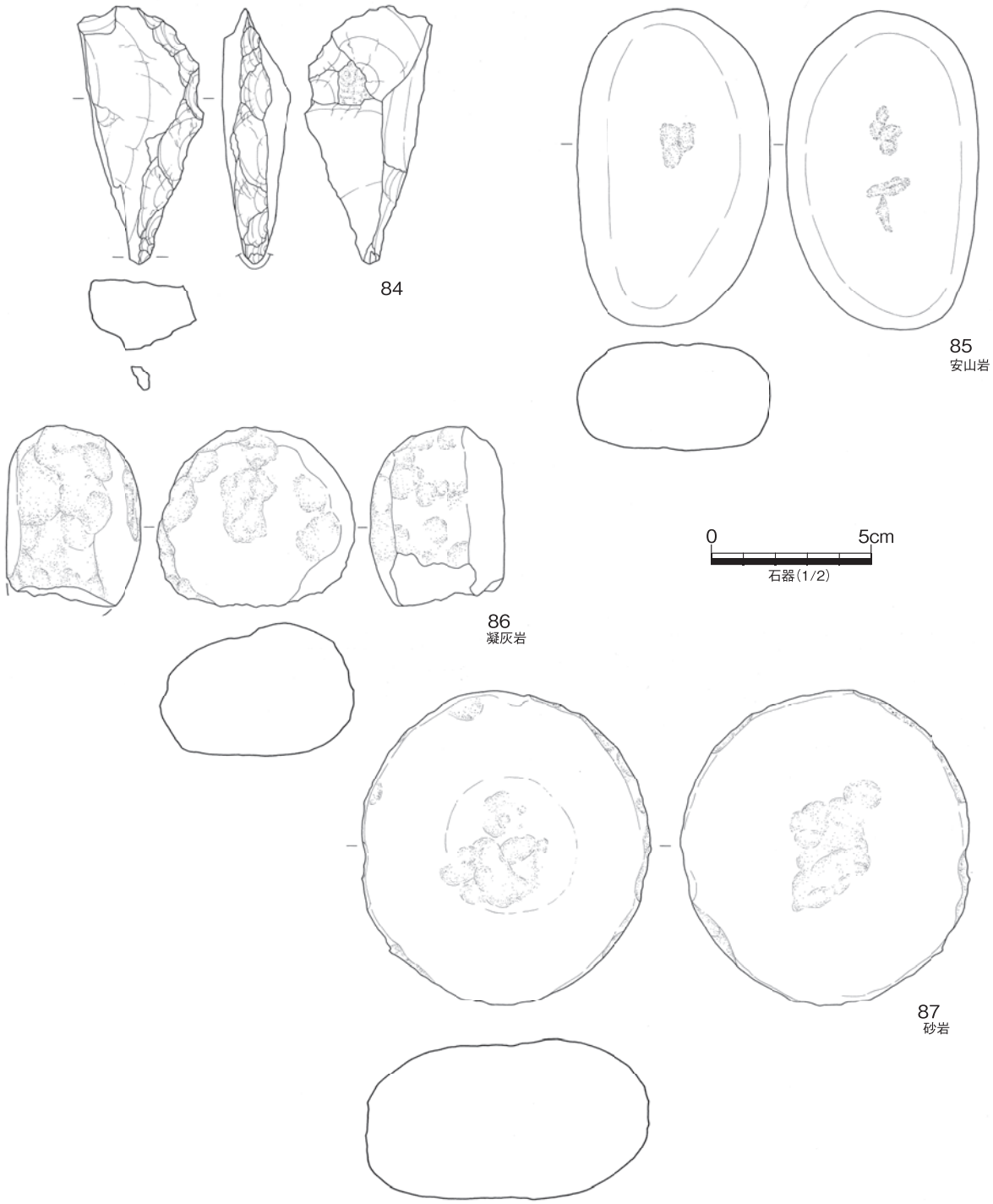
以上の1区7層出土遺物は、押型文系土器において、外面に大粒の楕円文を施すものが多いこと、文様単位の重複が多いこと、格子目状となる原体もあること、口縁部内面に斜行する太いナデ沈線を施文するものが含まれることから、高山寺式に該当する。一方で、突帯文、沈線文、条痕文等を施文する個体があることや、弛緩した角度の山形押型文を施文する個体もあり、これらは高山寺式に後続する穂谷式に位置づけられることから、早期後半の高山寺式から穂谷式にかけての時期と考えられる（矢野2008）。



第 26 図　1 区縄文包含層 7 層出土遺物（1）



第 27 図　1 区縄文包含層 7 層出土遺物（2）



第 28 図　1 区縄文包含層 7 層出土遺物（3）

＜1区5層下位出土遺物＞（第29～31図）

88は図上で完形に復元できる楕円押型文系深鉢である。器高47.2cm、口径56.6cmで上開きの胴部から口縁部が僅かに外反する。口縁外面には、押型文原体を用いたと思われる直径15mmの円形刺突文が巡る。胴部外面の押型文は縦位の楕円文である。内面は横位の板ナデ調整を施しており、斜行ナデ沈線は認められない。底部は尖底である。

89は口縁部から胴部下半まで残存する楕円押型文系深鉢である。僅かに膨らみながら直立する胴部から、口縁部が緩やかに外反し端部が肥厚する器形である。復元口径は48.4cm。胴部外面の押型文は縦位楕円文で、内面は胴部から口縁部にかけて、太形の斜行沈線を施す。胎土に角閃石と思われる微粒を含み、細かな繊維質圧痕が器面及び胎土中にみられる。

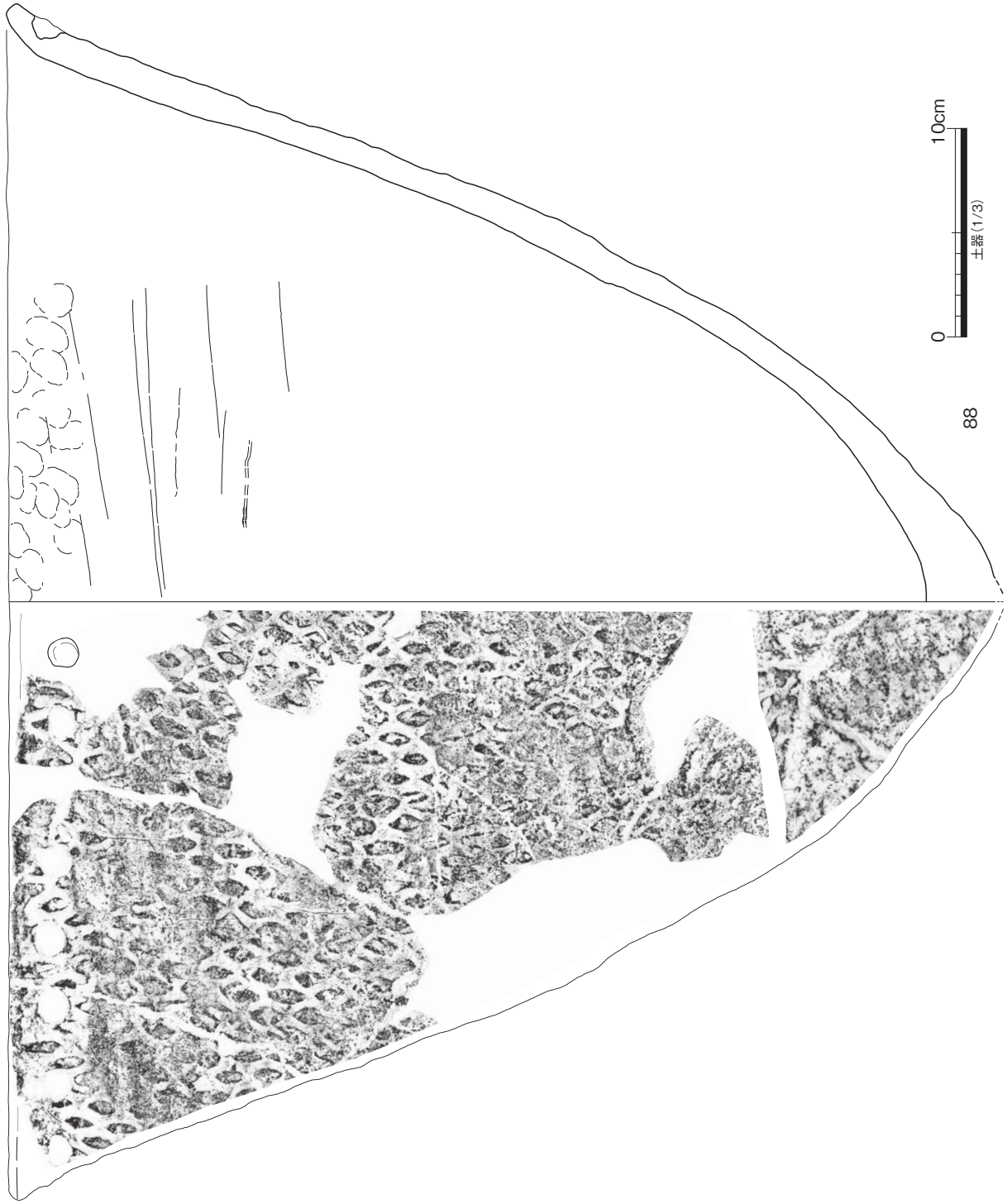
90～92は楕円押型文系深鉢の口縁部片である。90は緩やかに外反する器形で外面に押型文原体によるとみられる円形刺突文が巡る。残存範囲には内面の沈線はみられない。91は上開きの胴部からそのまま口縁部に至る器形で内面に斜行沈線を認める。92は胴部から強く外反する器形で内面に通常とは逆の右上がりの斜行沈線を認める。

93～103は楕円押型文系深鉢の胴部片である。93・94・96～98、101・102は楕円の単位が大粒で格子目状となるもの。99は楕円間が離れて空白部が多い原体である。楕円の形状は小口部が尖り、側縁が緩やかな弧状を呈すため、斜葉文としてもよい。内面には横位のハケ目状工具による器面調整が施される。磨滅顕著な100は、胴部中程に横位区画沈線があり、器面の凹凸の状態で楕円押型文と推定したが、沈線文の可能性もある。

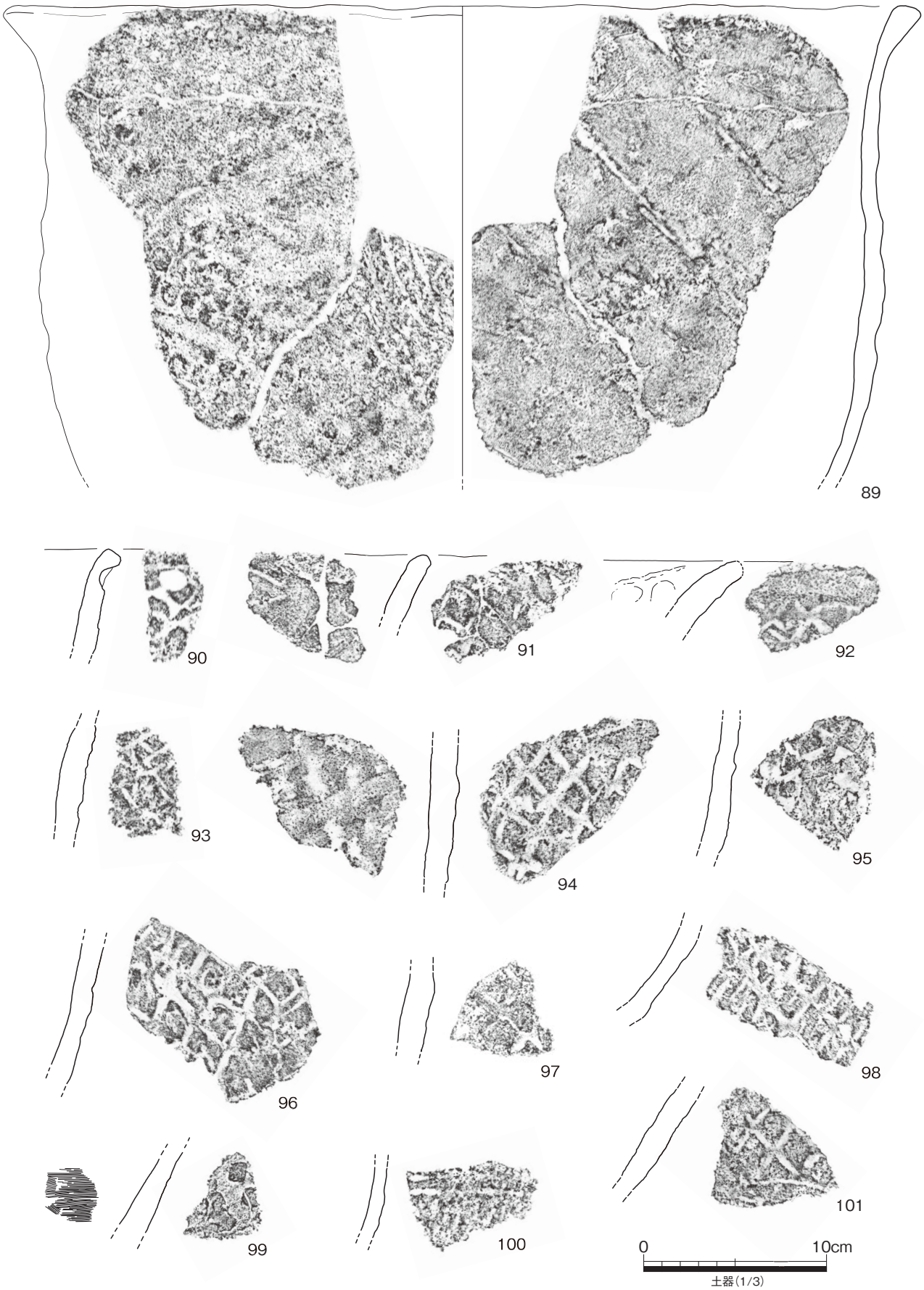
104～109は山形押型文系深鉢胴部片である。104～108は横位で施文し、そのうち106は山形文1条の上位に斜行する条痕沈線文を施し、下位に横位の区画沈線を入れ、さらに縦位の条痕沈線文を施している。107・108にも文様の一部に横位の区画沈線を施す。108は幅広い隆帯を貼付する。109は縦位で角度の大きな山形文を施す。

石器は、110～112がサヌカイト製打製石鏃である。いずれも側縁は直線的だが、110・112は逆刺中央部が窪み、逆刺が左右下に踏ん張る形状。113はサヌカイト製スクレイパー。剥片刃縁の背面側にのみ調整加工を施し、片刃を作出する。114は蛇紋岩を素材とする石製棒状垂飾である。上端の穿孔部付近がやや幅広く、中央部が僅かにくびれ、下端部は微かに広がる形状である。断面は隅丸方形で、稜線は不明瞭だが、各面は平坦・平滑に仕上げる。穿孔部上面は表裏とも左右に偏った部分の磨滅が顕著である。この偏りは垂下した際の重心の偏りに連動することから、装身具として垂下使用した痕跡と考える。115は花崗岩製の磨石である。

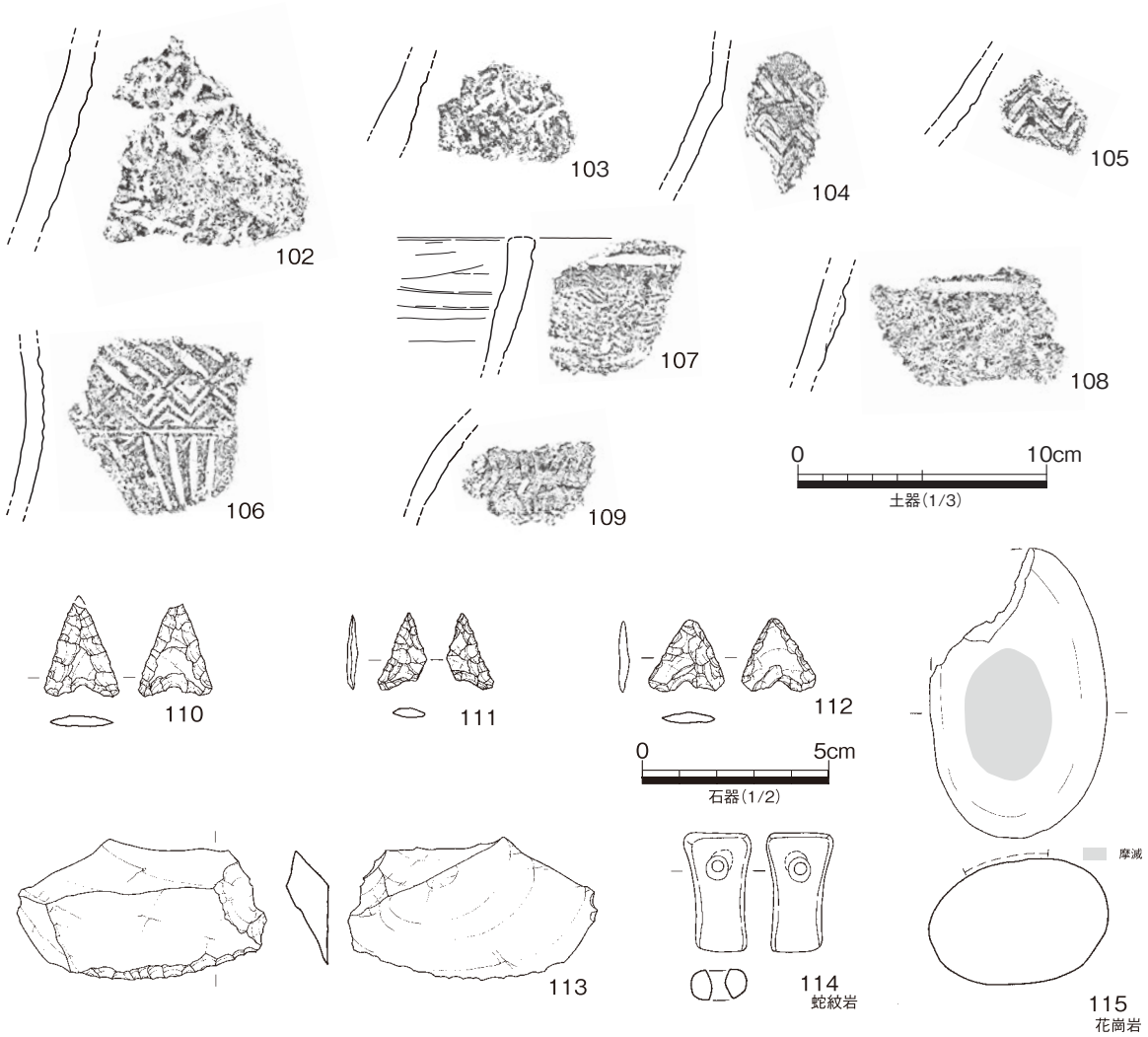
以上の1区5層下位出土遺物は、楕円系押型文土器において、外面に大粒の楕円文を施すものが多いこと、文様単位の重複が多いこと、格子目状となる原体もあること、口縁部内面に斜行する太いナデ沈線を施文するものが含まれることから、高山寺式に該当する。ただ、内面沈線を施文せず、口縁部外面に円形刺突文を巡らせる中四国地方に多い深鉢（矢野2008）が含まれる点が7層と異なる。また、5層下位では楕円文押型文以外にも山形押型文とともに沈線文や条痕文等を施文する深鉢が多く含まれており、土器型式としては早期後半の高山寺式から穂谷式の範疇に収まるものと考える。共伴する114の垂飾は玉質とされる滑石または蛇紋岩製で、早期末ごろとされている抉状耳飾を含めた玉質装身具の出現期（川崎1998・2007）とされており、土器型式から導く所属時期と一致する。



第 29 図　1 区縄文包含層 5 層下位出土遺物（1）



第 30 図　1 区縄文包含層 5 層下位出土遺物（2）



第 31 図　1 区縄文包含層 5 層下位出土遺物（3）

＜1 区 5 層出土遺物＞（第 32 ～ 36 図）

116 ～ 120 は楕円押型文系土器のうち、外面に縦位の楕円文、内面に左上りの斜行沈線を施文する深鉢口縁部片である。いずれも口縁部が緩やかに外反する器形で、118 は端部が平坦仕上げ、その他は端部を丸く収める。119 は指先による円形押捺を施す。

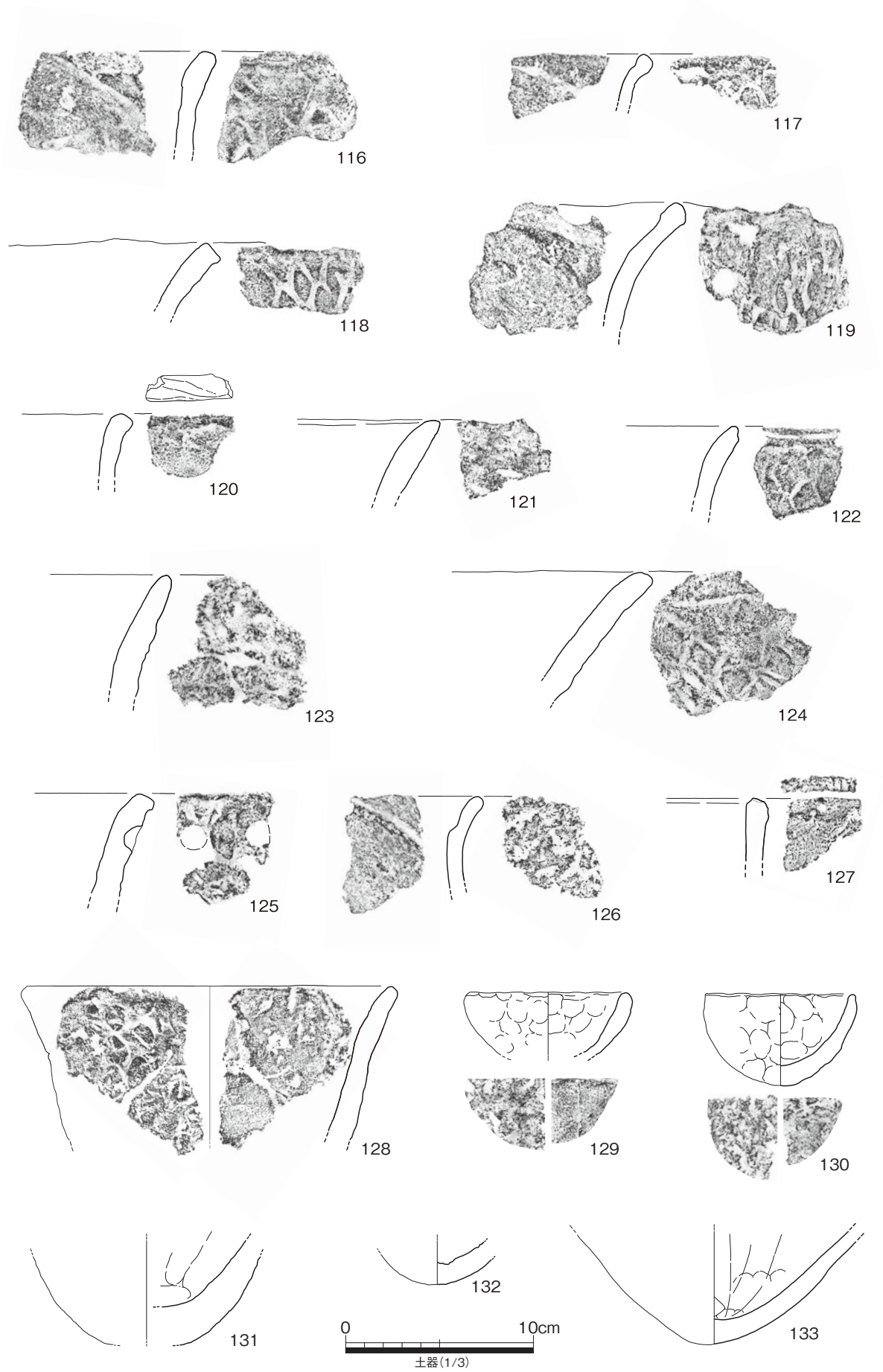
121 ～ 125 は楕円押型文系土器のうち、内面に斜行沈線を施文しない深鉢口縁部片である。外面の楕円文は 122 を除き斜位に施文する。125 は口縁部外面に押型文原体を用いたと推定される円形刺突文が巡る。

126・127 は外面遺存範囲に施文がない押型文系深鉢口縁部片である。126 の内面には段状の斜行沈線を施文する。127 は口縁端面に条痕原体風の工具による刻目を施す。

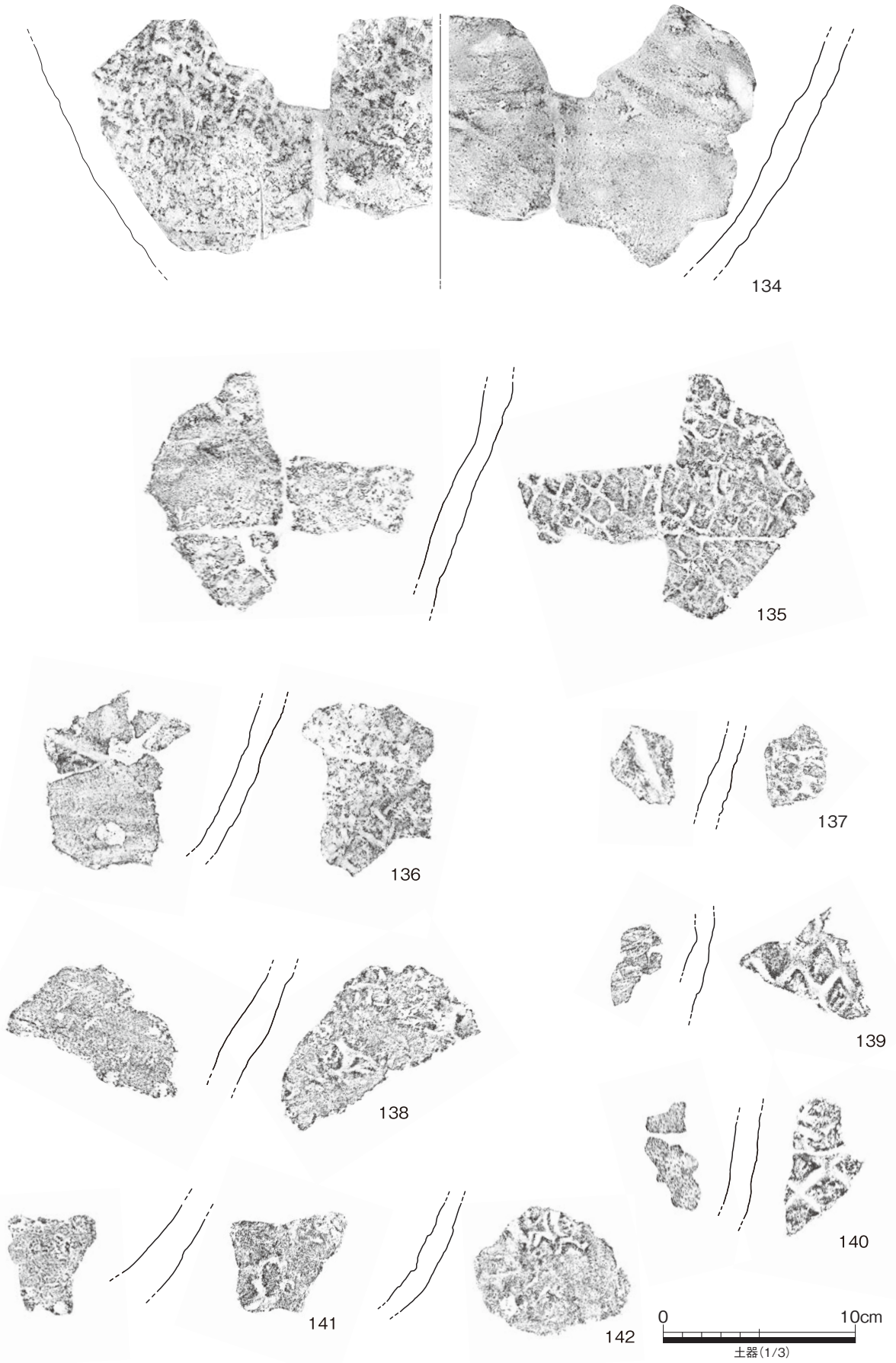
128 は楕円押型文系の小形深鉢である。口径 19.4cm で、器高は 15 ～ 18cm ほどと推定する。外面には方向が一定しない大粒の楕円文を施し、内面は不明瞭ながら斜行沈線を認める。

129・130 は楕円押型文系の椀形浅鉢である。外面に不明瞭ながら楕円押型文を認める。130 は口径 7.8cm、高さ 5.0cm をはかる。

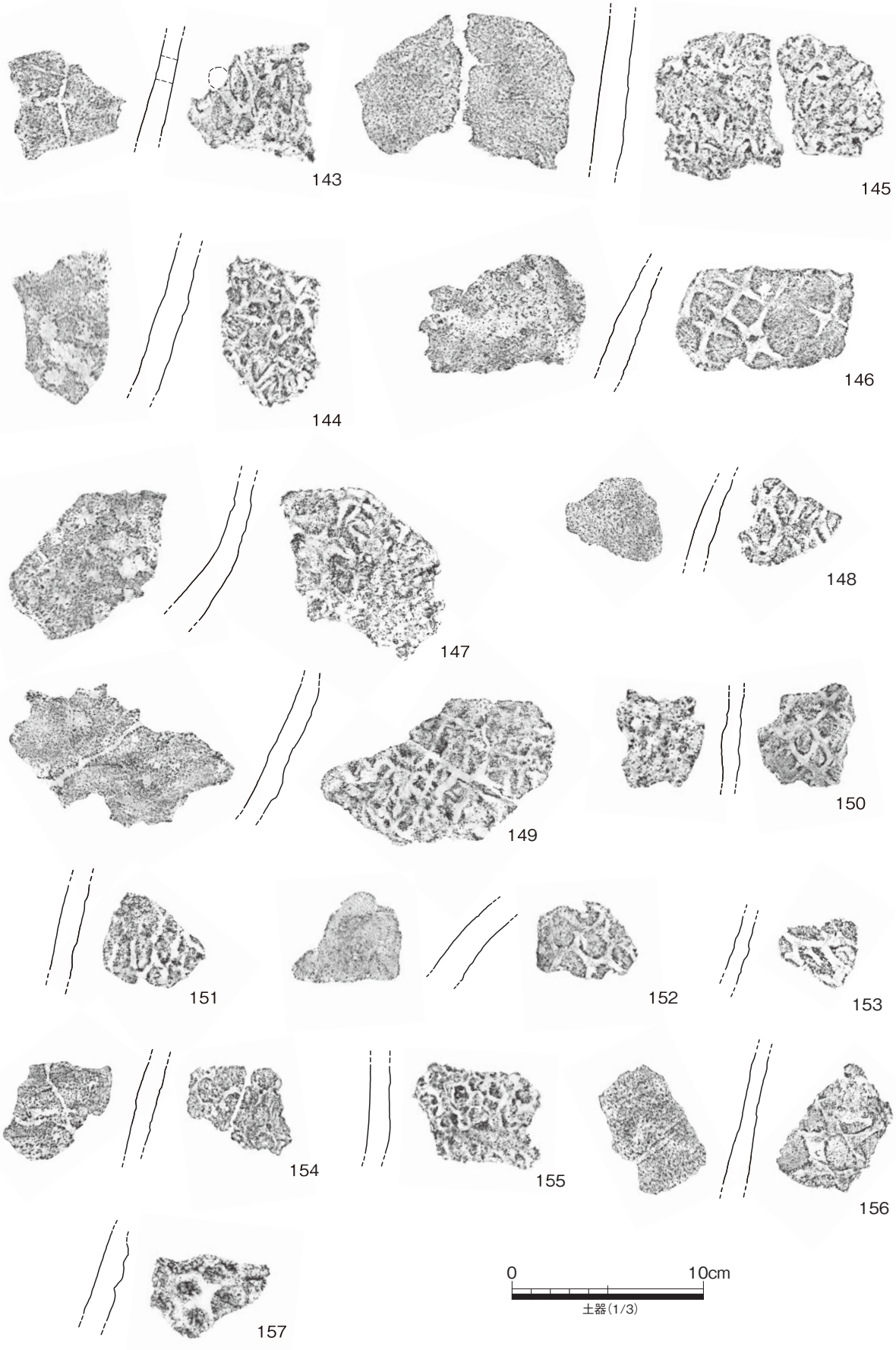
131 ～ 133 は楕円押型文系の深鉢底部片である。いずれも丸味をもった尖底である。131 外面には不



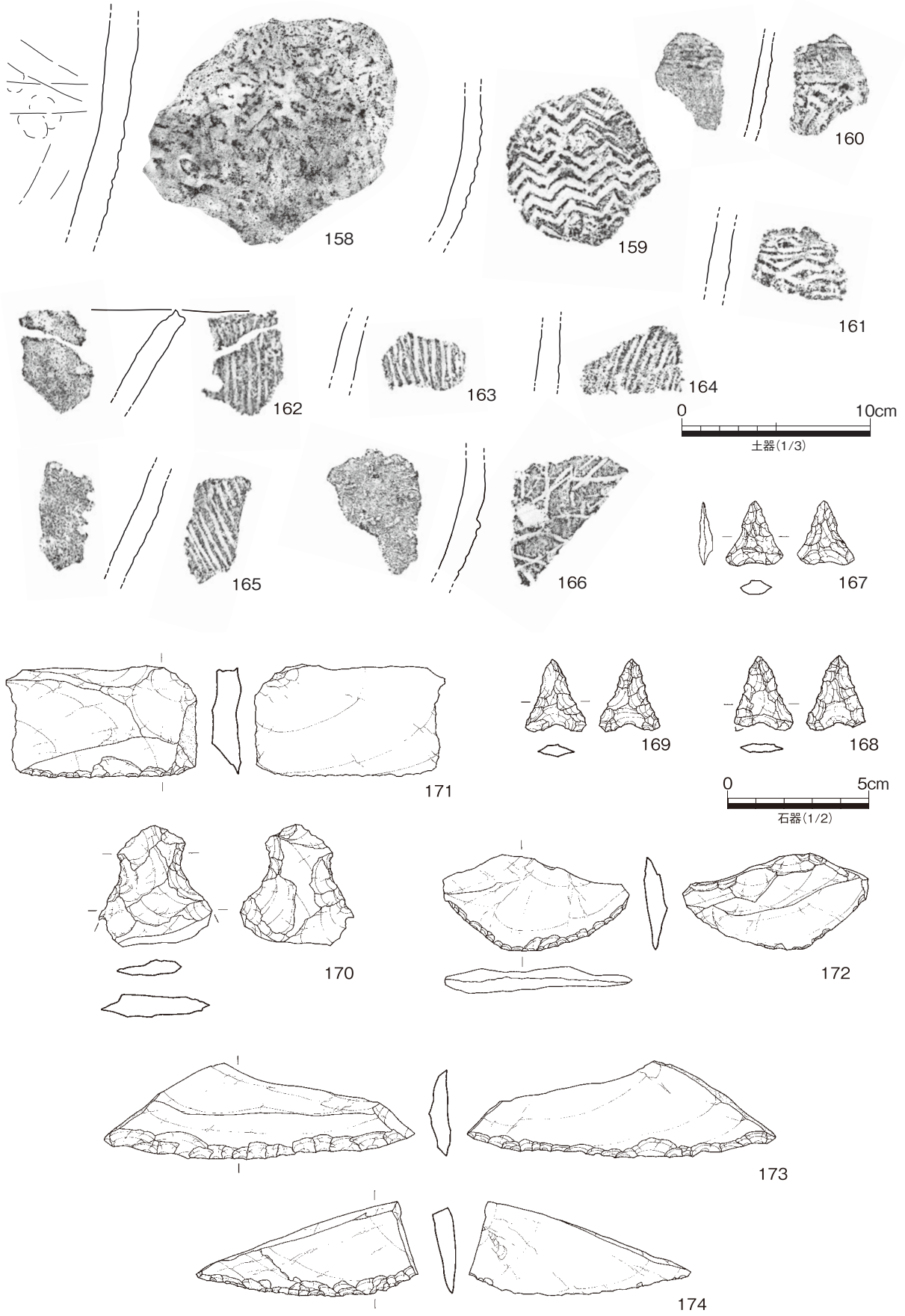
第 32 図　1 区縄文包含層 5 層出土遺物（1）



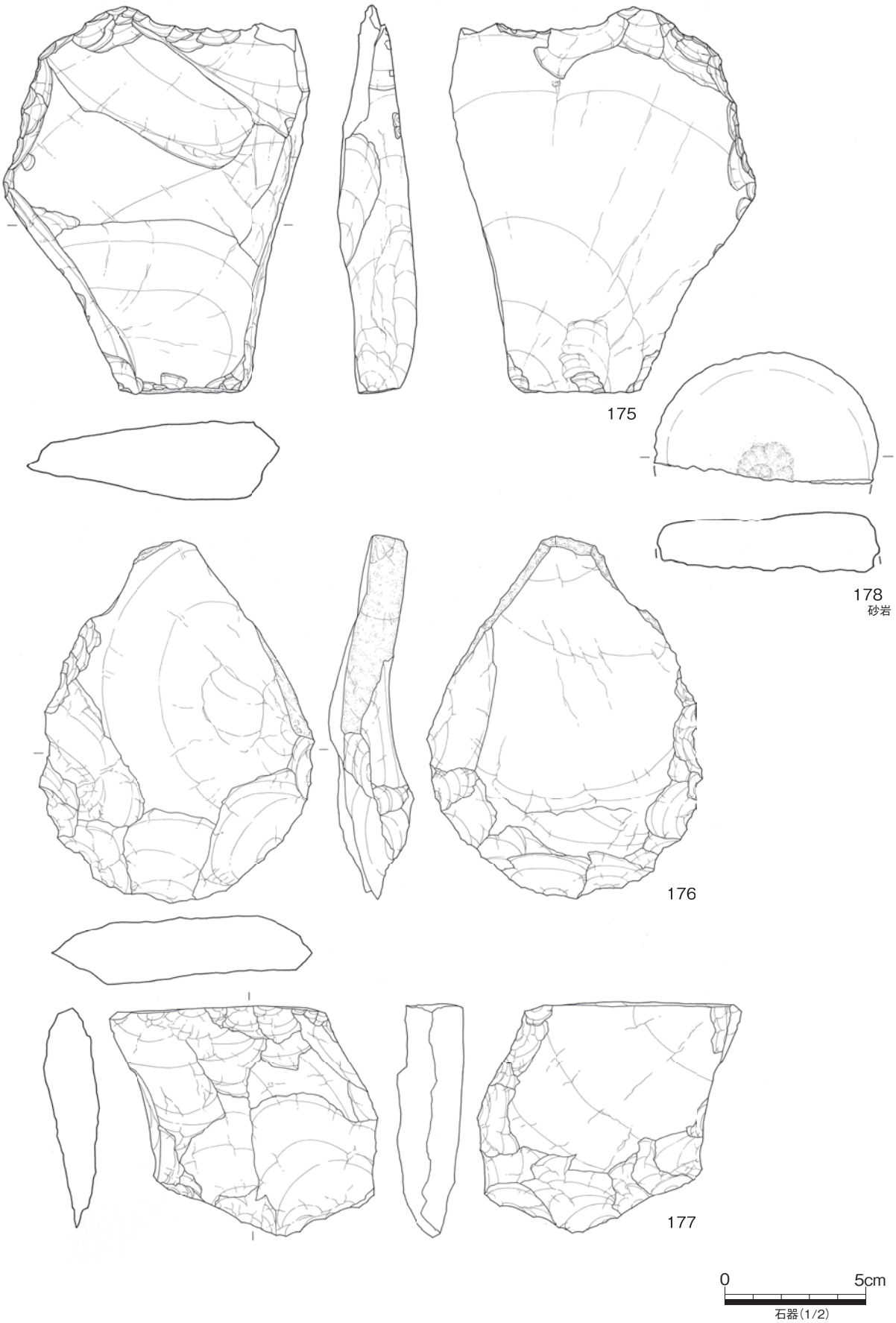
第 33 図　1 区縄文包含層 5 層出土遺物（2）



第 34 図　1 区縄文包含層 5 層出土遺物（3）



第 35 図　1 区縄文包含層 5 層出土遺物（4）



第 36 図　1 区縄文包含層 5 層出土遺物（5）

明瞭ながら楕円押型文を認める。

134 ～ 166 は押型文系土器の深鉢胴部片である。134 ～ 140 は外面に楕円文を施文し、内面に斜行沈線を施文する。このうち 140 は格子状の楕円押型文である。また 139 の内面には土器製作時に付着した木葉圧痕が残る。141 ～ 158 は外面に楕円文を施文し内面に斜行沈線が認められないものである。楕円文には大小や形状にバリエーションがあり、重複して施文するものも多い。このうち 144・158 は楕円文と山形文を組み合わせて施文する。159 ～ 161 は山形文を施文するものである。159 は胴部の膨らみが強く横位の山形文を胴部全面に施文するものである。160 は山形文と沈線文を組み合わせて施文する。161 は山形文の中にあらかじめ楕円部分を組み込んで製作した原体を用いている。162 ～ 166 は貝殻もしくは木質工具による条痕風の沈線を施す沈線文系土器の深鉢胴部片である。166 は貝殻腹縁の圧痕により格子状の沈線文を施文する。また 166 の内面には雑穀類の圧痕が残る。

167 ～ 169 はサヌカイト製打製石鏃である。いずれも逆刺部が斜下方に踏ん張る形状で、167 は側縁の屈曲が顕著である。170 はサヌカイト製石匙基部片である。基部の抉り加工が不十分で製作途上品と思われる。171 ～ 174 はサヌカイト製スクレイパーである。171 は直刃、172 ～ 174 はカーブをもつ刃部である。173 は表裏両面に調整加工を施すが、他はすべて片側からのみ調整加工を行う片刃である。175 ～ 177 はサヌカイト製石核である。いずれも大形の板状石材から表裏を打点をずらしながら剥片剥離する。177 は作業途上に分割し、さらに分割面から作業を続けている。178 は砂岩製の叩石片である。平面円形で中央部にあばた状の敲打痕が残る。

以上、1 区 5 層出土の楕円押型文系土器は内面に斜行沈線を施文する深鉢の存在など、高山寺式の特徴をとどめる。山形文と楕円文を組み合わせて施文するものは 7 層や 5 層下位ではみられなかったが、5 層では大形個体が存在する。一方で、原体上で山形と楕円を組み合わせる 161 は九州地方に多いとされる菱形文様内に楕円を有する（矢野 2008）文様パターンとの関連性が考えられる。5 層も高山寺式及び穂谷式の範疇に収まるものである。

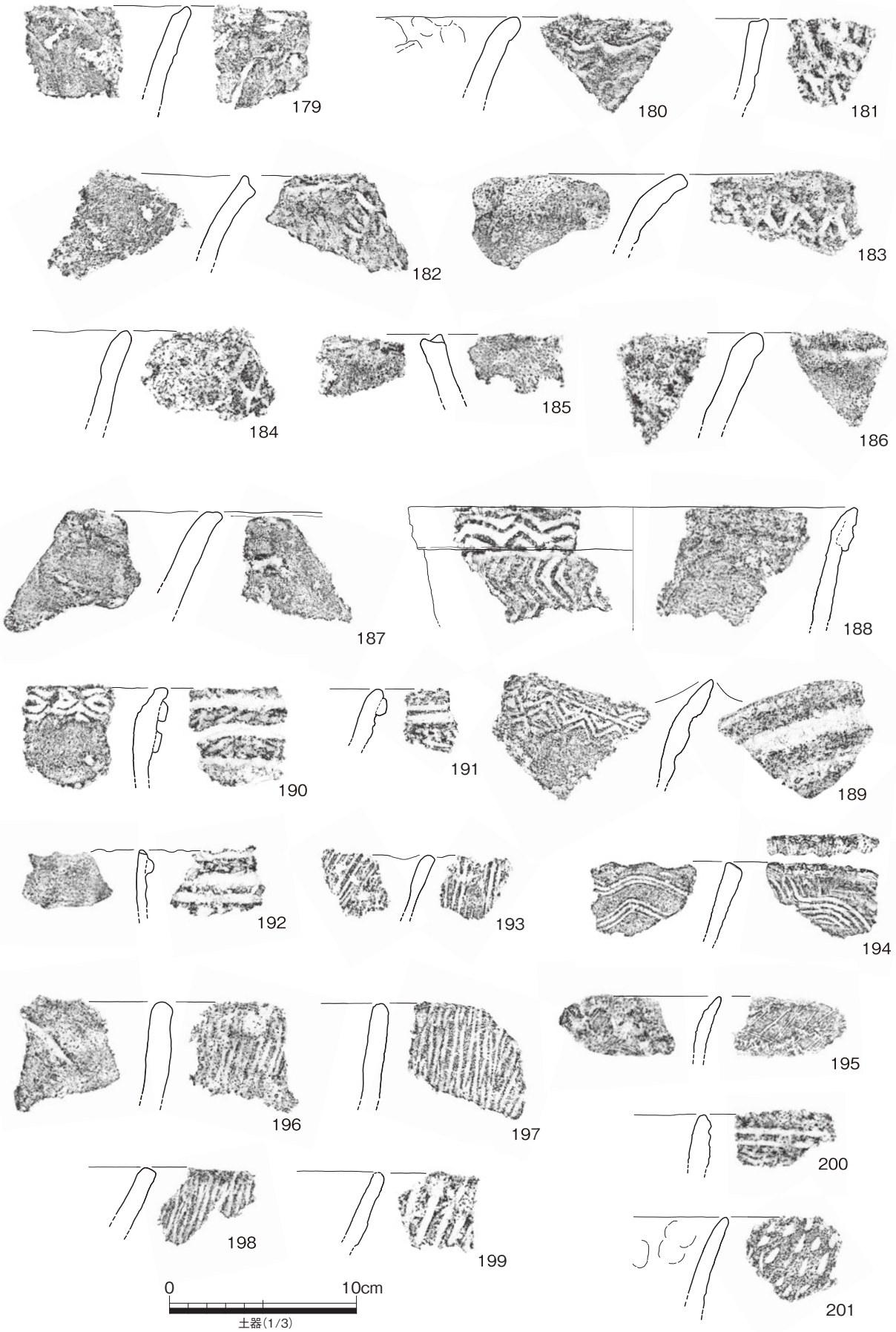
＜ 1 区 4 層出土遺物＞（第 37 ～ 42 図）

179 ～ 184 は楕円押型文系土器で外面に楕円文を施文する深鉢口縁部片である。179・180・182 は内面に斜行沈線を施文する。182 は沈線上端が口唇部に及び、端面の沈線状の窪みにつながる。楕円文の単位は粒が不揃いで、182 は山形文と組み合わせた文様となる。

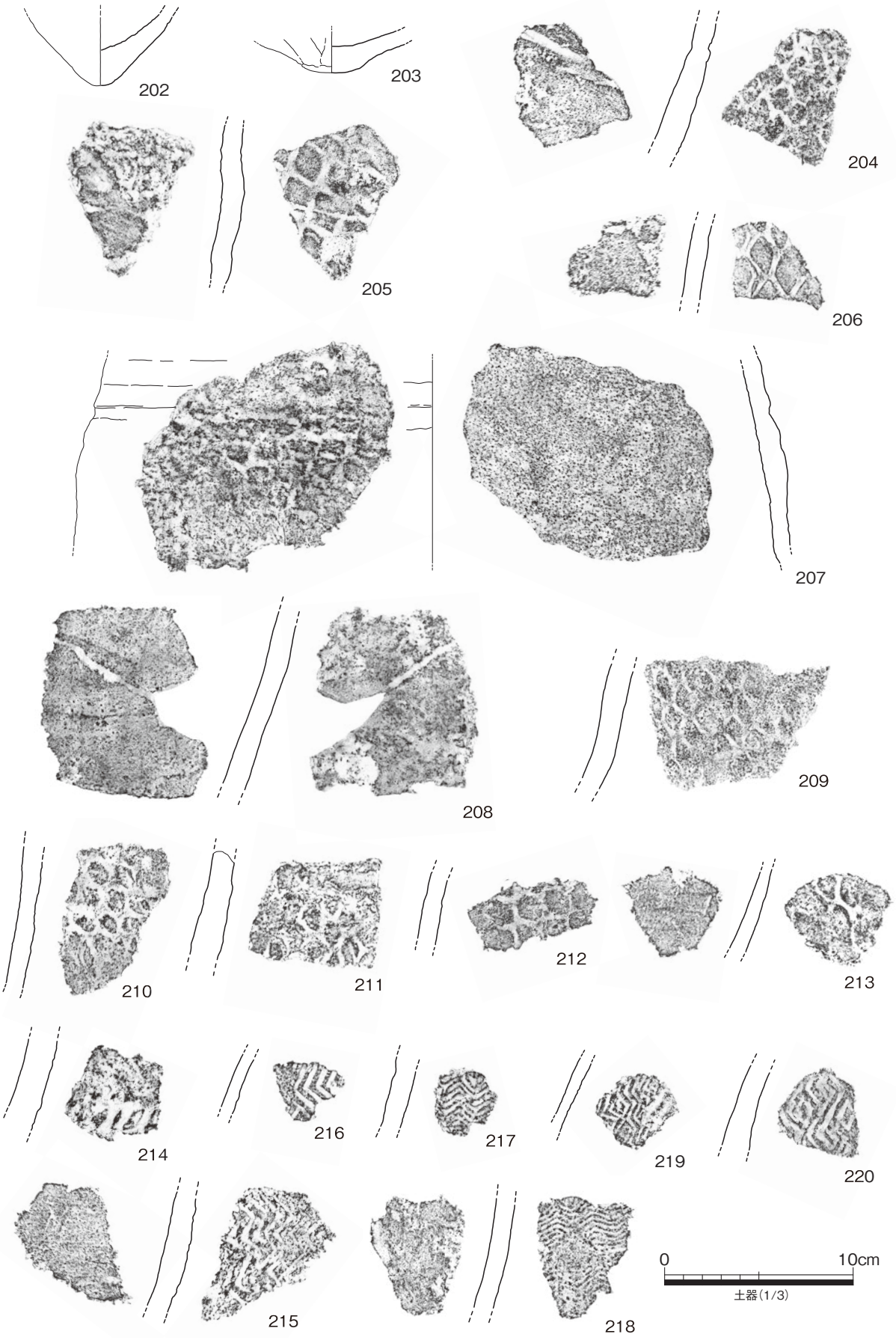
185 ～ 187 は外面が無文の深鉢口縁部片である。いずれも内面には斜行沈線を施文する。185 は口唇部にも沈線による窪みが及ぶ。これらの斜行沈線は太いナデで間隔をあけて施している。

188 ～ 192 は外面に隆帯を貼付する押型文系深鉢口縁部片である。188 は口縁端部を折り曲げて幅 2.3cm の幅広の隆帯を作り出し、外端面に横位の山形文を施文する。隆帯より下位は縦位の山形文を施文する。189 は口縁部が波状を呈し、幅 1.5cm の隆帯を 2 条貼付する。内面には直線で区画された 2 条の山形押型文を施文する。190 は口縁端部からやや下がった位置に幅 1.1cm の隆帯 2 条を貼付し、押型文原体で刻む。内面は山形文と楕円文を組み合わせた菱形文を横位に施文する。191・192 は口縁部直下に細い隆帯（突帯）を貼付し、下位に沈線や刺突文を施文する。

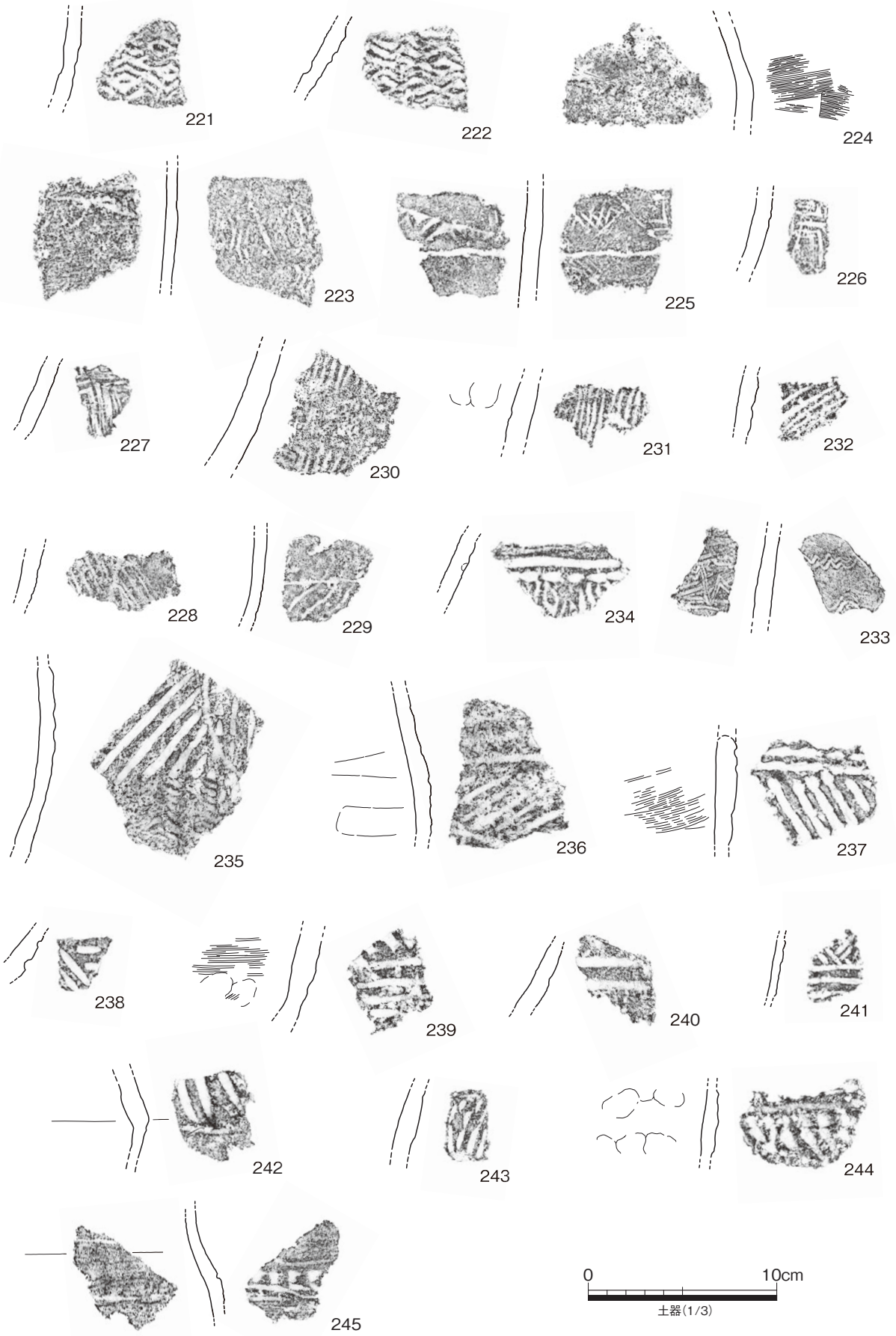
193 ～ 198 は外面に沈線・条痕文または平行線押型文を施文する押型文系深鉢口縁部片である。いずれも斜上方に立ち上がり、外反せずに端部に至る器形である。194・195 を除き、右上りの条痕もしくは同方向の平行線押型文を施文する。窪み内に微細な条線が観察できるものについて条痕とし、それが



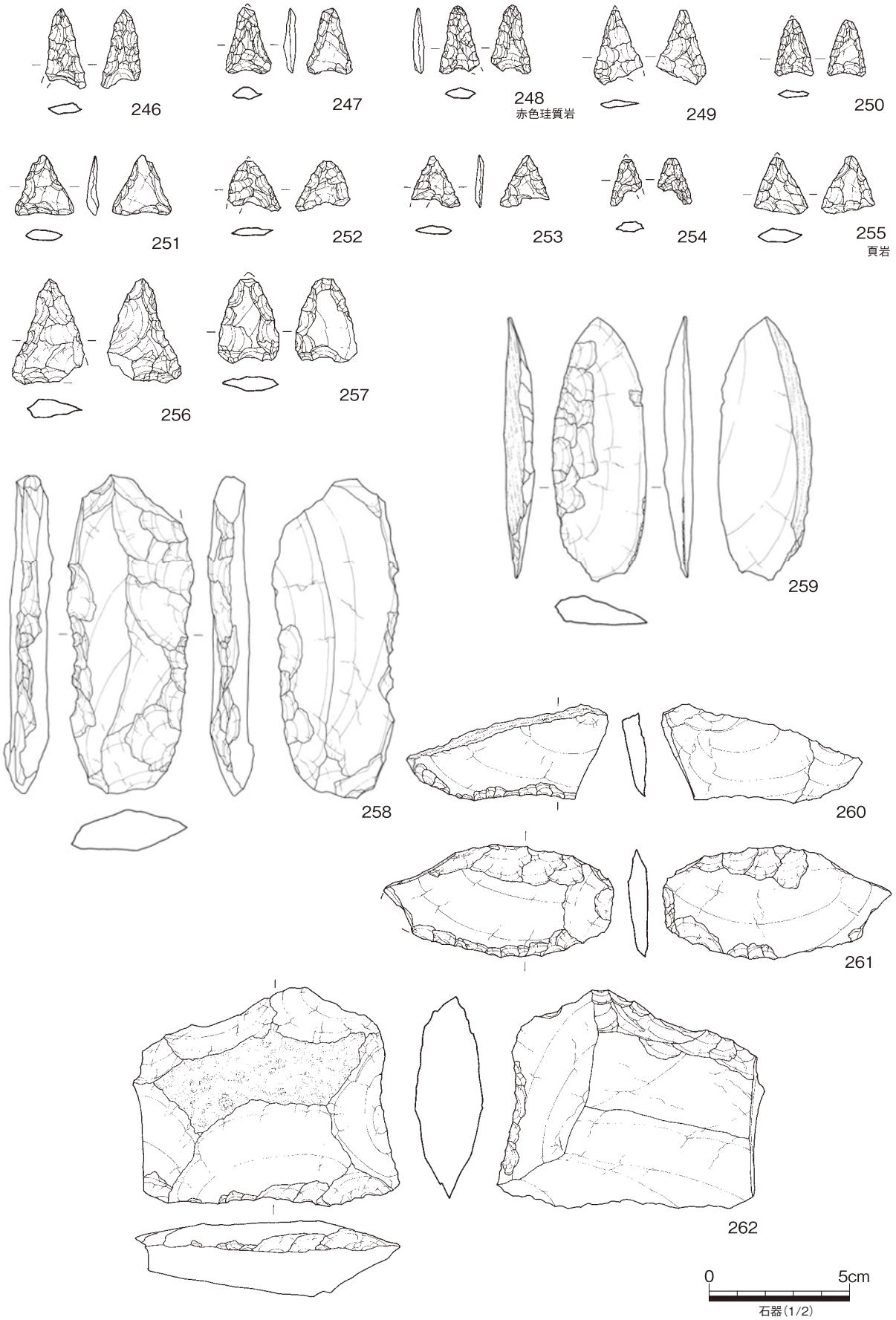
第 37 図　1 区縄文包含層 4 層出土遺物（1）



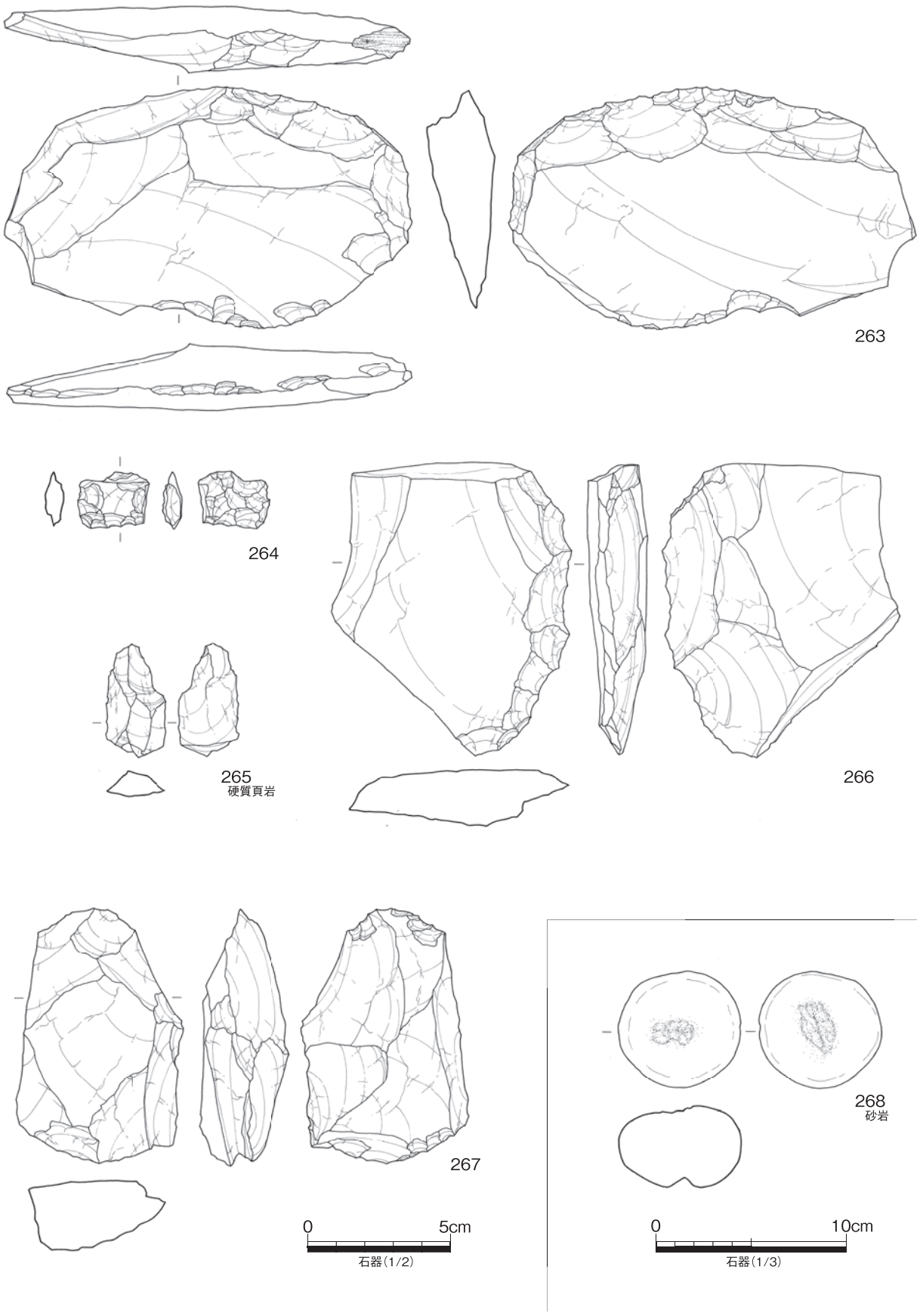
第 38 図　1 区縄文包含層 4 層出土遺物（2）



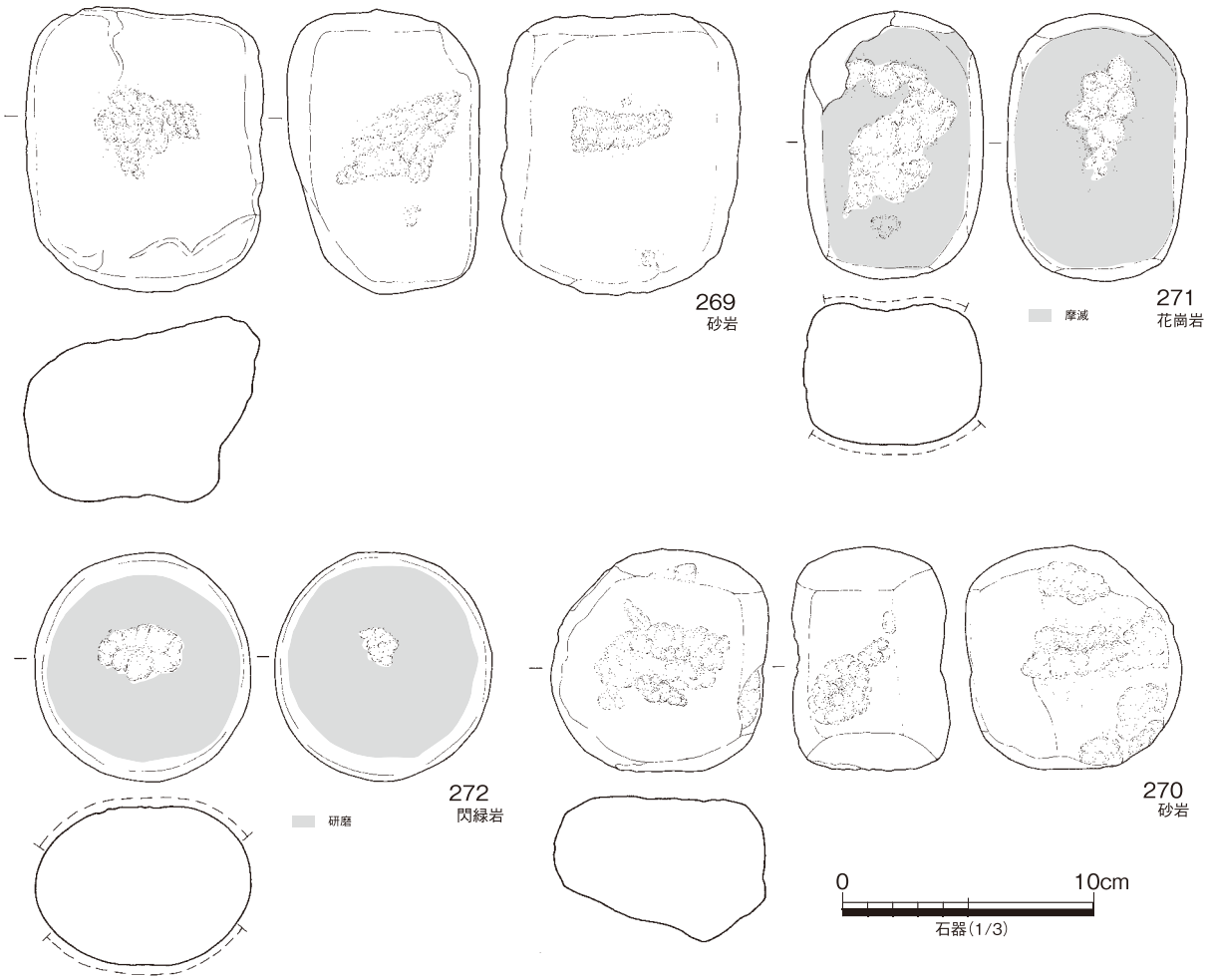
第 39 図　1 区縄文包含層 4 層出土遺物（3）



第 40 図　1 区縄文包含層 4 層出土遺物（4）



第 41 図　1 区縄文包含層 4 層出土遺物（5）



第 42 図　1 区縄文包含層 4 層出土遺物（6）

見えないものを押型文とした。ただ、器面風化のため明確ではない。194 は条痕原体を使った波状文を施文する。195 は口縁内外に間隔を置いた細沈線を斜格子状に施文する。

199・200 は沈線施文の深鉢口縁部片である。200 は沈線下に山形文を施文する。201 は爪形押捺文を施文する深鉢口縁部片である。

202・203 は楕円押型文系土器底部片である。202 は尖底の深鉢。203 は平底で浅鉢の可能性がある。

204 ～ 214 は楕円押型文系土器深鉢胴部片のうち、外面に楕円押型文を施文するものである。204 ～ 206 は内面に斜行沈線を施文し、207 ～ 214 は内面ナデ調整である。楕円の単位は大粒である。

215 ～ 227 は山形押型文を施文する深鉢胴部片である。215・216 は縦位、217・218 は横位に施文する。219 ～ 223 は楕円文を組み合わせ、菱形文の文様形態となる。219・220・223 は縦位、221・222 は横位に施文する。224・225 は施文後のナデ調整により外面の山形文が消失しかかっているものである。225 は内面にも施文した痕跡が残るが、その範囲は明確でない。226・227 は楕円を組み込まない菱形文と考える。

228・229 は外面に撚糸文を施文する深鉢胴部片である。228 は細かい単位、229 は約 1cm 間隔で施文する。

230 ～ 233 は条痕または平行線押型文を施文する胴部片である。233 は 2 条一単位の工具で外面に波状文を施文し、内面は同工具で器面調整を行う。

234 ～ 242 は外面に沈線施文をもつ胴部片である。234・235 は沈線文様帯の下位に山形押型文を施文する。237 は沈線工具で押引技法により施文し、刺突文と組み合う。

243・244 は押捺文施文の胴部片である。243 は細長い工具、244 は爪による押捺である。

245 は混在した縄文時代晩期の深鉢口頸部片である。屈曲部に半載竹管の押引刺突文を施し、屈曲部から下はケズリ調整を施す。口縁部は緩やかに外反する。

246 ～ 257 は打製石鏃である。このうち 248 は赤色珪質岩、255 は頁岩で、その他はサヌカイト製である。形態的にはいずれも凹基式で幅に対して長さがあるもの（246 ～ 250）と正三角形に近いもの（251 ～ 255）に大別できる。いずれも側縁は直線的で、基部の逆刺の踏ん張りは目立たない。なお 256・257 は製作途上の未製品である。

258 はサヌカイト製の大形の横長剥片を用いた尖頭器未製品とした。素材を縦に使い、打面部を大きく剥ぎ取り側縁を直線的に整形する。階段状剥離で折損した刃縁側も、直線的な整形加工を施す。主に素材剥片の腹面側を加工する。

259 はサヌカイト製のスクレイパーである。尖頭部を有する素材剥片の形状から、尖頭器を志向した可能性があるが、剥片の刃縁部に連続する微細剥離痕があることから、スクレイパーとした。

260 ～ 263 もサヌカイト製スクレイパーである。260・261 は長さ 10cm 未満で通常サイズのスクレイパーである。一方で、262・263 は石核を転用し加工量が多く、その結果直線的な刃部に整形されたものである。他器種の未製品である可能性もあり得る。

264 は小形のサヌカイト製楔状石核である。石鏃等の小形器種の整形途上品であろう。

265 は硬質頁岩製の縦長剥片である。打面が同時割れにより残存しない。また末端部も折損する。

266・267 はサヌカイト製石核である。266 は板状素材の片面を作業面とし、打面調整を施して打点を横方向にずらしながら長さ 8 ～ 10cm ほどの剥片を連続して剥離する。267 は打面転移を繰り返しながら剥片剥離を進め、厚味のある残核に至ったものである。

268 ～ 270 は叩石・磨石類である。砂岩・花崗岩・閃緑岩を用いて、砂岩以外の石材は表裏に顕著な磨り痕が残る。敲打痕はあばた状のものが多い。

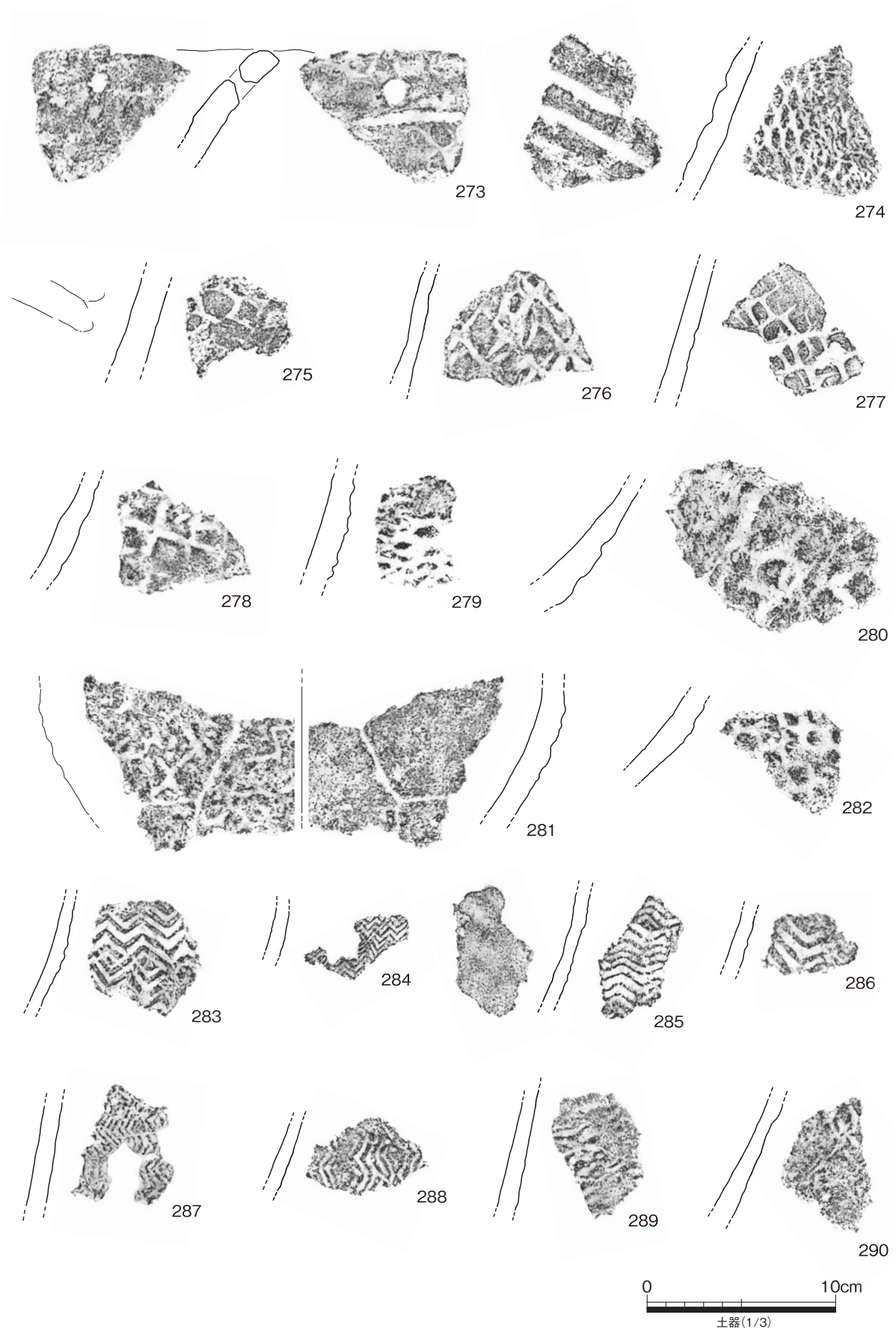
＜ 1 区及び 2 区層位不明遺物＞（第 43 ～ 48 図）

273 ～ 282 は楕円押型文系土器の楕円文施文の深鉢である。273 は外反する口縁部の外面に沈線を施しその下に楕円文を施す。口縁端部と沈線との間に補修孔が穿たれる。内面はナデ調整で斜行沈線はみられない。274 は楕円文を施す胴部片で、内面に斜行沈線を施す。275 ～ 282 は外面に楕円文を施し、内面をナデ調整し斜行沈線を施さないものである。楕円の単位はいずれも大粒である。

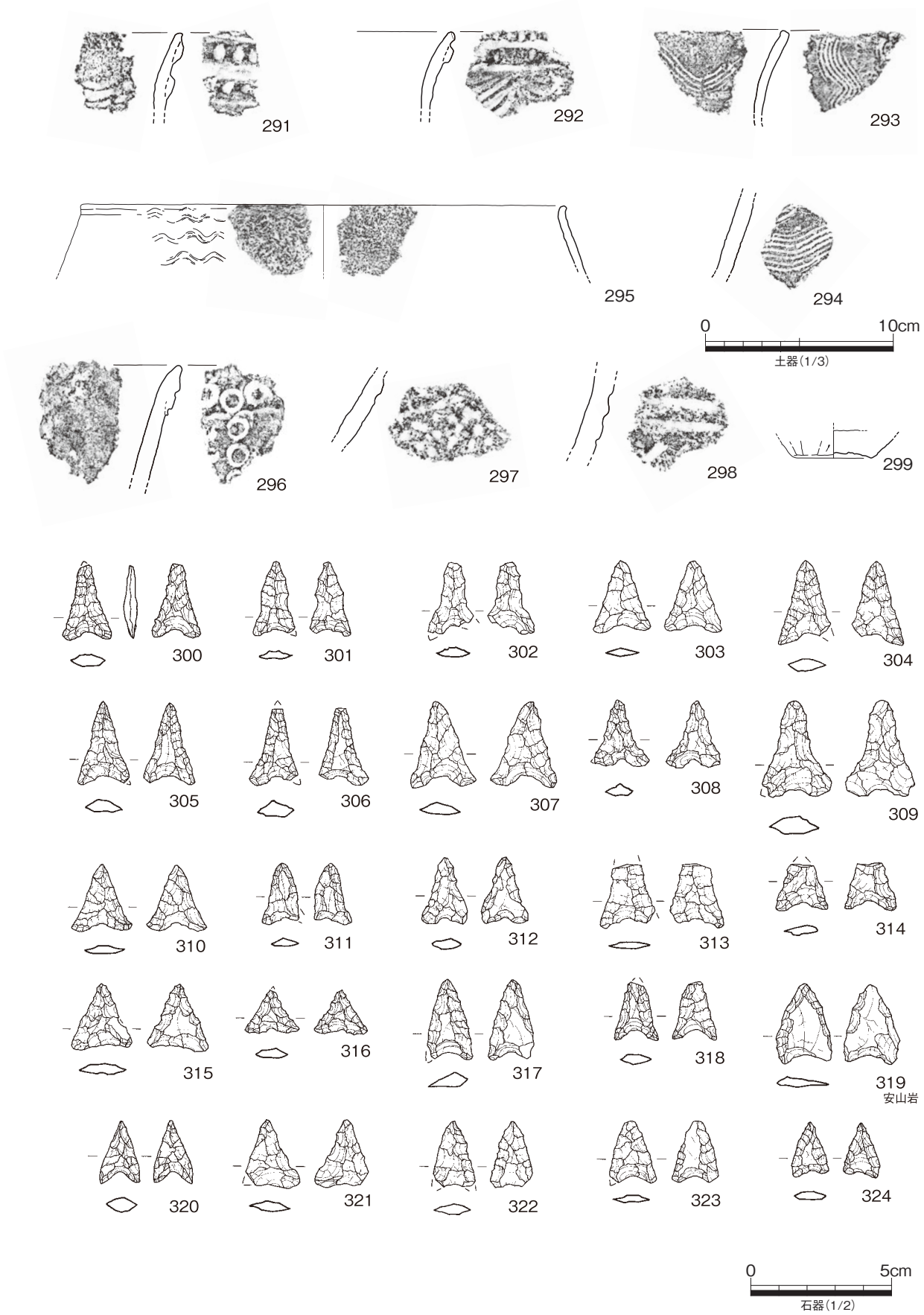
283 ～ 288 は山形押型文を施文する深鉢胴部片である。289・290 は山形文と楕円文が複合する押型文を施文する。285 は内面斜行沈線を施す。

291・292 は口縁部に刻目のある隆帯文を施し内外面のいずれかに弧状の押型文もしくは条痕文を施文する。292 は隆帯 1 条で口唇部にも刻目を施し、口頸部から口縁部にかけて緩やかなカーブで外反する器形である。縄文時代晩期後半の突帯文系土器に類似する。

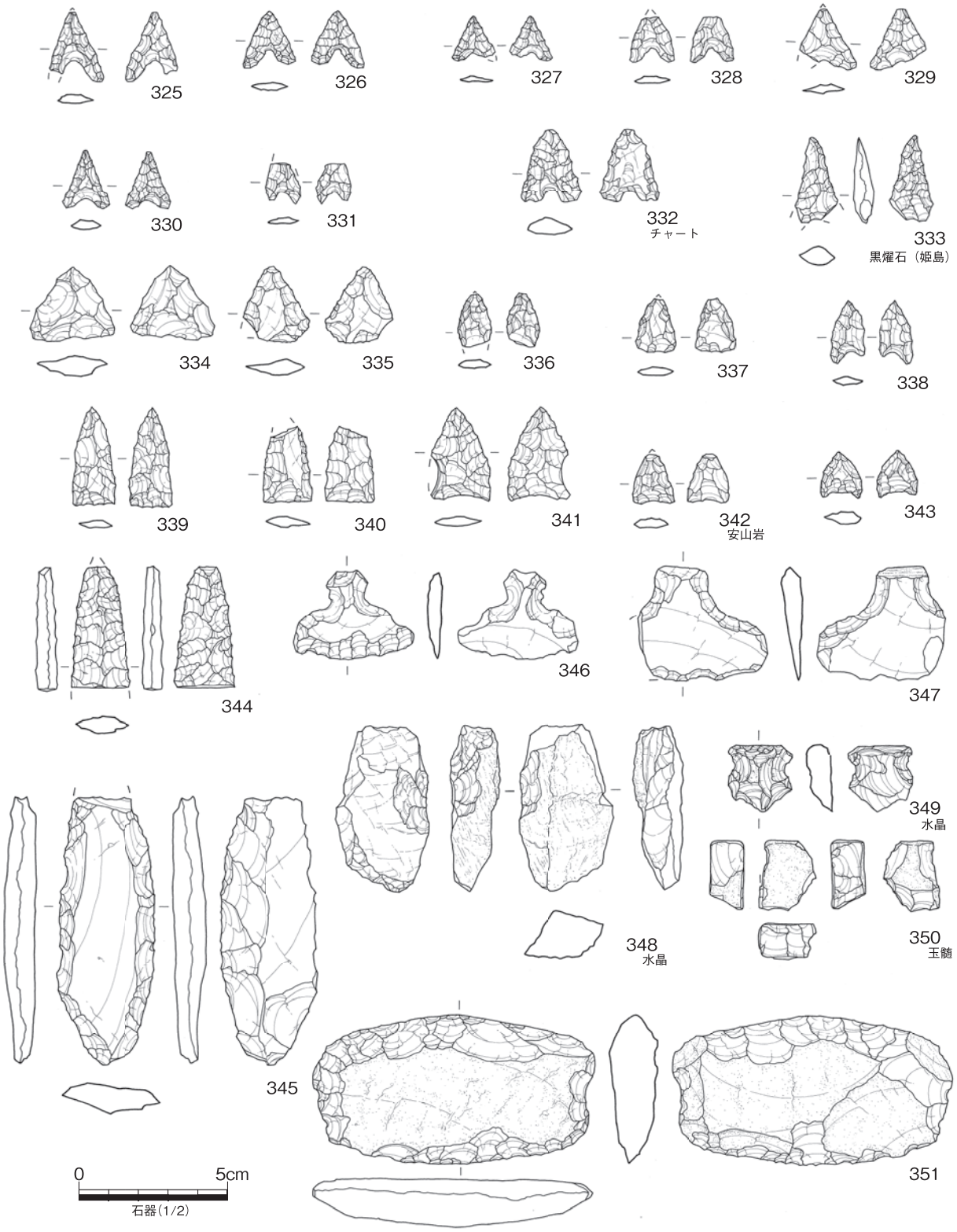
293・294 は内外面に条痕波状文を施文する深鉢である。293 は外面を縦位、内面を横位に施文する。



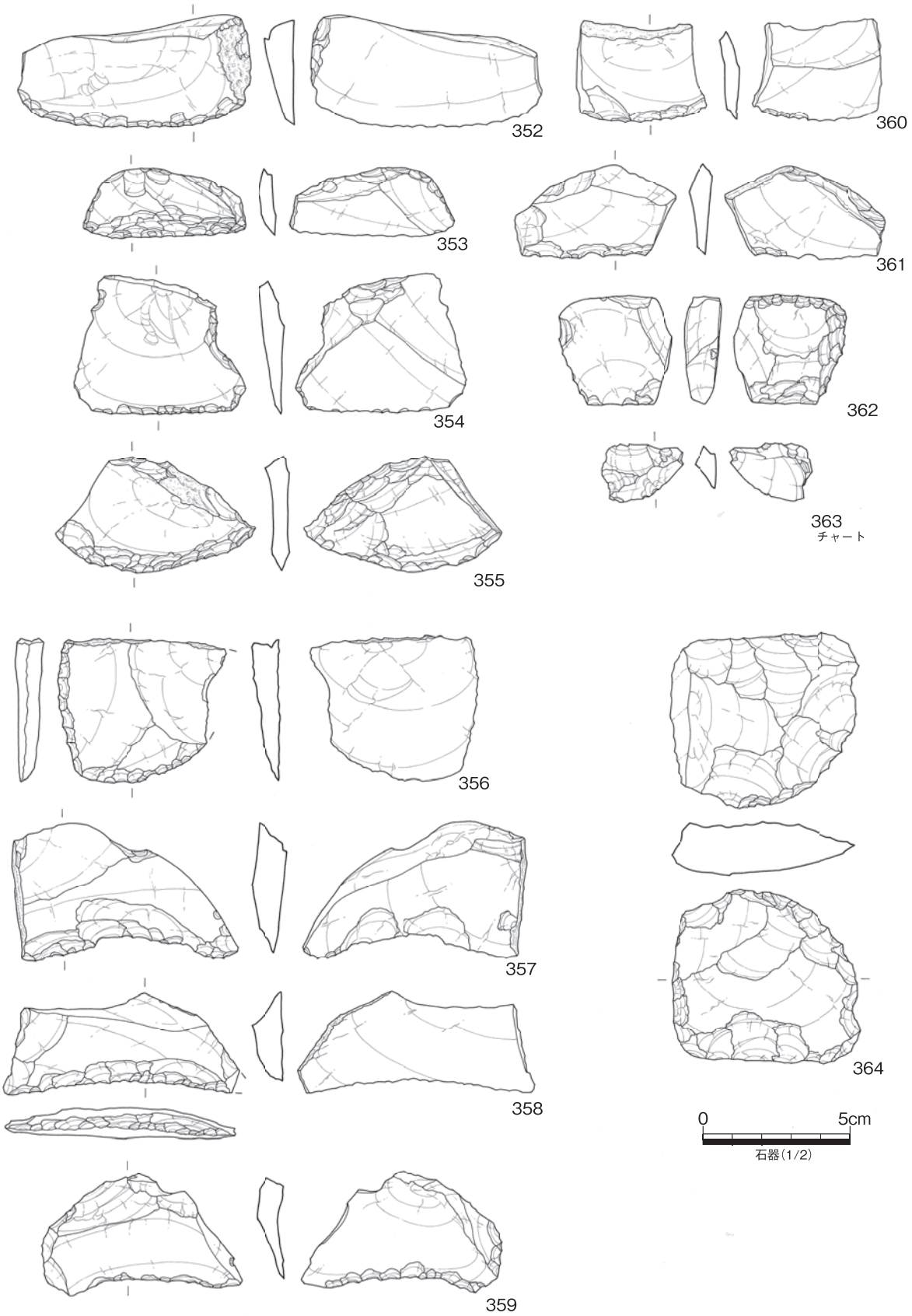
第 43 図　1 区出土位置・層位不明遺物（1）



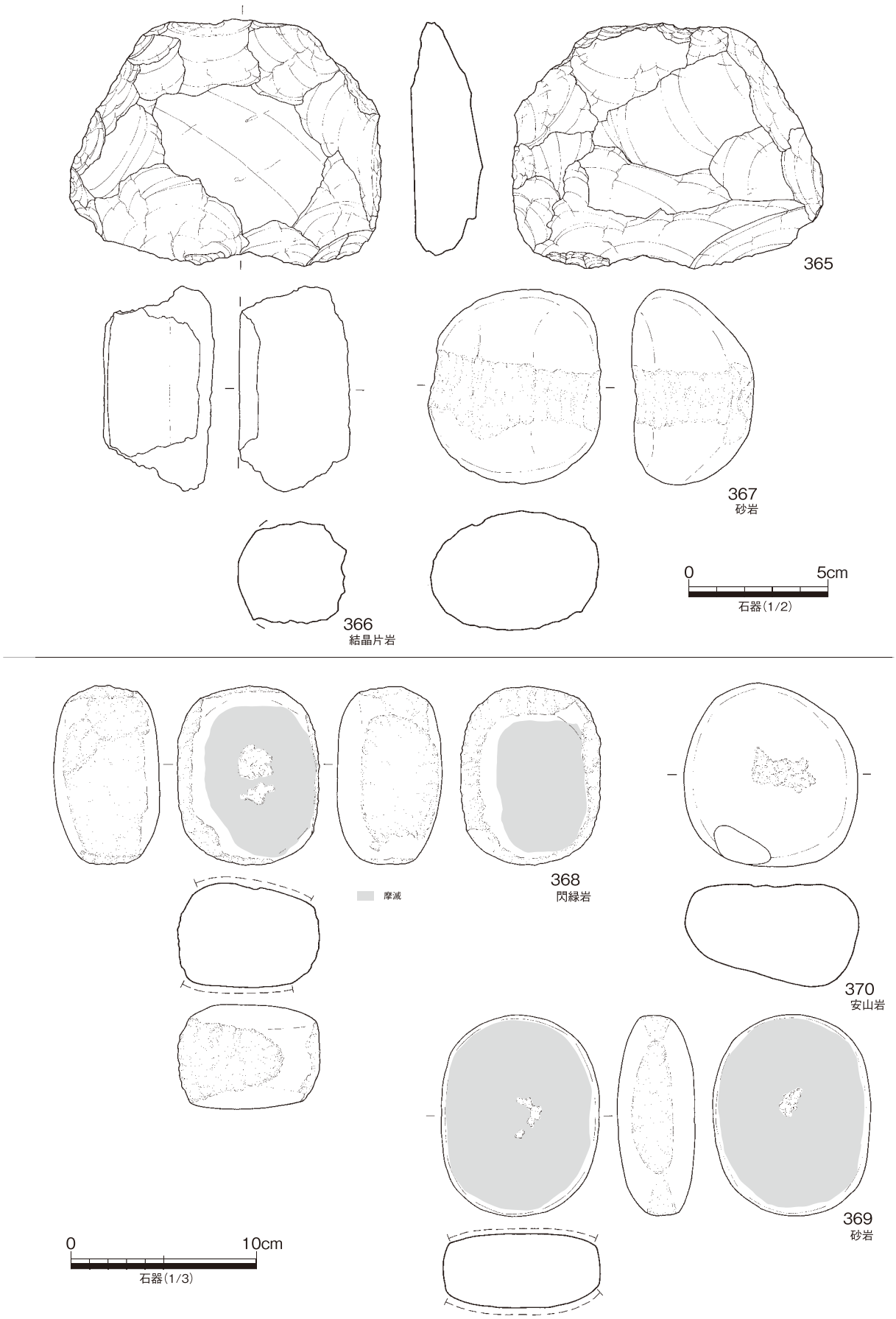
第 44 図　1 区出土位置・層位不明遺物（2）



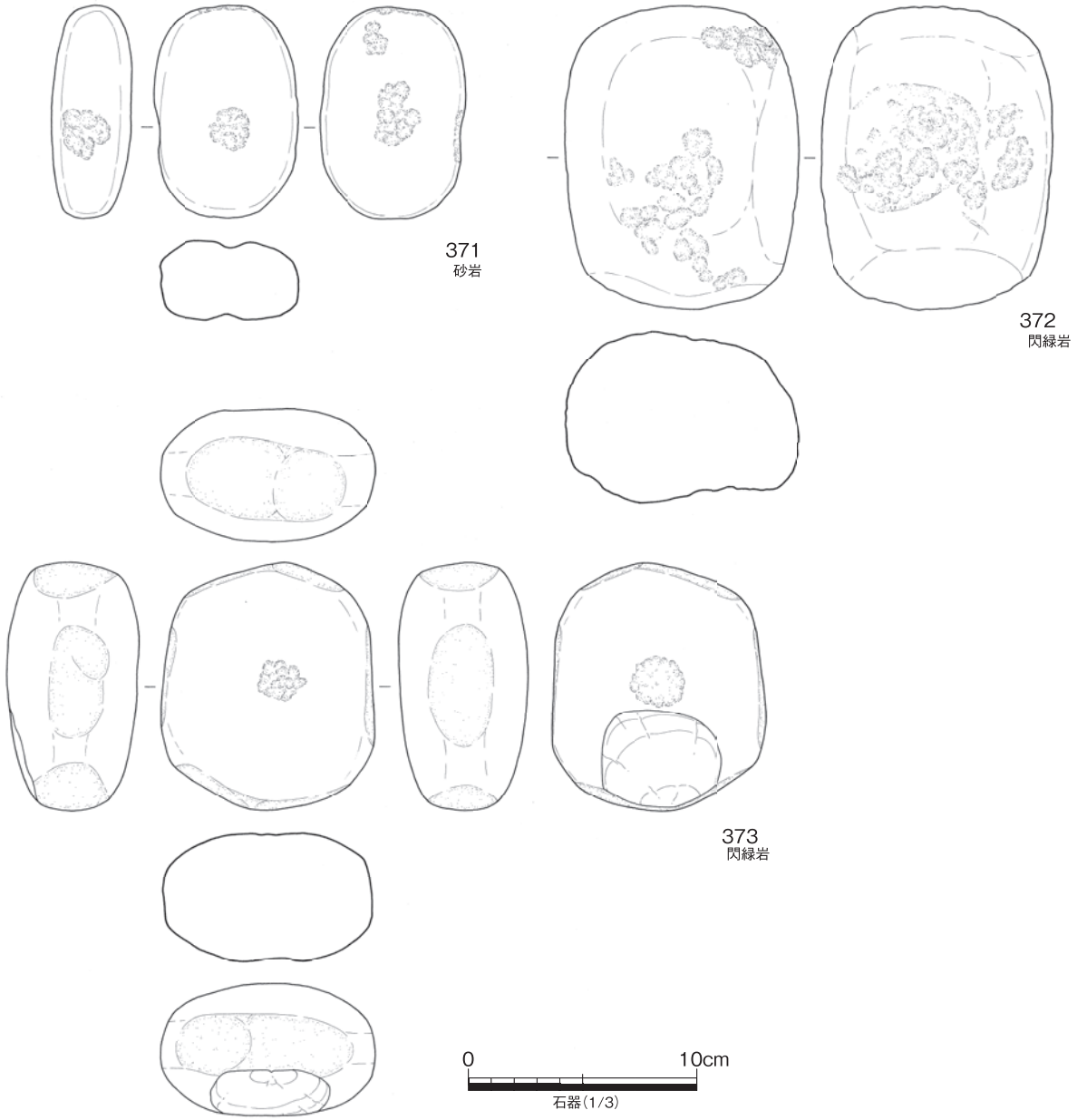
第 45 図　1 区出土位置・層位不明遺物（3）



第 46 図　1 区出土位置・層位不明遺物（4）



第 47 図　1 区出土位置・層位不明遺物（5）



第 48 図　1 区出土位置・層位不明遺物（6）

器壁が薄く、器面のナデ調整も丁寧に施すことから浅鉢の可能性もある。294 は胴部片で、外面に波状文を施文する。

295 は口縁部が「ハ」の字に内傾する浅鉢である。口縁端部が短く屈曲し、端部は丸く収める。器壁は薄く均質な厚味に仕上げる。外面に条痕原体による条痕波状文を施文する。器形や器壁の仕上げから縄文時代晩期後半の突帯文系土器に伴う浅鉢に類似する。

296 は口縁部に粘土帯を折り曲げた幅広の隆帯を施文し、隆帯上から胴部にかけて竹管刺突文を施す。297・298 は棒状原体による押引刺突文を施文する。299 は底面が若干の上げ底となる深鉢底部である。外面はナデ調整で仕上げる。

300 ～ 343 は打製石鏃である。319・332・342 がチャート製、333 が姫島産黒耀石製で、その他はす

べてサヌカイト製である。300 ～ 314 は側縁が基部付近で屈曲して下に広がる形態、315 ～ 331 は側縁が直線的に開く形態である。基部形状は凹基式が多く、平基式は 315・316 のみである。325・326 は逆刺部が細長く伸びる。チャート製の 332 は黒灰色を呈し先端が幅広く、側縁は先端部付近で屈曲して基部に向かう形態である。逆刺は短く、幅を減じることなく下端に向かい、端部は丸く仕上げる。333 は側縁が基部付近で屈曲して下に広がる。逆刺は折損するが強く踏ん張る形態と推定する。334 ～ 338 は形状が歪な未製品である。339 ～ 343 は側縁が内彎気味で基部付近で垂直となる形態で、いずれも平基式である。340 は器面の風化が進行していない。

344・345 はサヌカイト製の尖頭器である。344 は下半が折損するが、表裏面に連続する樋状剥離が残る。345 は未製品とした。大形の横長剥片を縦に使い、側縁に加工量の多い調整加工を施す。

346・347 はサヌカイト製の横形石匙である。いずれも刃部は片面のみを加工する。

348 ～ 350 はサヌカイト以外の石材搬入品である。348 は粗い水晶塊の一部を加工するものである。349 は水晶の小形の剥片を加工し、左右に浅い抉り、下端に尖端加工を施し、上端の基部には刃潰し加工を施す。350 は玉髄の角礫各面に剥離痕を施す。

351 はサヌカイト製の打製石庖丁である。弥生時代の混在であろう。

352 ～ 362 はサヌカイト製のスクレイパーである。片面のみ加工する片刃が多い。363 はチャート製の剥片である。364・365 はサヌカイトの塊状の石核である。打面転移を頻繁に繰り返して小形の剥片を剥離する。

366 は結晶片岩製の石棒である。縄文時代後晩期の遺物と考える。367 は砂岩製の石錘である。楕円礫を横に使い、敲打による抉りを施す。

368 ～ 373 は叩石・磨石系石器である。扁平な円形礫を用いて表裏の腹面と周縁部を敲打に使う。敲打痕はあばた状となり、線状の敲打痕は目立たない。なお 368・369 は表裏面に顕著な研磨痕が残る。

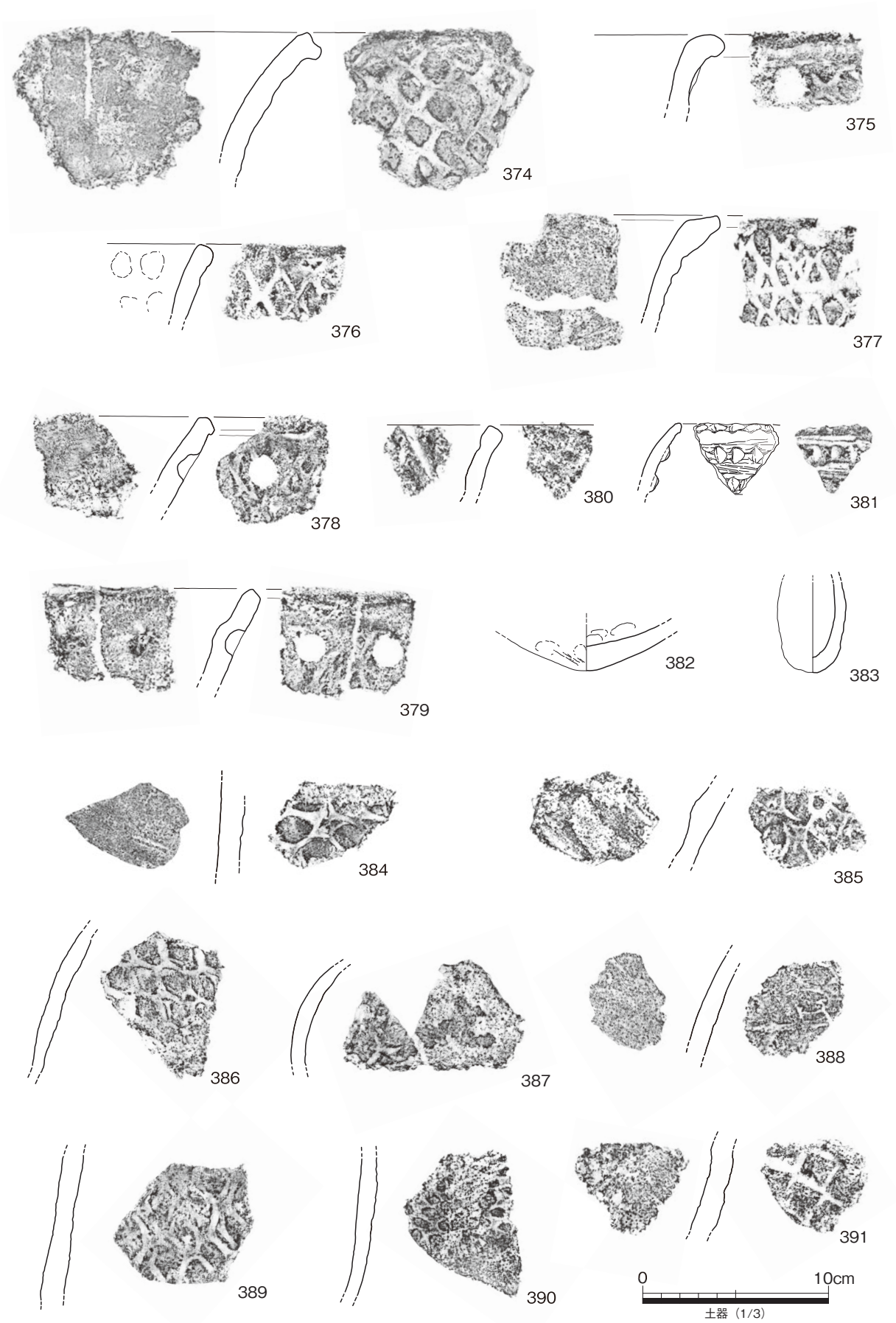
（4）4・5 区縄文包含層の調査

前節で記したように、両区にまたがって縄文期の低地帯が南から北に流下する。その範囲を東西 50 m、南北 13 m の範囲を階段状に掘り下げ、層位別（上層と下層の 2 区分）に出土遺物を回収した。この掘削は中世遺構面から範囲設定し掘り下げはじめており、後述する古代の河川跡とした SR401 もこれにより埋土を掘削し、後に SR401 の流路形態を断面で確認したという経緯である。SR401 は後述するように流路中央部がクレバス状に下刻しており、そこに含まれた古代の遺物は縄文包含層に相当混在している。しかし、その下位に存在する縄文包含層は取り上げの際の層位区分と断面で確認できる層位区分が概ね一致しており、第 14 図の断面図に示した層位区分が実態を反映しているので、古代以後の混在遺物を抽出することで SR401 に伴う遺物を除外できる。ただ、4 区側の縄文包含層断面は 5 区側より低位まで流路堆積状の断面形状が認められ、5 区の包含層を切り込むようなラインも散見できることから、5 区の上下層と 4 区下層との層位的な新古は判別できない。

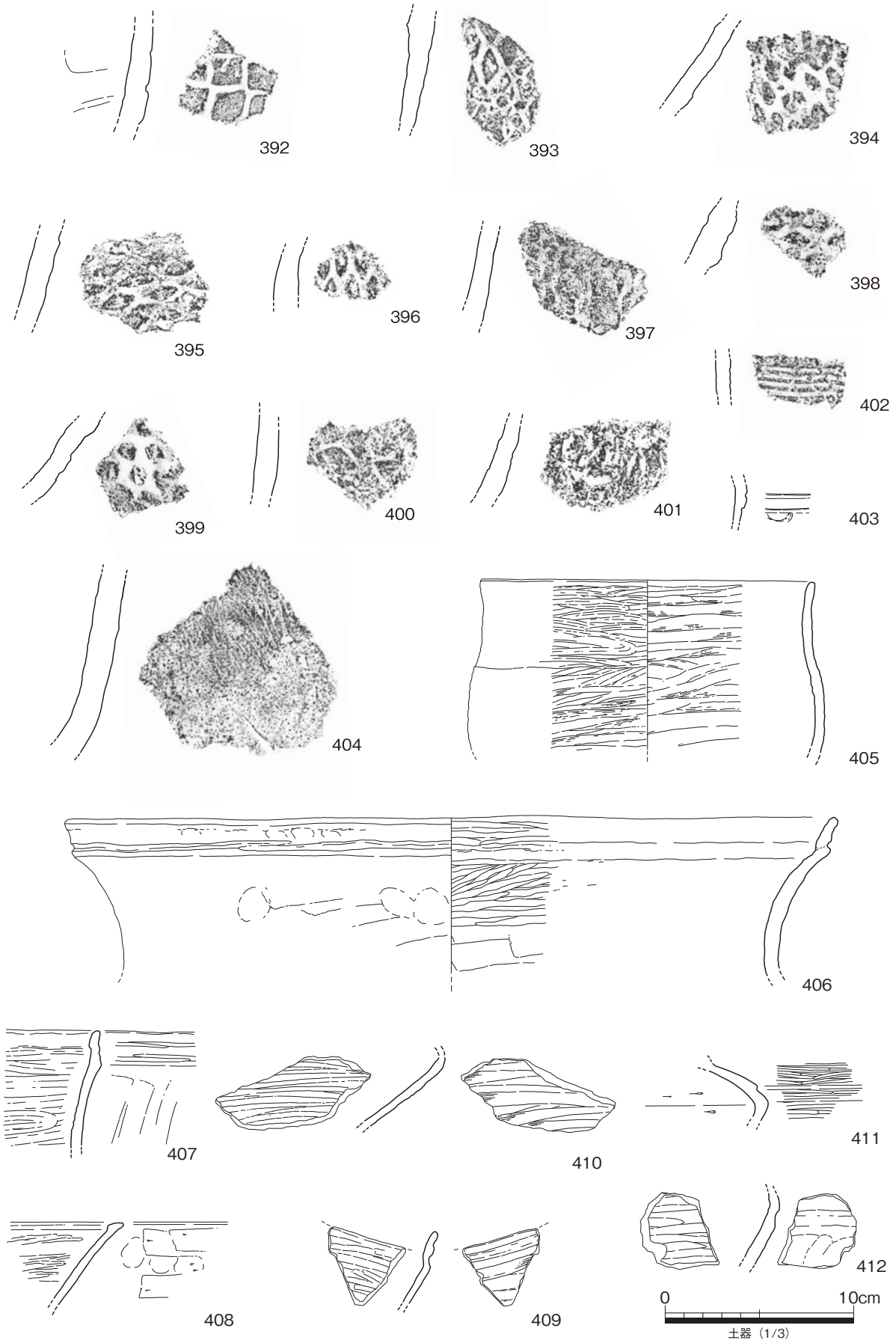
以下、4 区下層、5 区下層、5 区上層、4・5 区層位不明の順で出土遺物を報告する。

＜ 4 区縄文包含層下層出土遺物＞（第 49 ～ 54 図）

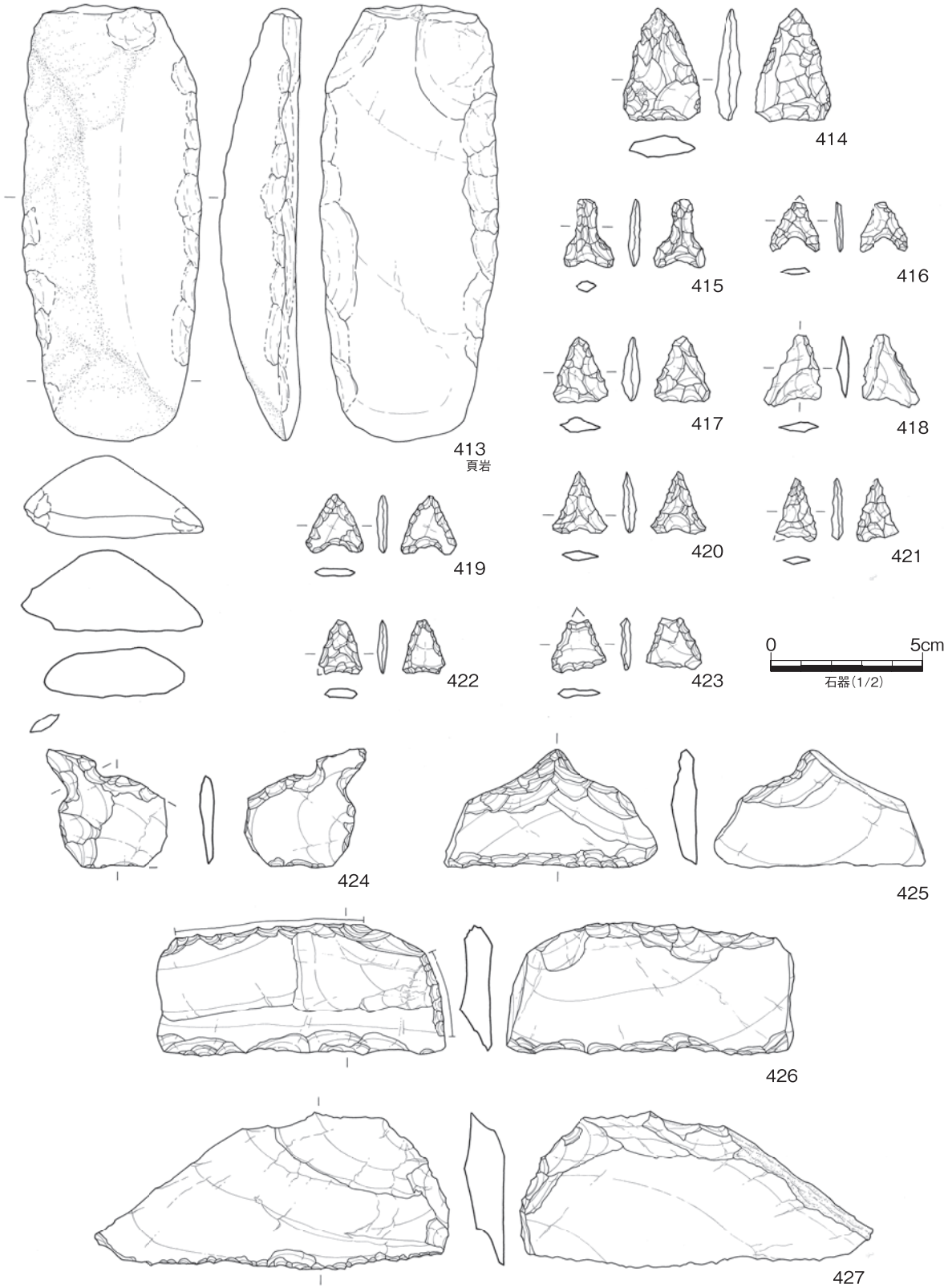
374 ～ 379 は押型文系土器で外面に楕円押型文を施文する深鉢口縁部片である。374・375・377 は外反する口縁端部が肥厚するもので、374 と 377 は内面斜行沈線から続くであろう沈線状の窪みを端面に



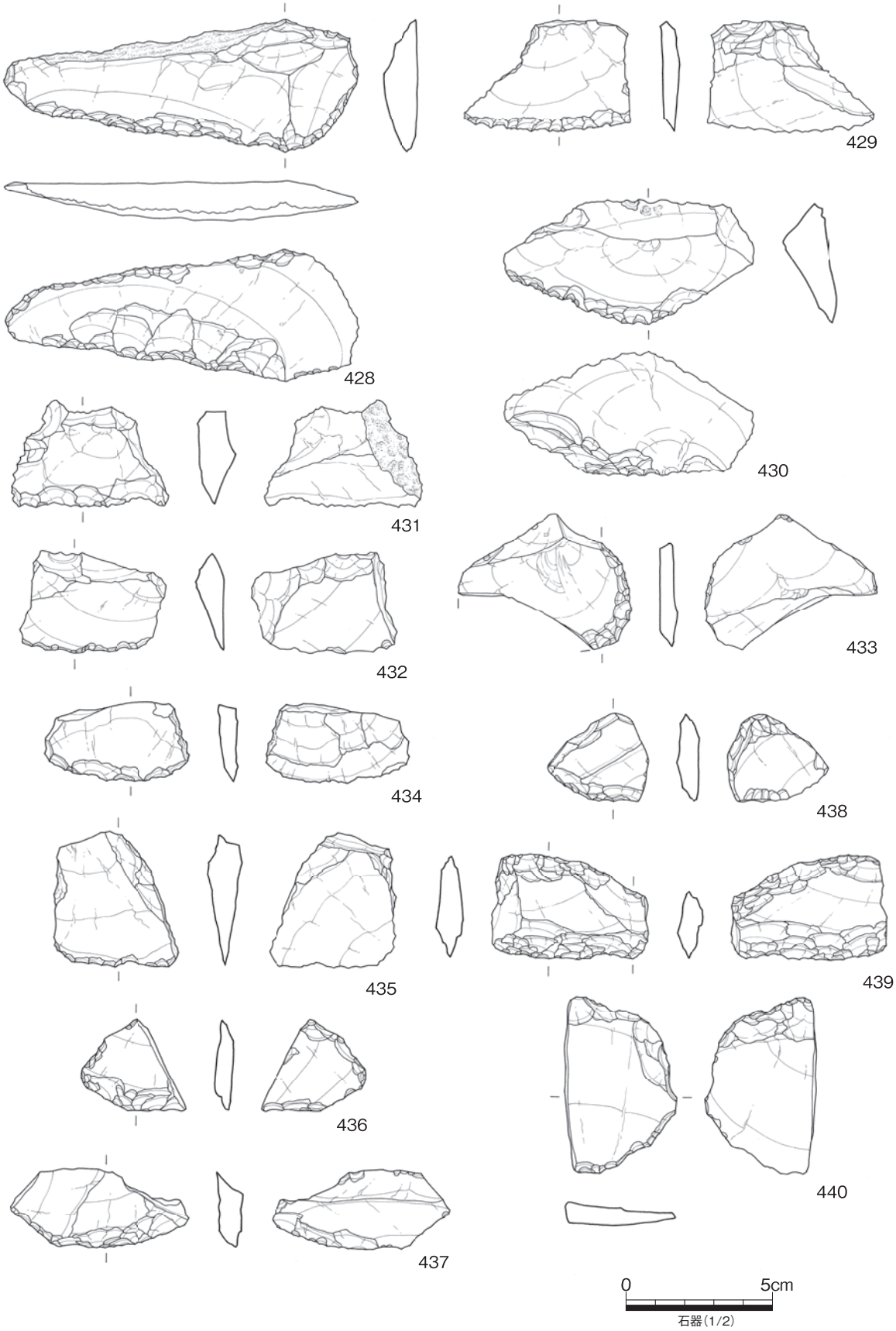
第 49 図　4 区縄文包含層下層出土遺物（1）



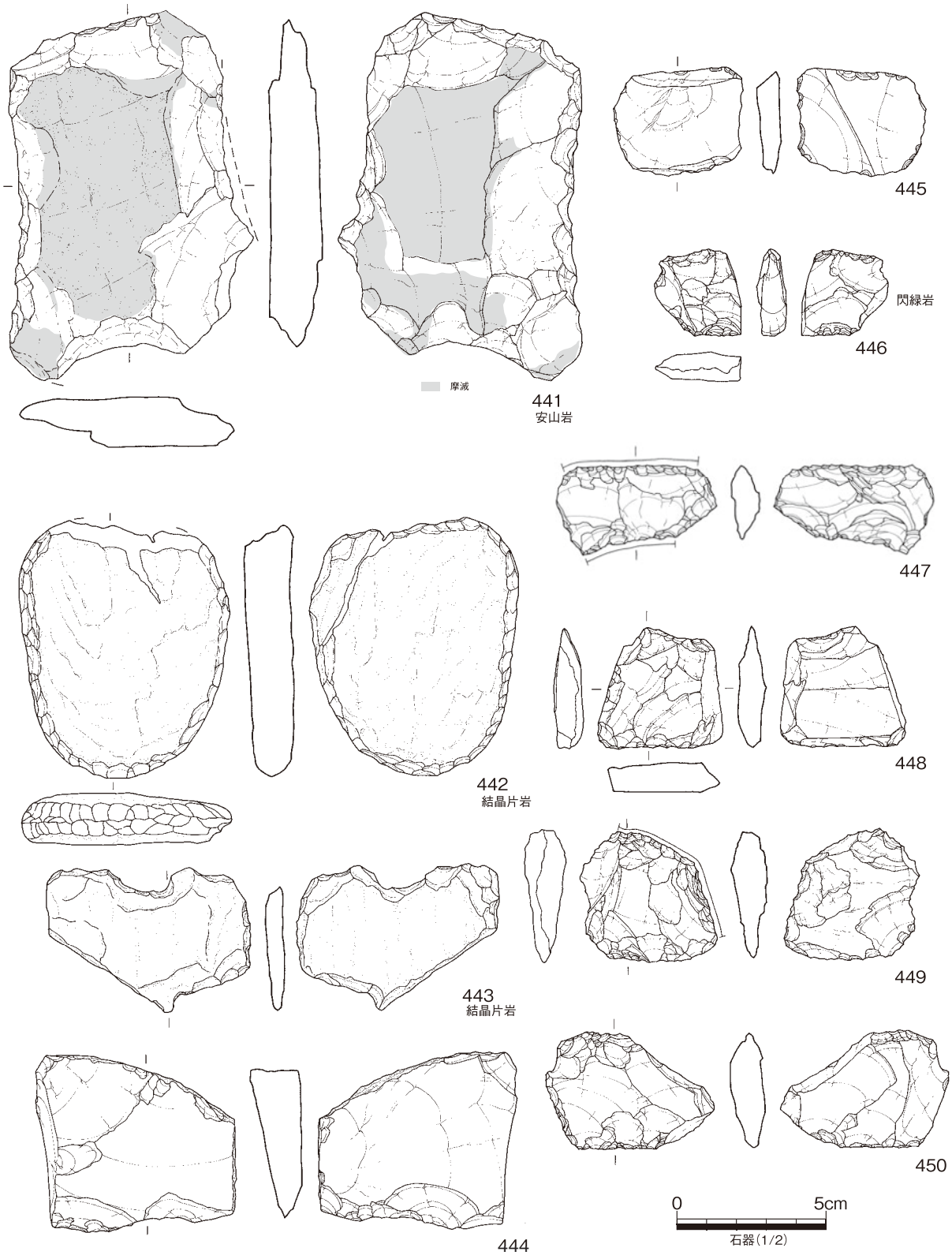
第 50 図　4 区縄文包含層下層出土遺物（2）



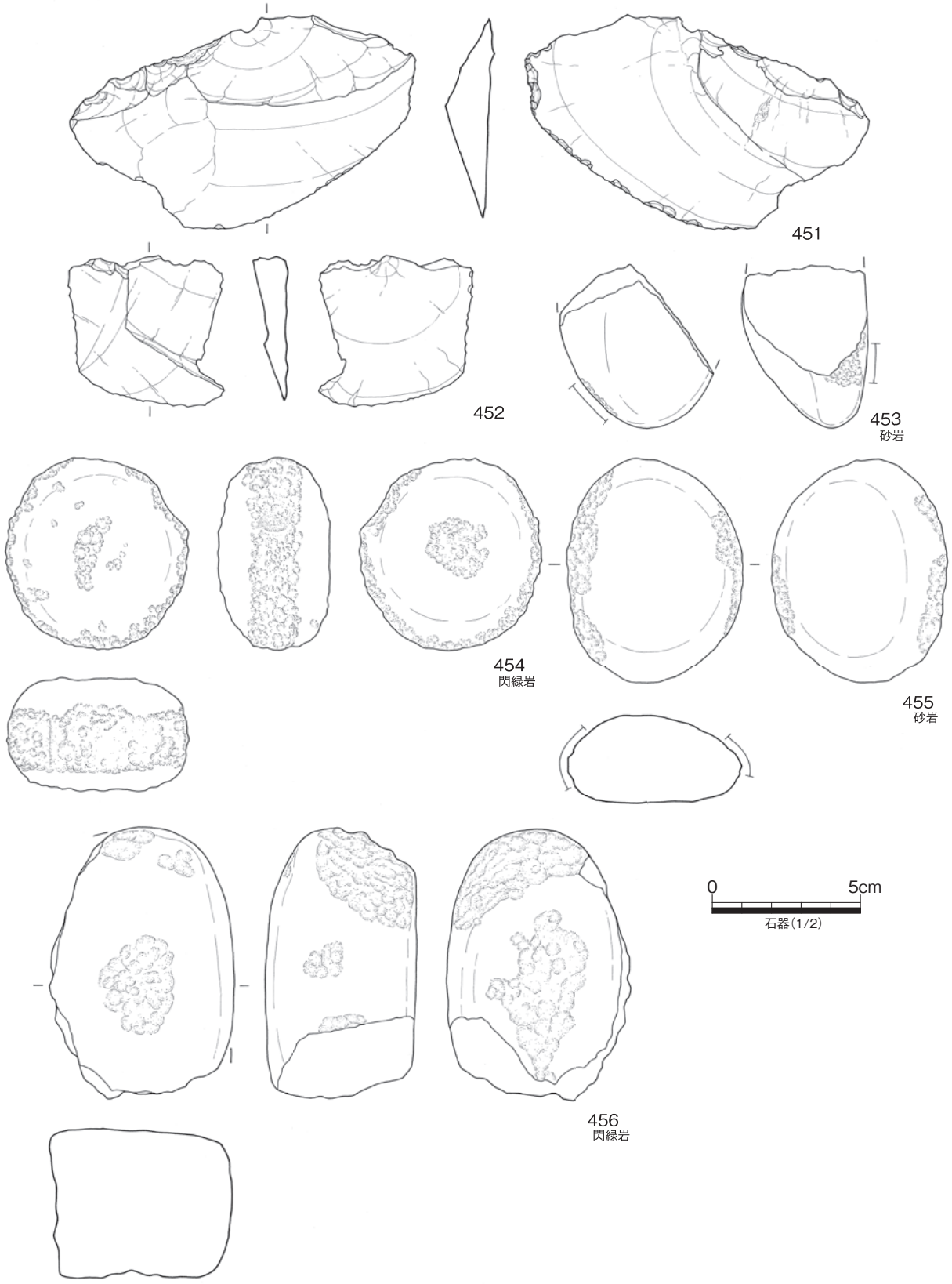
第 51 図　4 区縄文包含層下層出土遺物（3）



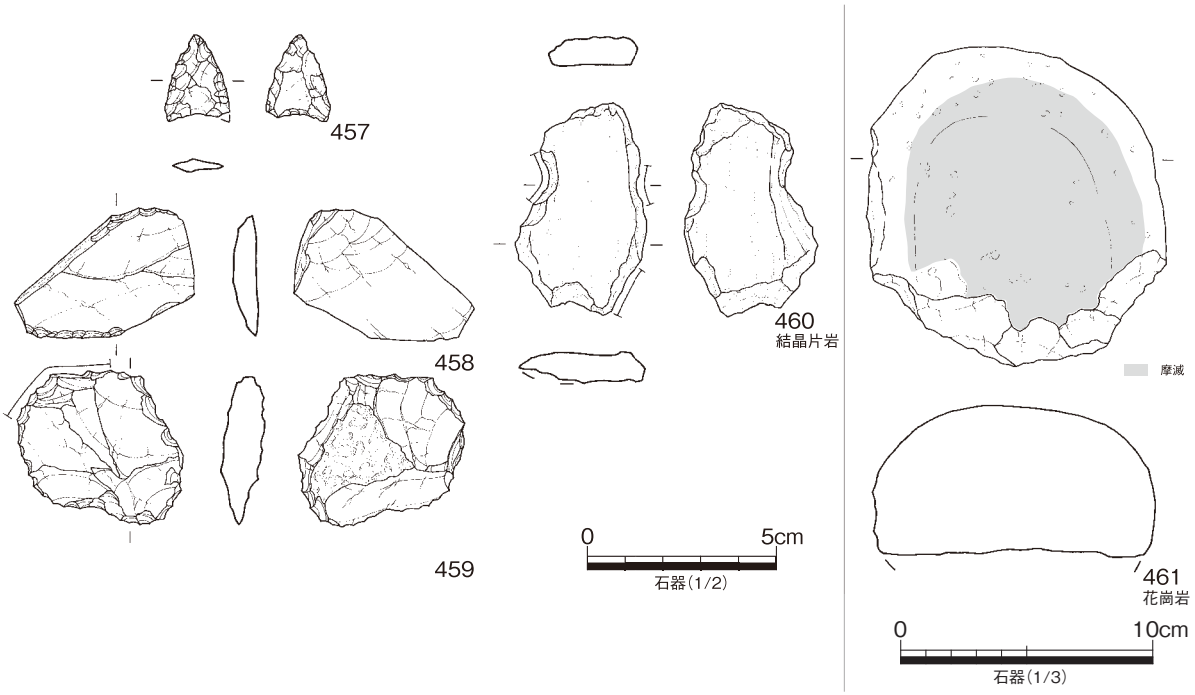
第 52 図　4 区縄文包含層下層出土遺物（4）



第 53 図　4 区縄文包含層下層出土遺物（5）



第 54 図　4 区縄文包含層下層出土遺物（6）



第 55 図　4 区縄文包含層上層出土遺物

留める。378・379 は外面に原体による円形刺突文を施文する。

380 は外面無文で内面に斜行沈線を施文する深鉢口縁部片である。381 は口縁下に 2 条の刻目隆帯文を貼付し、さらに口唇部に刻目を施す深鉢口縁部片である。縄文時代晩期後半の突帯文系土器に類似するが、晩期では口縁部に突帯を 2 条施文することはないことから、早期末ごろの穂谷式に伴う隆帯とみておく。

382 は尖底の深鉢底部片である。胴部へ緩やかに立ち上がり、寸胴な胴部に接続するものと考えられる。383 はミニチュアの深鉢である。内外面ナデ調整で押型文の施文はみられない。

384 ～ 400 は外面に楕円押型文を施文する深鉢胴部片である。楕円は大粒の単位で、391・392 のように斜格子状のものも含まれる。

401 は沈線・条痕文を施文する深鉢胴部片である。402 は横方向の二枚貝条痕を施文し、403 は 2 条の沈線の下位に円弧状の沈線を施文する。404 は斜格子状に施文された撚糸文土器胴部片である。

405 ～ 412 は縄文時代晩期前半の黒色磨研系土器である。405 は内外面を巻貝条痕調整で仕上げる深鉢である。406 は口縁部に段をもつ深鉢である。一旦外反口縁を仕上げ、さらに上方に粘土を積み増して段を介して外反する口縁を成形する。外面は撫で仕上げで、内面には丁寧な研磨痕が残る。407 も同様に口縁部に段をもつ深鉢である。408 ～ 412 は浅鉢で、408 は外反する口縁端部内面が玉縁状に肥厚する。外面はナデ調整で、内面には研磨痕が残る。409 は段を有する波状口縁の浅鉢である。段部外面には 2 条の凹線を施文する。凹線と内面のミガキ調整は巻貝を使う。410 ～ 412 は胴部が強く屈曲する浅鉢で、胴部最大径付近に段や沈線を施文する。

413 は頁岩製の局部磨製石斧である。自然面もしくは古い剥離面を背面に取り込んで縦長剥片を剥ぎ取り、左右の側縁に粗加工を施し、下端の刃部を研磨する。断面は蒲鉾状で、やや内彎する側面観をもつ。414 ～ 423 はサヌカイト製の打製石鏃である。414 は長さ 3.7cm で大形だが、それ以外は長さ 2cm に満たない小形品である。418 は未製品。424・425 はサヌカイト製の石匙である。剥片を素材として、いず

れも片刃に仕上げる。

426 ～ 440 はサヌカイト製スクレイパーである。427 ～ 433 は剥片片面を加工して片刃を成形するもので、長さ 15cm 前後のものと 5cm 前後のものに分かれる。

441 は安山岩製の打製石斧である。刃部付近に強い研磨痕が残る。442・443 は結晶片岩を素材とする叩石（敲打具）である。442 は外縁に連続する敲打痕を残す。443 は敲打により上端に抉りが入る。

444・445 は二次加工ある剥片である。444 は大形剥片の折損片、445 は平坦打面の剥片である。446 ～ 450 は楔状の石核、451 は打面調整を施す石核である。452 は調整打面を打撃して剥離された剥片である。453 ～ 456 は砂岩・閃緑岩製の叩石・磨石類である。いずれも円礫周縁及び腹面に顕著な敲打痕が残る。

＜ 4 区縄文包含層上層出土遺物＞（第 55 図）

少量の土器片、石器類が出土している。土器片は小片が多くここでは報告していない。石器を報告する。

457 は凹基式のサヌカイト製石鏃である。風化状況から縄文時代晩期に所属するものと思われる。458 はサヌカイト製スクレイパーである。側面に自然面を残し、対する側縁は折損する。三角形状の剥片の下縁部を直線的に片側から調整加工を施す。459 はサヌカイト製の楔状石核である。周縁が敲打により潰れ、表裏に両極打撃により階段状に剥片が剥離した痕跡がある。風化状況から縄文時代晩期に所属するものと思われる。460 は結晶片岩製の叩石である。長さ 6cm 以上、厚さ 0.8cm の薄い棒状石片の左右両端に敲打痕が残る。461 は花崗岩製の石皿である。上面の磨滅が顕著に残る。

＜ 5 区縄文包含層下層出土遺物＞（第 56 ～ 68 図）

462 ～ 500 は深鉢口縁部片である。

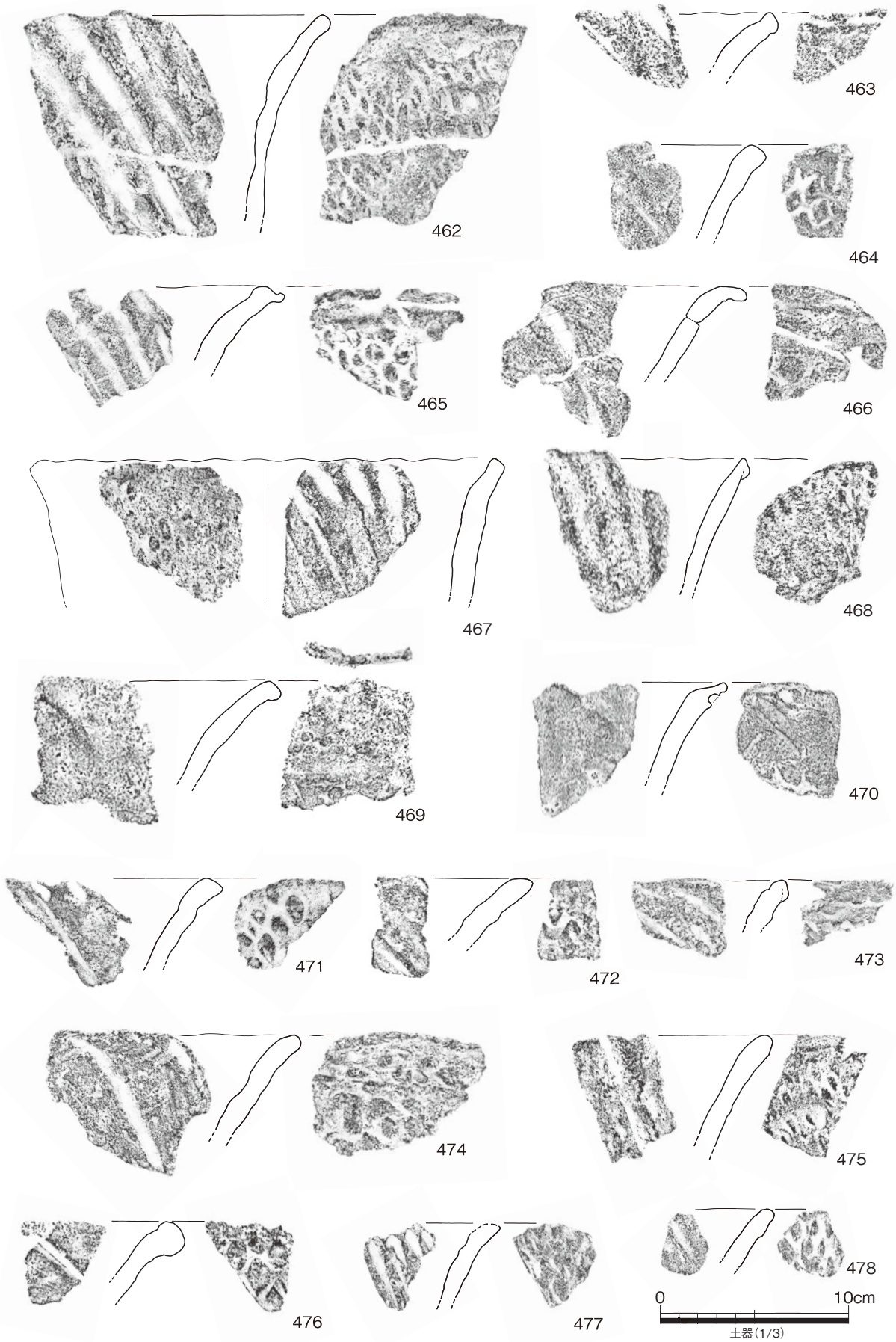
そのうち 462 ～ 478 は外面に押型文を施文し、斜め上方に外反する口縁部内面に斜行沈線を施すものである。462 ～ 473 は斜行沈線をナデ状に大きく器壁を窪ませて施文するが、474 ～ 478 は棒状工具を用いて刻線状に施文する。なお、477 は内面の沈線を細かいピッチで施文しており黄島式に類似するが、その他は高山寺式に該当する。押型文はすべて楕円文で、原体の単位は大形のものが多いが、475・477 のみ小形の単位である。

479 ～ 492 は外面に押型文を施文し、内面に斜行沈線を施文しないものである。押型文はすべて楕円文で、楕円の単位は小形（486）、中型（479・489 ～ 491）が含まれるがその他はすべて大形である。483・485・486・492 は口縁部下外面に貫通しない円形刺突文を巡らせる。484 は補修孔を有す。

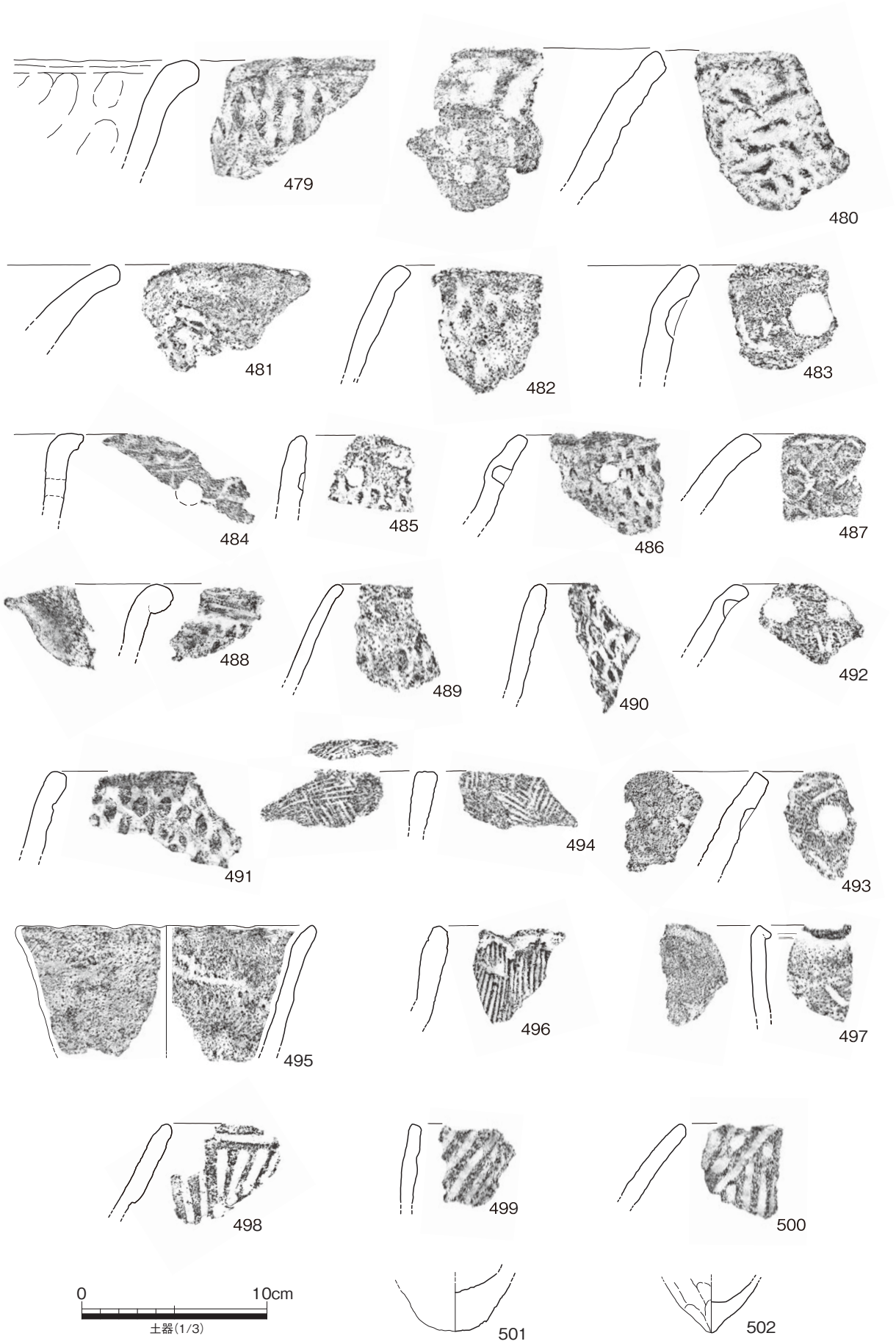
493・494 は山形押型文を施文する。493 は口縁部下に円形刺突文を施す。494 は内面及び口縁部端面にも山形押型文を施文する。495 は内面に斜行沈線を施すが外面調整は磨滅のため不明である。496 は外面に 5 条 1 単位で縦位に条痕文を施す。497 は外面は無文で口縁端部に突帯状の隆帯を貼付し、内面には斜行沈線を施す。498 は口縁部外面が肥厚し幅 4.5cm の文様帯を認める。ここに太い沈線文及び刺突文を施す点で、九州地方の平栫式（八木 2008）に類似する。499･500 は口縁部肥厚は認められないが、沈線文を施文することから 498 と同様の型式であろう。

501・502 は尖底の深鉢底部である。501 は底部下端は丸味をおび、502 は下端が短く突出する形態である。

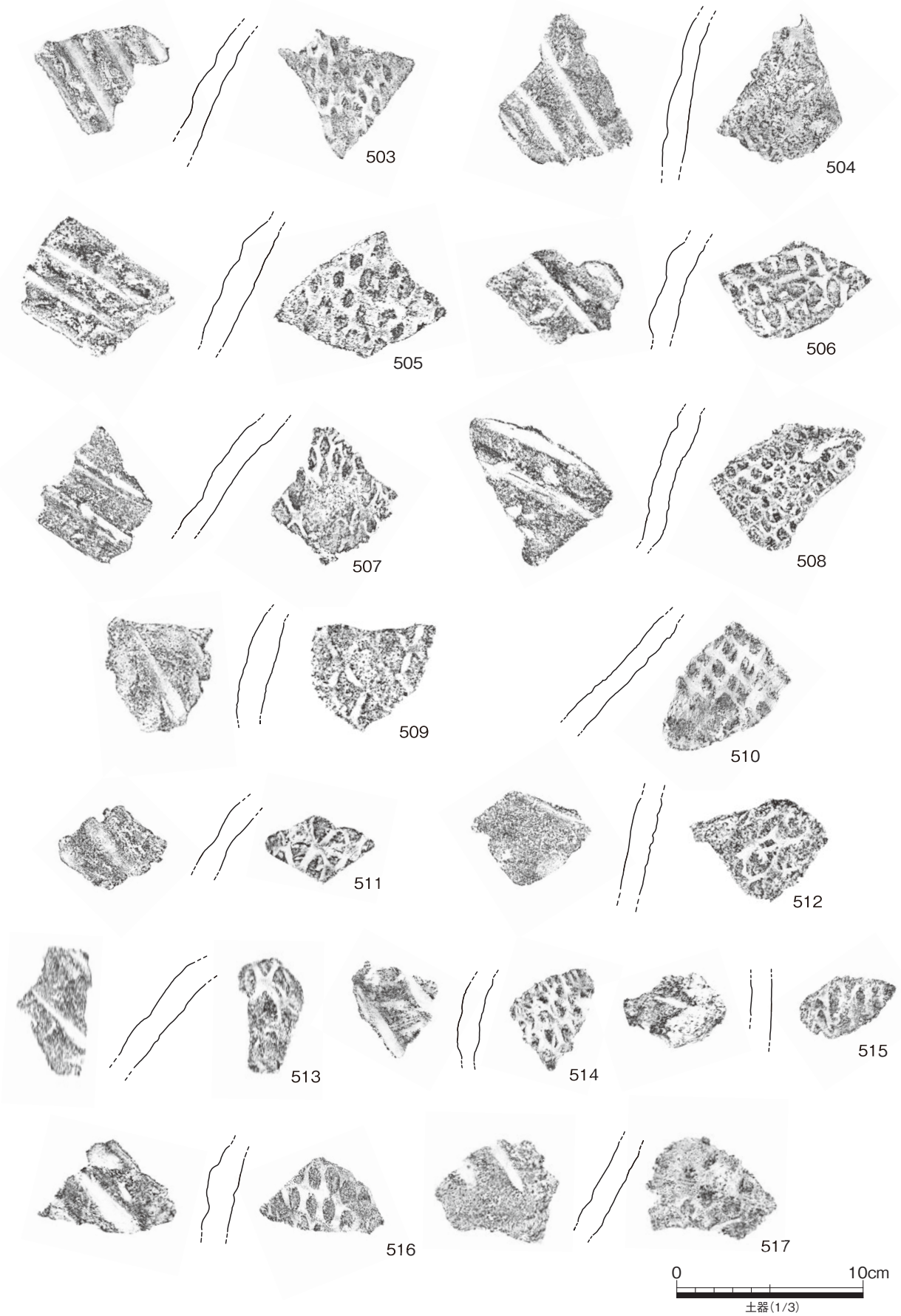
503 ～ 538･568 は外面に楕円押型文を、内面に斜行沈線を施す深鉢の胴部上半片である。内面沈線は、



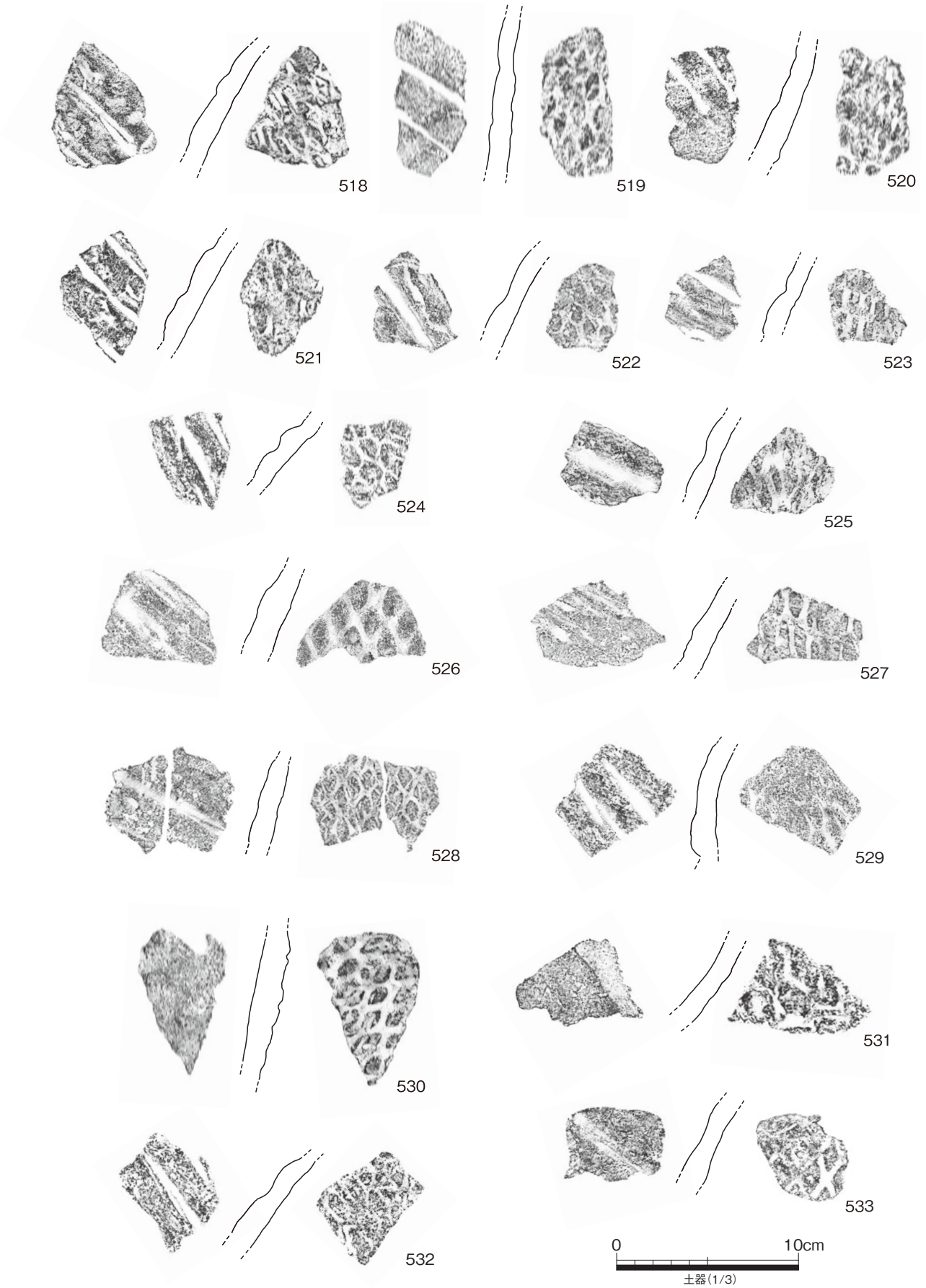
第 56 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（1）



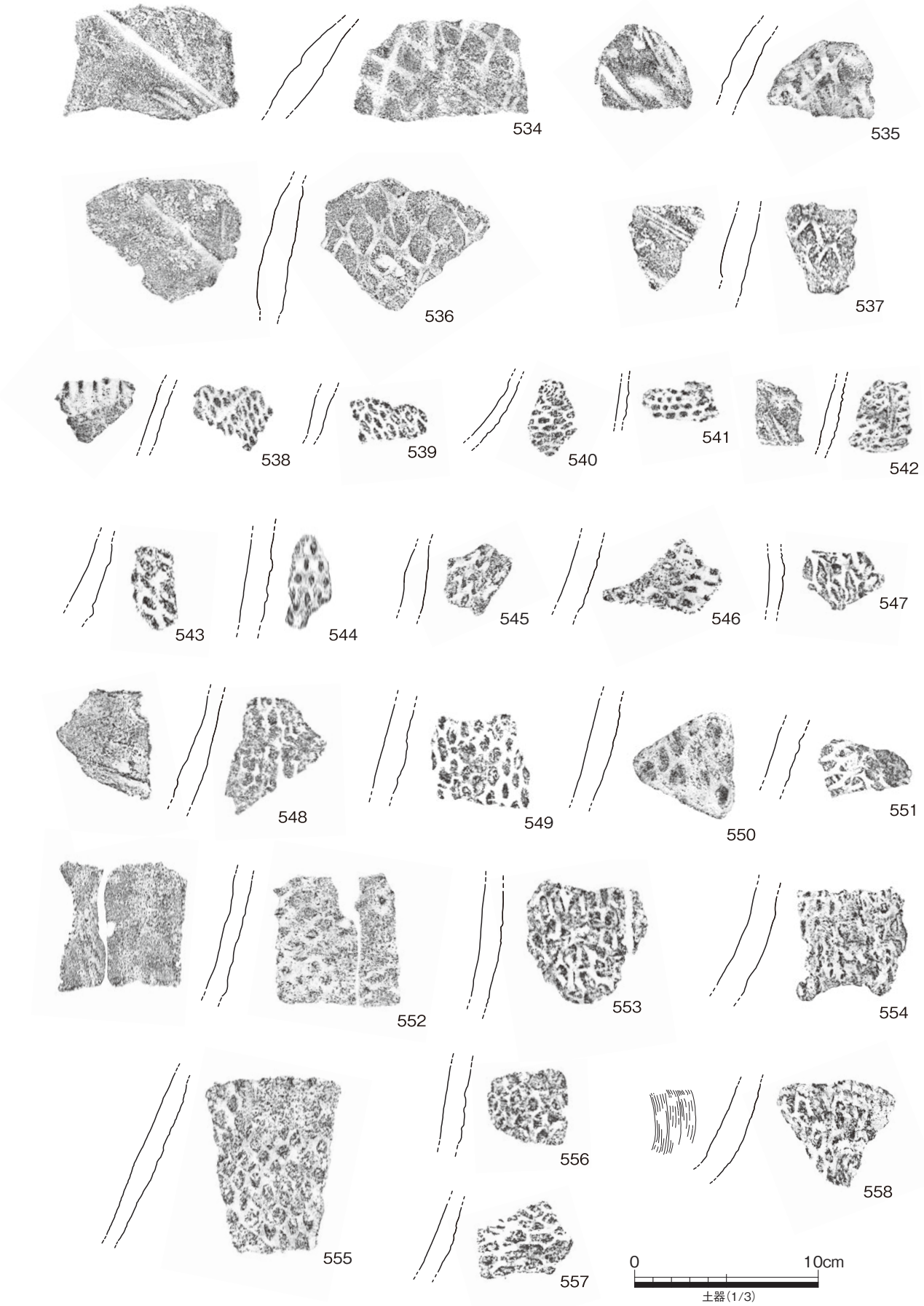
第 57 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（2）



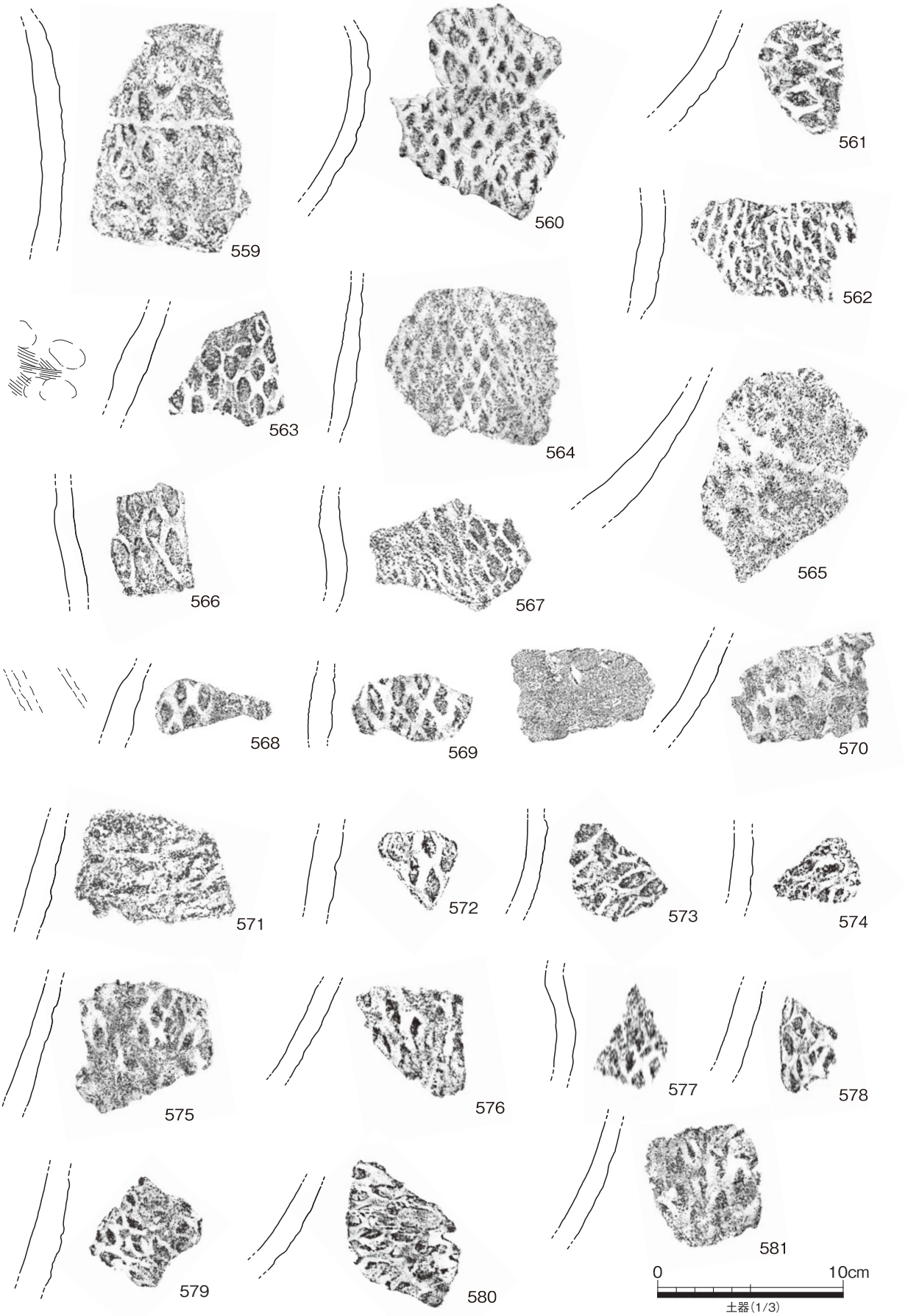
第 58 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（3）



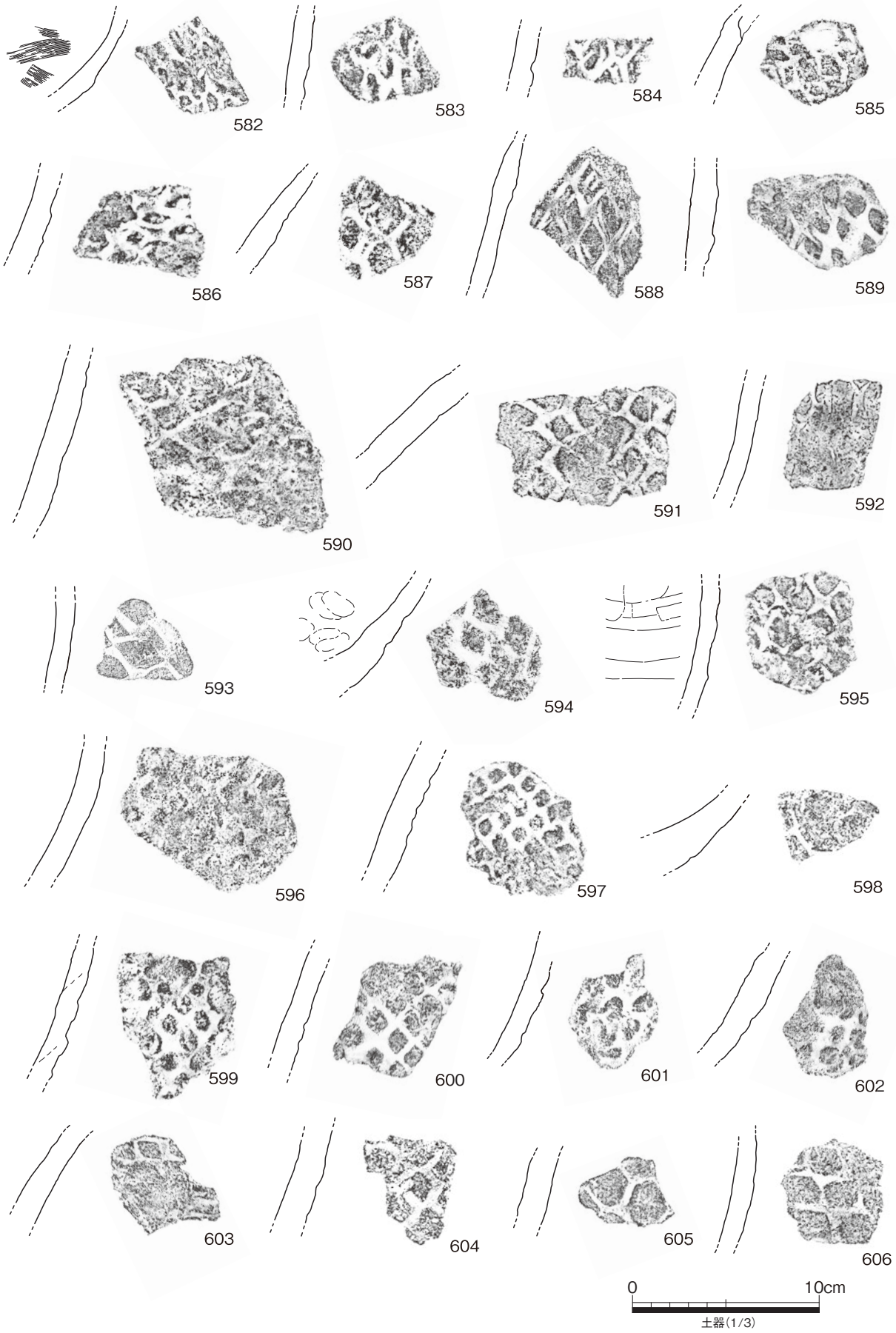
第 59 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（4）



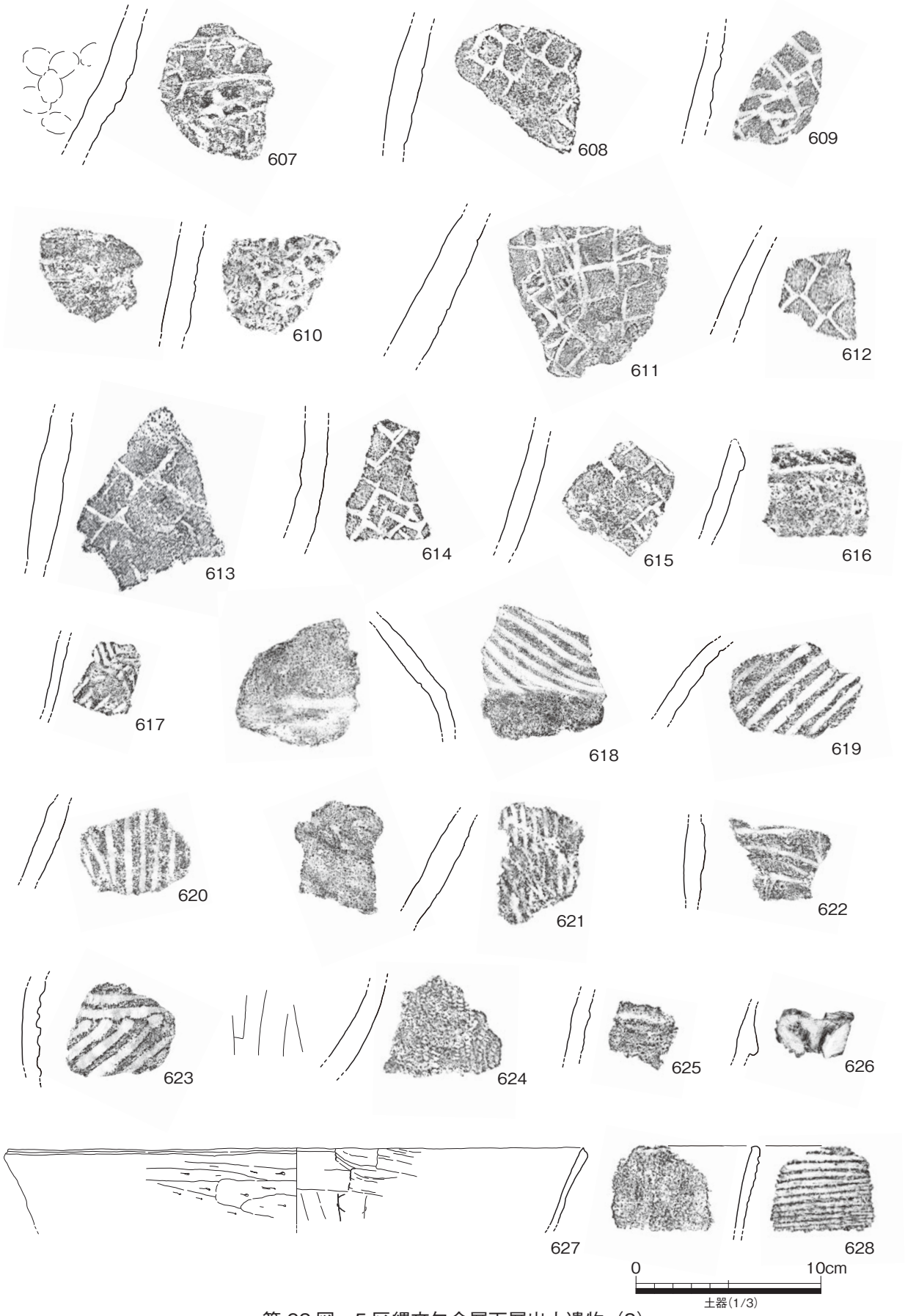
第 60 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（5）



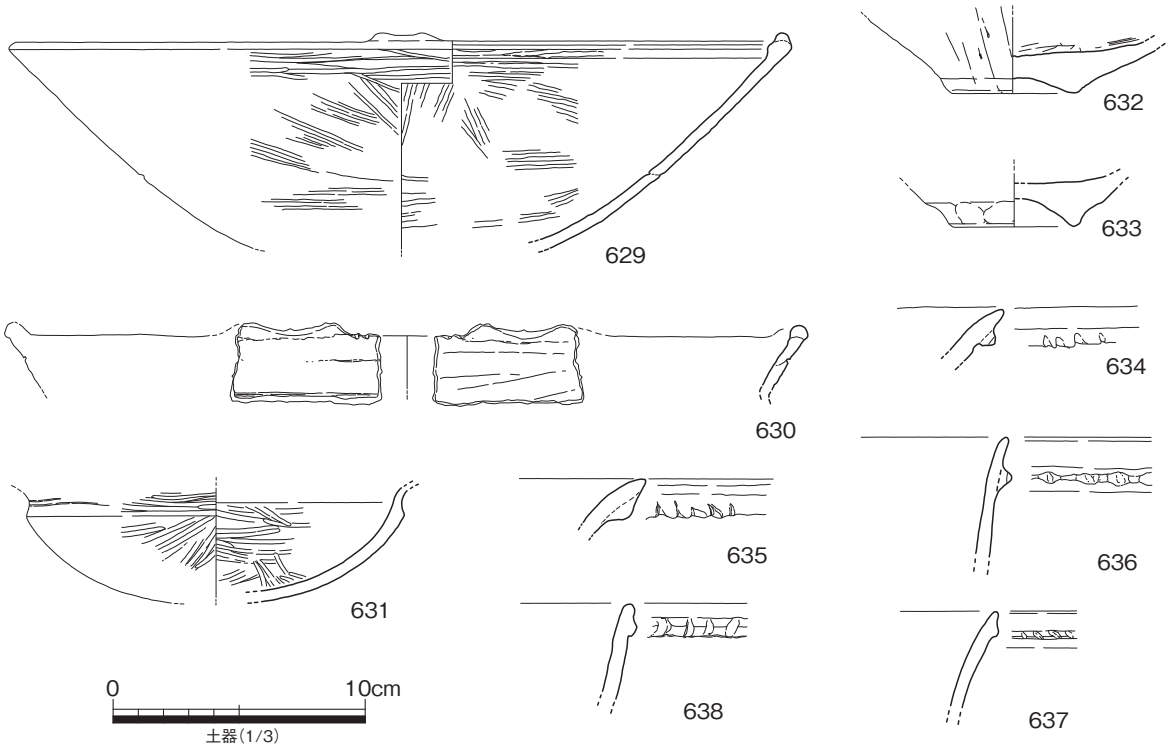
第 61 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（6）



第 62 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（7）



第 63 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（8）



第 64 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（9）

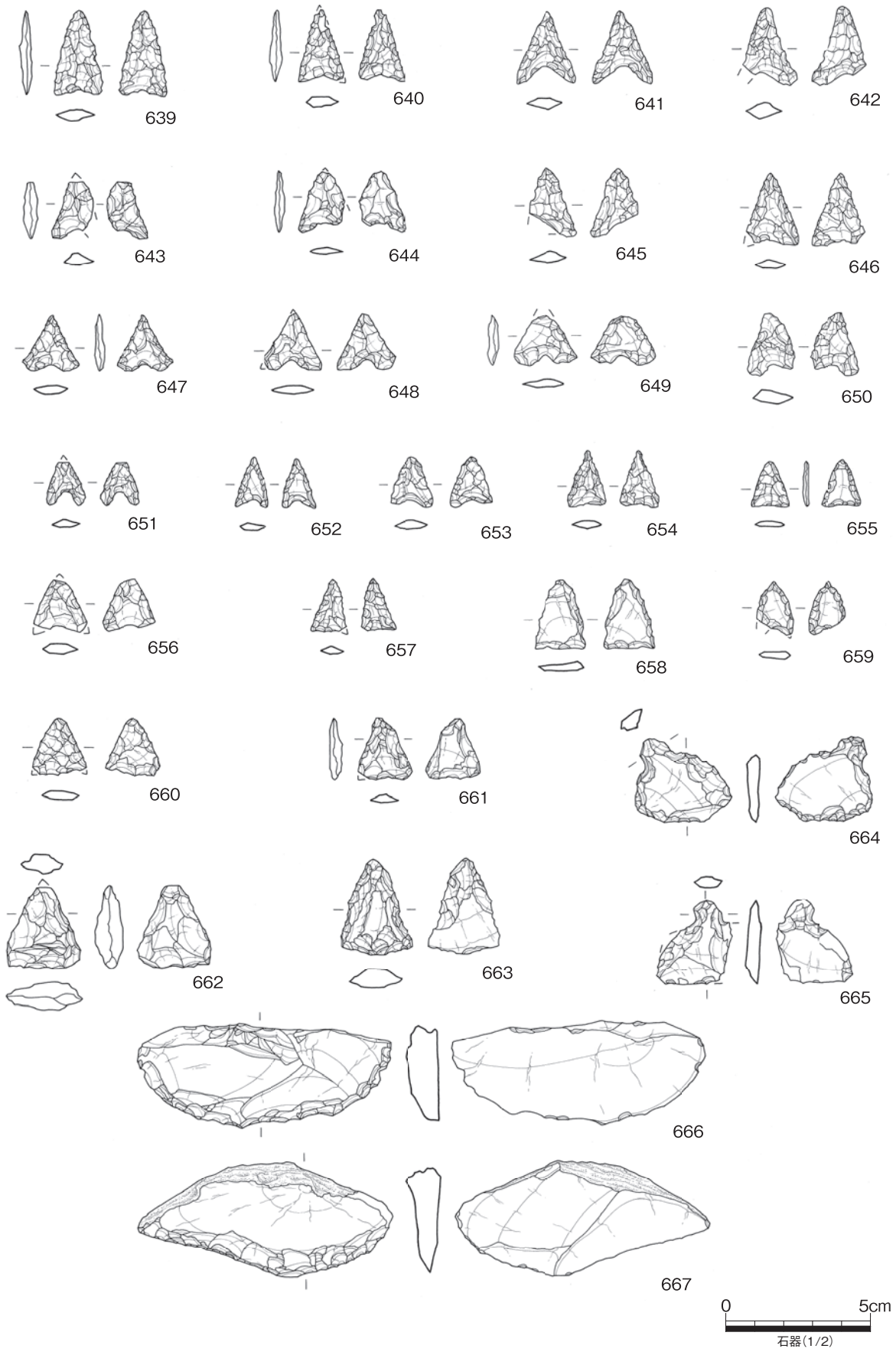
多くが幅広いナデ状の沈線で、534 ～ 538 は刻線状に、538 は縦位で密に施される。外面の楕円文は大形のものが多く、高山寺式の特徴をもつが、538 は単位が極端に小さく内面の縦位沈線とも合わせて黄島式の特徴を認める。

539 ～ 615（568 を除く）は外面に楕円押型文を施文する深鉢胴部片で、内面に沈線文を施さない一群である。楕円文は大形のものが多いが 539 ～ 549 は 538 と同様の小形である。その他は楕円の上下端が鋭角のものや、幅が広く斜格子風のものなど多様である。

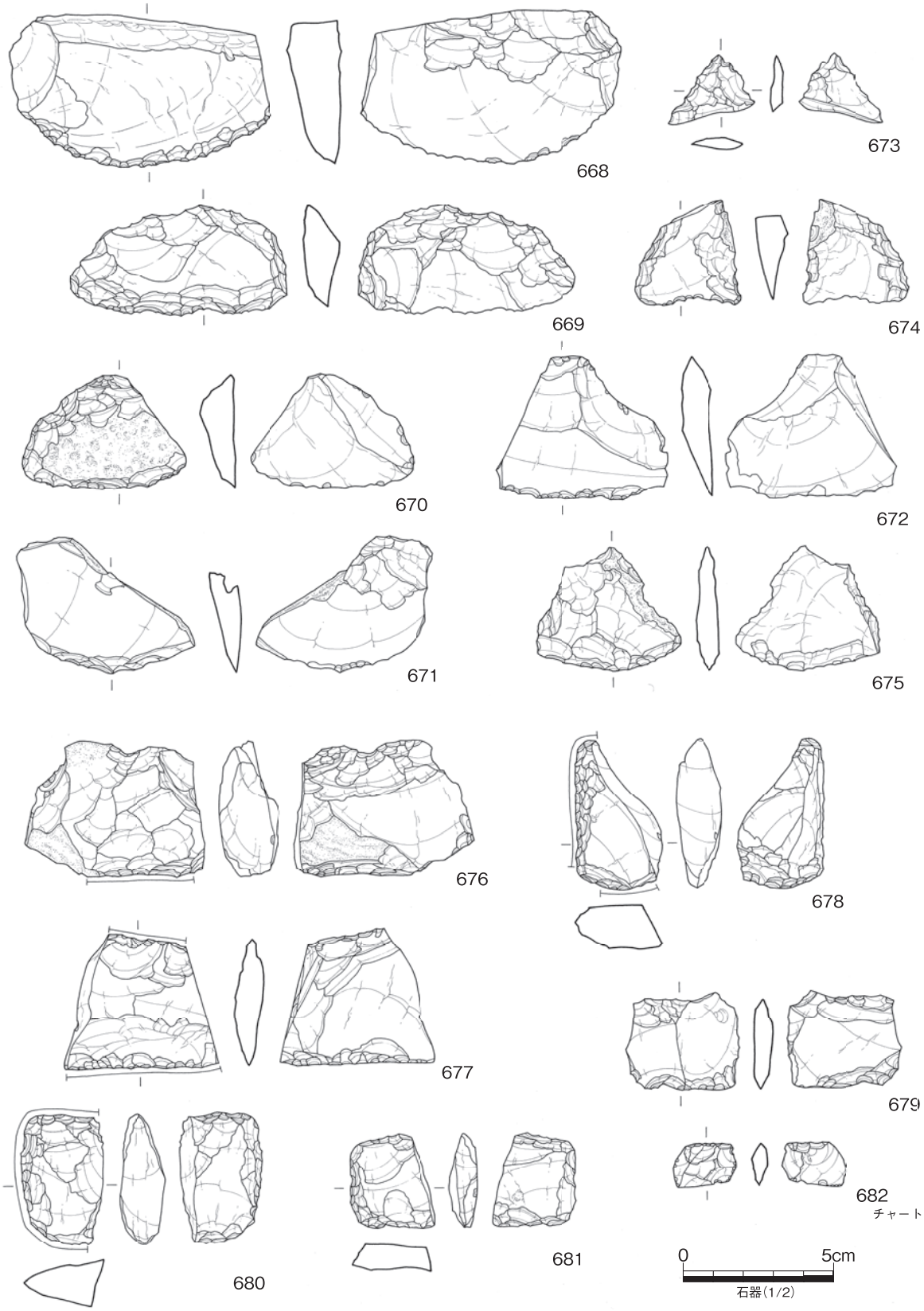
616 は口縁部に刻目を施した隆帯を貼付する。617 は山形押型文と沈線文を組み合わせて施文する。618 は胴部が屈曲する器形で屈曲部から上に斜行する沈線を施す。619 ～ 623 は外面に沈線文を施文するものである。このうち 621 は外面に細い単位の沈線（または条痕）を施し、内面に幅広い斜行沈線もしくは斜め方向のナデを施すものである。624 は外面に撚糸文を施文する。625 は外面に細い粘土隆帯を貼付する。626 は下向きの三角形突起を貼付し、細沈線を施す。

627 ～ 637 は縄文時代晩期の土器である。627・628 は外面を二枚貝条痕または削りで調整する深鉢。629・630 は口縁部にリボン状突起を貼付するボール状の黒色磨研系浅鉢である。631 は胴部で屈曲するタイプの浅鉢で屈曲部直上に浅い沈線を施文する。632・633 は上げ底の深鉢底部である。以上の 627 ～ 633 は晩期前半に属す。634 ～ 637 は口縁部に刻目突帯文を貼付する深鉢である。晩期後半に属す。

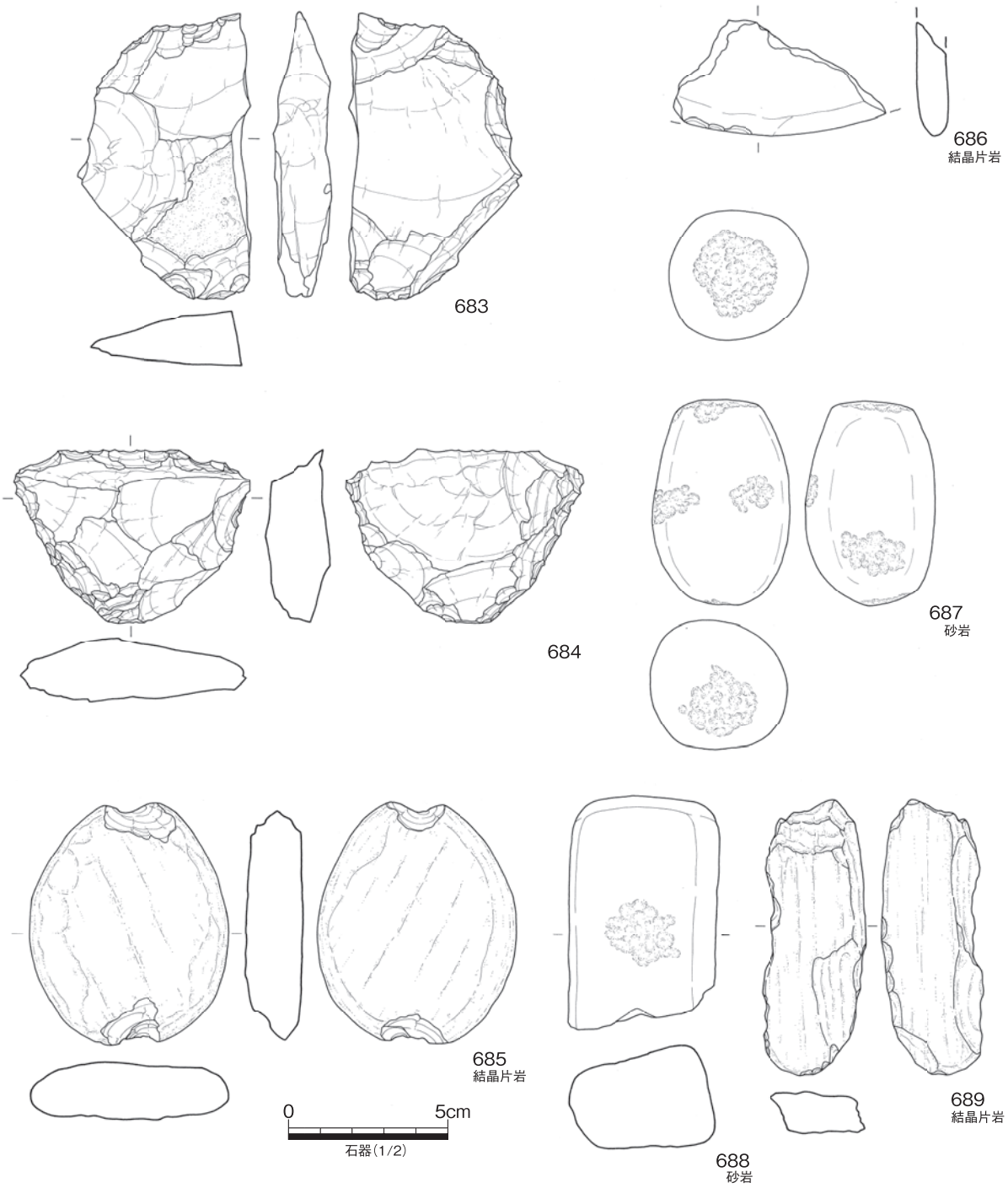
639 ～ 663 は石鏃である。すべてサヌカイト製の凹基式で、逆刺の突出が短いもの（639・640・654 ～ 663）のタイプと、強く突出するもの（641 ～ 653）がある。いずれも不整形の未製品が多い。664・665 はサヌカイト製の横形石匙である。柄部の抉りは明瞭だが、刃部の調整加工は不十分である。これらも未製品であろう。666 ～ 672 はサヌカイト製のスクレイパーである。666 ～ 668 は幅広の横長剥片



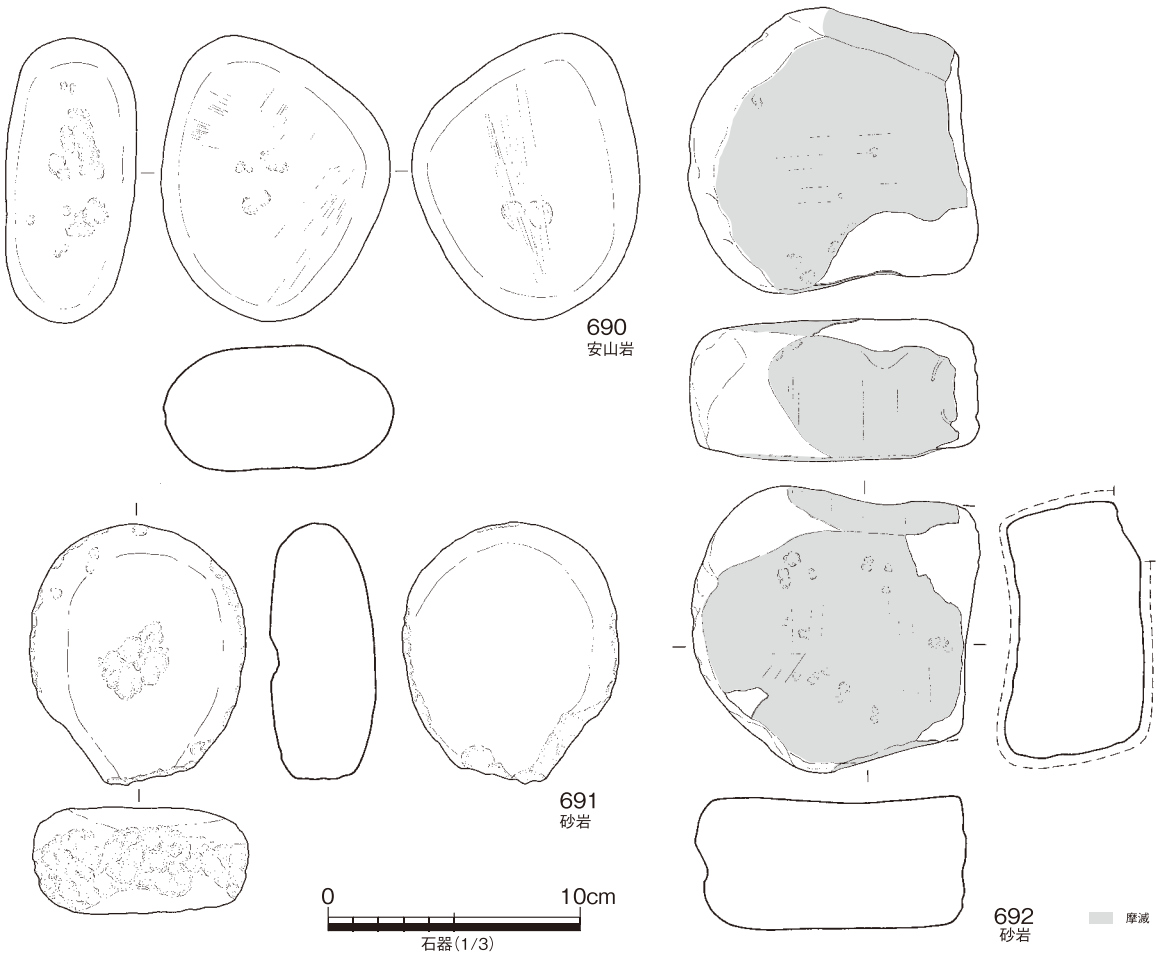
第 65 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（10）

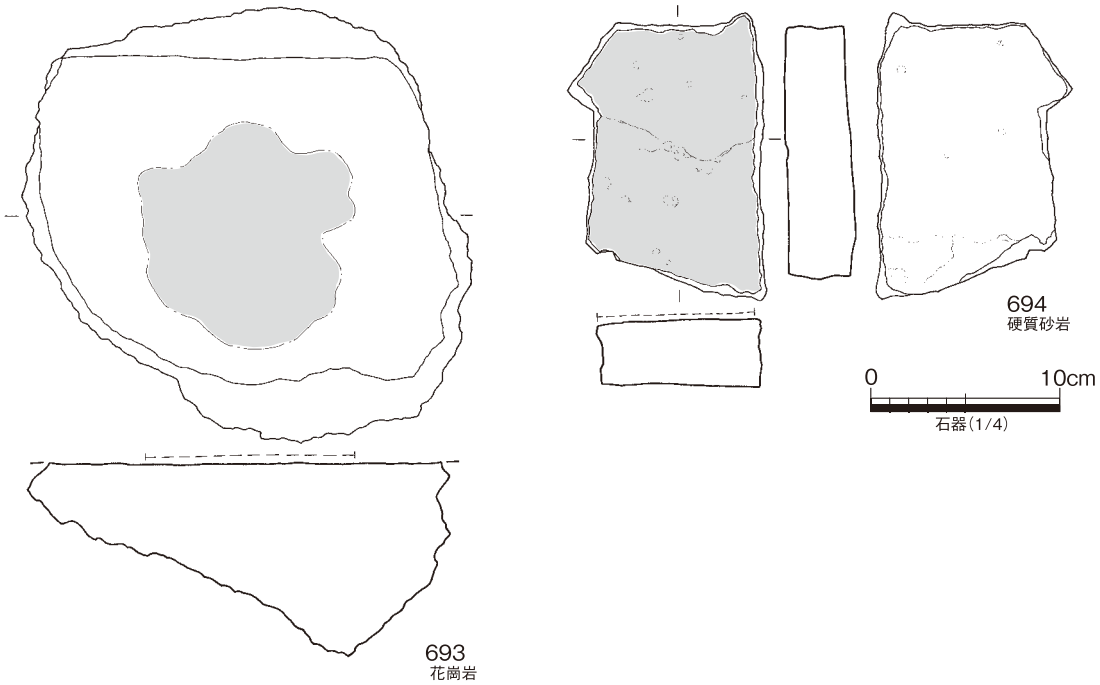


第 66 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（11）



第 67 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（12）





第 68 図　5 区縄文包含層下層出土遺物（13）

を素材とし、曲線的な下縁を片刃調整、背部を敲打するものである。669 は表裏素材面に複数剥離面を残すことから、石核を転用したものである。670 ～ 672 は素材剥片の剥離時に折損した剥片を用いて刃部加工を施すものである。いずれも片刃調整である。673 ～ 675 は小形の剥片周縁に不規則に調整加工を施すか微細剥離をもつ。そのうち 673 は石鏃未製品の可能性がある尖頭部片で、風化状況から縄文時代晩期に属する。676 ～ 681 はサヌカイト製の楔状石核である。上下縁を敲打し、側縁が垂直に折損するものが多い。両極打撃により剥片剥離作業を行った後の残滓である。このうち 677 は風化が弱く縄文時代晩期に属す。682 はチャートの剥片である。図の上縁に敲打痕があることから、両極打撃により剥離した剥片である。683・684 は厚みのあるサヌカイト製の石核である。厚さ 2cm 以上の板状素材から不規則に打点を移動させながら扇状の剥片を剥離した後の残滓である。685 は結晶片岩製の打欠石錘である。扁平楕円礫の両小口部を敲打で打ち欠く。686 ～ 691 は叩石である。686・689 は結晶片岩製で、扁平礫の周縁に敲打痕が認められる。687・688・691 は砂岩製で、687・691 は上下の小口面にあばた状の顕著な敲打痕があり、側縁には線状の敲打痕がある。690 は安山岩製、その他は結晶片岩製である。692 ～ 694 は石皿である。692 は砂岩製で磨滅面が窪む。693 は花崗岩製で磨滅面は平坦である。694 は硬質砂岩製で磨滅面は平坦である。

＜ 5 区縄文包含層上層出土遺物＞（第 69 ～ 74 図）

695 ～ 707 は深鉢口縁部片である。そのうち 695 ～ 704 は楕円押型文を施文するもので、702 ～ 704 以外は内面に斜行沈線を施文する高山寺式である。702 は口縁端部を外側に拡張し面をもつ。704 は口縁下に円形刺突文を施す。705 は口縁外面に粘土帯を貼付し楕円と山形が組み合う複合押型文を横位に 1 条施文するもので、穂谷式の新しい段階（矢野 2008 の穂谷式第 2 段階）に属す。706 は外反しない直口外面に二枚貝条痕を横位に施し、上端面に押捺縄文を施すものである。707 は口縁部が斜上方に開く器形で、外面に斜行する平行線押型文を施文する。原体彫刻は 4 条横位刻みで、器面側で 3 条凹線の陰刻となる。1 回転毎に器面から離し、重複して施文する。内面は縦位の刷毛状の木目条痕を施す。

708 ～ 741 は楕円押型文を施文する深鉢胴部片である。そのうち 708 ～ 714 は内面に斜行沈線を施文する高山寺式。734 ～ 741 は楕円の単位が小形で、734 は内面にも押型文を施文する黄島式（兵頭 2008）である。

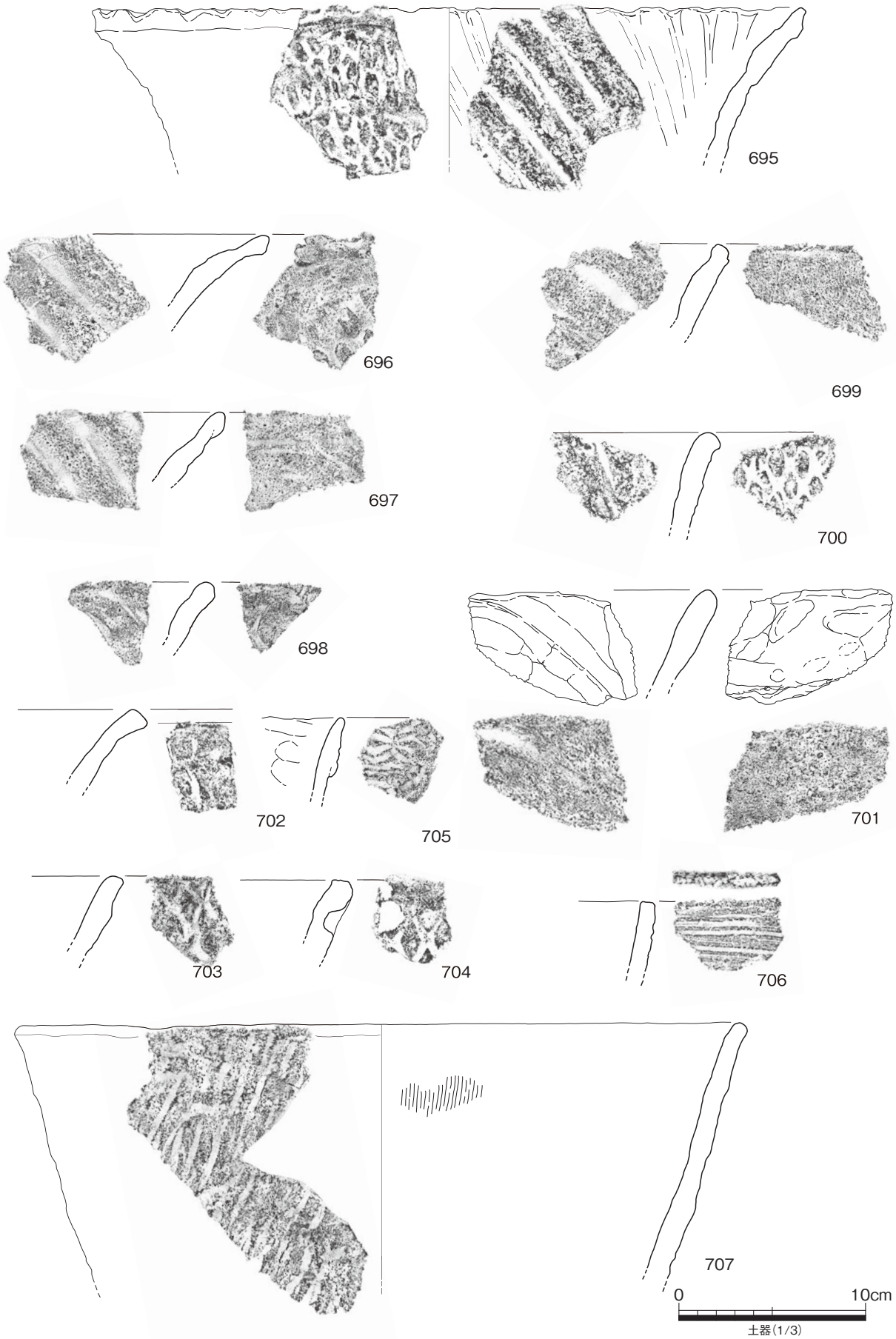
742 ～ 745 は押型文系以外の深鉢片である。742 は内外面に撚糸文を施文。743 は外面に刻目隆帯 1 条、押引沈線文を施文。744・745 は下向きの三角形突起を貼付する。

746・747 は縄文時代晩期の混在遺物である。746 は口縁端部に刻目をもつ深鉢で外面を二枚貝条痕で調整する。747 はボール状浅鉢で内外面を研磨し、外面に 3 条以上の沈線を施文する。

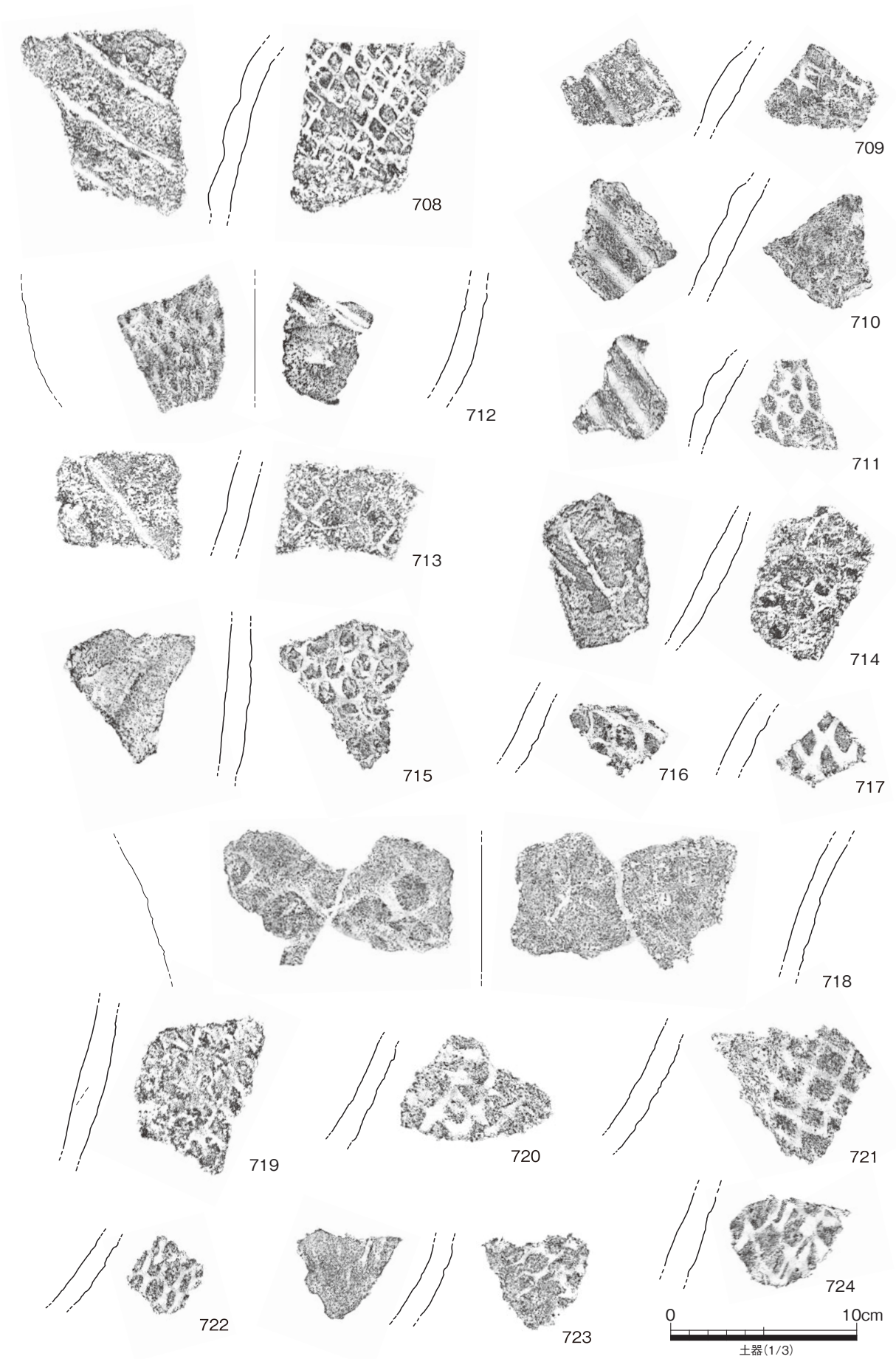
748 ～ 776 は石鏃である。すべてサヌカイト製の凹基式である。このうち 762 ～ 775 は風化が進行していないことから、晩期に所属する。748・749 は側縁で屈曲し、先端に向かって細く仕上げる。753・755･759 は逆刺の下端を丸く仕上げるものである。晩期の石鏃は、素材剥片の剥離面を残すものが多い。

776 は石鏃未製品の可能性があるものでここではスクレイパーに分類した。777 は尖頭器である。調整加工には樋状剥離が認められず、断面は扁平な三角形状を呈す。778 は結晶片岩製の打欠石錘である。図上側の打欠は片側からのみで、2 か所に認められる。

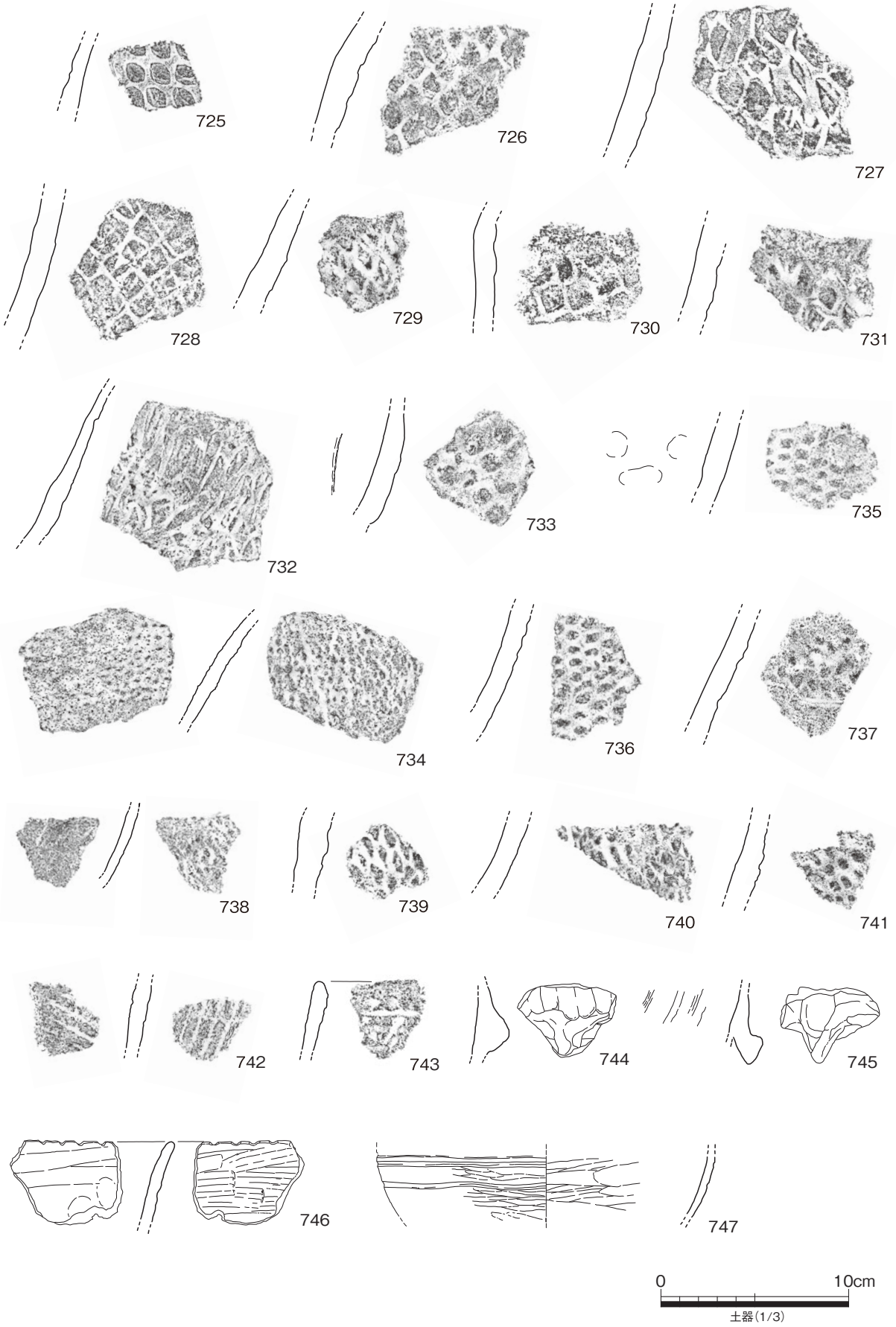
779 ～ 782 はサヌカイト製のスクレイパーである。いずれも風化が進行していないため晩期に所属するものである。779 は片刃の刃部を直線的に仕上げる。780 ～ 782 は刃部加工が不規則である。



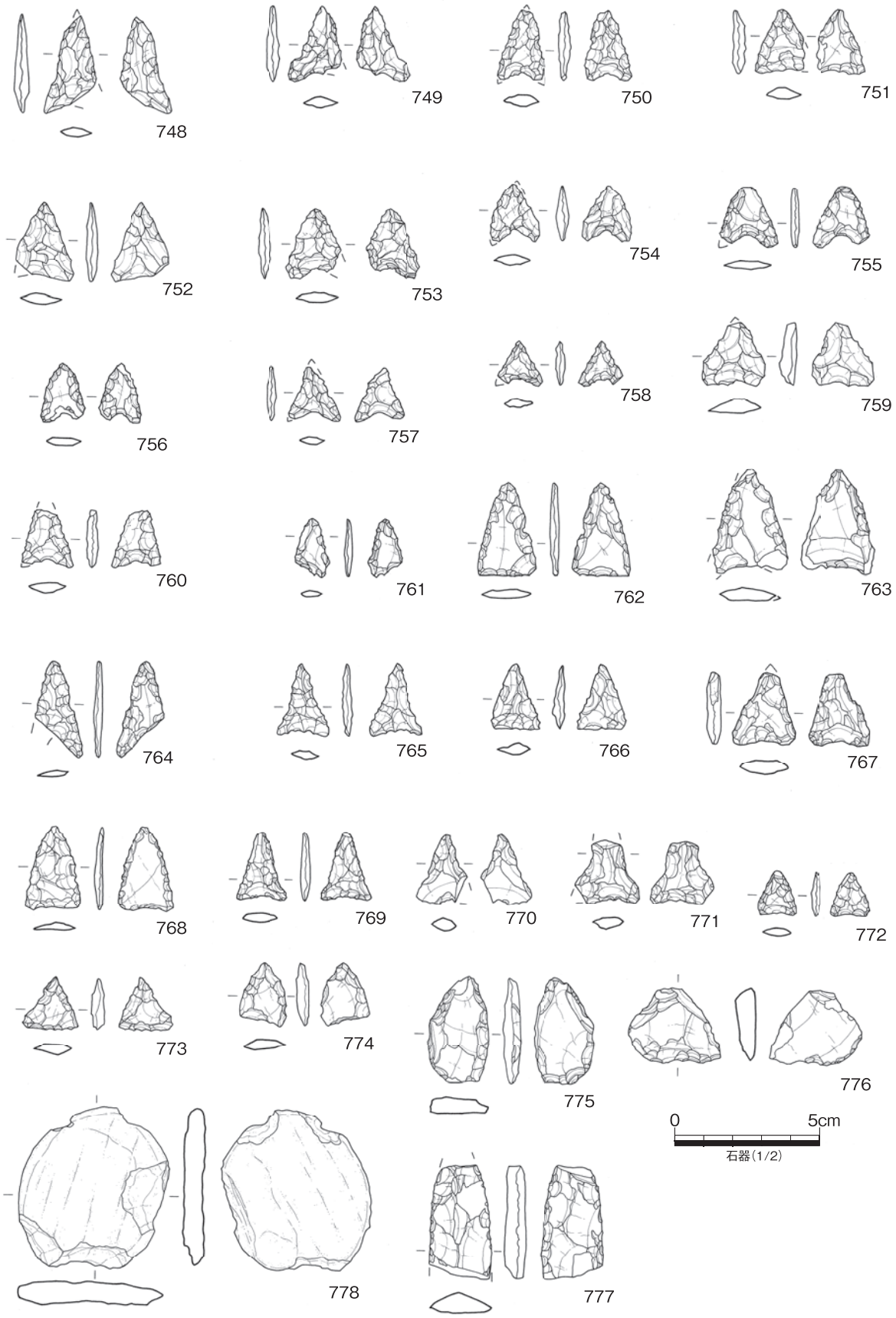
第 69 図　5 区縄文包含層上層出土遺物（1）



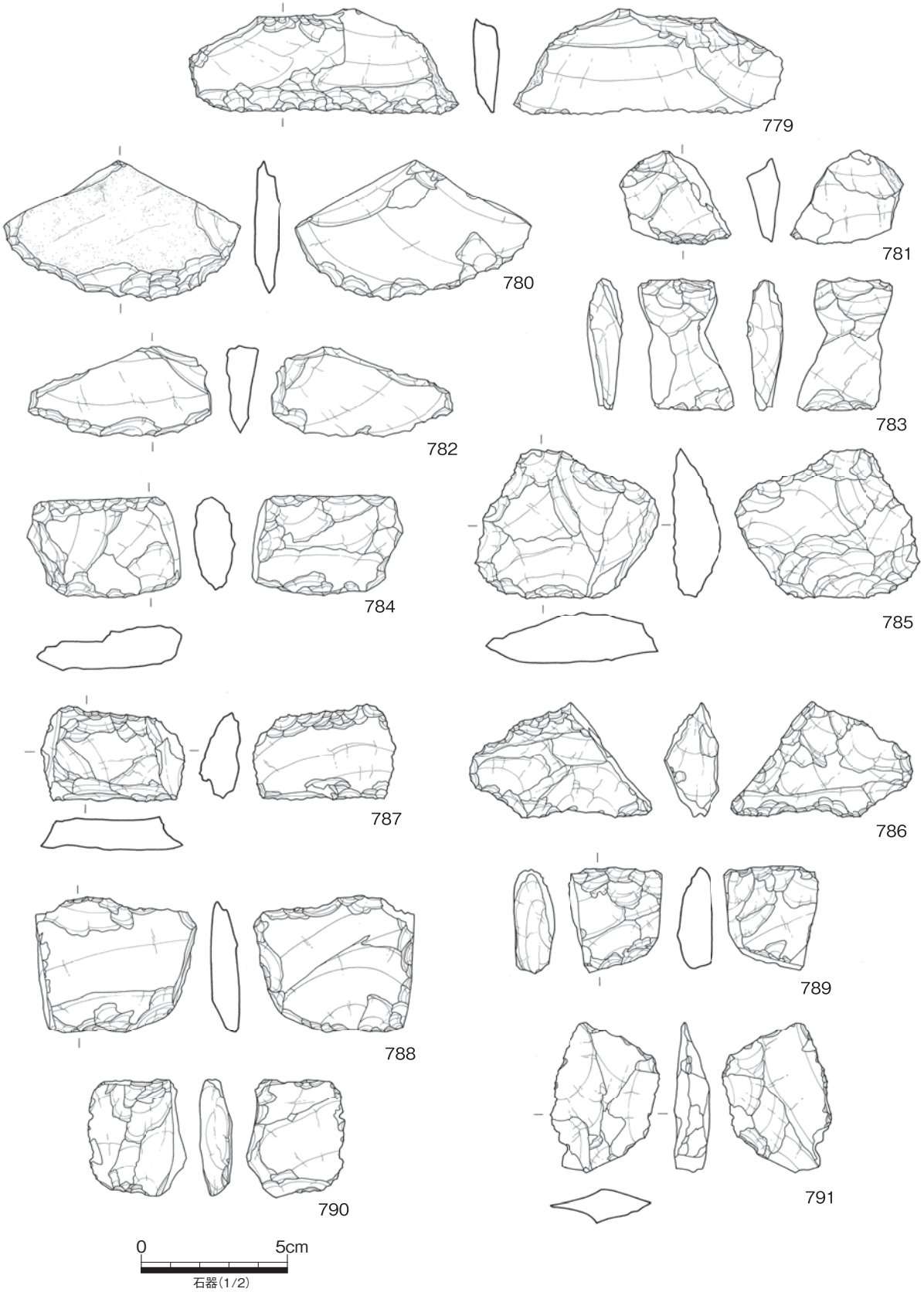
第 70 図　5 区縄文包含層上層出土遺物（2）



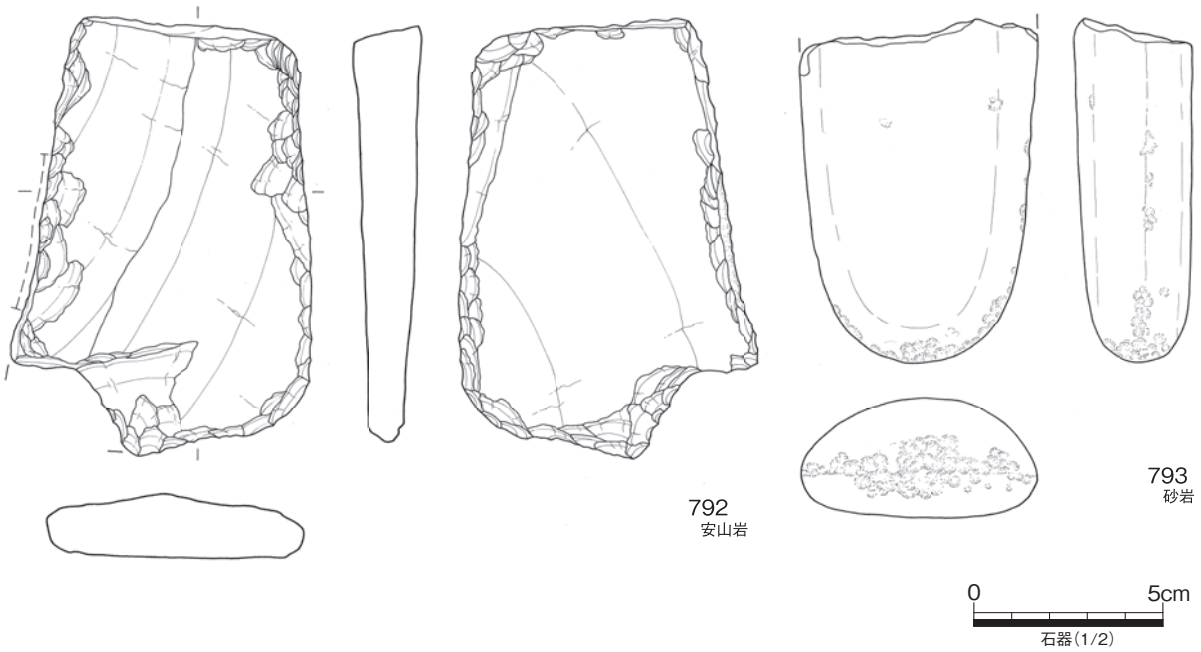
第 71 図　5 区縄文包含層上層出土遺物（3）



第 72 図　5 区縄文包含層上層出土遺物（4）



第 73 図　5 区縄文包含層上層出土遺物（5）



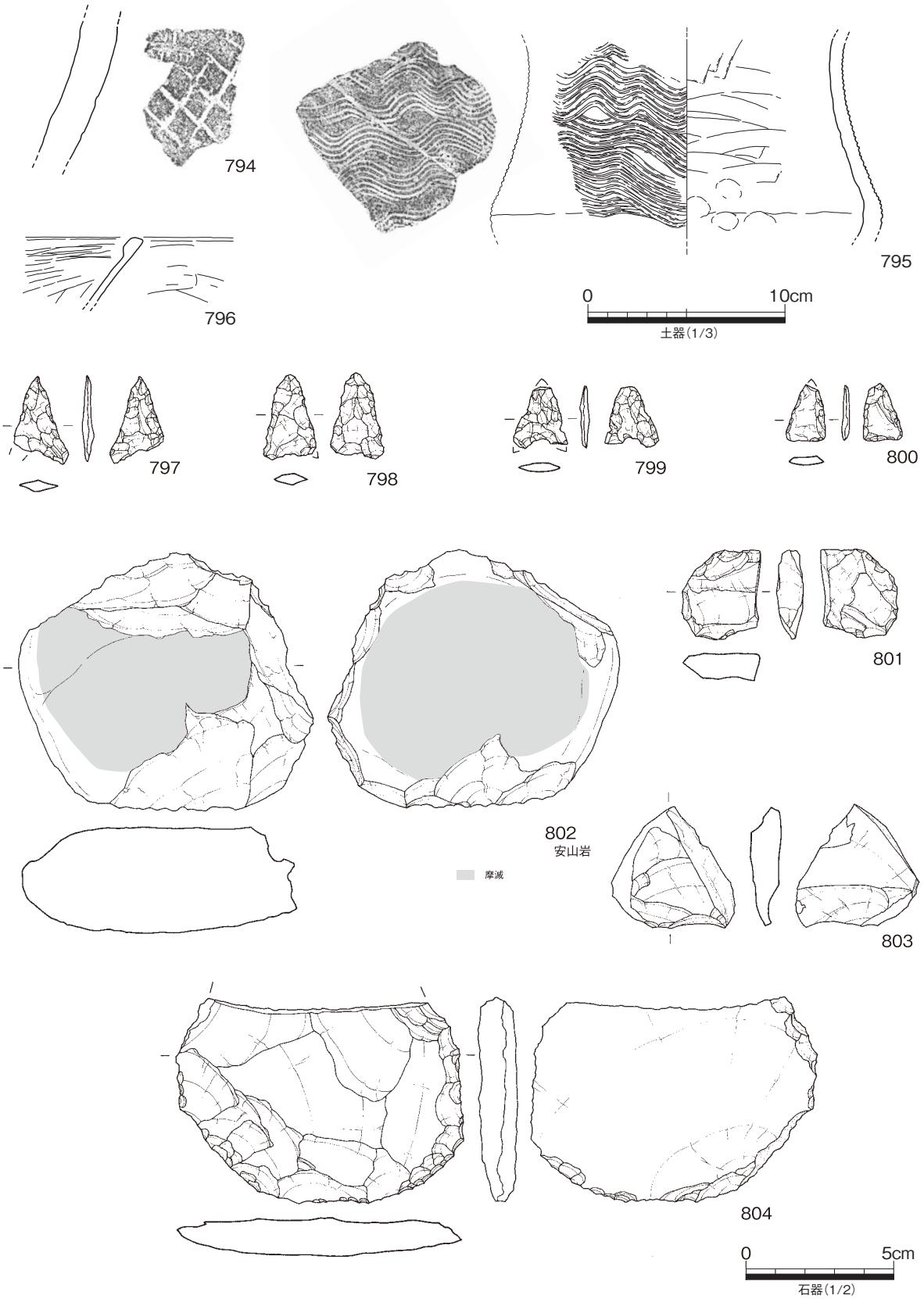
第 74 図　5 区縄文包含層上層出土遺物（6）

783 ～ 790 はサヌカイト製の楔状石核である。このうち 787 ～ 790 は風化が進行していないため晩期に所属する。791 は晩期に所属するサヌカイト製の交互剥離石核である。792 は安山岩製の打製石斧である。刃部付近に磨滅を認める。風化の程度からは判断できないが、晩期に所属する可能性が高い器種である。793 は砂岩製の叩石である。図下端の小口部にあばた状の敲打痕が残る。

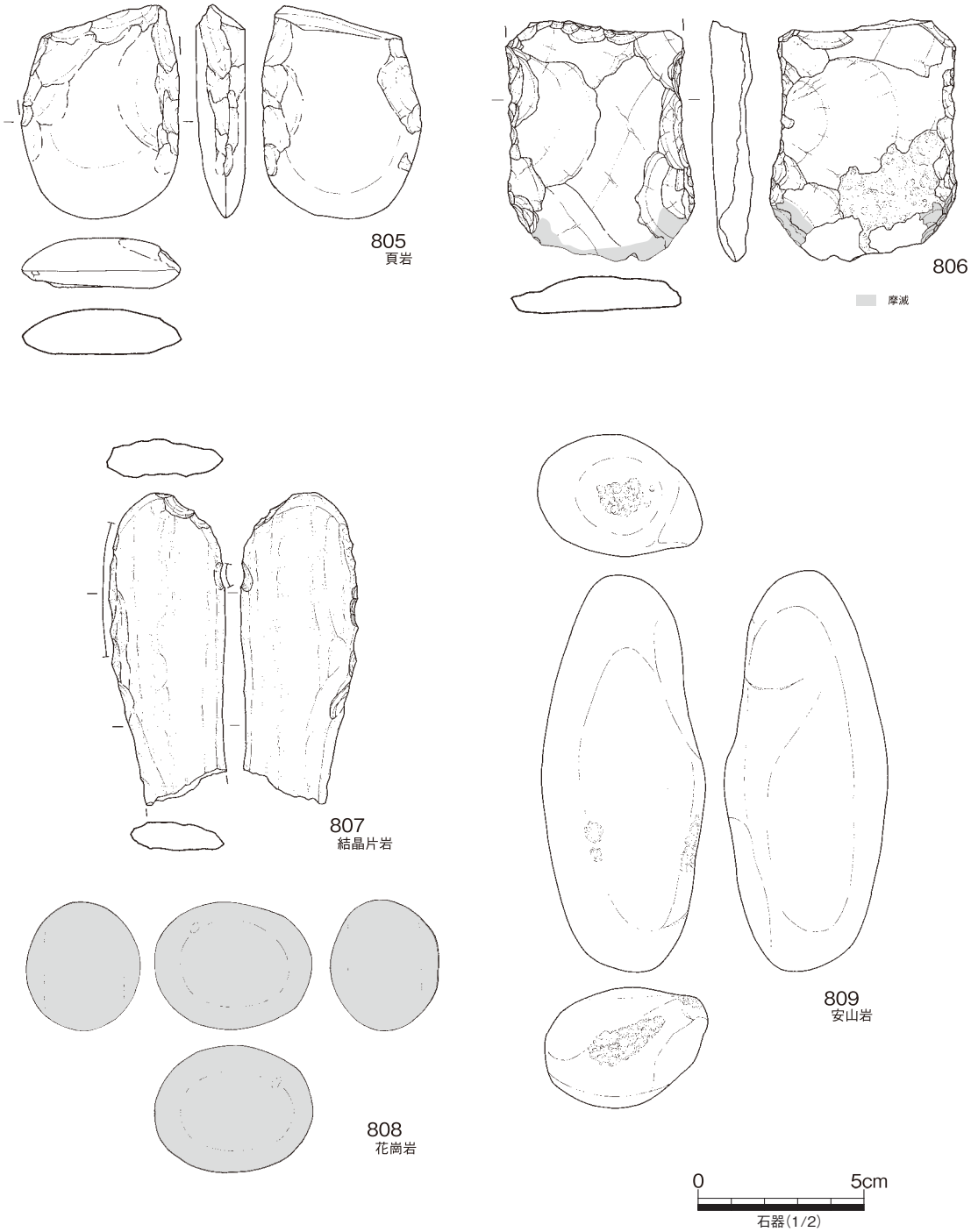
＜4・5 区出土位置・層位不明遺物＞（第 75・76 図）

794 は押型文系深鉢胴部片である。格子目状の楕円押型文を施文する。795 は胴部がくの字に屈曲する浅鉢である。屈曲部から上に横位の条痕波状文を施文する。口縁への外反部までが残る。穂谷式第 1 段階（矢野 2008）に位置づけられる。796 は晩期前半の黒色磨研系浅鉢の口縁部片である。口縁部内面に玉縁状肥厚をもち、内外面を研磨で仕上げる。

797 ～ 800 はサヌカイト製の石鏃である。798 は風化の程度から晩期に所属する。801 はサヌカイト製の楔状石核である。802 は安山岩製の磨石である。被熱のため赤色化する。803 はサヌカイト製の剥片である。側縁に自然面を残す。804 はサヌカイト製のスクレイパーである。周縁を主に片側から加工する。805 は頁岩製の磨製石斧である。側縁に加工痕を残し、刃部は平面的に丸く、若干片刃に磨き上げる。基部側は折損しており、全長は不明である。806 はサヌカイト製の打製石斧である。刃部に磨滅痕がみられる。807 は結晶片岩製の叩石である。主に側縁に敲打痕が残る。808 は全面研磨の花崗岩製磨石である。809 は安山岩製の叩石である。上下の小口部にあばた状の敲打痕が残る。



第 75 図　4・5 区出土位置・層位不明遺物（1）

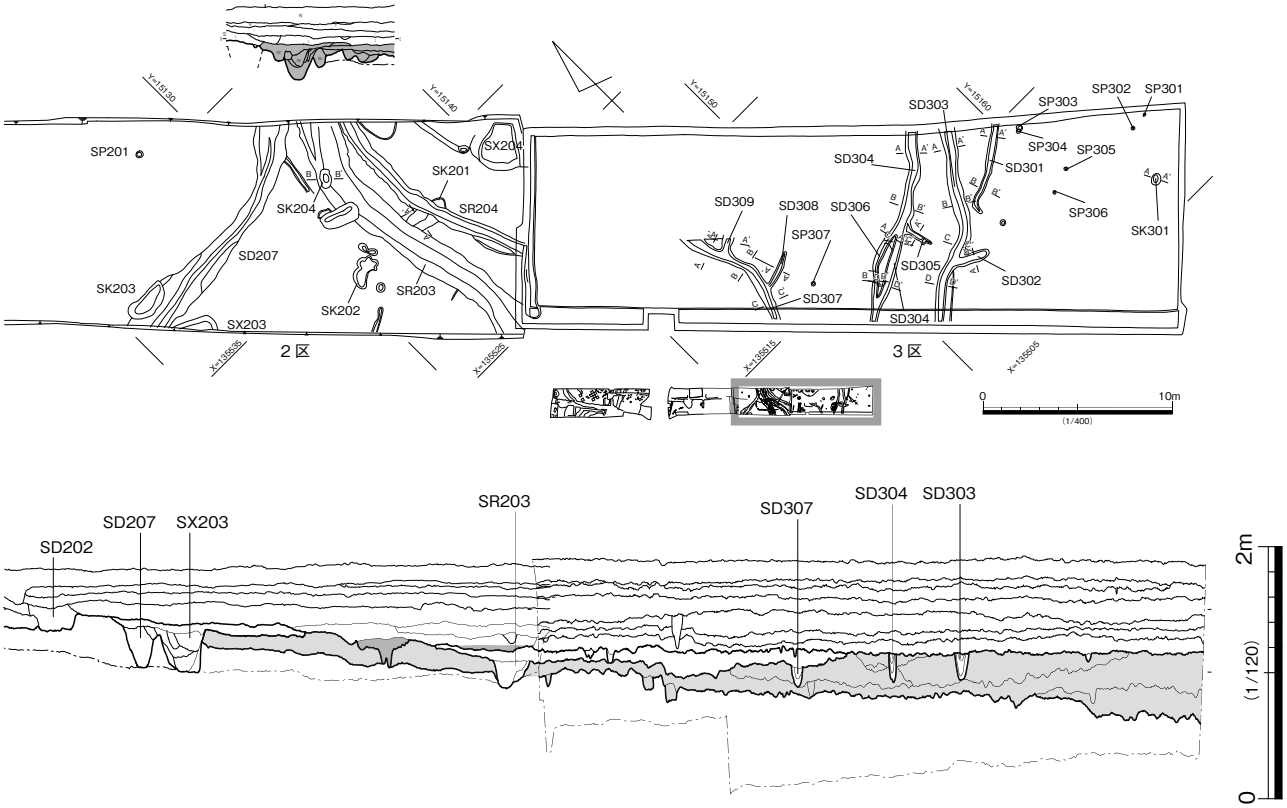


第 76 図　4・5 区出土位置・層位不明遺物（2）

第３節　弥生・古墳時代の遺構・遺物

（１）概要及び報告の方法

２区の東半から３区にかけて、地形は緩やかに東に傾斜する。第２節で記した３区の縄文時代遺構を覆う縄文時代晩期から弥生時代初頭にかけての遺物包含層（第 77 図の薄いトーン）は２区東半の中程付近から始まり、次第に厚味を増し、３区東端では厚さ 0.6 ｍに達する。暗褐色系で粗砂を多く含み穏やかに堆積した土層である。弥生・古墳時代の遺構はこの堆積層を基盤として掘削されている。ただし、２区３区の境付近に真南から真北に向かう幅約 20 ｍの低地帯が形成され、その中央部に自然流路 SR203・SR204 がやや東に蛇行しながら北流しており、その東西両側の微高地に柱穴が、微高地から低地帯への傾斜面に溝が所在する。第 77 図断面では、特に３区側では、低地帯の上端から当該期遺構確認面まで､上部層との層堺が水平である。これは後世に耕作等により上面を削平された痕跡とみられる。この範囲で柱穴８基、土坑５基、不明遺構２基、溝９条、自然流路２条を確認した。なお、柱穴･土坑･不明遺構は出土遺物が少なく、時期不明のものが多い。出土遺物のある遺構を取り上げて報告することとした。

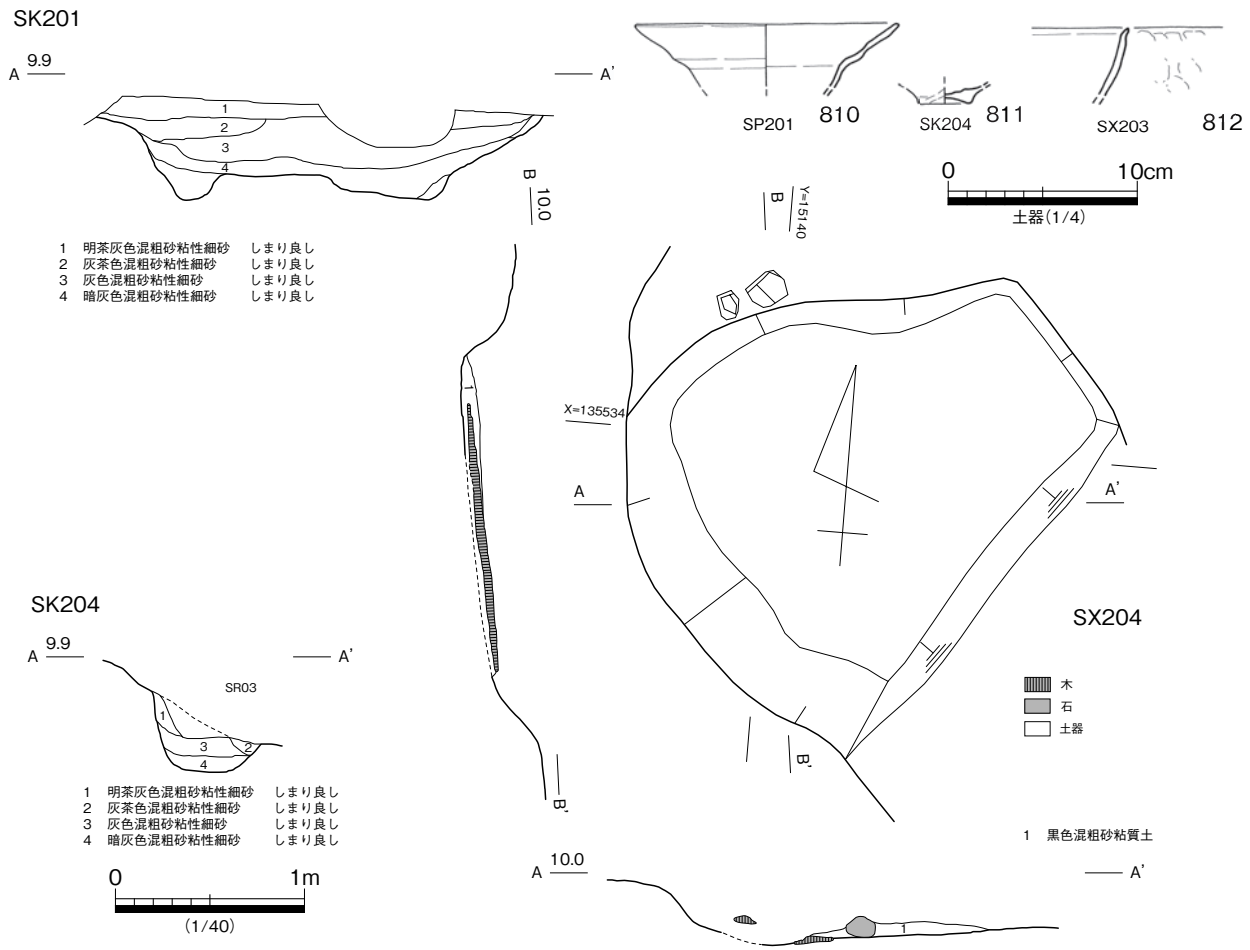


第 77 図　２・３区弥生・古墳時代遺構分布図

（２）柱穴・土坑・不明遺構

SP201・SP301 ～ SP307（第 78 図）

２区側で１基､3 区側で７基の柱穴を確認した。SP307 を除き､微高地上に位置する。配列は不規則で、建物構造は明らかでない。出土遺物もほとんどなく、SP201 で古墳時代土師器が１点出土したにとどまる。



第 78 図　SK201・SK204・SX204 実測図、柱穴・土坑・不明遺構出土遺物

810 は古墳時代の土師器鉢である。口縁部屈曲が弛緩した二重口縁のタイプで器壁が薄い。

SK201 ～ SK204（第 78 図）

自然流路 SR203･SR204 に上面を削られ、流路に直交する方向で配置される不整楕円形土坑群である。最も長い土坑は SK201 で約 2 m。深さは 0.5 mほどのものが多い。暗灰色系の粘性細砂で埋積しており、自然形成の可能性もある。出土遺物はほとんどない。

811 は SK204 で出土した弥生土器の底部片である。上げ底で内面が剥落しており､厚さは不明である。弥生時代後期前半の鉢である。

SX203・SX204（第 78 図）

いずれも自然流路を覆う低地帯縁辺で検出した不定形な落ち込みである。SX203 は SD207 と同時に低地帯堆積土で埋没するが、その堆積以前に SD207 を切り込んで掘削されていることから SD207 より新しい遺構である。812 の土師器鉢が出土した。

一方、SX204 は自然流路 SR204 の東肩付近に広がる低地帯底面の凹凸の一部である。一辺約 2m の不整台形状の落ち込みで、深さ約 0.4 mの底面は平坦に揃う。底部に灰色細砂、その上層に黒褐色粘質

土が堆積する。底面に接して板状加工木が組まれたような状態で出土した。埋土中にはここでは報告していないが弥生時代終末期の土器が含まれていた。

（3）溝

SD207（第 79・80 図）

低地帯を横切るように、その西側縁辺から東方向に流下し、自然流路 SR203 に合流するように掘削された溝である。ただ、北壁の断面観察で SR203 の埋没後に掘削されたことが判明している。幅は 1.4 ～ 2.0 m、深さ 0.35 mで底面は凹凸があり 2 条に分かれる部分もある。下層（8 ～ 10 層）は細砂が目立つ灰褐色系シルトで自然堆積し、再掘削による埋積（7 層）を経て、粗砂混じり土（4・5 層）堆積中に土器が多量に投棄されている。

813 は二重口縁壺である。頸部が強く締まり直立する口縁部外面には凹線状の強いナデを 3 条施す。胴部上端までヘラケズリが及ぶ。814 は頸部胴部境が不明瞭で頸部径が小さい壺である。外面には胴部から頸部まで連続したハケメを施す。815・816 は口縁部が大きく開く形態の壺である。816 は頸部がやや直立し､口縁端部を上方に拡張する。淡橙色を呈す胎土中に結晶片岩片や赤色粒を多く含むことから、阿波地域からの搬入品と考えられる。817 は小形丸底壺である。頸部の締りが弱く、底部にわずかな面を残す。粗いハケメ調整を施す。818 ～ 838 は甕である。このうち、819 は下川津Ｂ類土器と同形態だが胎土中には角閃石ではなく粗い金雲母を含む。826 は二重口縁の吉備系甕である。口縁部に擬口縁 8 条を施し器壁が薄い。胎土は茶褐色で小粒の角閃石を含む。吉備地域からの搬入品と考えられる。838 は口縁部下に×字を施文する幅広い突帯を貼付する。西部瀬戸内系の土器である。839 ～ 846 は鉢である。840・846 は底部が厚く下端が外に踏ん張る形状を呈すが、839、841、845 は丸底化が進行しつつある。847 ～ 855 の底部片も下端稜線が弛緩する。850 は底部から 2cm 上の外面に細棒状モチーフを陰刻する絵画土器である。856 は製塩土器である。外面に斜め方向のタタキが施され、脚部は外下方に踏ん張る形状を呈す。備讃Ⅲ式に位置づけられる。

以上の出土土器は、直立する二重口縁壺、鉢主体の供膳器種組成、丸底傾向のある底部片、吉備系古式土師器の存在などから古墳時代初頭を下限とする資料である。溝は弥生時代後期後半から継続し、再掘削を経て古墳時代初頭に埋没したものと考えられる。

SD301（第 81 図）

3 区南東部で検出した。幅 0.32 m、深さ 0.1 mで北東方向に流下し、灰色系砂質土で埋没する。土器片が少量出土した。

857 は弥生土器甕である。口縁端部の面取りは明瞭である。858 は製塩土器脚台部片である。茶褐色を呈し、脚台の外下方への踏ん張りはあるが、若干の矮小化が認められる。備讃Ⅲ式の範疇で位置づけられる。

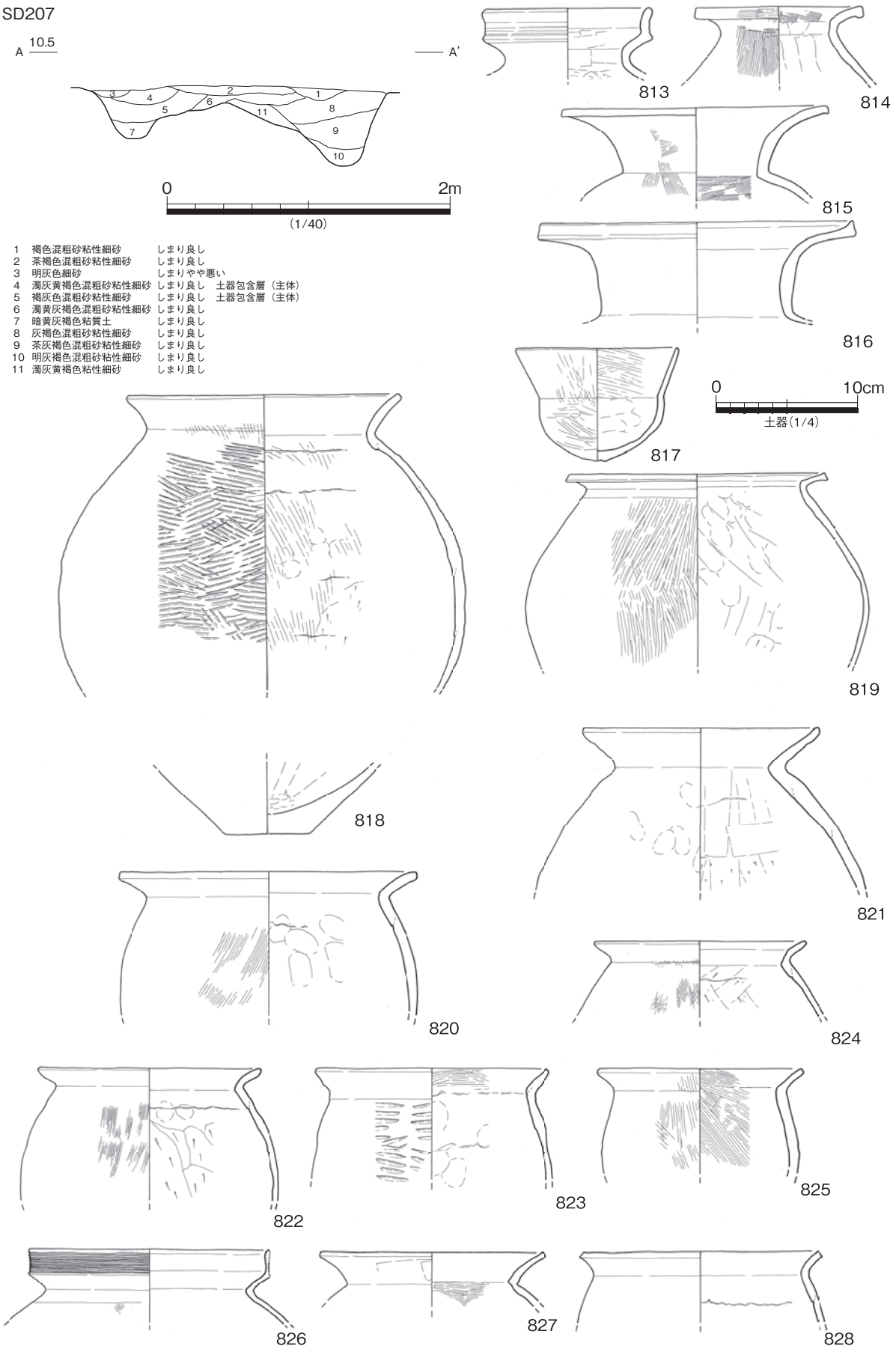
SD303（第 81 図）

3 区で検出した。調査区の西から東に蛇行しながら流下する。途中 SD302 に分岐する。幅 0.67 m、深さ 0.35 mで下層に粗砂ブロックを含む灰褐色系砂質土で埋没する。

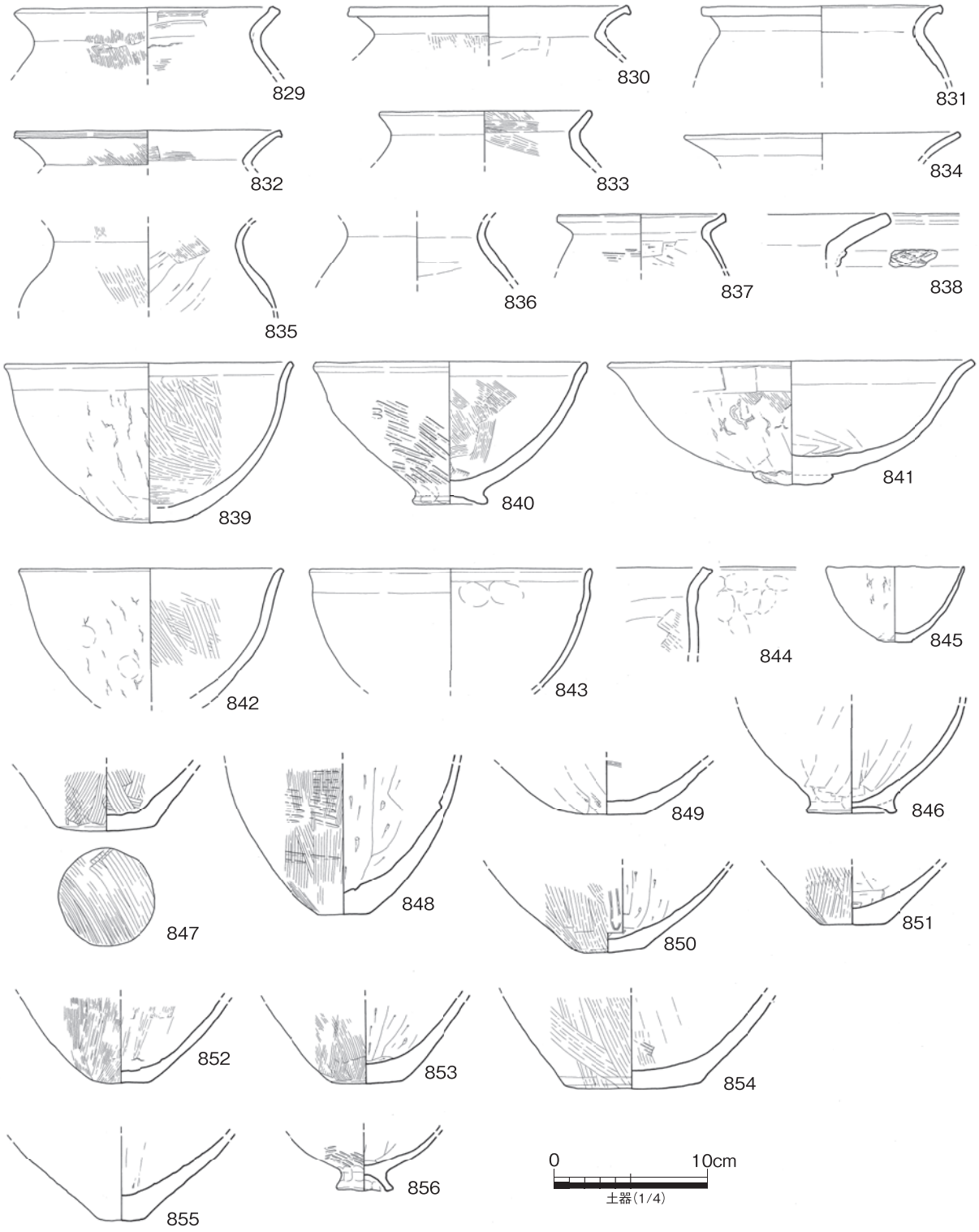
859・860 は壺である。859 は小形丸底の短頸壺で肩が張る胴部から口縁部が短く屈曲するタイプで、

SD207

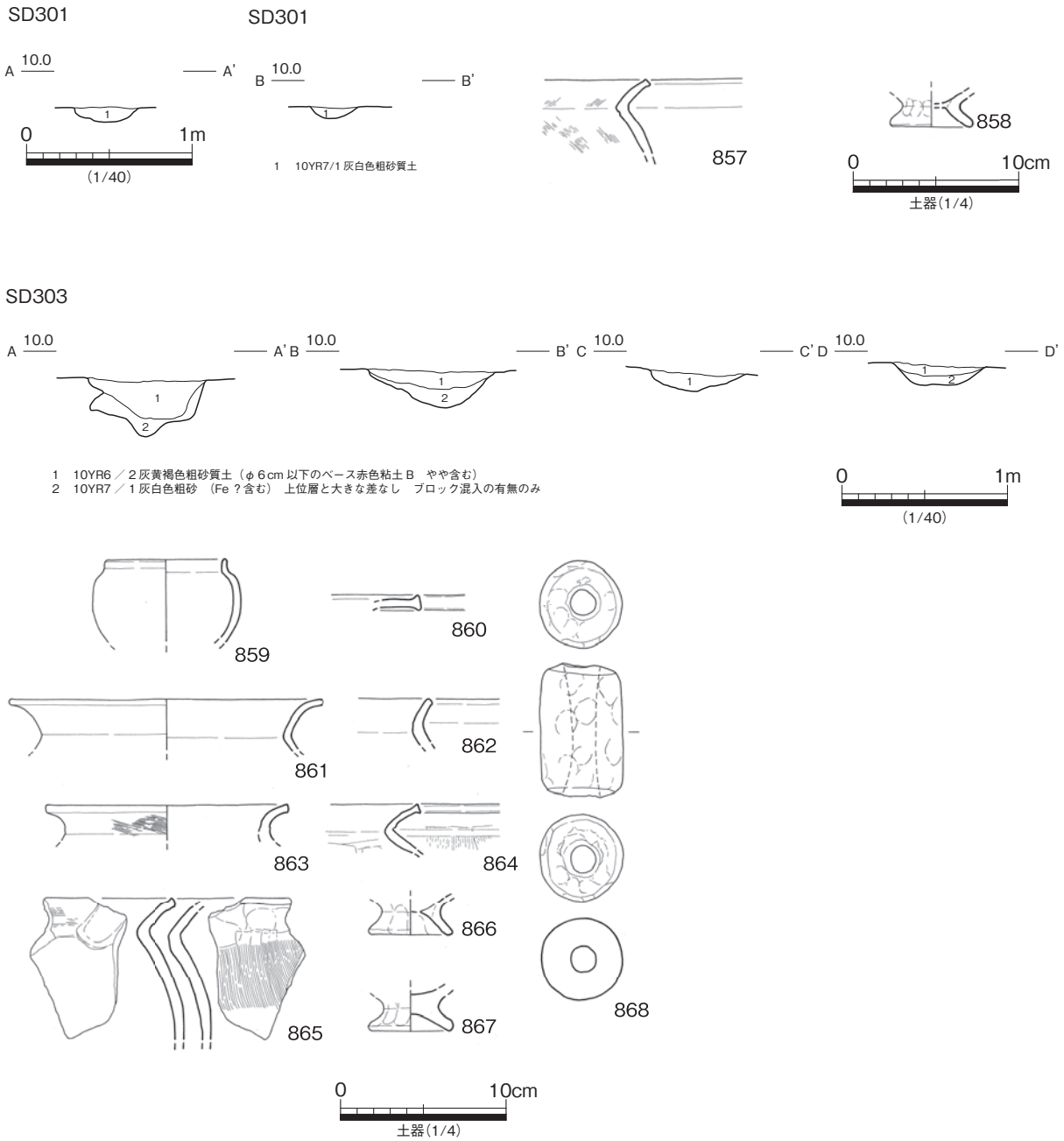
1　褐色混粗砂粘性細砂　しまり良し
2　茶褐色混粗砂粘性細砂　しまり良し
3　明灰色細砂　しまりやや悪い
4　濁灰黄褐色混粗砂粘性細砂　しまり良し　土器包含層（主体）
5　褐灰色混粗砂粘性細砂　しまり良し　土器包含層（主体）
6　濁黄灰褐色混粗砂粘性細砂　しまり良し
7　暗黄灰褐色粘質土　しまり良し
8　灰褐色混粗砂粘性細砂　しまり良し
9　茶灰褐色混粗砂粘性細砂　しまり良し
10　明灰褐色混粗砂粘性細砂　しまり良し
11　濁灰黄褐色粘性細砂　しまり良し



第 79 図　SD207 実測図、出土遺物（1）



第 80 図　SD207 出土遺物（2）



第 81 図　SD301・303 実測図、出土遺物

器壁が薄い。860 は広口壺口縁部片である。端部を上下に拡張する。861 ～ 864 は甕である。865 は片口鉢。866・867 は製塩土器脚台部片である。裾を外下方へ踏ん張る形態で備讃Ⅲ式である。868 は土師質の大形管状土錘である。上下に面を持ち側面は直線的で、胎土は茶褐色を呈し粗い砂粒を含む。長さ 8.1cm、重量は 247.8 g と大形で、孔径２乗値も 2.25 と瀬戸内海の児島地域に多い管状土錘Ｃ型に相当する（乗松 2009）。

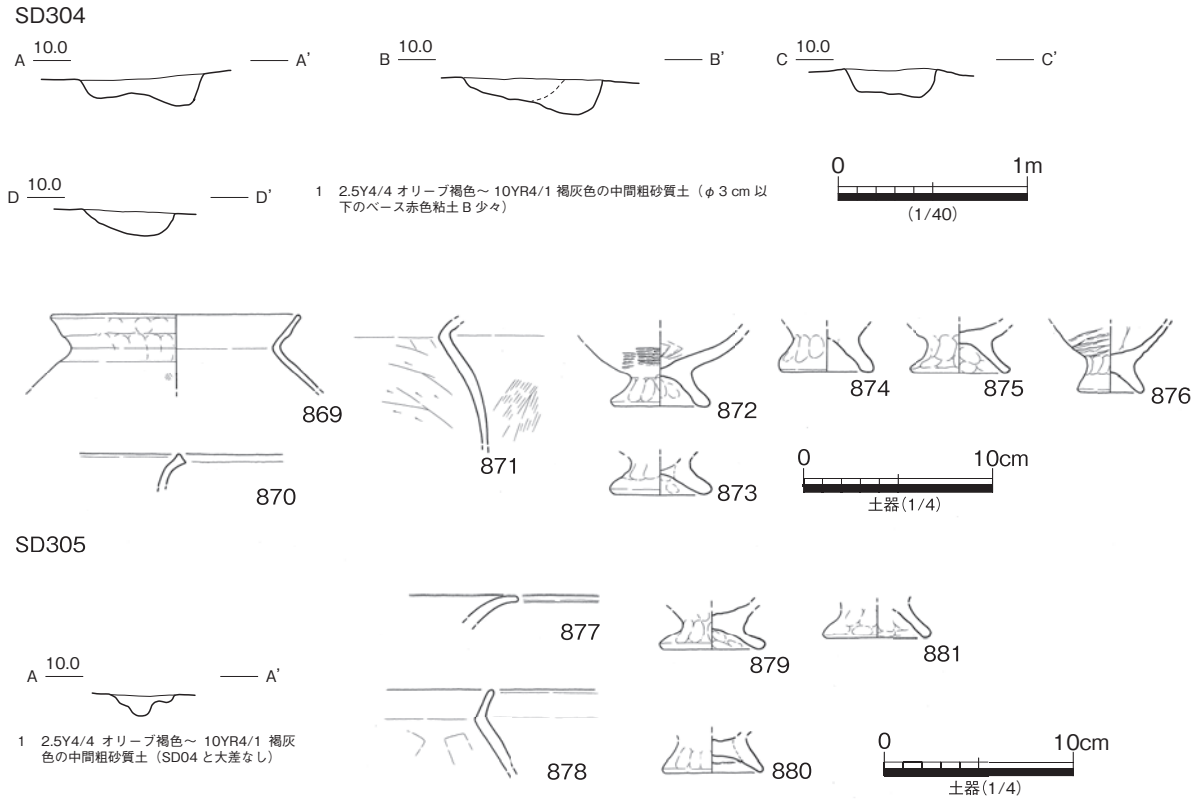
以上の出土土器は弥生時代後期後半から終末期に位置づけられる。

SD304・SD305（第 82 図）

3 区で検出した。SD304 は、調査区の西から東に蛇行しながら流下する。途中 SD305 に分岐する。幅 0.7 m、深さ 0.15 m で灰褐色系粗砂質土で埋没する。SD304 とほぼ同じ軌跡をもつ。製塩土器が多く出土している点が注目される。SD305 は幅 0.32 m と小規模で、南方に派生し延長 1.3 m で消失する。この SD305 分岐点付近で製塩土器がまとまって出土している。

869 ～ 871 は甕である。869 は器壁が極端に薄く、口縁部中位に僅かな屈曲があり、端部は内面に僅かに肥厚する。内面はヘラケズリの痕跡が僅かに残る。残存状態は悪いが、古式土師器の範疇に含まれる個体である。872 ～ 876 は製塩土器の脚台部片である。872 ～ 875 は外下方への踏ん張りが強く、876 は脚台の矮小化が認められる。なお 872 は体部に横方向の連続タタキ、内面に放射状に調整原体圧痕線が残り、胴部下半が丸くなる形態と推測される。備讃Ⅲ式からⅣ式古相に位置づけられる。

877 ～ 880 は SD305 で出土した土器である。877・878 は甕口縁部片、879 ～ 880 は製塩土器脚台部片である。いずれも SD304 出土資料と齟齬はなく、同時に埋没したものと考えられる。

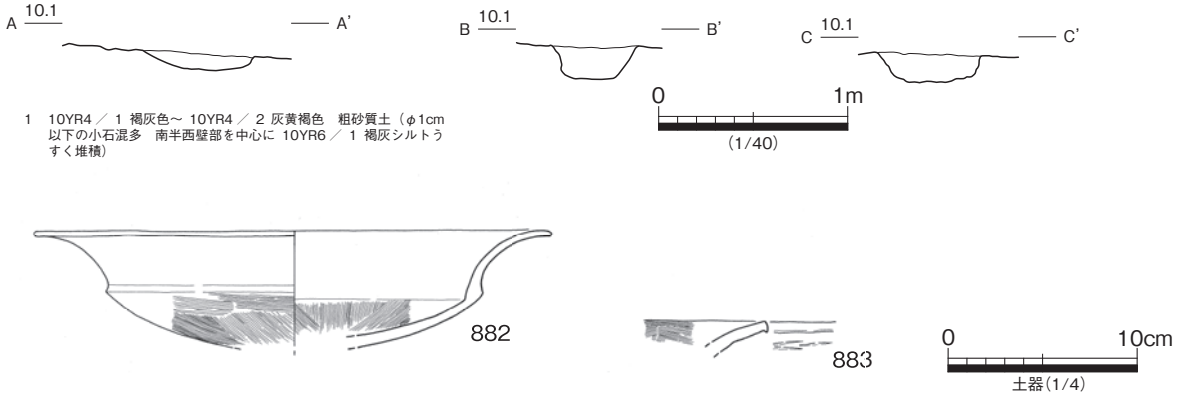


第 82 図　SD304・305 実測図、出土遺物

SD307（第 83 図）

3 区北側で低地帯の東肩に沿うように掘削された溝である。途中 SD308・SD309 が東方に分岐する。調査区南壁断面では、溝の埋没後に低地帯堆積層に覆われることがわかる。幅 0.55 m、深さ 0.16 m で礫混じりの粗砂質土で埋没する。

882 は高杯杯部片である。口縁部の開きが大きく端部の肥厚は見られない。883 は甕口縁部小片である。端部を面取りし、外面に胴部から続くとみられるタタキが残る。弥生時代後期後半に位置づけられる。



第 83 図　SD307 実測図、出土遺物

（4）河川跡

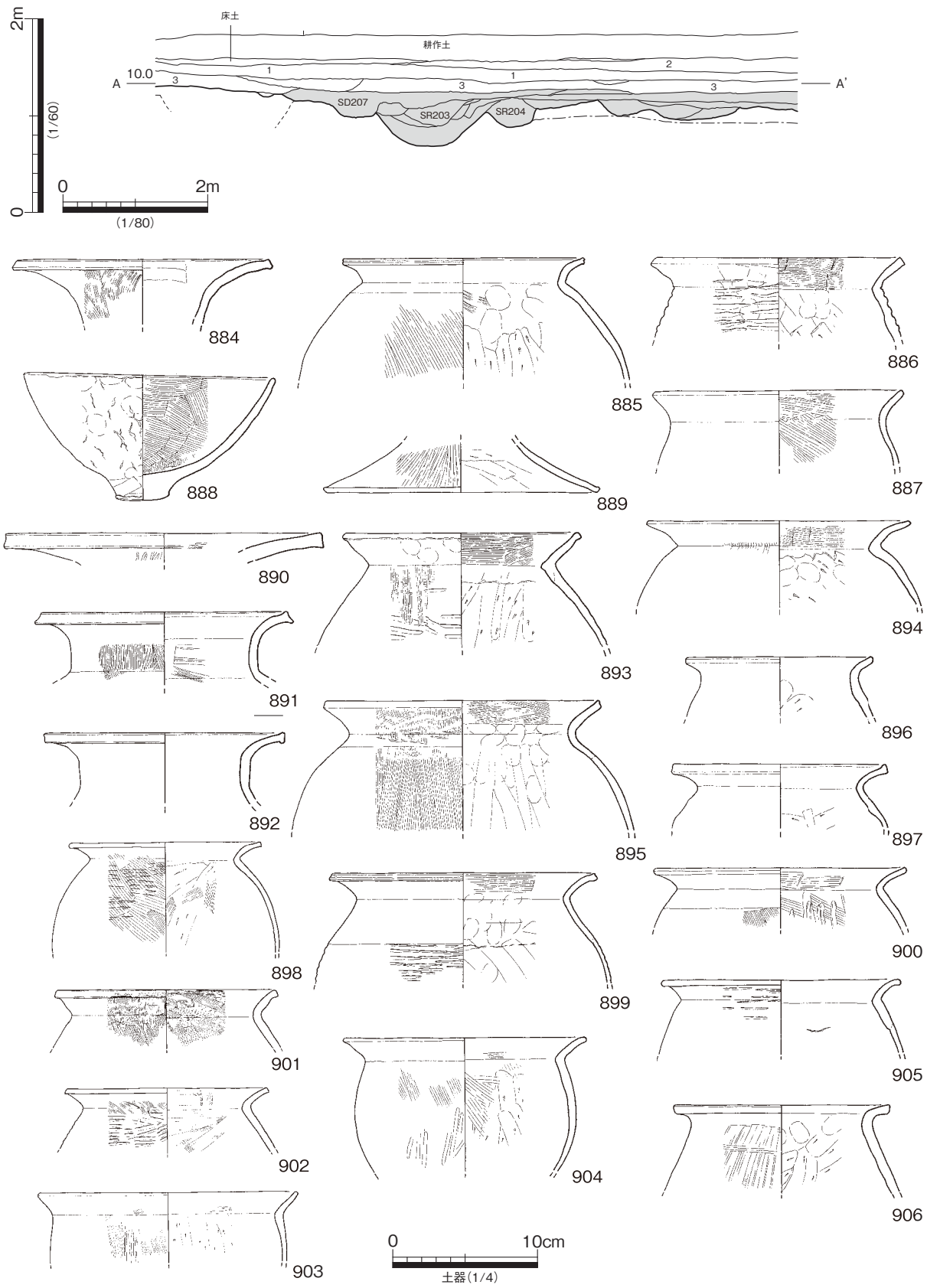
SR203・SR204（第 84・85 図）

SR203 は 2 区南側低地帯中央を背骨状に南から北に流下する自然流路である。幅 2.1 m、深さ 0.8 m で断面はU字形を呈す。断面観察から、東に隣接して流下する SR204 の埋没後に流れが生じたことがわかる。下層に灰白色粗砂層が 0.3 m堆積し、その後暗黄色系シルト質土が粗砂ラミナを介しながら堆積する。この層に出土遺物の大半が含まれる。調査区北半に遺物が集中する。流路底面で検出した SK204 の位置よりやや北側に遺物集中区があり 884 ～ 889 の土器が出土した。また北壁土層の観察から、当該流路埋没後に東から流下して合流するようにみえる SD207 が掘削されている。なお、SR204 は実測可能な出土遺物が出土しなかった。

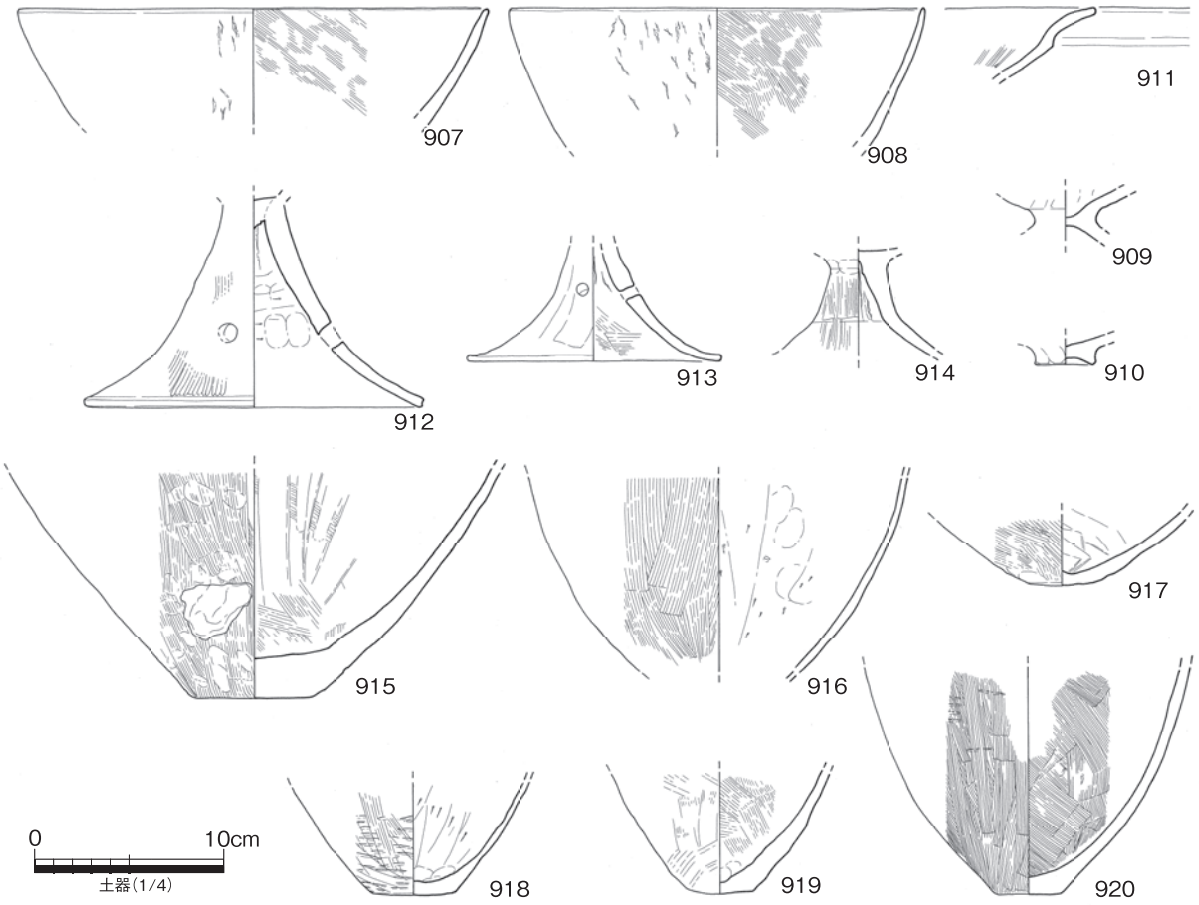
884 は口縁部が大きく開く広口壺口縁部片である。端部を下方に若干拡張する。885 ～ 887 は甕である。いずれも口縁部の面取りは丁寧に施される。888 は厚く突出した平底をもつ直口鉢である。889 は器壁が薄く脚端が大きく開く高杯脚部片である。以上の土器が SK204 北側の遺物集中区でまとまって出土した。

890 ～ 892 は壺である。890 は口縁部が大きく開く広口壺、891 は頸部が直立し口縁部が短く外反する広口壺、892 は胴頸部の屈曲が弱く外面調整が胴部から頸部まで継続するタイプの壺である。893 ～ 906 は甕である。口縁部は面取りを行うものと丸く収めるものがある。胴部境はくの字に屈曲するものと緩やかにカーブを描いて反転するものがある。899 は胴部上半中程まで横位のタタキを施し、そこから上がやや内傾する器形を呈す。907 ～ 910 は鉢である。909・910 は低脚台が付く鉢で製塩土器ではない。911 ～ 914 は高杯である。914 は脚部中程で弱い屈曲を経て脚端が開く形状を呈す。915 ～ 920 は胴部から底部にかけての破片である。915 は外面に焼成破裂痕様の剥離が残る。917・919 は底縁稜線が弛緩し、丸底化の傾向がみられる。

以上の出土土器は弥生時代後期後半新相に所属する。



第 84 図　SR203・SR204 実測図、出土遺物（1）



第 85 図　SR203 出土遺物（2）

第 4 節　古代・中世の遺構・遺物

（1）概要

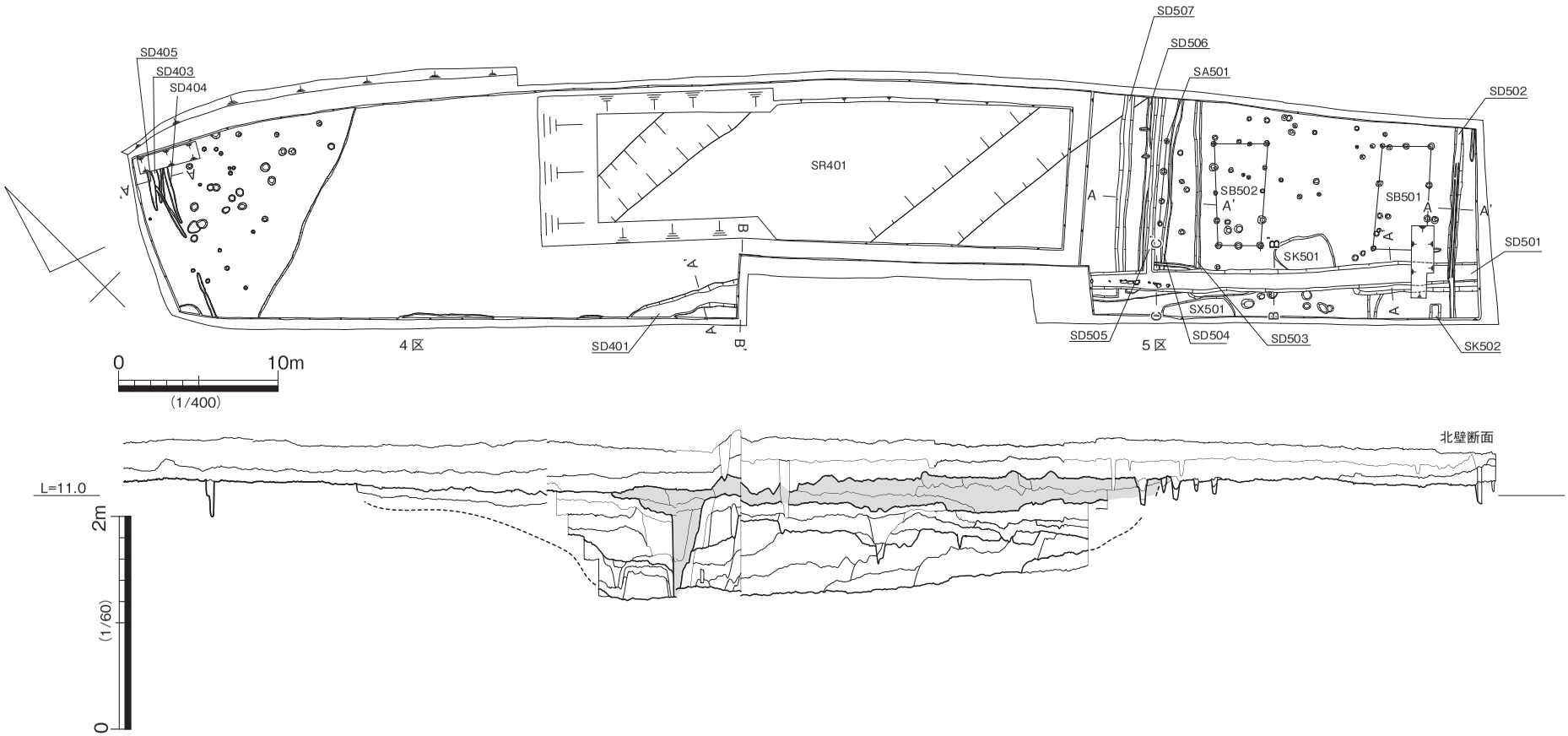
古代は 2 区に浅い低地帯 SR201・202 に 9 世紀頃の土器が少量、4･5 区にまたがって西から東に流下する自然流路 SR401 に 10 世紀頃の遺物の出土をみるが、ほかにまとまった遺構は所在しない。中世から近世にかけて、4･5 区では SR401 埋没後の低地帯の南北に柱穴・土坑・溝が分布し、主に低地帯南側で建物遺構を検出した。そのほか、近世の木樋を埋めた暗渠水路も検出している。1 区では土坑墓 1 基、井戸 1 基、溝 4 条を検出した。2 区では溝 2 条を検出した。以下、遺構種別ごとに報告する。

（2）建物跡

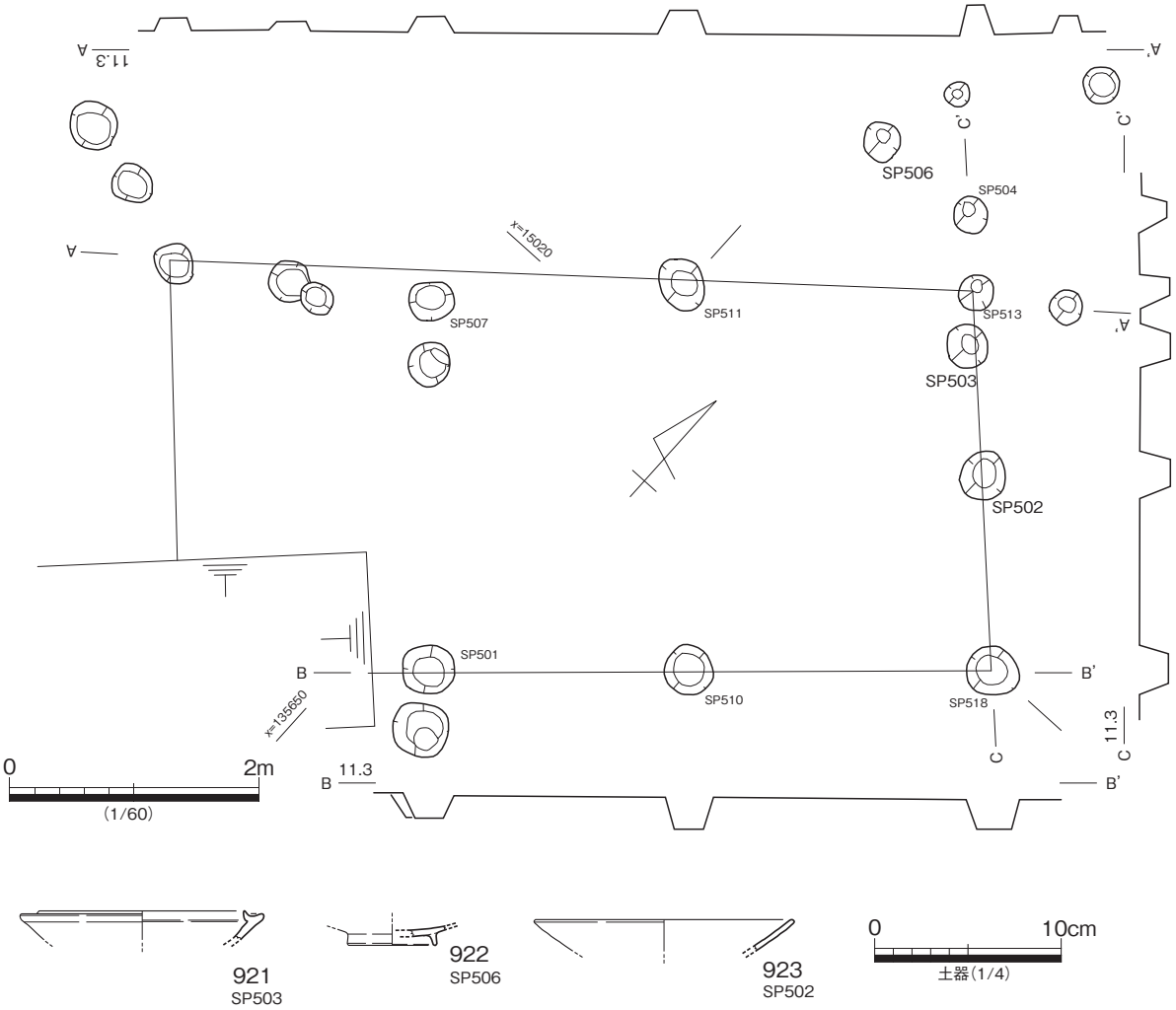
SB501（第 87 図）

5 区南側で検出した掘立柱建物である。梁間 2 間（3.1 m）、桁行 3 間（6.6 m）で主軸方位はN 50°Eを示す。柱穴の大きさは直径 0.35 ～ 0.4m で、深さは深いものでも 0.25 mを超えるものはなく、上面の削平を被る。柱痕が遺存したものでは直径 0.18 mの太さを確認した。柱穴埋土中から少量の土器片が出土した。

921 は 7 世紀中葉の須恵器坏身片である。混在品とみられる。922 は土師器椀の高台部片である。高台径 4.6cm と小形で、高台も矮小化した形態である。923 は土師器皿である。橙色を呈し焼成は硬く、



第 86 図　4・5 区古代・中世遺構分布図



第 87 図　SB501 実測図、出土遺物

15 世紀頃のものであろう。

SB502（第 88 図）

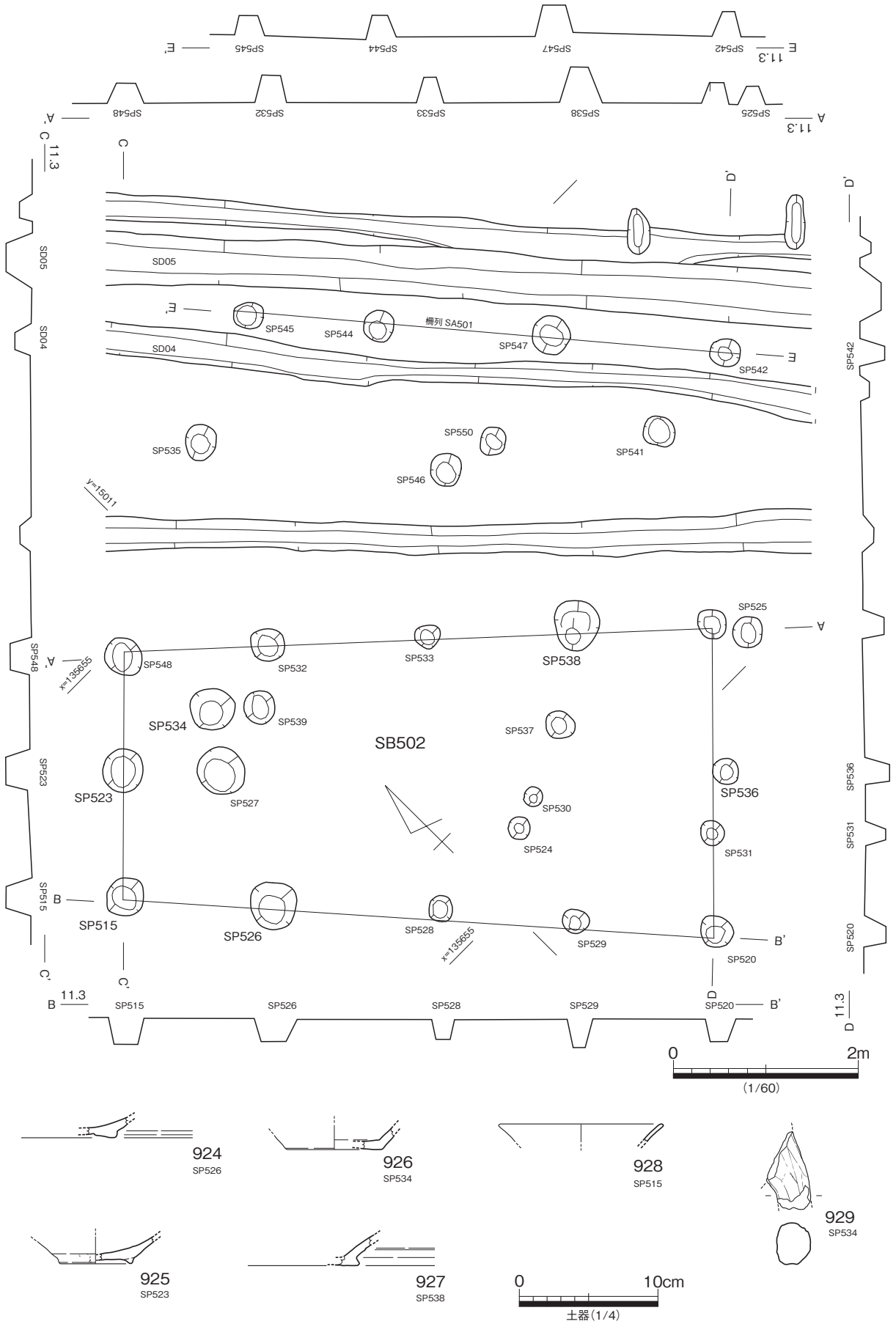
5 区北側で検出した掘立柱建物である。梁間 2 間（3.3 m）、桁行 3 間（6.6 m）で主軸方位はN 50°Eを示す。SB501 と同じ方位で並列する。柱穴の大きさは直径 0.35 ～ 0.5m で、深さは深いものでも 0.3 mを超えるものはなく、上面の削平を被る。柱痕が遺存したものでは直径 0.18 mの太さを確認した。柱穴埋土中から少量の土器片が出土した。

924 は緑釉陶器の椀底部片である。釉は全面が剥離するが形状から判断した。925 は黒色土器底部片である。926 は須恵器坏底部片である。927 は土師器坏である。928 は土師器皿口縁部片である。929 は土師器足釜脚部片である。

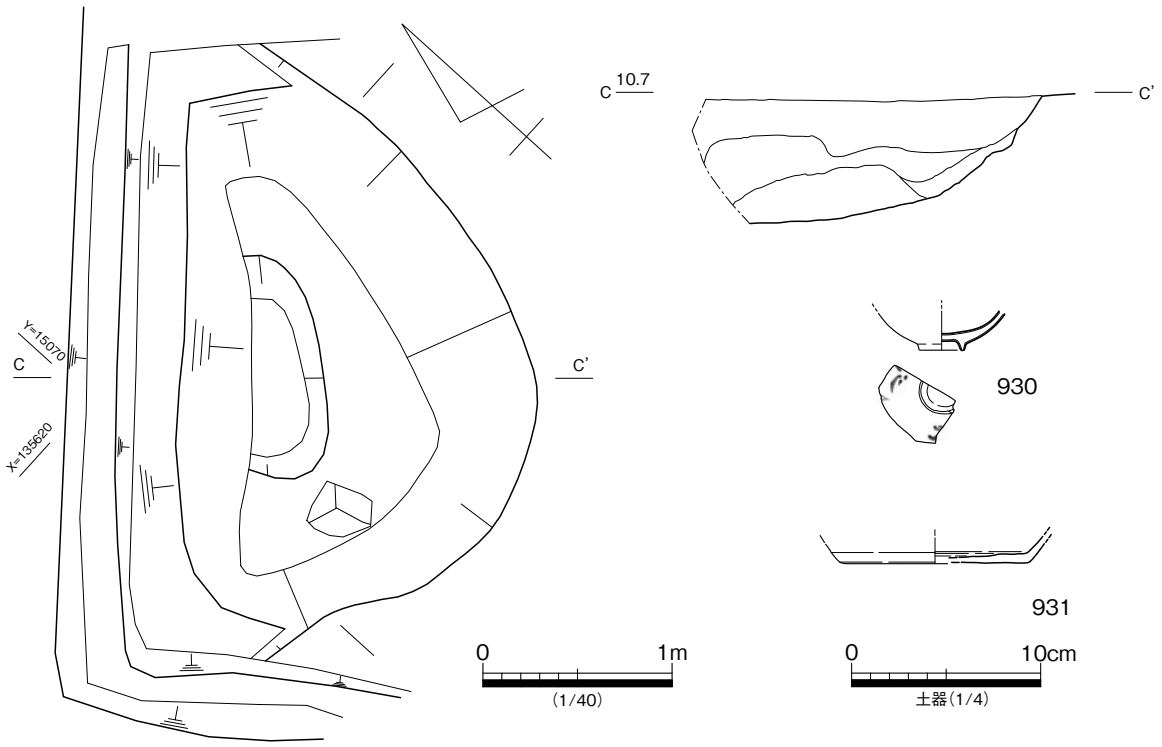
（2）井戸

SE101（第 89 図）

1 区北端で検出した井戸である。直径約 3 m、深さは 0.65 mで断面は緩やかなU字形である。埋土中



第 88 図　SB502 実測図、出土遺物



第 89 図　SE101 実測図、出土遺物

より若干の遺物が出土した。930 は埋土中位で出土した磁器染付小坏である。外面に草花文を施文する。931 は須恵器坏である。瓦質焼成で底面付近に火襷が残る。18 世紀前半の遺構である。

（3）土坑

SK501（第 90 図）

5 区南側で検出した土坑である。長径 3.7 mの不整楕円形で、深さは 0.2 mが残り、褐色系砂質土で埋没する。埋没後、南側を SD401 の掘開で削られる。埋土中より少量の土器片が出土した。

932 は黒色土器Ａ類の椀口縁部片である。端部が短く折れ、内面に沈線が巡る。933 は黒色土器Ｂ類の椀高台部片である。934 は土師器坏底部片である。黒色土器の年代から 12 世紀ごろの遺構と考える。

SK502（第 90 図）

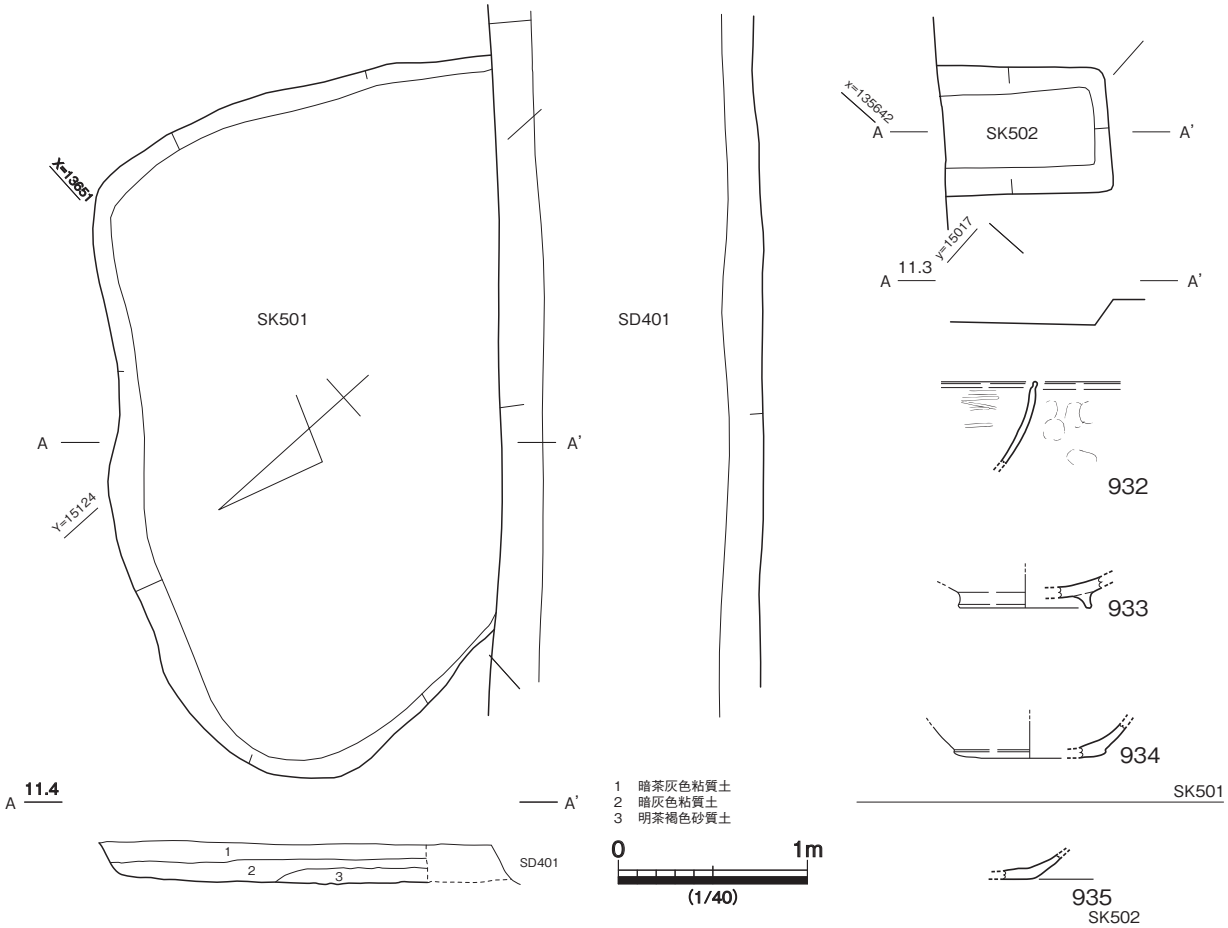
5 区南側で検出した長方形土坑である。南側は調査区外に延びる。長さ 0.9 m以上、幅 0.7 mで箱型に掘削される。深さは 0.15 mである。埋土中から土器片 1 点が出土した。

935 は土師器皿底部片である。内外面に丹塗りを施す。底部稜線が明瞭で､9 ～ 10 世紀の所産である。ただ、当該遺構の時期を示すかどうか、明らかでない。

（4）土坑墓

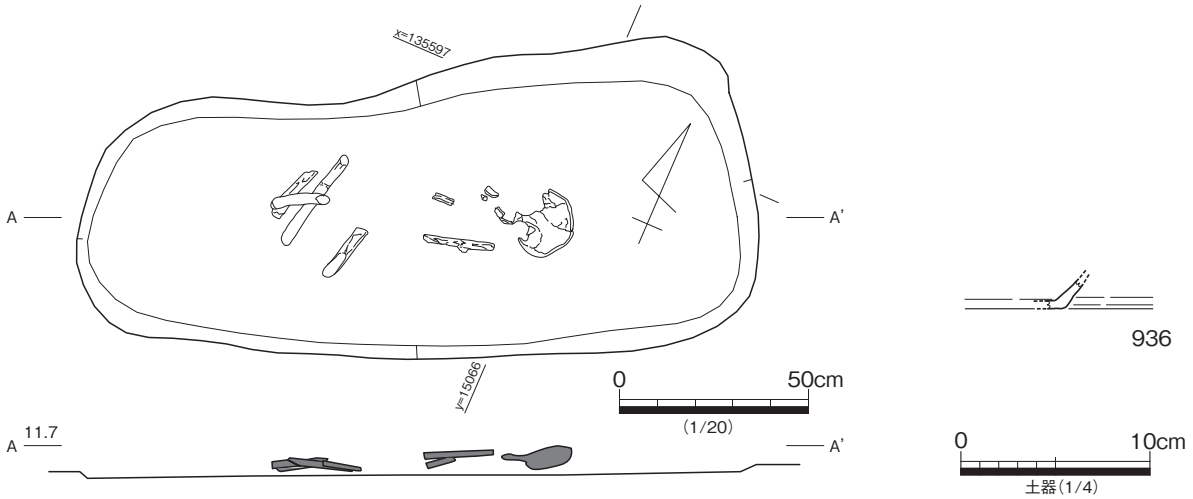
ST101（第 91 図）

1 区北端で検出した土坑墓である。長さ 1.84 m、幅 0.8 mで東が若干幅広の楕円形掘り方をもつ。深さは 0.05 m以下と浅く、底面にほぼ接して掘り方中央部から人の頭蓋骨及び手足骨が出土した。頭蓋



第 90 図　SK501・SK502 実測図、出土遺物

骨が東側で横位におかれ、正面は東を向く。そのすぐ西に手骨が、さらに西に足骨が折り重なるように出土した。出土位置に乱れはなく、足を折り曲げて埋葬したものと思われる。性別や年齢等は不明である。936 は埋土中から出土した 13 世紀頃の十瓶山産須恵器坏底部片である。この遺構の上限時期を示す。



第 91 図　ST101 実測図、出土遺物

（5）溝

SD101（第 92 図）

1 区の調査区中央部を、等高線に沿って縦断するように流下する地境の溝である。南肩には大形の角礫を配した石列が残る。石列前面から計測した溝幅は 0.7 m、深さは 0.5 mである。石列の背後には奥行約 1 m分を控え掘りし裏込め土を充填する。井戸 SE101 の埋没後に掘削されている。また当該溝の埋没後には同じ位置に現代用水路が設置されている。埋土中から中世から近世にかけての遺物が出土した。

937 は備前系陶器壺口縁部片である。口縁部の立ち上がりが短く端部が若干玉縁状となる。備前Ⅲ期（13 ～ 14 世紀）の所産である（間壁・間壁 1966）。938 は磁器染付碗底部片である。内面見込みは蛇目釉剥ぎし、砂目が若干残る。高台部外面に 3 条線を染付する。939 は磁器染付皿口縁部片である。口縁内面に草木文を施文する。940 は京焼風陶器の瓶底部片である。底面に墨書が残る。キヘンの一文字を記す。941 は土師器小皿底部片である。底面にヘラ切痕がある。942 は陶器小皿片である。内面光沢釉、底面糸切痕を残す。幕末ごろの所産であろう。943 ～ 945 は土師器足釜口縁部片である。946 は弥生時代後期ごろの製塩土器片である。947 は古墳時代の須恵器甕口縁部片である。外面にヘラ記号が認められる。948・949 は丸瓦片である。側縁内面側に幅広いケズリ調整が施される。内面には鉄線切の痕跡は観察できない。950 は凝灰岩製の石臼である。風化が進み、磨目がほとんど遺存しない。951 は銅銭（洪武通寶）である。952 は器種不明の肉厚の鉄器である。

以上の出土遺物から、SD101 は近世幕末期までに埋没した用水路と考えられる。

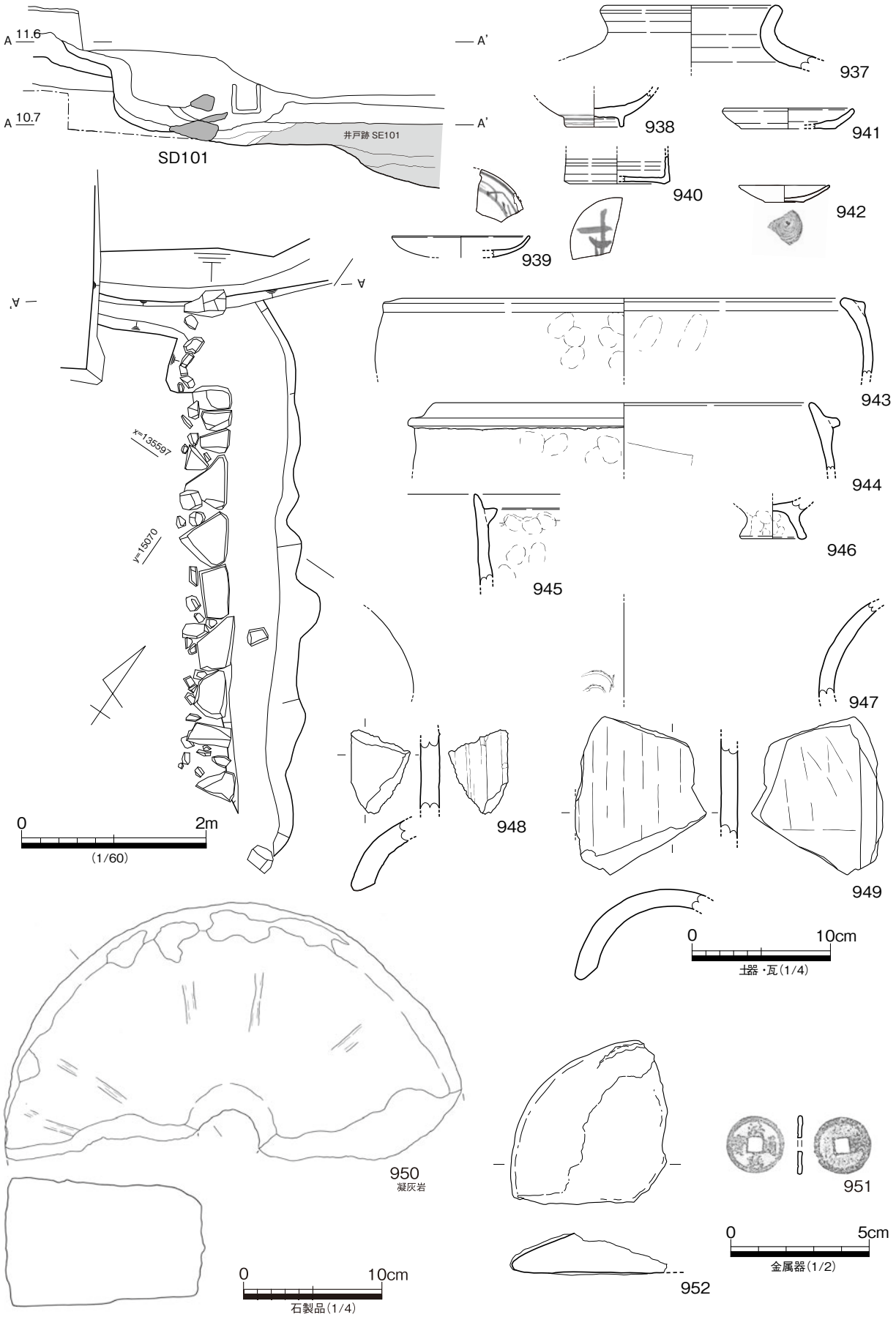
SD102（第 93 図）

1 区 SD101 と一部重複しつつ、その下位や側面にずれながら掘り方を残し、調査区を縦断する形で走行する溝である。調査区西側では緩やかにカーブして調査区外の北側に流下する。調査区東側では SD103・SD104 と合流し、合流部分では調査区の南に所在するため池堤防の基礎部分と推定される礫土で埋められる。埋土は下層に流水を示す褐色系粗砂混土が 0.14 m堆積する。その中層には灰色系粘質土が堆積し穏やかな埋没過程を示し、さらに上層を粗砂ブロック混土が覆う。上層は埋め戻した可能性が高い。

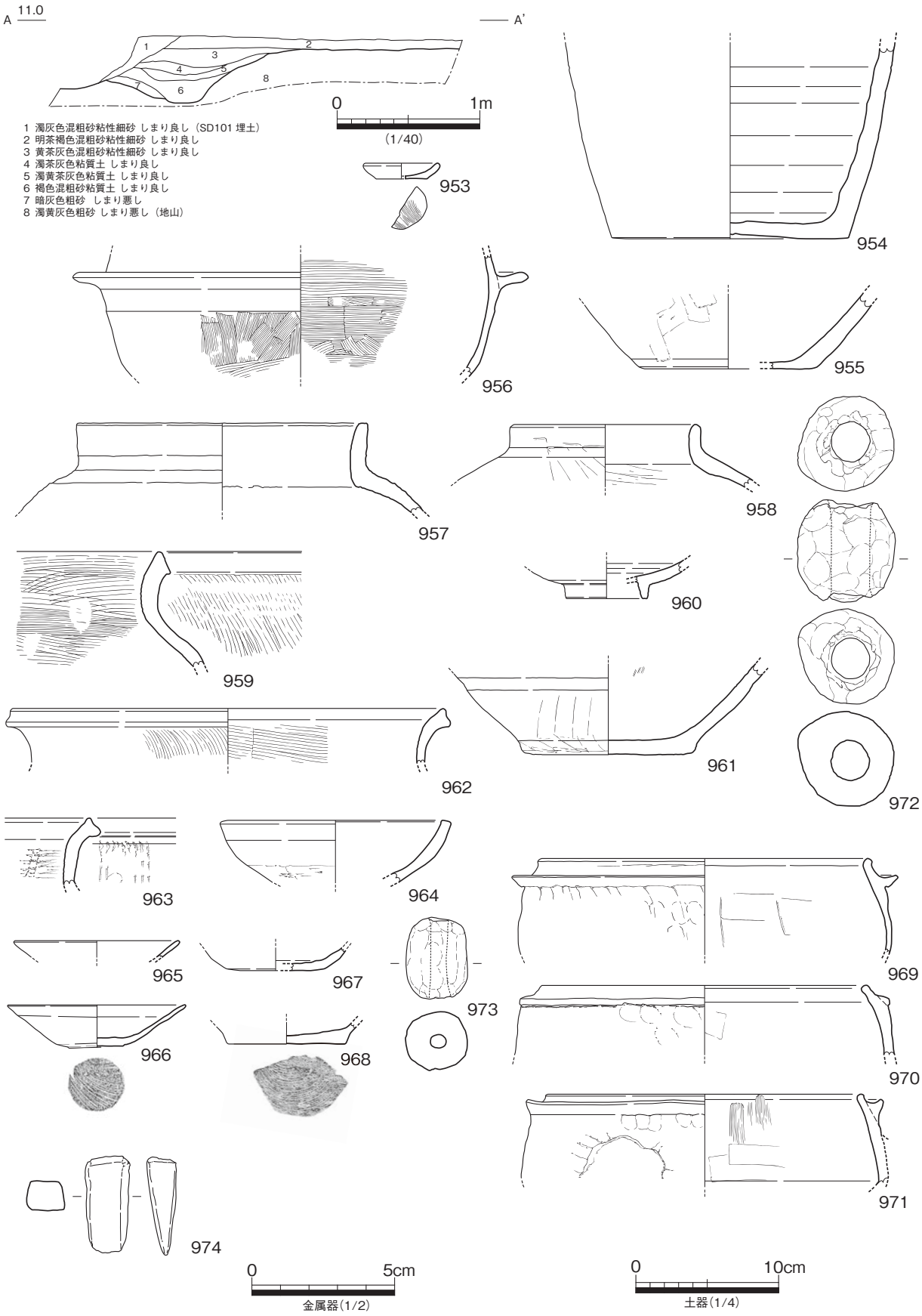
953 ～ 959・972 は下層で出土した遺物である。954 は備前系陶器壺胴～底部片、955 は須恵器こね鉢底部片である。956 は瓦質土器羽釜、957・958 は土師質土器壺で口縁部が短く立ち上がる形状。959 は土師質土器甕口縁部片である。972 は土師質の漁網錘で大形管状土錘である。長さ 6.2cm、重量は 296.3 ｇと大形で孔径 2 乗値は 6.76 となる。

960 ～ 974 は中層・上層出土の遺物である。960 は肥前系陶器の刷毛目塗鉢である。内面に施釉と刷毛目塗、外面は釉剥ぎ。961 は土師質土器の擂鉢である。962・963 は瓦質土器甕、964 は土師質土器鉢である。965 ～ 968 は土師質土器坏･皿類で、底面に糸切痕を残す。969 ～ 971 は土師質土器足釜である。973 は土師質の漁網錘で管状土錘である。長さ 5.7cm、重量は 88.7 ｇ、孔径 2 乗値は 1.69 となる。974 は鉄器の楔である。

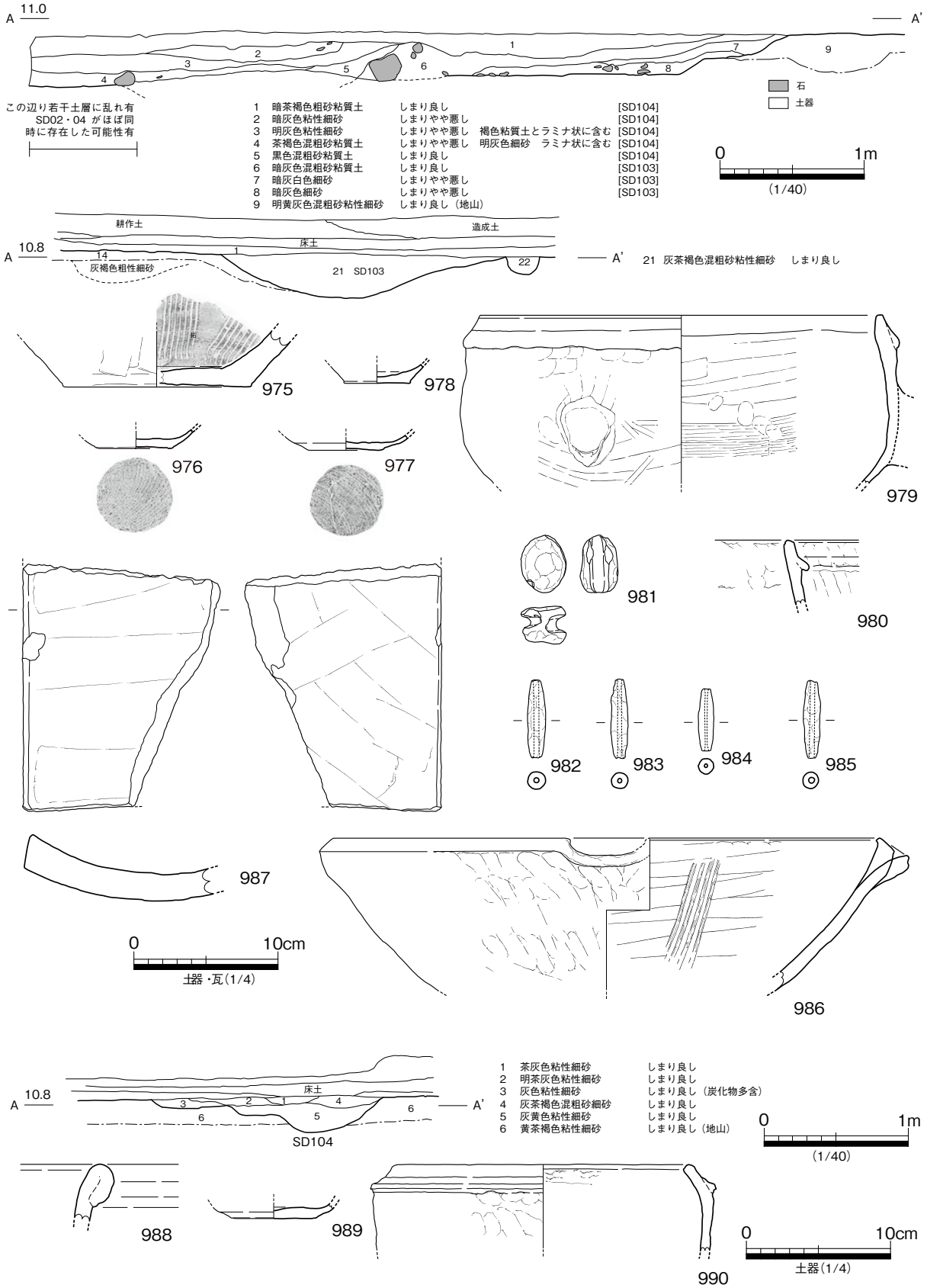
以上の出土土器から、当該溝の埋没時期は 16 世紀後半ごろと考える。



第 92 図　SD101 実測図、出土遺物



第 93 図　SD102 実測図、出土遺物



第 94 図　SD103・SD104 実測図、出土遺物

SD103・SD104（第 94 図）

1 区中央部を横断するように 2 条併走する溝である。SD104 が北側、SD103 が南側で、両溝は最大 2 mの間隔をもち、SD102 と交わる部分では両溝が重複する。断面では SD103 が先行し、埋没後に SD104 が開削されたことがわかる。いずれも灰色系砂質土で埋没しており、細砂のラミナ層が介在することから、継続的な水流があったものと推測する。両溝とも SD102 との交差部近辺では直径 20 ～ 30cm の礫が多数出土する。SD102 交差部より南側は大形礫が集中し、溜池状遺構 SG101 として別に報告しているが、SD102 を含めて両溝とも SG101 と関係をもつものと考える。

SD103 は幅 3.0 m以上、深さ 0.3m で断面は浅い皿状を呈する。SD104 は幅 2.4m 以上、深さ 0.3 mで断面は浅い皿状を呈する。

975 ～ 986 は SD103 出土の遺物である。975 は備前系陶器擂鉢底部、976･977 は土師質土器坏である。坏底部には糸切痕が残る。978 は土師質土器皿、979・980 は土師質土器足釜、981 ～ 985 は土師質の土錘である。そのうち 981 は側面に溝をもつ有溝土錘、982 ～ 985 は管状土錘である。細型管状Ａ型である（乗松 2009）。長さ 4.4 ～ 5.5cm、重量は 4.6 ～ 7.9 ｇ、孔径２乗値はいずれ 0.09 となる。986 は土師質土器擂鉢で、口縁部は片口となる。987 は平瓦片である。

988 ～ 990 は SD104 出土遺物である。988 は備前系陶器壺の玉縁状口縁部片である。989 は土師質土器の坏、990 は土師質土器足釜である。

以上の出土遺物から SD103、SD104 は 15 世紀ごろに埋没したものと考える。

SD201・SD202（第 95 図）

2 区中央部を南から北に走行する重複する 2 条の溝である。SD201 は幅 5.0 m、深さ 0.3 mで浅く幅広い。SD202 は幅約 1.8 mで深さ 0.15 mをはかる。いずれも皿状の断面を呈す。

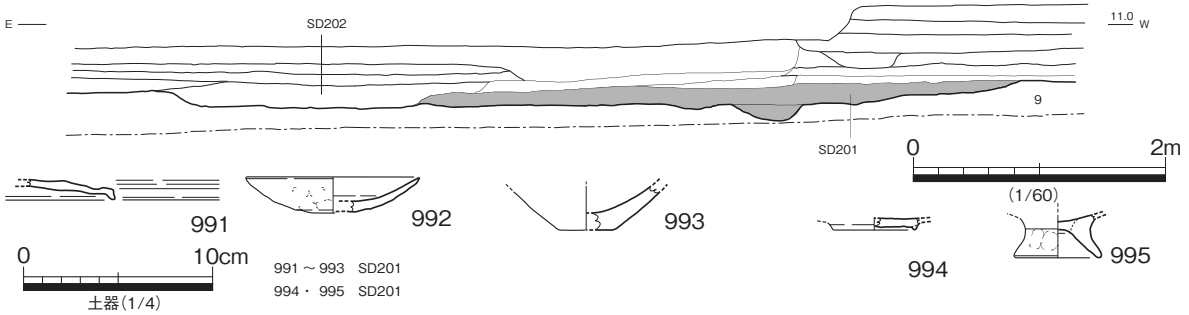
991 ～ 993 は SD201 出土土器である。991・993 は 9 世紀前半の須恵器坏蓋と弥生土器底部で混在品、992 は 15 世紀頃の土師器小皿である。994・995 は SD202 出土土器である。994 は土師器椀の高台部片である。高台は細く矮小化しており古代末のものである。995 は製塩土器脚台部片である。いずれの土器も、混在品である。

以上の出土遺物から、SD201・SD202 は 992 が示す 15 世紀頃の堆積により埋没したものと考える。

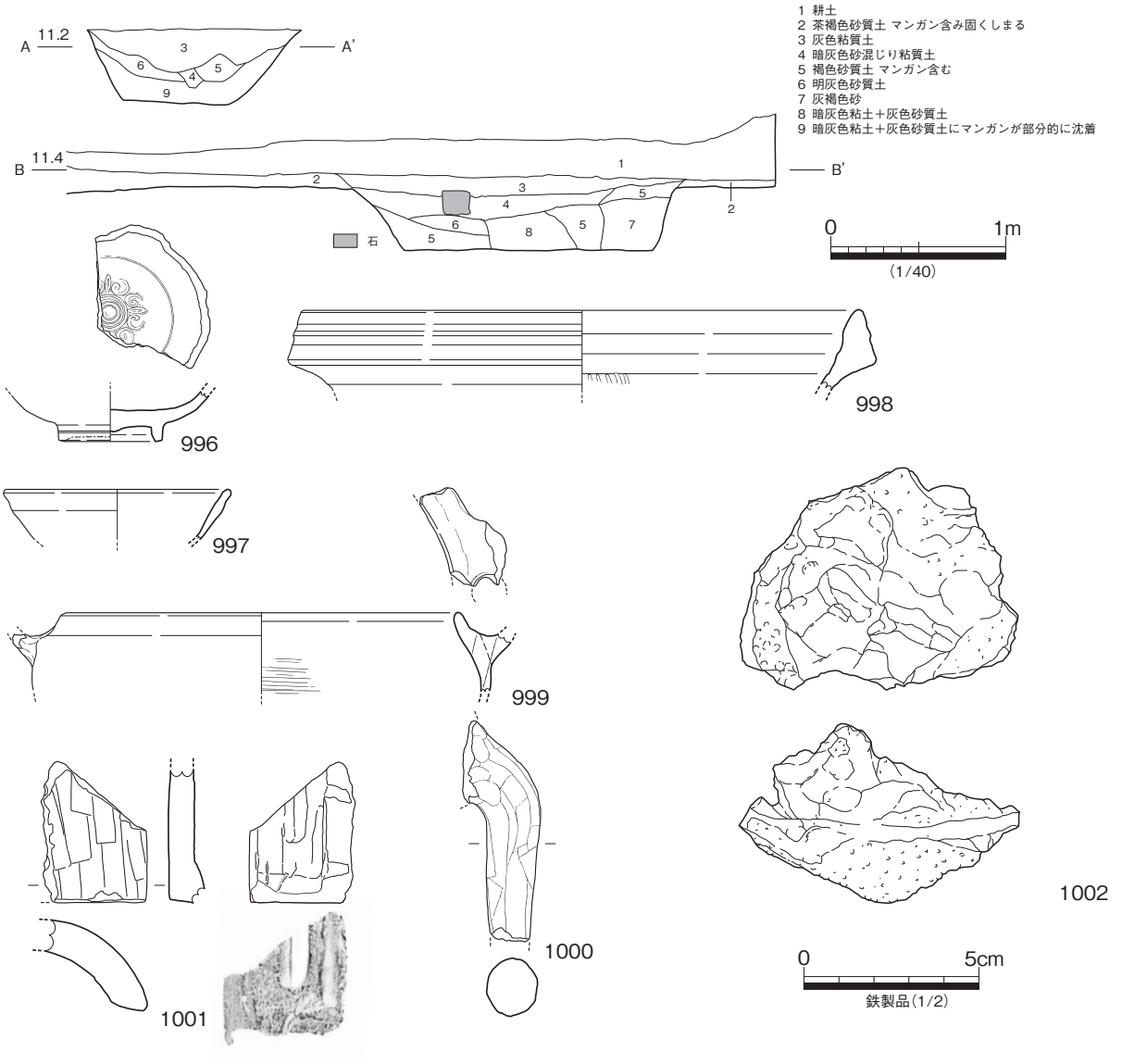
SD401（第 96 図）

4 区の調査区南壁に沿って東から西に流下する溝である。幅 1.5 m、深さ 0.4 mで断面は逆台形で底面が平坦となる。灰褐色系砂質土で埋没する。

996 は内面に花弁文を陰刻する 18 世紀頃の肥前系の施釉陶器である。997 は土師器椀である。10 世



第 95 図　SD201・SD202 実測図、出土遺物



第 96 図　SD401 実測図、出土遺物

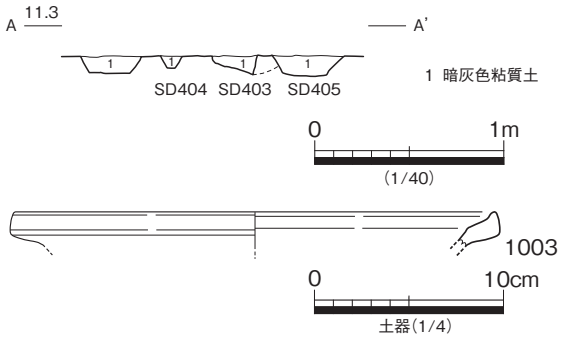
紀代の混在。998 は陶器の擂鉢である。口縁部を大きく拡張し端面に幅広い凹線を施す。内面にやや粗い擂目を備える。999 は土釜口縁部片。1000 は足釜。1001 は軒丸瓦の瓦当部が剥落したものである。天部に釘穴 2 孔をもつ。側面は斜めに大きく面取りする。中世末から近世にかけての瓦である。1002 は椀形滓である。重量は 238.4 g で上面はガラス化する。底面のカーブから直径 8 ～ 9cm の小形の鍛冶炉が想定できる。996 の陶器から 18 世紀頃に埋没した溝である。

SD403 ～ 405（第 97 図）

4 区北端で検出した小溝群である。幅 0.1 ～ 0.3 m で深さ 0.1 m 程度、断面 U 字形である。1003 は SD405 で出土した青磁皿口縁部片である。13 ～ 14 世紀頃のものである。周辺柱穴からも同様の時期の土器が出土していることから、調査区外にかけて所在する建物群に伴う溝と考える。

SD501（第 99 図）

4 区の調査区南壁に沿って東から西に流下する溝である。幅 1.5 m、深さ 0.4 m で断面は逆台形で底



第 97 図　SD403 ～ 405 実測図、出土遺物

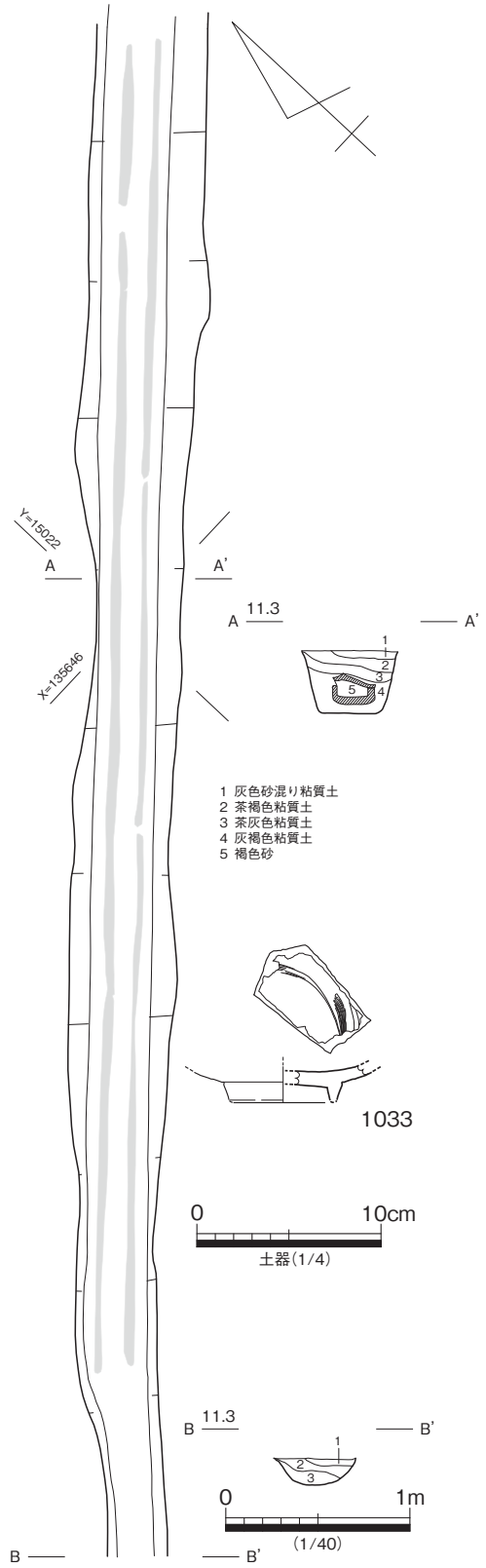
面が平坦となる。灰褐色系砂質土で埋没する。溝の北側に主軸を直交する中世の掘立柱建物 SB501・SB502 があるが所属時期は異なる。また SD503 ～ SD507 の中世溝を切り込んで掘開している。調査区東端では、木樋を検出した SD502 に切られている。

1004 は磁器染付碗である。草花文を施文する。1005 も磁器の碗である。1006 は京焼風陶器碗である。1007 は陶器の灯明皿である。以上の遺物が当該溝の所属時期を示す。一方で、1008 ～ 1031 は混在品で、主に 10 ～ 12 世紀代のものと 15 世紀代のものがある。1010・1011 は緑釉陶器である。1012・1013 は黒色土器椀、1017 ～ 1022 は土師質土器椀・坏である。1023 は法華経を表裏に陰刻する瓦経片である。黄桃色で酸化炎焼成されたものだが、まるで石のように硬く焼き締っており、砥「石」に転用されている。片面は砥面のため経文の残りが悪いが、対面は経文、割付縦罫線とも明瞭である。側縁には砥「石」転用の際の擦切分割痕が残る。経文は第 4 章で詳説するが、「妙法蓮華経（法華経）見宝塔品第十一」の一節である。1024・1025 は陶器擂鉢、1026 ～ 1029 は土師器坏である。1030 は土師質土器鍋、1032 は外区に連珠をもつ巴文軒丸瓦である。

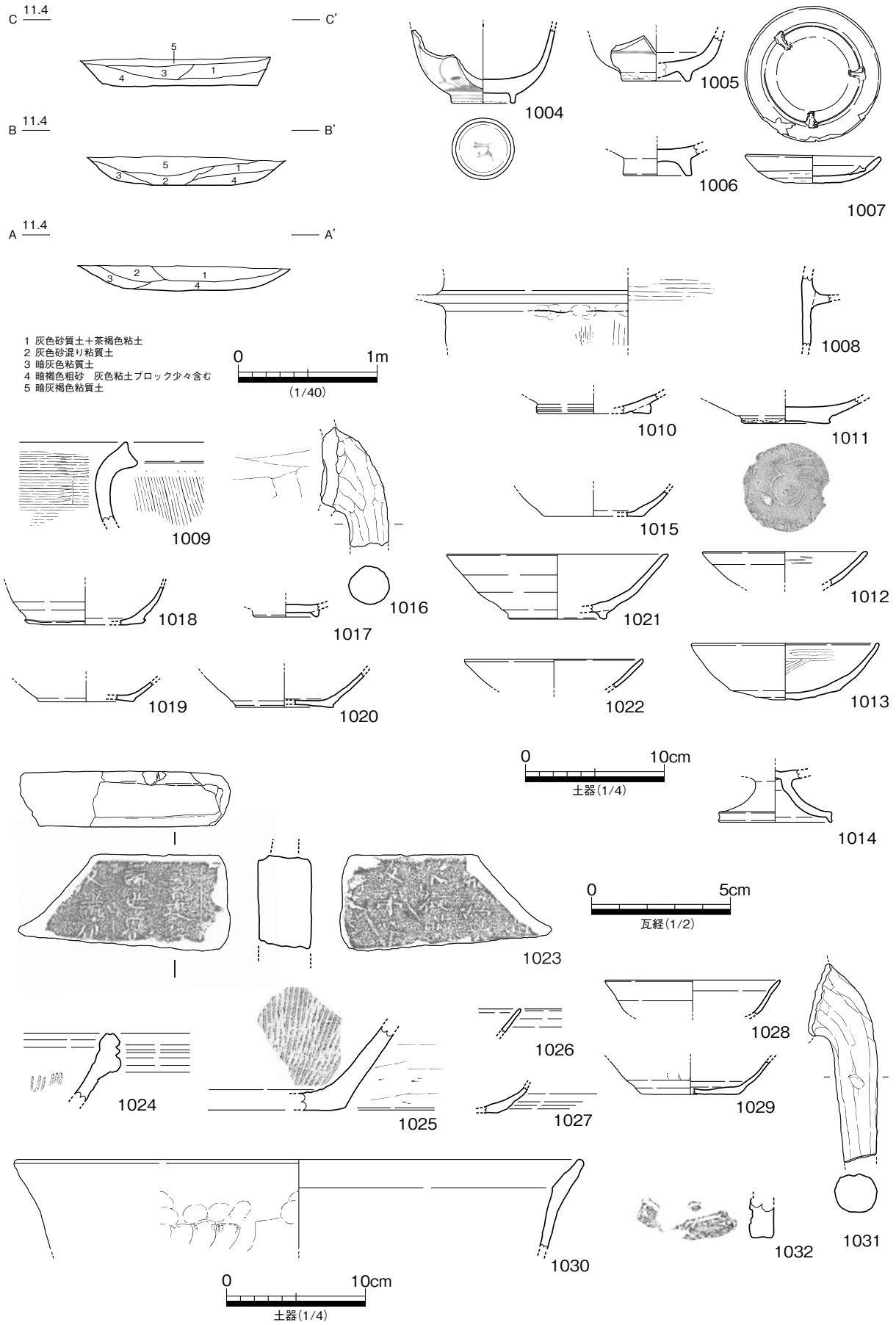
以上の出土遺物から 18 世紀頃に埋没した溝と考える。

SD502（第 98 図）

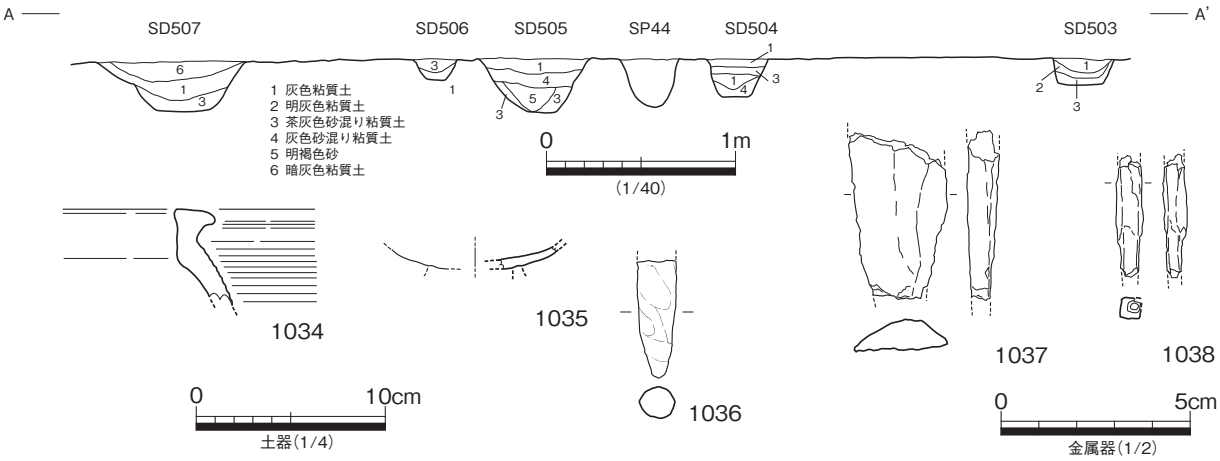
5 区南端で調査区東壁に沿って北流する溝である。SD501 埋没後に掘削されている。幅 0.52 m、深さ 0.35 m で断面は逆台形を呈す。溝内には幅 23cm、高さ 10cm の木樋を設置する。木樋は上面に蓋が遺存するこ



第 98 図　SD502 実測図、出土遺物



第 99 図　SD501 実測図、出土遺物



第 100 図　SD503 ～ 507 実測図、出土遺物

とから、暗渠水路として使われたものである。埋土中より 1033 の白磁が出土した。内面に円弧状の印刻を施文する大宰府分類Ｖ類（森田・横田 1978）である。13 世紀ごろのもので混在品である。所属時期は SD501 の埋没時期である 18 世紀以後である。

SD503 ～ SD507（第 100 図）

5 区の掘立柱建物 SB501･SB502 の北側に所在する溝群である。幅 0.23 ～ 0.64 m で、深さは 0.1 ～ 0.27 m、断面は逆台形を呈す。いずれの溝も灰色系の砂質土で埋没する。1034 は SD504 出土の陶器壺、1035 は SD507 出土の黒色土器椀、1036 は同溝出土の土師器足釜片である。1037 は同溝出土の不明鉄器、1038 は SD505 出土の鉄釘である。SD504 は出土遺物からみて近世に下るが、それ以外の溝は中世の溝とみておく。

（6）河川跡

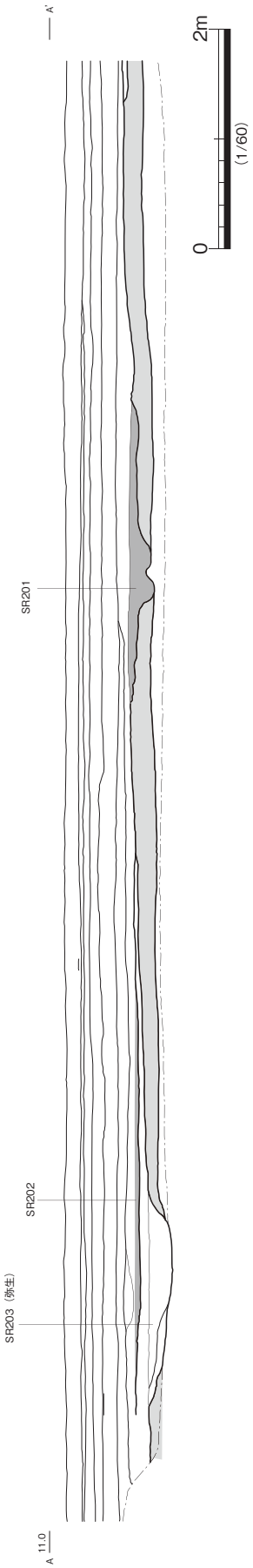
SR201・SR202（第 101 図）

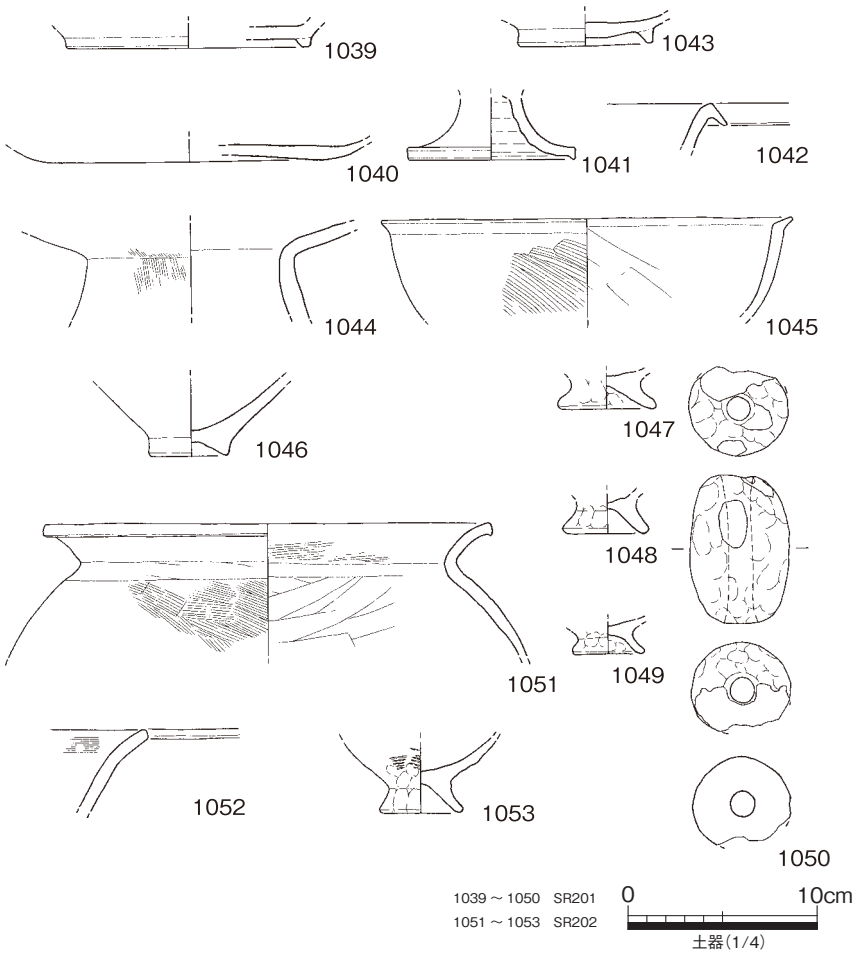
2 区南側で検出した河川跡である。弥生時代の河川跡 SR203・SR204 の埋没後に浅く幅広く堆積した SR202 と、その西側で幅 2.5 m、深さ 0.25 m で中央部が強く窪む断面を呈する SR201 からなる。両河川は調査区中央付近で合流し北に流下する。

埋土は暗褐色系砂質土で、埋土中から古代の遺物とともに弥生時代遺物が混在して出土した。1039 ～ 1050 は SR201 出土遺物である。1039 ～ 1042 は古代の須恵器である。1039 は幅広の高台を有する須恵器壺、1040 は須恵器皿で、内面を硯に転用した転用硯である。1041 は須恵器高杯、1042 は須恵器甕口縁部である。1043 は土師器椀、1044 ～ 1050 は混在の弥生時代遺物である。SR203 遺物の巻き上げと考えられる。1047 ～ 1049 は製塩土器脚台部片、1050 は大形の管状土錘である。重量は 177.8 g で、孔径２乗値は 1.69 となる。1051 ～ 1053 は混在の弥生土器及び製塩土器である。出土遺物からみて中世以前に埋没した溝である。

SR401（第 102 ～ 106 図）

4 区・5 区にまたがって検出した河川跡である。調査区北西の谷から接続する河川で、調査区を斜交し、南東に向かって流下する。河川は縄文包含層を切り込むように浅く流れる低地域と、低地域北端付



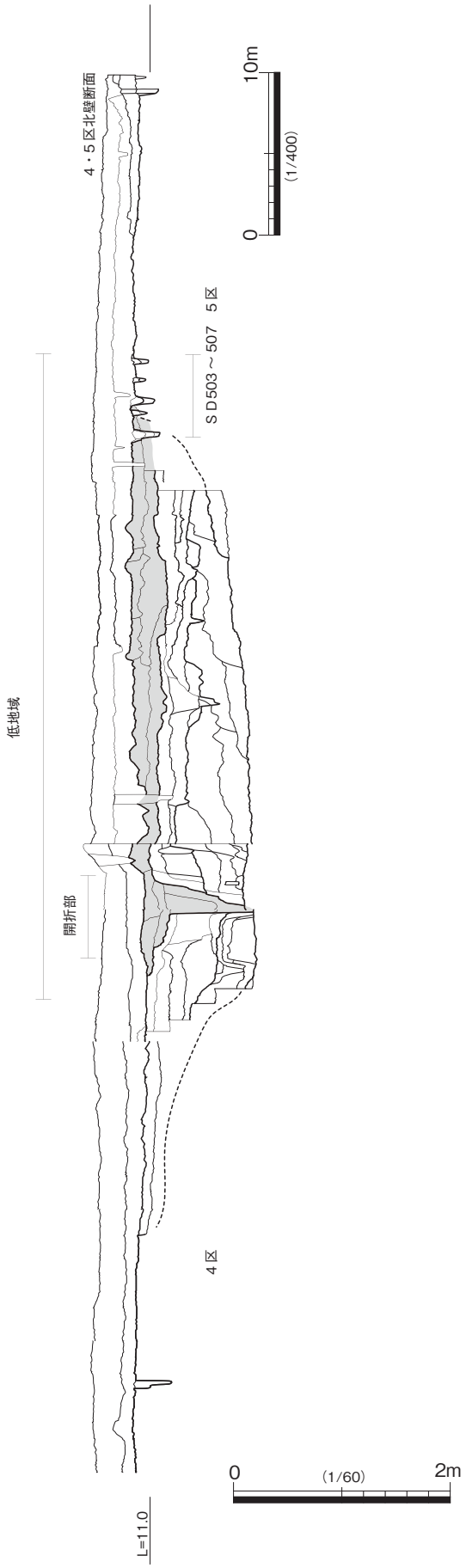


第 101 図　SR201・SR202 実測図、出土遺物

近で強く開析する開析部に分かれる。開析部は最大で幅 3.5 m、深さ 1.7 m、白色の粗砂で一度に埋没した痕跡が認められる。一方低地域は幅 25 m、深さ 0.25 m で灰褐色系砂質土で埋没する。南肩部は中世の溝群 SD503 ～ 507 に切られる。出土遺物は多くが低地域側（5 区）で出土しており、開析部付近（4 区）で出土した遺物は少ない。

1054 ～ 1067 は緑釉陶器である。1054 ～ 1056 は皿。削出高台で口縁端部が短く弱く屈曲して外反する。胎土は暗灰色で硬く焼き締める。1057 ～ 1061 は椀の口縁部片である。胎土が黄色系を呈し、釉の色調が淡い緑色であるものが多い。ただ 1061 の釉は深緑色を呈す。1062 ～ 1065 は椀の高台部片である。いずれも削出高台である。1066 は坏底部の削出高台部片。1067 は削出高台をもつ大形の皿底部片である。これらはすべて京都産緑釉陶器と考えられるが、1061 は釉薬の色調から近江産の可能性がある。いずれも 9 世紀後半から 10 世紀のものである。

1068 ～ 1095 は須恵器である。1068 ～ 1071 は坏蓋である。天井部と口縁部の境稜線が明瞭で、口縁部端部拡張は弱い。1072 ～ 1082 は坏である。

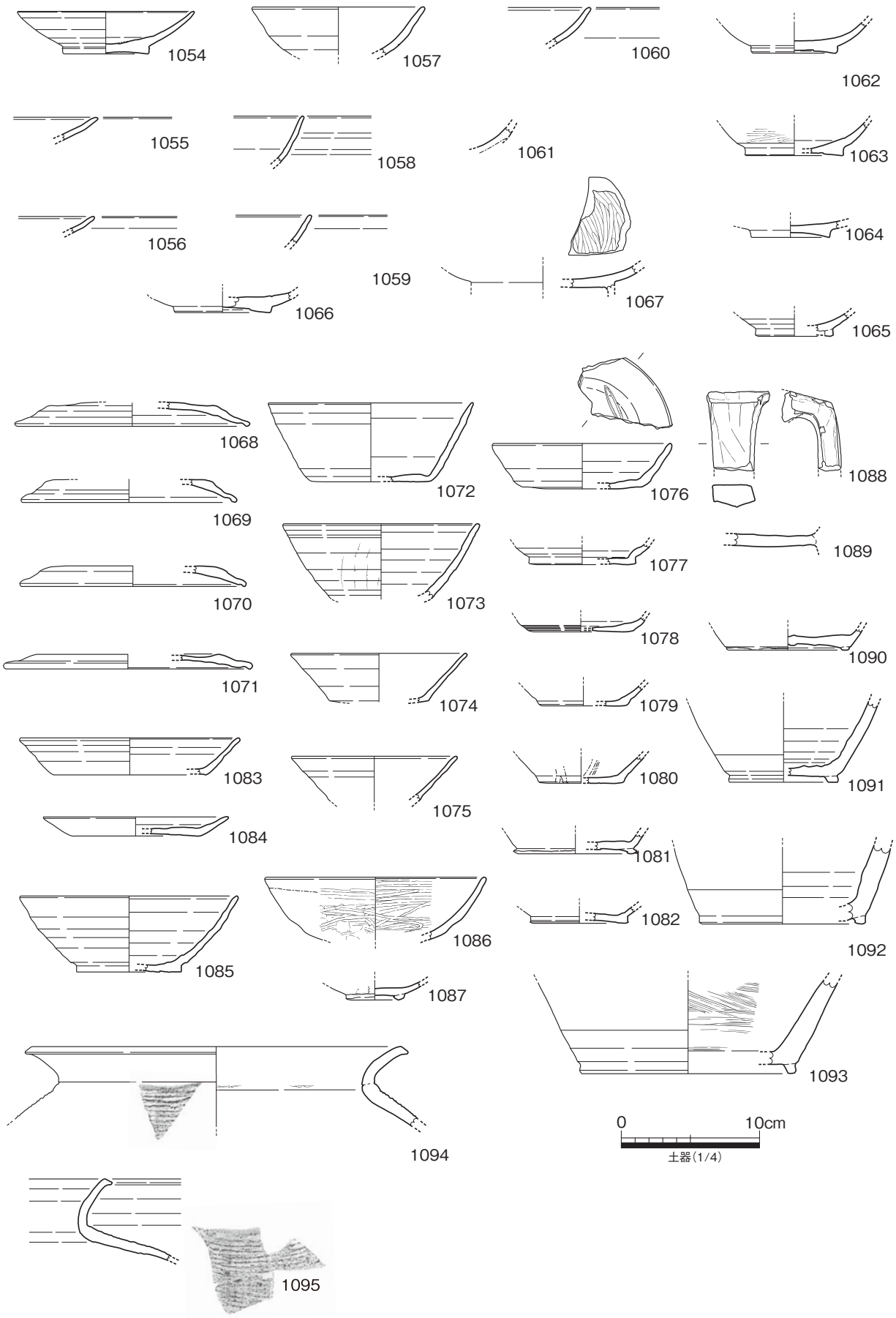


第102図　SR401断面図

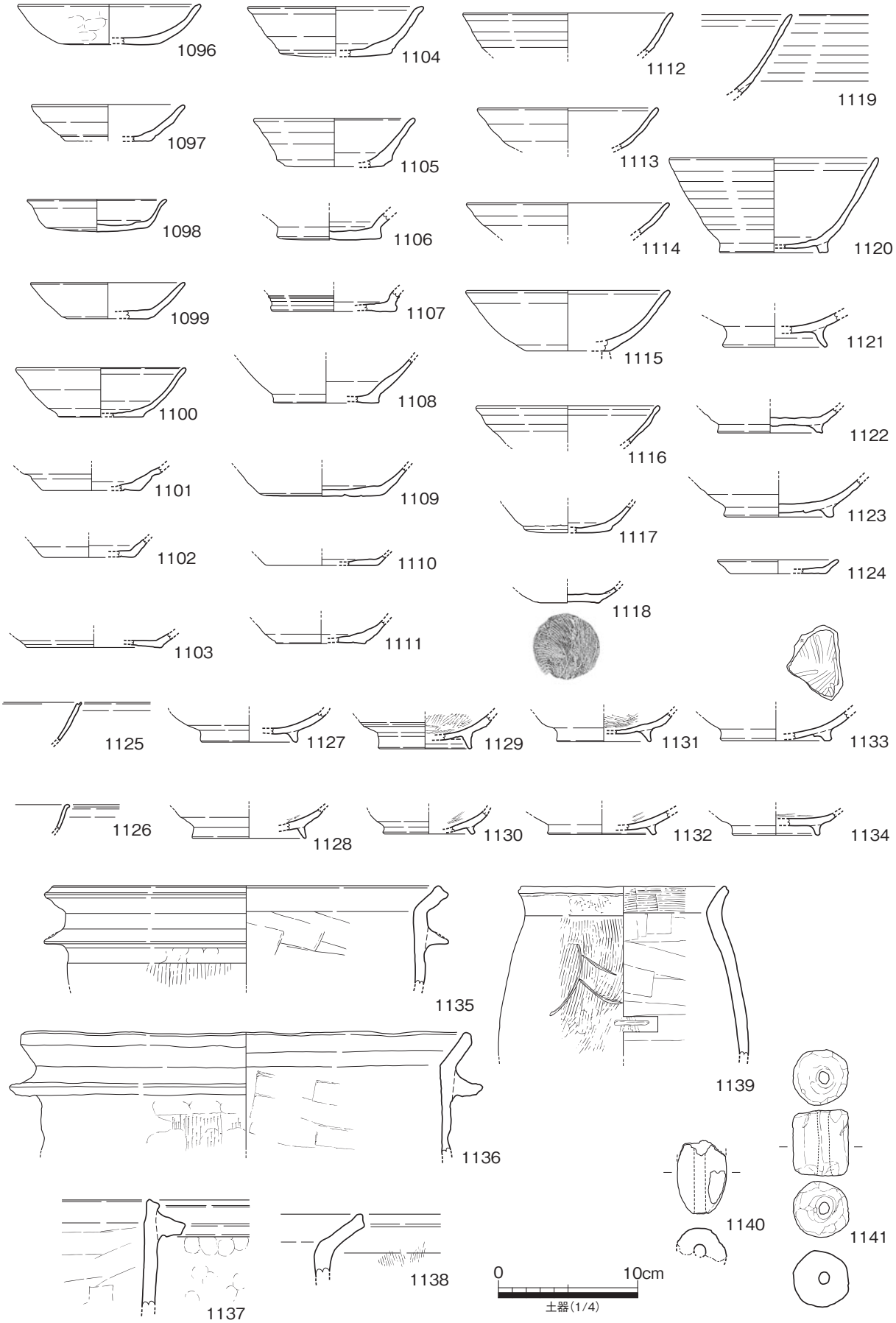
1072～1075は口縁部が斜上方に直線的に長く立ち上がる形態である。1077は底部を円盤状に削り出す。1083・1084は皿、1085～1087は椀である。1086は内面に暗文状の篦磨きを施す十瓶山産の須恵器である。1088は火舎香炉の脚部片、1089は内面調整が粗いので大形の壺底部片である。1090～1093は壺、1094・1095は十瓶山産須恵器甕である。外面に細かな格子叩きを施す。

1096～1124は土師器である。1096～1118は坏、1119～1123は椀、1124は小皿である。坏は口縁部の立ち上がりが低いもの、長く直線的に斜め上方に延びるものなど複数形式に区分できる。底部も円盤状のものや高台付などがある。

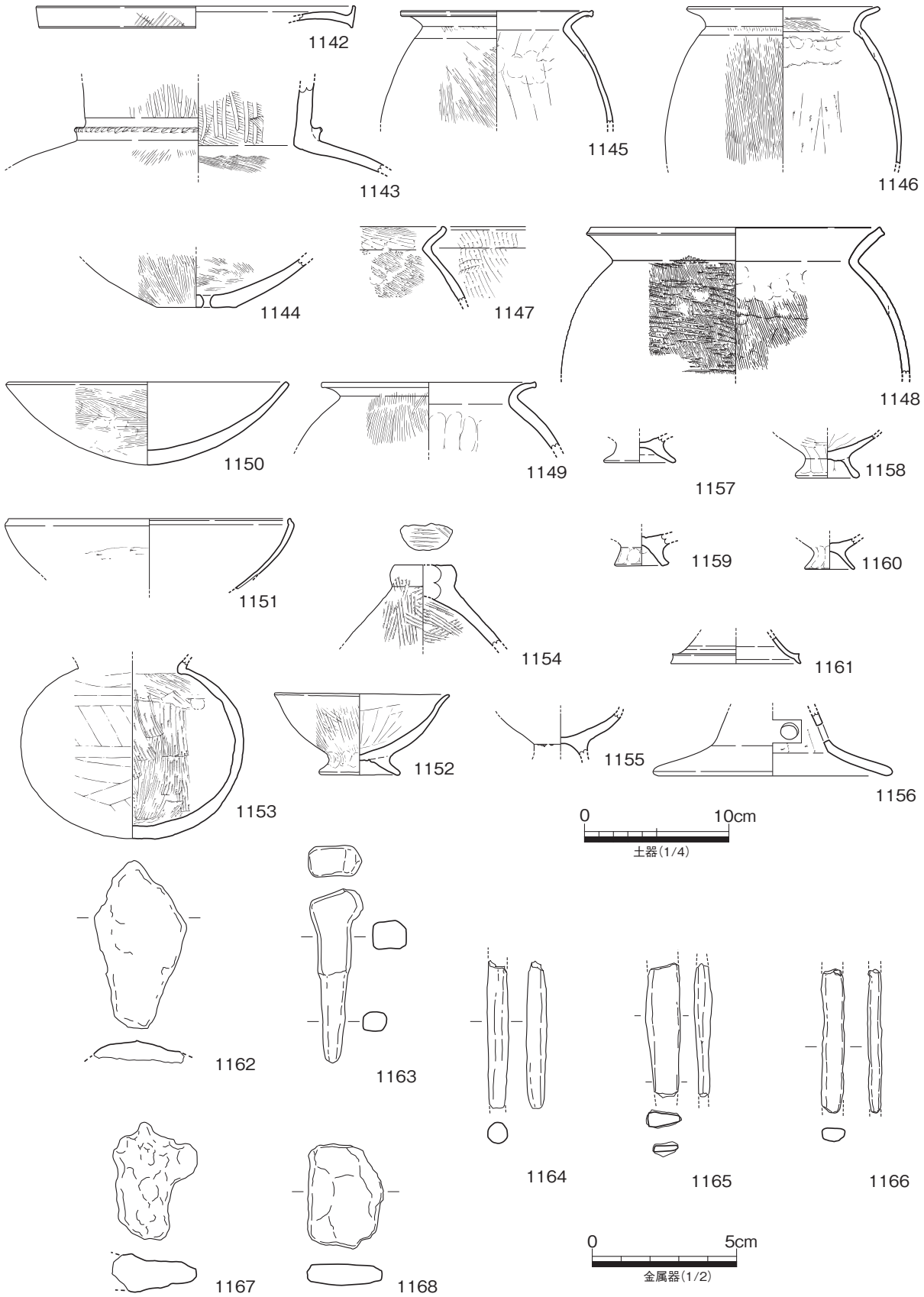
1125～1134は黒色土器椀である。いずれも内面が黒化するA類で、高台は断面三角形のものと台形のものがある。1135～1138は土師器羽釜・甕の煮沸具である。1139はヘラ記号をもつ甕である。口縁部が短く真蛸壺の可能性もある。1140・1141は管状土錘である。1142～1156は混在の弥生土器・土師器である。1157～1160は製塩土器。1161は須恵器高杯脚部片である。1162～1173は鉄器である。1163は頭部が方形となる大型の釘、1164・1166は棒状鉄片で鉄鏃茎か後述の馬具部品の可能性がある。1165は断面形からみて刀子と考えられる。1167は鉄滓。1168は小型の鉄斧片である。1169～1171・1173は馬具である。1169は棒を直径約7cmの円環状に曲げたもので、図の左右両端は内側に若干屈曲するため正円にはならない。1171は円環連接部錆着片である。円環は連結する両環とも直径0.5～0.7cm断面丸形の鉄棒を蕨手状に曲げ加工し内径約1.0cmの環を形成するもので、いわゆる蕨手状環である。1173は棒を長さ4cm以上、幅2.8cmのU字形に強く曲げたもの。1170は棒を長さ7.5cmの釣り針状に曲げたもの。これらはいずれも轡の部品と思われる。1169は環状鏡板の円環部と考えられるが、円環が正円ではないことや、1173の強く曲げられたU字形環が付属することからみて古代の馬具における複環式轡（津野 2012）の鏡板部品群の可能性がある。1171



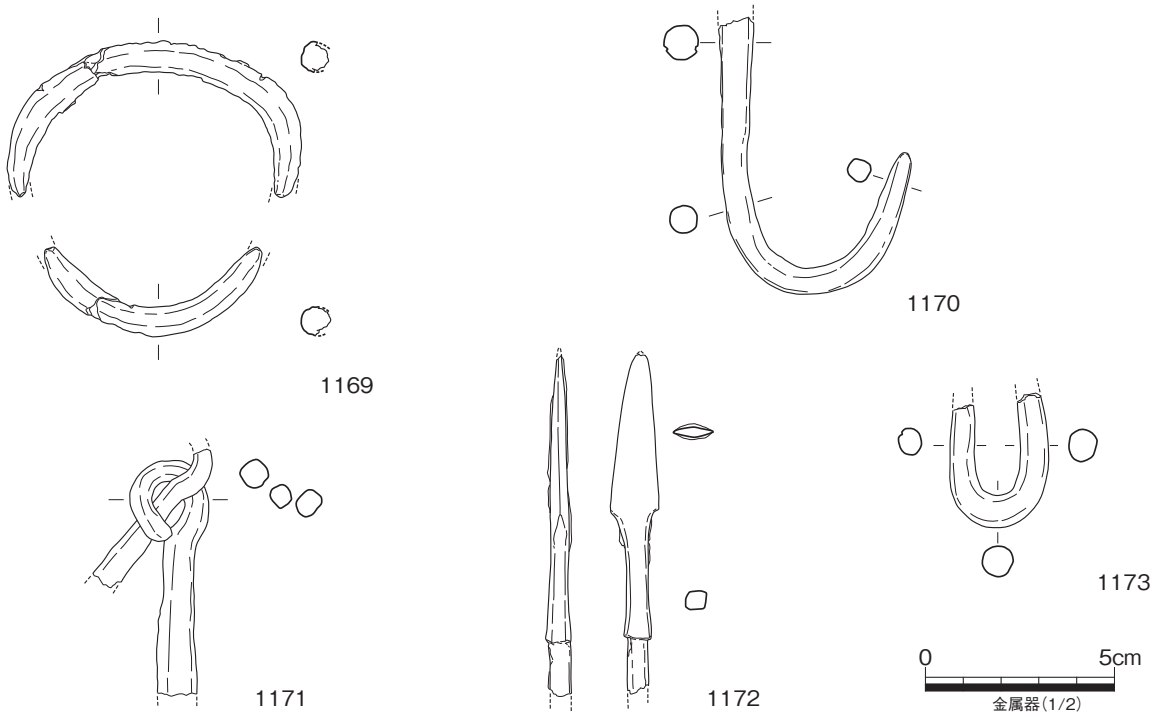
第 103 図　SR401 出土遺物（1）



第 104 図　SR401 出土遺物（2）



第 105 図　SR401 出土遺物（3）



第 106 図　SR401 出土遺物（4）

は両環の内径が小さいことから連銜の中央連結部と考えられる。1170 は、現形状から部位を特定することが困難だが、蕨手状環が変形して広がったものとみれば内径 2.5 ～ 3cm の環が想定でき、銜端または引手端の環とみることができる。すなわち馬具の轡一式がほぼ揃う。1172 は細根の柳葉式鉄鏃で、刃部長 4.3cm に対して篦被部が 3.3cm と長い。篦被端は下端がやや幅広となり明瞭な関をもつ。津野編年の柳葉Ⅰ式でⅡ期（10 世紀）に属す形態である（津野 1990）。

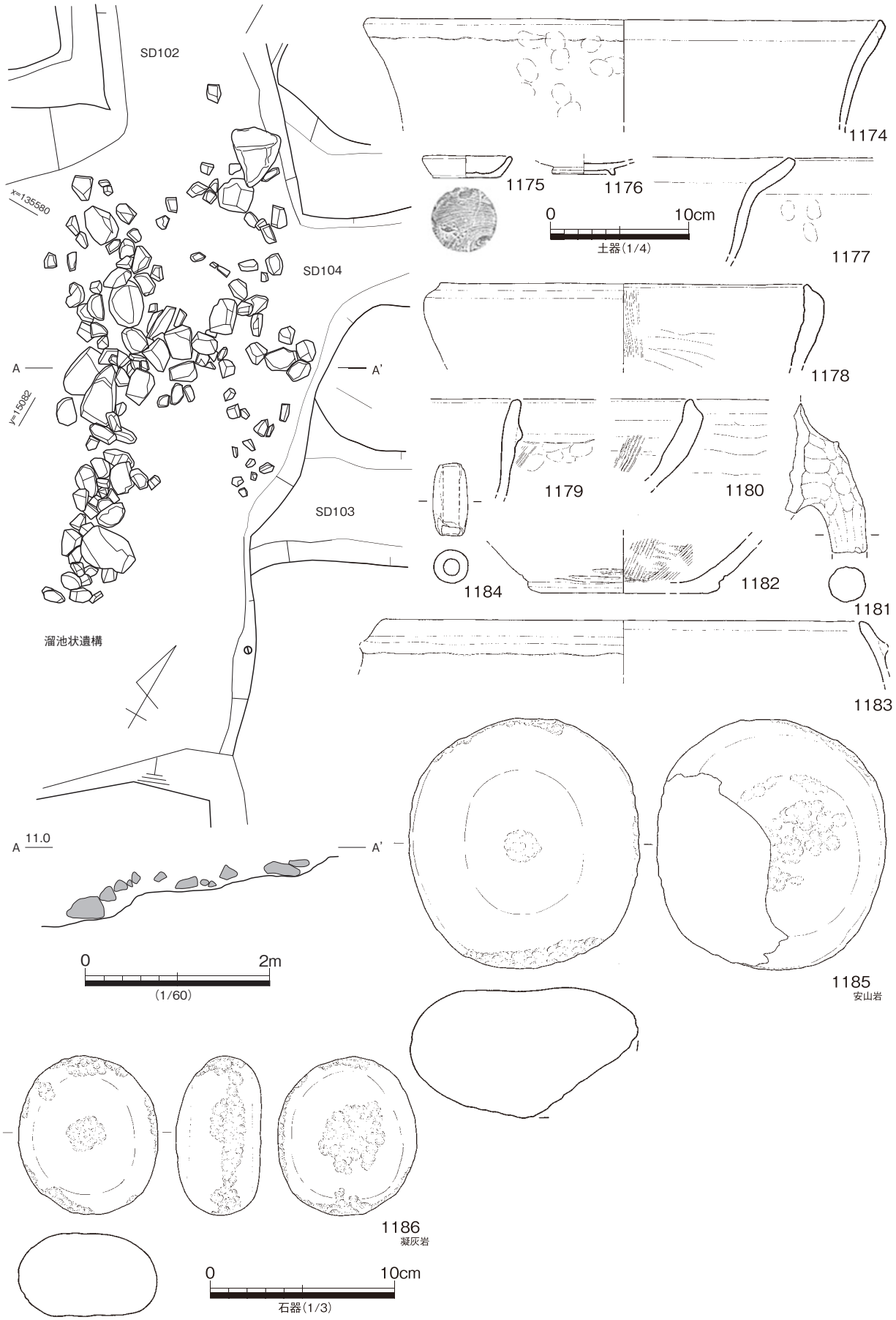
以上の出土遺物は 9 世紀後半から 10 世紀前葉の遺物が最も多く、その時期の遺構が調査地至近に埋没している可能性を示唆するものである。また、緑釉陶器が多数出土することと、この時期としては珍しい馬具轡一式、仏具である須恵器火舎香炉の出土など、一般集落にはあまり含まれない遺物が目立つ点が注目できる。

（7）池跡

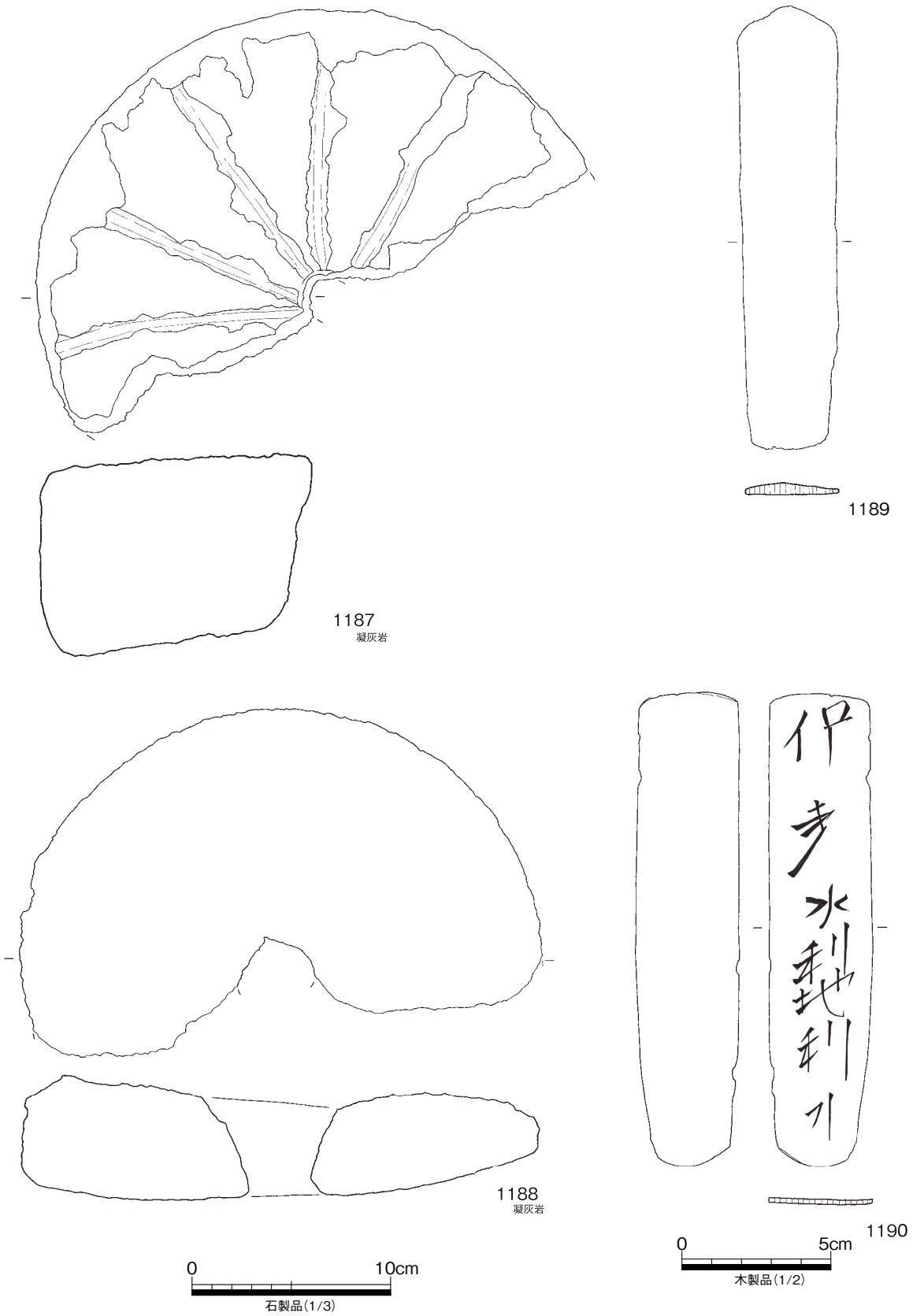
SG101（第 107・108 図）

溜池状遺構として捉える遺構である。溝の SD102・103・104 のすべてが交差する部分で、地形に反して溝底が南に大きく傾斜しその肩部付近に最大直径 60cm の大形礫が集中して分布する。礫上部は埋め戻したようなブロック土が置かれており、調査地より南に広がる溜池の堤体基礎の可能性が考えられる。基礎部分に混在する遺物と、それより南の低位で出土した池堆積層から出土した遺物がある。

1174・1177 は堤体出土の土師器鍋、1175・1176・1178 ～ 1181・1183 は堆積層出土の土師器である。1182 は堤体出土の土師器擂鉢、1184 は堆積層出土の管状土錘である。1185・1186 は敲打痕をもつ叩石である。1185 は安山岩、1186 は凝灰岩製である。1187・1188 は堤体南側にはりついて出土した石臼である。いずれも凝灰岩製。



第 107 図　SG101 実測図、出土遺物（1）



第 108 図　SG101 出土遺物（2）

1189・1190 は木札片である。1190 は墨書の木簡である。7 ～ 8 文字が記される。そのうち上から 3 ～ 4 文字目に「水」とある。その他の文字は判読できないが、溜池状遺構とも合わせて考えると興味深

い資料である。

（8）柱穴・包含層出土の遺物

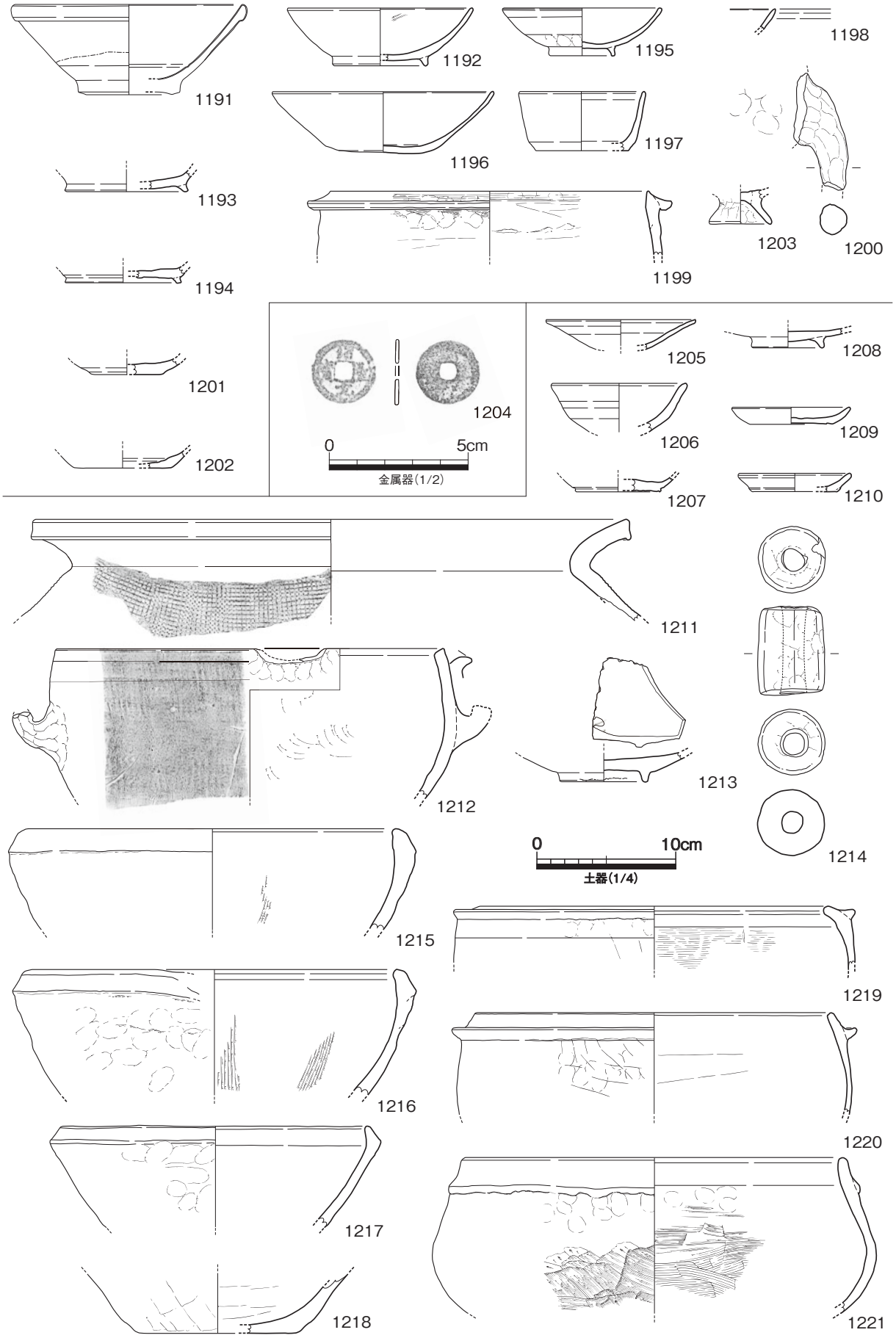
1191 ～ 1203 は柱穴出土の遺物である。1191 は 1 区出土の白磁碗である。Ⅳ類（森田・横田 1978）で 12 世紀頃である。1192 は 5 区出土の黒色土器椀 A 類、1193 は 5 区出土の須恵器坏、1194 は 1 区出土の須恵器坏である。1195 は 1 区出土の土師器椀、1196 は 5 区出土の土師器坏、1197 は 4 区出土の土師器坏、1198 は 1 区出土の土師器小皿、1199 は 1 区出土の土師器足釜、1200 は 4 区出土の土師器足釜である。1201・1202 は 5 区出土の土師器坏。1203 は 1 区出土の製塩土器である。

1204 ～ 1276 は包含層出土遺物である。以下、調査区ごとにまとめて報告する。

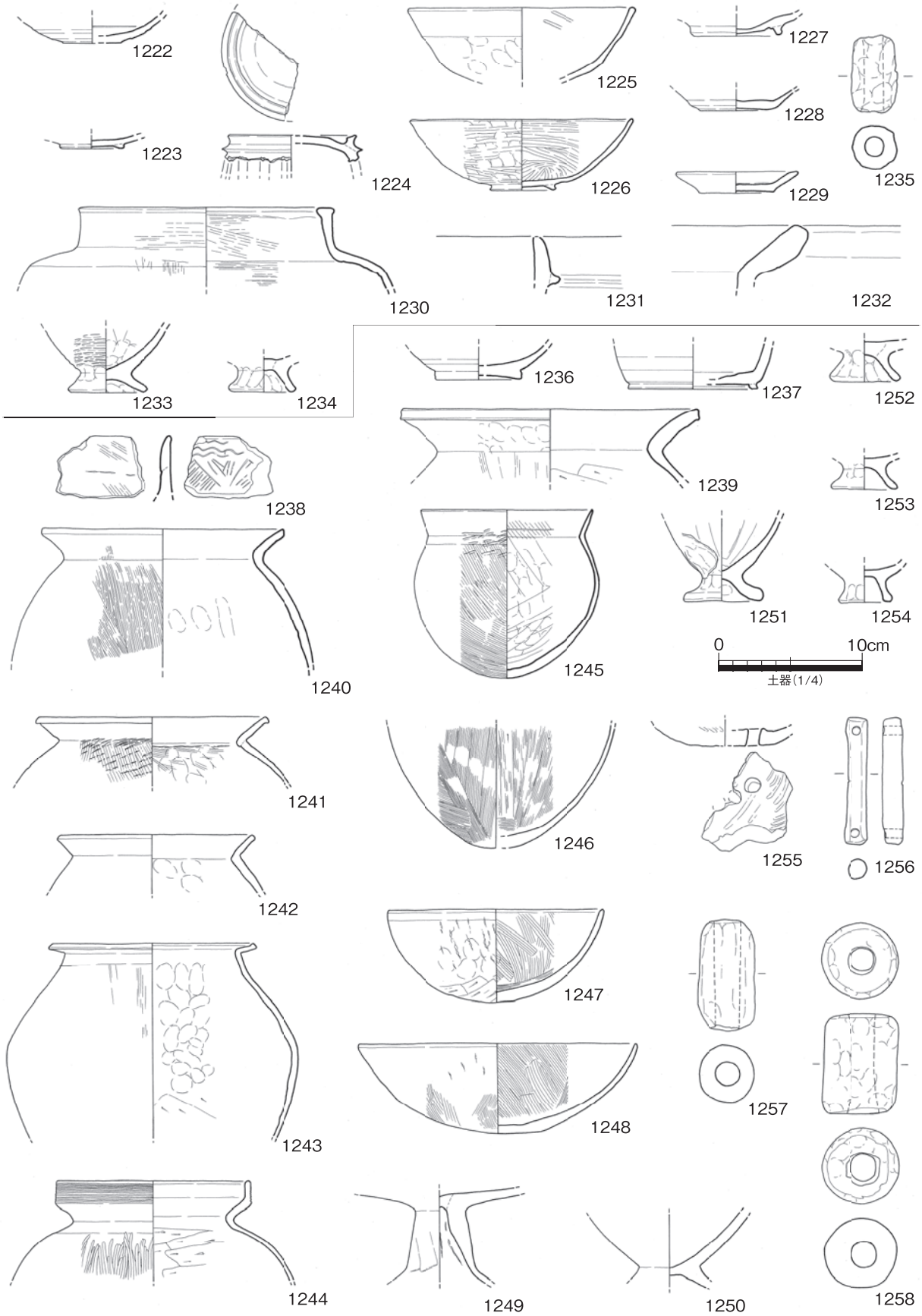
1204 ～ 1235 は 1 区出土遺物である。そのうち、1204 ～ 1220 は縄文包含層の上を覆う包含層堆積出土の遺物である。調査時には河川堆積として調査を進めている。1204 は銅銭で紹熙元寶。1205 ～ 1207 は土師器坏、1208 は土師器椀、1209・1210 は土師器小皿である。1211 は須恵器甕、1212 は須恵器甑である。口縁部が片口となる。1213 は磁器染付皿。1214 は土師質の管状土錘である。重量は 163.9 g で、孔径 2 乗値は 2.89 となる。1215・1216 は土師器擂鉢、1217・1218 は土師器捏鉢、1219 ～ 1221 は土師器足釜である。1222 ～ 1235 は 1 区の表土剥ぎあるいは精査中に出土した遺物である。1222 は白磁碗の底部片である。底部は削り出しの低い段状高台で、内面に高低差の低い段が巡る。1223 は黒色土器椀底部片、1224 は須恵器円面硯である。肩部から硯面にかけての破片で、脚部上端が若干遺存する。細長の透孔の上端痕が多数みられる。硯面端部は高台状に仕上げ、硯面の海と硯部との境の稜線は明瞭である。ただし、硯面の器面は平滑化していないことから、実際に使用したかどうかは疑わしい。1225・1226 は瓦器椀である。1227 ～ 1229 は土師器で、椀、坏、小皿である。小皿の底部はヘラ切り痕を残す。1230 は瓦質土器の土釜、1231 は土師質土器の羽釜、1232 は土師質土器鍋である。1233・1234 は製塩土器である。1233 は体部外面に横方向のタタキを残す。1235 は土師質の管状土錘である。重量は 44.2 g で、孔径 2 乗値は 1.96 となる。

1236 ～ 1258 は 2 区包含層出土遺物である。1236 は削出高台の須恵器坏である。1237 は須恵器高台付壺底部片である。1238 は弥生土器複合口縁壺口縁部片である。細い工具による櫛描波状文及び鋸歯文を施文する。1239 は古墳時代土師器甕口縁部片である。1240 ～ 1243 は弥生土器甕である。このうち 1243 は茶褐色を呈し角閃石を多く含む胎土で高松平野香東川下流域産の土器である。1244 は土師器甕である。複合口縁の外面に擬凹線 9 条を施文する。胴部の肩部の張りが顕著で器壁は薄く、内面は口縁部直下までヘラケズリが及ぶ。吉備系で亀川上層式に相当する。1245 は胴部球形の土師器甕。1246 は同様に底部周りが膨らみ、球形の胴部を呈す土師器甕である。1247・1248 は底部が完全な半球状となる土師器鉢である。1249 は脚部が屈曲して裾が広がる土師器高杯。1250 は脚台付の弥生土器鉢である。1251 ～ 1254 は製塩土器脚台部片である。1251 は胴部器面の表面剥離がみられる。1255 は土師器甑である。端部が曲線的な平底面に 3 個以上の穿孔をもつ。1256 は土師質の棒状土錘である。上下両端に貫通孔をもつ。孔回りは穿孔時の押圧によりやや扁平となり、平面矩形の成形痕跡が残るタイプで、古墳時代後期に多い。1257･1258 は土師質の管状土錘である。重量は 1257 が 114.9 g、1258 が 194.1 g で、孔径 2 乗値は 1257 が 2.25、1258 が 2.56 である。

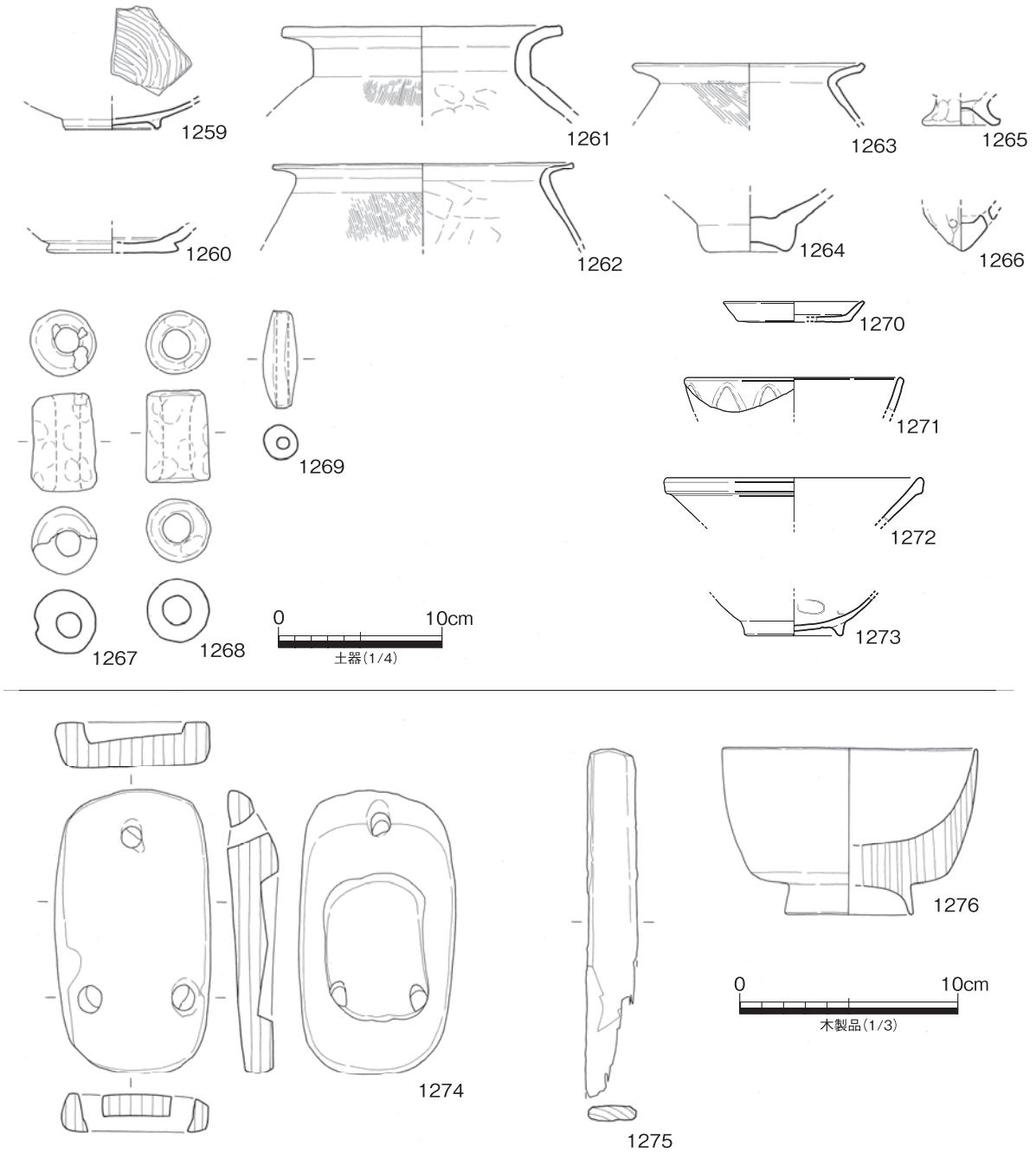
1259 ～ 1269 は 3 区包含層出土遺物である。1259 は須恵器椀底部片である。内面に暗文風篦磨きが認められる。1260 は削出高台をもつ須恵器坏底部片。1261 ～ 1264 は弥生土器の壺・甕である。1265 は



第 109 図　柱穴・包含層出土遺物（1）



第 110 図　柱穴・包含層出土遺物（2）



第 111 図　柱穴・包含層出土遺物（3）

製塩土器脚台部片。1266 は尖底の甑である。底部中央ではなく側縁に穿孔を施す。1267 ～ 1269 は土師質の管状土錘である。重量は 1267 が 90.6 ｇ、1268 が 90.9 ｇ、1269 が 22.4 ｇで、孔径 2 乗値は 1267 が 1.96、1268 が 3.24、1269 が 0.36 となる。

1270 は 4 区包含層出土の土師器小皿である。1271 ～ 1273 は 5 区包含層出土の遺物である。1271 は青磁碗で外面に鎬蓮弁を施文、1272 は白磁碗口縁部片である。口縁端部外面に蒲鉾状に肥厚する。Ⅳ類（森田・横田 1978）で 12 世紀頃である。1273 は黒色土器Ａ類底部片である。内面にヘラミガキによる暗文が施される。

1274 ～ 1276 は 1 区包含層出土の木製品である。1274 は下駄、1275 は板状木製品、1276 は漆椀である。1276 は黒漆を全面に塗布する。これらは中世以後の遺物である。